

☒高貴なる蒼穹☒ 或い  
は☒光輝なる真紅☒

またたね

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

気高く、自信家で、猫被りで。

それでも誰よりも強い、真紅を冠する彼女のお話。

# 目次

Prologue: 何れ、栄光へと至る

テイアラ

“高貴なる蒼穹”、或いは“光輝なる

真紅” 1

謳歌せよ勝利、或いは桜花を貫いて

9

1章: 何れ、真紅へと至る赤

桜舞う、或いは君と携わる | 23

その始まり、或いは物足りない

32

敗走の回想、或いは才能の解放

50

来たる初陣、或いは抱く唯心 | 59

初戦にして緒戦、或いは露見、引目、預

言 | 74

勝利の味、或いは余酔の価値 | 87

火蓋、或いは絆 | 103

2章: 紅き蓮は、泥沼の中で咲く

望むテイアラ、或いは求む力 | 118

接敵せし怪物、或いは前衛的雷風

133

“白い稲妻”、或いは酷い火達磨

145

火脚猛る、或いは誓い蹉跌 | 158

失ったモノ、或いは培ったコト

180

猿も木から落ちる、或いは覚悟、力、虚

実

192

夢の終わり、或いはそれを拒み

212

そして赤は、真紅へと至る — 233

3章：真紅と炎帝、夏を超えその手に秋

を掴むか

近づく常夏、或いは見破る思惑

258

魂滅入る男、或いは私に出来ることを

宅食仕様、或いは約束しよう — 287

274

夏合宿の刻、或いは錯乱する思い

312

熱砂日差し、或いは滅多に無い

327

飢えた爪痕、或いは触れた傷痕

338

夜空に咲く光華、或いは君の横顔

354

風に舞う紅葉、或いは猛り立つ紅華

377

降臨する炎帝、或いは押印する返礼

396

真紅、或いは炎帝 — 410

410

決戦、或いは全てを賭けて — 430

4章：領域と資格、真紅よ屍の上で嗤え

快勝の代償、或いは最高の対極

454

天秤、或いは決心 — 468

加害者、或いは破壊者 — 489



Prologue : 何れ、栄光へと至るタイヤラ  
“高貴なる蒼穹”、或いは “光輝なる真紅”

師走下旬の日曜日。

これだけで、何を指しているかわかる人もいるだろう。

冬晴れの千葉、頬を撫ぜるは寒気。しかしそこは歓喜渦巻く、日本で一番の熱気に包まれる場所。走りを楽しむ、走りに愛された少女達の頂上決戦。その光景を目に焼き付けるべく中山レース場に集まったのは、30000人ももの観衆達。

——『有馬記念』。

数あるレースの中でも、所定の条件を満たし、選ばれた者だけが走ることを許される夢の祭典。その祭典に集うは、走るために生を受けた、異世界から受け継いだ輝かしい名前と、競争能力をもつ選ばれし少女達——人呼んで、ウマ娘。彼女達は人間と共存し、共に支え合いながら歴史を築いてきたのだ。

そして観客席の最前列、誰よりもウマ娘達に近い場所で、落ち着かない様子でレース場を眺めている、とある男が居た。

男は所謂『トレーナー』と呼ばれる、ウマ娘と共に有り、時に厳しく、時に優しく寄り添う、彼女達と同じ夢を見る一心同体の存在である。彼は有馬記念に出場するとあるウマ娘の専属トレーナーであり、彼女の勝利を彼女と同じように——若しくはそれ以上に願っている。

そんな中ゲートに現れたのは、14人の選ばれしウマ娘達。その様子は、緊張で頬に汗を伝わせる者、笑顔で観客に手を振り返す者、瞳を閉じて精神統一を図る者と、至って様々だった。しかしそれでも胸に抱く思いは同じ。頂の景色、己の存在証明。栄光を掴み、称賛を浴びる己の姿だけを胸に描いて、今か今かとただその時を待ちわびている。整理が終わり、熱狂と歓声に包まれていた場内を一転、静寂が満たしていく。音のな



い世界で導火線から火花を散らす、緊張の爆弾。14人のウマ娘が、ゲートが開く瞬間を逃さぬよう、全神経を張り巡らせている。

赤い信号が、ゲートに灯る。開放の瞬間まで、あと僅か。一秒経ったか、十秒経ったか。容易に時間感覚を狂わせる緊迫と静謐、そして導火線は燃え尽きて――

起爆した。

開戦を示すゲートの開く音は、一斉に駆け出した少女達の足音に掻き消された。14人のウマ娘が、己の最強を証明するために芝を踏み鳴らして走る。

善戦も健闘賞も不要、狙うは1着の頂のみ。積み重ねた鍛錬とプライドを両脚に乗せ、彼女達は2500m、各々のピクトリロードを直走る。

横一文字の様相は、序盤が終わって中盤に差し掛かると、徐々に変化を見せ始めた。現在14人が、大きく4つの集団に分かれている。

序盤から己の最高速を叩き出し、逃げ切りを狙うウマ娘達。その後ろに付け、後半で逃げウマ達の腸を喰い千切らんとするウマ娘達。そしてさらにその後ろ、力を溜めて後半での差しを狙うウマ娘に、そのまた後ろ、最後尾に付けて後半での全抜きを狙うウマ娘。各々が自分の得意なスタイルを持ち、それによってレースの状況は刻一刻と変化し

てゆく。

その中で、男の目線は第二集団のとあるウマ娘へと向けられていた。

青いリボンで結われた大きなツインテールを揺らしながら必死の表情で走る、紅玉の様な瞳を携えた少女。艶のある暗い茶髪は冬の日差しに照らされて輝いており、頭の天辺に据えられた白銀のティアラをより際立たせている。身に纏う戦装束は、軍服をモチーフとした、瞳と対照的に全てを包み込む大海を思わせる青。

男が注視しているその少女は、現在5順目に付けている。先頭から大きく引き離されているわけではないが、前を走る二頭がコースを塞ぎ、抜け出すことを許さない。このままでは力を出しきれずに、無様な敗北を晒すこととなるだろう。それを悟っているのか、必死な表情に、焦りと苦しさが混じり始めている。

それを見た男の拳に、思わず力が籠る。男は知っていた。彼女がこのレースにどれだけの決意をもって臨み、どれだけの鍛錬を重ねてきたのか。血の滲むような努力、そんな言葉では生温い。尊大で、見栄っ張りで、気高い彼女が歩んできた道は、決して平坦なものなどではない。挫折と、苦悩と、啼泣を味わい、それでも折れることなく足掻き続け、今日この場へと立っているのだ。そんな彼女に、報われて欲しい。そんな思いから、男は瞳をギュッと強く結びながら、両拳を握りしめた。

最終コーナーに差し掛かる直前。転機は訪れた。

彼女の必死の形相が、闘争本能を露わにした獯猛な笑みへと変わった。細めた紅眼から稲妻が弾け、鋭角に吊り上がった口角から鋭い犬歯が剥き出しになる。

グシヤリ、と観客席まで響いたように錯覚しかねない渾身の膂力で地面を踏み締めた刹那。

——彼女は音を置き去りにするかのよう加速した。

進路妨害を意に介さず、先行する4人を数秒で追い抜いた勢いのまま、彼女は先頭へと躍り出る。瞬きの間に後続を引き離し、一刻毎に差が広がっていく。後続のウマ娘達が追い縋ろうと必死に加速するが、それを嘲笑うかのような速度で、彼女は疾風となってターフを駆け抜ける。

誰が言ったか、それはまさしく、愚民が触れることを許さない、  
トップ・オブ・ブルー 高貴なる蒼穹”。

誰が言ったか、それはまさしく、宝石のように気高く煌めく、  
ブリリアント・レッドエース 光輝なる真紅”。

相反し、決して合わさることのない二色を兼ね備える、矛盾の体現者。高速で駆ける紅と蒼がマーブルのように溶け合い、紫電となつて視界を染める。そんな彼女を、祈るように両手を重ねたまま見ていた男が、耐えられなかつたかのように大声を張り上げた。

「——行ッけえエエ!! スカアアレツトオオオ!!!」

そんな男の声に応えるかのように、後続の消えた世界で、彼女はトップギアへとシフトした。ターフを切り裂くように、紫電が駆け抜けていく。勝ちを確信した彼女の笑みは、闘争本能に身を任せた獯猛なそれから、いつもの明るく朗らかなモノへと変わる。一步、また一步とゴールへ近づく度に湧き上がる歓声。それはファンファーレのように、彼女の凱旋を祝福していた。

観衆の声に応えるように拳を高々と突き上げ、彼女はゴールラインを駆け抜けた——

「…………きてよ、起きなさいってば!!」

「ふべらっ!?!」

爆音と共に頬に弾けた痛みで、意識を取り戻した。

「……………夢?」

「はい?アンタ何言ってるの?」

どうやら疲れから椅子に座ったまま寝てしまっていたようだ。ジンジンと痺れる頬をさすりながら後ろを振り返ると、ジャージ姿で両手を腰に当て、紅玉のような紅い瞳で怪訝に俺を見つめる一人のウマ娘の姿があった。

「あー…………おはよ、スカーレット」

「いつまで寝てるのよ! ってか、なんで椅子で?」

「いやいや、今日のトレーニングのメニュー考えてたらいつの間にか……」

「はあ!? アタシ今日、出走の日なんだけど!?」

「え!? ウツソだろお前!？」

「それはこっちのセリフよ! なんでトレーナーのアンタが把握してないのよ!」

「モタモタすんな! さっさと準備しろ、スカーレット!」

「パジャマ着てるアンタに言われたくないわよ!」

ガミガミと叫び散らかす彼女——ダイワスカーレットを尻目に、俺は椅子から飛び起きて身支度を始めた。

# 謳歌せよ勝利、或いは桜花を貫いて

4月、桜の舞う阪神レース場。風に乗って木々が揺れる並木道を、俺とスカーレットは歩いてた。

「全く……信じられないわよ、レースすつぽかしかねないほど爆睡するなんて」

「だからごめんってば……何回も謝ってるじゃんか」

「謝って済む問題じゃないって言ってるの!」

「ほらほら落ちて着け落ちて着け。レース前に心乱されてちゃ話になんないぞ」

「誰のせいだと思ってるのよー!!」

ぎゃあぎゃあど騒ぎ立てるスカーレットを適当に遇らい、入り口までの道のりを歩きながら、俺は今日のレースへと思いを馳せていた。

ダイワスカーレット。今日までの戦績、4戦2勝。これだけだと振るわないように見て取れるかもしれないが、侮るなかれ、着順は1位2回と2位2回。相応の実力——俺の指導の賜物だな、フン——と、並々ならぬ覚悟をもって今回のレース、『桜花賞』へ

と臨んでいるのだ。

「ほら、もうすぐ着くから機嫌直せよ」

「だから誰のせいだと……はあ、もういいわ。なんか疲れたし」

「レース前に疲労溜めてんじやねえよバーカ」

「キツ……!」

「いつったあ!!!」

阪神レース場に、小気味の良い破裂音が響いた。



控室に到着する頃には、スカーレットの怒りは収まっていた。彼女は瞳の色と真逆の蒼い衣装を見に纏い、フンフンと鼻歌を歌いながら足をパタパタと揺らして椅子に腰掛けている。能天気なのか何も考えてないのか……緊張してるこっちがバカバカしくなってきた。

「はあ……」

「なによたため息なんて吐いて。もしかして緊張してるわけ?」

「そりやお前……っっていうか、スカーレットは緊張してないのか?初めてのG1レース



だぞぞ?」

「……まあそうだけど、別にレースが初めてってわけじゃないもの。どんなレースでも、アタシはアタシの走りをするだけよ」

「……確かにデビュー戦のお前は、見るに耐えないくらい緊張してたもんな」

「な……!!? い、今それ言う必要ないでしょ!?!」

「ツてえ!! すぐ叩くのやめろって言ってるんだろ!?!」

「アンタが叩かれるようなこと言うからでしょうが! 足で蹴らないだけ感謝しなさいよね!」

「お前の足で蹴られたら死ぬわボケが!」

頬を真っ赤に染めたスカーレットの迫真のビンタを喰らい、椅子から転げ落ちた勢いのままに吠える。一通りやり取りを終えて、小さく溜息を吐くと俺は微笑んだ。

「つたく……ま、その調子なら本番も大丈夫そうだな」

「だからそう言ってるじゃないさつきから。心配しすぎなのよ、アンタは」

「俺はお前の自信がどこから湧き上がってくるのか気になって仕方ないよ」

「はア? そんなの決まってるじゃない」

俺の疑問に心底意味がわからないというように、怪訝な表情を浮かべるスカーレット。彼女はいつものように左手を腰に添えると、自信満々の表情で俺を見据えながら口

を開いた。

「アンタよアンタ」

「は？」

「アタシはアンタを——アンタが作ってくれたアタシを信じてる。アタシのためにしてくれたこと、一つたりとも無駄になんてしない。だから踏ん返り返って気楽に眺めてれば良いのよ。アンタが信じるアタシは、無敵なんだから」

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。自分の頬が熱を持つていくのを感じた。人前で優等生振るこの少女——実際成績もよく賢いのだが——は、致命的な場面で語彙がバグったり、顔から火が出るほど恥ずかしくなるようなことを平気で口にする節があった。本人はそれを言っただけから初めて気付くらしく、現に漸く自分の言ったことの中身に気付いたのだろう、彼女は自信満々の表情のまま、頬と耳を真っ赤に染めて俺を見ている。

「…………お前それ、自分で言っただけで恥ずかしくねえの？」

「…………うるさい」

「いや、嬉しかったけどさ。口に出すのってかなり勇気いると思うんだよね」

「うるさいって言うてんでしょ!？」

「ンゴス!!」

弄り倒していたら、流石にキレた。飛んできたのは、鍛え上げた脚力から放たれる渾身のローリングゴバット。知覚すら出来ずにモロに腹に入ったそれは、人間の俺を容易に部屋の端から端まで、机や椅子を巻き込みながら吹き飛ばした。喉元から迫り上がってきた鉄の味。自分の腹に風穴が開いていないか確認する。そうしないと安心できないほどの威力だった。

「ぶ、ふ……蹴つ、た! 蹴つたなお前!! 足はダメだろうが普通に考えて!!」

「先に弄ってきたアンタが悪いのよ! 普通に流してくれるのが優しさってもんじやないの!？」

「等価交換になつてねえんだよ!! メラに対してインビンシブル・フォートレスを返してくるんじやねえ!!」

「何ワケのわかんないこと言うてんの? ま、今謝れば許してあげないこともないけど?」

『アンタが信じるアタシは、無敵なんだから』

「うわああああああああああ!!」

渾身のカウンターはクリティカルヒット。ざまア見やがれ。スカレットは頭を抱えて地面をのたうち回っている。

そこで部屋に鳴り響くノック。恐る恐ると言った様子で開かれたドアの先には、物凄く恐縮した様子の係員がいた。

「あの～……ダイワスカーレットさん、準備をお願いします……」

「は、は～い……」

気まずい雰囲気のまま、俺たちは控え室を後にした。



控室を出て本バ場までの道のり、地下バ道を二人で歩く。控室での上機嫌は一転、スカーレットは不機嫌を全身から撒き散らしていた。

「全く……アンタのせいでひどい目にあつたじゃない」

「俺は物理的に痛い目にあつたけどな」

「あー……まあほら、水に流しましょう？ アタシ、レースに集中したいから」

「そうだな、俺が信じるお前は、無敵だもんな」

「……レース終わったら覚えてなさいよ、マジで」

おお、怖い怖い。これはマジでやばいやつだ。後でなんか美味しい物でも奢ってやんな  
いと。そんなことを考えていると。

「お、ここであったが百年目、つてやつか？ 元気そうじゃねえか、スカーレット」  
「フン……アタシはアンタの顔なんか見たくなかったんだけど、ウオツカ」

角で出会ったのは、黒いライダーズジャケットに、同じく黒いショートパンツにこれ  
また黒いニーハイストッキング。惜しげもなく晒された浅黒の素肌が眩しい、ボーイッ  
シユな雰囲気を漂わせるウマ娘、その名をウオツカ。彼女はニヤリと笑みを浮かべ  
ると、自信満々にスカーレットに告げる。

「今回も負かしてやるよ」

その言葉の通り、スカーレットは前回のレース……桜花賞の前哨戦トライアルとも言われる、  
『チューリップ賞』でウオツカと熾烈な争いを繰り広げ、1着を逃している。さらに2人  
は幼い頃からの腐れ縁であり、世間はその出自とレースでの関係性から、2人を「宿命  
のライバル」と呼んでいる。

前回の勝利で、自信を深めている様子のウオツカ。しかしそれは慢心から来るもので  
はなさそうだ。トレーナーの俺の目から見ても、前回より筋肉量を増やしてきたのだろ  
う、一回り体が大きく見える。

しかしそれは——こちらも同じこと。

「——そ。いいレースにしましょ。じゃ、トレーナー、行ってくるわね」

「おう、頑張れよ」

「あ、おい待てよスカーレット！」

ウオッカからの挑発を意に介さず、スカーレットは笑顔で本バ場への道のりを進んでいった。それを追いかけるようにウオッカも走って彼女の背を追いかける。その様子を見届けて、俺も観客席に向かうべく歩き出した。

——俺だってそうだよ。

心の中で、そつと呟く。

緊張こそしているが、心配なんて微塵もしていない。

あの敗北は、間違いなく君を強くした。厳しいことをたくさん言っただし、その後の練習も生半可なものではなかった。それでも君は、俺を信じてついて来てくれたから。屈辱と苦痛をバネに、君はまた一つ大きく成長することができた。

そんな君の信頼に、応えたい。

彼女は、こんなところで足踏みするようなウマ娘じゃない。もつと高く、1番高いところまでいける才能がある。そんな原石を、俺の匙加減一つで壊してしまうかもしれない。それでも彼女は、俺を信じてついてきてくれている。だからこそ妥協したくない、常に最善を尽くしてあげたい。彼女と共に——同じ景色を見ていたい。

「頑張れよ、スカーレット」

もう一度小さく呟いて、俺は歓声が鳴り始めた観客席へと歩を早めた。



——『桜花賞』。

阪神レース場、芝1600m。天候晴、良バ場。

計18人のウマ娘達が、一斉にゲートへと入った。

1番人気、ウオツカ。2番人気、ダイワスカーレット。激戦が期待される両者は、何

の因果かそれぞれ17、18番ゲートからのスタート。

「よおスカーレット。緊張して震えてるんじゃないやねえの……か……」

ゲートインを終え、いつものように気軽に話しかけるウオツカ。その言葉は、半ば途切れてしまう。

彼女の視界が捉えたダイワスカーレットの紅い瞳は、触れば切れるナイフ……否、目を合わせるだけで切り裂かれかねない、日本刀のように鋭かった。傍目からでもわかる、研ぎ澄まされた集中力が紅い気炎となつて立ち昇り、大気を揺らしている。

（コイツ……しばらく見ないうちに、マジでなんか変わったか……？ レースじゃなきや誰かブツ殺しかねない顔してんぞ……）

余りにも殺気だった彼女の様子に、ウオツカは思わず面食らつてしまう。そんなウオツカと目を合わさず、ダイワスカーレットはゲートの前を見据えたまま、小さく呟いた。

「……ごめんウオツカ、今アンタと話してる余裕無い」

「あ……？」

「これ以上、アイツに無様な姿は見せられない。悪いけど、アタシはアンタじゃなくて――」



——一位しか見てないから。

瞬間、轟音を立てて開いたゲート。

各ウマ娘は一斉に飛び出してターフの上を駆け抜けていく。ウオッカもダイワスカーレットも流石の集中力で、ミスなくスタートを切る。序盤にさしたる動きは無く、レースは中盤戦を迎えた。

ダイワスカーレットは現在3順目。先頭から2バ身程離れた2順目のすぐ後方に付けている。対するウオッカは7順目と、大きく後方に付けている。しかしそれは敢えての作戦。後方に付けることで視野を広く持ち、虎視眈々と相手を差す瞬間を狙っている。各々の得意距離で、1番人気と2番人気は静かに機を伺っている。そして勝負は最終コーナーを抜け、最後の直線へと差し掛かる——瞬間。

(——ッし、いづくぜエッ!!)

ウオッカが仕掛ける。一步目を力強く踏みしめた。二歩目で瞬間的な加速、三歩目で最高速へ。先行するウマ娘たちを抜き去り、一気に先頭へと躍り出た。その勢いのままスカーレットを含む後続とグングン距離を離していく。

(見たかスカーレット！今回もオレの勝ちだッ!!)

勝利を確信し、口角を釣り上げる。しかし次の瞬間。

——グシヤアツ

“ナニカ”がウオツカの鼓膜を揺らした。

次に押し寄せたのは、爪の先から全身に込み上げる悪寒。

猛烈な殺気が、ウオツカを射殺そうとせんばかりに背中へと突き刺さる。

(な、に——が)

恐怖に屈したウオツカが、後ろを振り返る。

そこに居たのは、牙を剥き出しにして、瞳から稲妻を撒き散らす、“真紅”。

そこに居たのは、風を切り裂いて、大空のようにウオツカを飲み込もうとする“蒼穹”

”。

そこに居たのは、それら全てが一緒くたになって溶け合つた、万象一切を貫く紫電”。

それを理解した瞬間には、もう彼女の姿はそこにはなかつた。

「——あ、え」

無様な呻き声を溢し、ウオツカは呆然と自分の遙か前方を走る紫電を眺める。押し寄せる敗北感すら置き去りにして、紫電がターフを焦がしながら切り裂いていく。

そして彼女は、  
宿敵ウオツカ諸共、桜花を貰いた。

【ダイワスカーレット 戦績：5戦3勝】

桜花賞——1着

## 1章： 何れ、真紅へと至る赤

桜舞う、或いは君と携わる

「トレーナー！見てたでしょ、アタシの走り！」

「見たよそりや。G1一位、おめでとな」

「ふん♪ 当然でしょ！」

阪神レース場から東京へ、そして寮へと戻る帰り道、夕暮れに染まる河川敷を俺とスカーレットは二人で歩いていて。初のG1勝利、口ではあんな風に言いながらも喜びを全く隠し切れていない。現に無意識だろうが尻尾をブンブンと振り回している。思い切り俺の尻にぶち当たって正直痛い。しかし俺は知っている。ここで言及すればどうせいつものが飛んでくるのだ。俺はデキる男、同じ轍を何度も踏んでやるものか。

「ま、アタシにかかればこのくらい大したことないわ。勝ちとわかつてたレースに勝ったところで嬉しくもなんとも無いわね」

「口だけは達者だな。喜びが尻尾から漏れ出してんだよお前。振りすぎ振りすぎ。犬か

「よ」

「ああん!?!」

「ったあ!?!」

前言撤回、全く我慢できませんでした。てへ。

真つ赤になった頬を労るように撫で、すっかり鼻を曲げてしまった今日の主役を横目で見る。その姿に、「あの日」が重なった俺は思わず笑みが溢れてしまった。

「ふふ……」

「……なにアンタ、普通にキモいんだけど」

「いや自覚あるけど、直球すぎて傷つくわ」

「もしかしてアタシが叩いたから? もう一回叩けば治るかしら……」

「絶対違うからやめて? いや、素振りしなくて良いから、えげつない風切り音してるからー」

「フフン、冗談よ。これは次やるときの練習だから安心して」

「今の話でどう安心すれば良いんだよ」

「まあそんなことはどうでも良くて。で? 何を笑ってたワケ?」

「いや……夕陽に照らされてるお前見てたら、「あの日」を思い出して、な」

「『あの日』……ああ、それって」

俺の言葉に得心が行ったかのように頷いたスカレット。瞬間、一際大きな風が吹いた。風に乗って舞う桜の花弁。その幻想的な景色の中で、頬を微かに染めて、彼女は微笑みながら呟いた。

——アタシと出会った日のこと？

あの日も同じように、桜が舞っていた。

4月。出会いと別れを孕んだ、始まりの季節。東京府中に大規模な居を構える、『日本

ウマ娘トレーニングセンター学園』——通称、『トレセン学園』。国民的エンターテインメントである、ウマ娘達の祭典“トウインクル・シリーズ”への参加を志したウマ娘達が集うその学園の門を、俺——松田克樹まつだかつきはあくび混じりに潜っていた。

諸事情で半年間の謹慎処分を受けていた俺がトレセン学園に復帰する今日は、春休みが明けた始業日でもある。

ウマ娘達が集うここ『トレセン学園』に、人間の俺が向かう理由がただ一つ。俺が、ウマ娘を指導するライセンスを持つ、“トレーナー”だからだ。トレーナーになるにはウマ娘や“トウインクル・シリーズ”に関する専門的な知識が必要であり、その試験の合格率は毎年一桁前半であるとも言われている……なんか自慢してるみたいで恥ずかしくなってきたな。

とにかく、俺はトレーナーで、それが理由で『トレセン学園』に足を踏み入れてるってことがわかってくれればいい。

「ついた、つと……まあ流石に残っちゃいないよな」

学園内を歩き、辿り着いたのはボロボロで小さなプレハブ小屋。かつてあった俺の担当していた“チーム”——ウマ娘は、必ずチームに所属することが義務付けられる——は、流石に俺の謹慎期間中に解散されたようで、人の気配はまるでない。



「……本当に俺が帰ってくる意味あったのか？」

トレーナーという職業は、先程言ったように本当に極小数しかいない。故に俺みたいな謹慎経験のあるトレーナーでも、復帰してウマ娘のために尽くすことが許される。というより、尽くさなければならぬと言ったほうが正しいか。

「……とりあえず、またチーム作りから始めるか。確か今日は選抜レースがあつてたら、有望そうなのを探すか——」

——『トレーナーさんとなら、どこまでも行ける気がするんです』——

「——今度は、大切にやらないな」

過ぎ去った思い出を心の奥底に仕舞い込む。感傷は要らない。未来のことだけを考へて過ごしていくだけでいい。

チクリと痛む心に蓋をして、俺は学園内の選抜レース会場へと歩き出した。



「次！スタート位置に着いて！」

『はいっ！』

「……お、やってるやってる」

選抜レースが行われる第3レース場へと辿り着くと、そこは熱気に包まれていた。数多くのウマ娘達が、自分の実力を誇示し、己の価値を証明せんとしている。トレーナー達も、才能の原石を発掘すべく、目を皿にしてレースを眺めていた。

「……芝の匂いだ」

何を言ってるんだお前と思うかもしれないが、俺が最初に抱いた感想はそれだった。その空気に若干の懐かしさを感じ、改めて俺はレースが、ウマ娘達のが好きなんだなと感情に浸る。

「あ、松田さん！こっちです！」

そんな俺に話しかけてきたのは、トレーナー席に座る1人の爽やかな若い男。名前は……ええと、なんだっけか、思い出せない。後輩だつてことは覚えてるんだが。

「おお……久しぶり」

「今日から復帰なんですね。長い間お勤めご苦労様でした」

「いや、別に刑務所に世話になってたわけじゃねえから。やめるよなその言い方」

軽口を叩きながら、男——仮称、爽やかだから『サワ君』で——の促しのままに横に腰掛ける。

「どうだ？ 今回の選抜レースは」

「目ぼしい子が何人か。もしかしたら豊作かもしれないですね。松田さんも、トレーナーとして活動再開するんですか？」

「まあ、な。上からの頼みだ。こんな俺でも、まだ使つてくれるんだと」

「そうなんですな……あ、でも前のチームは……」

「もうねえよ。また一から、全部最初からだ」

残念ぶつて呟くが、実はそうでもない。

かつての経歴や実績なんて、必要ない。むしろ知らない方がマシだろう。その方が実際、都合は良かった。

「次！ 整列してください！」

『はい！』

「お！ 始まるみたいですよ、松田さん！」

「言われなくても見てるっての」

係の促しに応じてゲートに向かうのは、5人のウマ娘達。その中の3名からは大きな緊張が見て取れたが、残りの2名はいかにも自信満々と言った表情で、ゲートまでの道

のりを歩いている。

「……あの二人、いいな。良くも悪くも吞まれてない」

「本番で、自分のポテンシャルを最大限発揮できるかは大事なファクターですからね」

「余程実力に自信があるか、ただの向こう見ずか……すっかり見させてもらうとするか」と、言った瞬間。

「へぶっ」

2名のうち、笑顔で歩いていた長髪の方が、間拔けな声を漏らしながら何も無い所でコケた。

『……………』

「つ~~~~~!!!」

対戦相手、観客席、ありとあらゆる無言の圧力が、コケた少女へと集中する。その横で、もう1人の少女はコケた少女を指差し、涙を流しながら大声で笑っている。当の本人は目に涙を浮かべ、顔から耳まで真っ赤にしながら、恥ずかしさに悶絶していた。

「……………今のところはただの向こう見ず、か？」

「まあまあ、誰だつてあれくらいありますよ」

俺の眩きに、サワ君は苦笑いを浮かべながら返した。今のところ、期待値は0。しかし何故だか、俺はあの長髪の少女から目が離せなかつた。

そしてこれが、俺と運命を共にする最高の相棒——『ダイワスカーレット』との、初めての出会いだった。

## その始まり、或いは物足りない

その後、気を取り直してレースは再開された。

俺が注目している2人は現在、短髪が4位長髪が2位。

「4位の子、敢えて順位を落としていますね」

「ああ。明らかに流してやがる」

「松田さんが見てた内の1人ですね。もう1人の娘は……」

「若干、かかっている」様にも見える。後ろを意識してんのか……大方後ろに付けてる4位のヤツの動向が気になるんだろう。互いに意識し合っているみたいだからな」

そして迎えた最終コーナー。先に仕掛けたのは4位の短髪のウマ娘だった。先行する3人を抜き去り一気に1位へ。長髪のウマ娘は4位まで下がるが、まだ仕掛けない。

「……行きませぬね」

「前半のツケか、もうスタミナが残ってないのかもしれないな。恐らく配分を間違え——」

——ズシン

瞬間、長髪の彼女が仕掛けた。

地面が割れた、そう錯覚しかねないほどの轟音。実際錯覚だろう、周囲を見回しても俺以外にそれに気づいた様子はないし、長髪の彼女も瞬間的な加速こそしたものの、長続きせず、1位まで追いつくには速度が明らかに足りていない。

だが。

「——今の、は」

俺は今の一瞬で、彼女に心を奪われてしまった。

結果はそのまま順位が変わることなく、短髪のウマ娘が1位。満面の笑みで拳を突き上げている。長髪のウマ娘は4位と言う結果に終わり、膝に両手を置き、肩で息をしながら悔しそうに歯を食いしばっている。

「今の1位の子、良かったですね。レース運びがダントツで上手でした。あれに更なる身体能力が身に付けば……今から将来が楽しみだ、是非ウチのチームに欲しいですね」隣でサワ君が興奮気味に捲し立てる声を聞き流しながら、俺は今のレースを振り返っ

ていた。確かに、彼女のレース運びは見事だった。自身の強みを正確に把握し、適切に運用することでしつかりと結果を残して見せた。ある意味で、完成していると言っても差し支えはない。

それでも俺の印象に強く刻み付けられたのは、長髪の彼女の方だった。後続に氣を取られてペース配分を間違え、自分のレースが出来なかつた彼女。結果途中でスタミナが切れ、走り方が崩れてしまいスピードが出せていなかった。

そう言った点を細かく見ていくならば、現時点では短髪の彼女の方が上だろう。しかし途中で見せた、地面が割れたと錯覚しかねない程勢いのある踏み込み。あれに本当の威力がつけば、その踏み込みで得た加速を推進力に変える走り方を身につけることができれば。

正直に言うと、俺からすればある程度の完成形が見えている短髪より、ただの原石でしかない長髪の方が育ててみたいと思わせるウマ娘だった。それがただの石止まりなのか、磨けばとんでもない宝石になるのか……今から楽しみで仕方ない。

——欲しい。

そう思った。思わされた。今尚屈辱と悔恨に齒を食いしぼり、勝者を射殺さんばかりに見つめる、負けん気の強い彼女の走りに。



「……じゃ、俺行くわ」

「ええ!? まだレース残ってますよ!」

「用事ができた。それじゃあな。お互い頑張ろーぜ」

「ああちよつと! 松田さーん!」

サワ君の呼び止める声を背に受けながら、俺はレース場を後にした。あの長髪の彼女について、少しでも情報を得なければ。



——勝てなかった。

夕暮れに染まる河川敷。舗装された道路脇の階段に腰掛けながら彼女——ダイワスカーレットは、夕陽を反射して揺れる水面をぼんやりと眺めていた。

今日行われた選抜レース。相応の決意と覚悟を以って臨んだそれは、見るに耐えない無様なものだった。後ろで構えていたライバルのプレッシャーに当てられ、ペースを乱

してしまった。巻き返しを狙った渾身のスパートも不発、惨めな結果を晒してしまつた。

悔しい。悔しい。

1番になれるように、1番が似合う自分になれるように。彼女がいつも思っていることだ。それがなんだ——このザマは。

ギリツ、と嫌な音が響く。

彼女の整つた顔立ちが、悔恨に歪む。

風に舞う桜の花弁が、嫌に気に障つた。

——幼い頃から、“いちばん”に焦がれていた。

始まりは、小さなことだったような気がする。かけっこで1番を取れば、みんなに速いと褒められた。テストで1番を取れば、みんなに凄いと褒められた。その称賛が心地よいものだったことに変わりはない。でもそれが理由かと言われれば領けない。

——それでもアタシは、“いちばん”でありたかつた。

彼女自身もよくわからないこの感覚。理由もわからぬままそれを欲し続け、そして今

日、それを逃した。

——今日の走りには課題が沢山あった。それを受け入れて、次に繋げればいい。

自らの課題を冷静に把握し、敗北という事実を悔しながらも受け入れ、次に繋げようとしている自分に、彼女は漠然とした違和感を覚えた。間違っていないはずなのに、そうすることが正しいことであるはずなのに。もう一人の自分が「それでいいの?」と、語りかけてくるような不思議な感覚。その感覚を振り切ろうと、彼女は大きく頭を横に数度振った。

「……明日から、もっと練習頑張らないと」

彼女は決意を言葉にし、気持ちを切り替えた。

そんな時、彼女の運命を変える存在が現れた。

「こんなところに居たのか、探したよ」

「誰……ですか?」

「いやー、一日中歩き回った。隣、いいかな?」

「え、嫌ですけど」

「ありがとう。失礼するよ」

「話聞いてます?」

よっこいしょ、と間拔けな声をぬかしながら、スカレットの質問に何一つ答えることなく男は彼女の隣に腰掛けた。

「あの、ホントに……なんなんですか?」

「まあ落ち着けよ、ダイワスカレット」

「つ……!? なんて、アタシの名前……」

「当然さ。俺は君のことならなんだって知ってる。ダイワスカレット、ジュニアクラス所属。成績優秀でクラスメイトも憧れる優等生。スイーツが好きで目がない。スリーサイズは上からB9——」

「うわあああああ!?! ああああ!!」

「あべしっ!!」

「あっ」

羞恥の余り、反射で手が出た。

衝撃に男は階段からゴロゴロと転げ落ち、砂煙を巻き起こしながら地面へと墜落していった。男はそのままピクリとも動かない。

「ごっ、ごめんなさい！ 大丈夫ですか!？」

我に返った彼女は、急いで階段を駆け下りる。最悪の事態を想像し、顔が青ざめていくのを感じた。しかしその心配は杞憂に終わる。

「よいこらせ」

「うわあああああ!？」

むくりと突然立ち上がった男。今度は恐怖から悲鳴が出た。

「いやー、いいピンタだった。長男だから耐えられたけど、長男じゃなかったら耐えられなかったね」

「は、はあ………」

「まあ座りなよ、ダイワスカーレット」

「は、い」

空気に流されて、彼女は「怪しげな」からランクアップした「いかにも怪しい」男の隣へと腰掛ける。

「自己紹介が遅くなったな。俺は松田克樹。トレセン学園でトレーナーをやってる」

「トレーナー……？ アナタが？」

「いいねえ物事を穿って見るスタイル。嫌いじゃないぜ。ほら、ライセンス」

そう言いながら男が彼女の前に示したのは、手帳型のライセンスだった。どうにも胡

散臭いが、一応本物のトレーナーなのだろうと彼女は結論付けた。

「わざわざ探してくださってありがとうございます。で、アタシに何か御用ですか？」

「そう結論を急くなよ、御用があるから探したんだ……見たよ、今日のレース」

「っ——」

自分の心に出来た生々しい傷跡を思い切り突かれ、ダイワスカーレットは顔を歪める。

「——真面目な話をしようか、ダイワスカーレット。俺は今から、お前が聞かれたくないだろうことについて聞く。30秒だけやる、心を落ち着かせて、覚悟を決めな」

先程までの飄々とした雰囲気を一転、男は真面目な声色と表情で彼女に語りかける。与えられた猶予は30秒。

彼女はそれが何なのか、薄々察していた。今日のレースを見たトレーナーが、自分を探して尋ねたいことなんて、一つしかあり得ない。彼女は深く息を吐いて、真剣な眼差しを男へと返した。

「——大丈夫です」

「……へえ、やっぱやるなお前。いいメンタルコントロールしてるよ」

ニヤリと笑って、男は感嘆する。

さて、と前置くと、彼は彼女に問いかけた。

「——今日のレースの敗因は？」

その問いは、想像通りのものだった。

故に特段驚きもせず——それでも吐き捨てるように言葉を紡いだ。

「……自分のレースが、出来ませんでした」

「その理由は？」

「後方につけていた5番とウオツカ——3番を気にしすぎました。2バ身程度の距離があつたんだから、ペースを乱さずに自分の走りを貫けば最後のスパートで充分巻き返しが効いたと思います。あと、最終コーナーで最後尾の1番が動き出した時、道を塞ごうとして横に移動したのは失敗でした。結果あれで残っていたスタミナを使い果たして、最後までスピードを保つことが出来ませんでした……自分の走りができれば、アタシは負けなかった」

自分なりに考えた敗北の理由を、ダイワスカーレットは饒舌に語る。途中まで理性的な解説だったが、最後の一言に込められた感情が、彼女の負けん気の強さを物語っている。

彼女の言葉を聞いて男は暫く唇に指を当て、物思いに耽る。そして彼女を見ると、再

びニヤリと笑った。

「……評価を上げよう。最高だな、お前」

「……負けたレースで褒められても、嬉しくありません」

「上昇志向が高いのは良いことだって言ってるんだよ。素直に受け取れ」

そう言いながら、彼女の頭に手を乗せ、優しく撫でる。彼女は一瞬驚いたものの、自分の頭に乗せられた手から伝わる温かな熱は、不思議と心地よいものだった。普段なら叩き返していただろうその手を素直に受け入れ、彼女は頬を微かに染めながら目線を男から逸らした。

「……ま、トレーナーの俺から見ればもう少し課題はあつたが、概ねお前の自省に同意だな。ただ……」

「……？」

「一つだけ、お前の話で腑に落ちない点がある——自分の走りって、なんだ？」

「っ！ それ、は……」

勢い良く言い返そうとして、言葉に詰まる。自分自身の最高の走りができれば、負けることはない。いつも思っていることだ。しかしその走りとは何か、と聞かれて相手を

——自分を納得させるだけの答えを持ち合わせていないことに、今漸く気づいた。

「……厳しいことを言うが、お前のソレはただの言い訳だ」



「つ……！」

「自信を持つのは良い。だがお前の言葉は薄っぺらいんだよ。そこに根拠がまるでない。『自分の走り』？ ジュニアクラスのレースにも出てないルーキーが、甘ったれた事吐かしてんじやねえ。お前の走りなんてモンは、まだ存在してないんだよ」

ダイワスカーレットの方は向かず、男は夕陽に照らされる水面を見ながら吐き捨てた。彼の言葉一つ一つが、彼女の心の柔らかい部分を抉っていく。その痛みと、それを違うと言いつ返しえない悔しさが、彼女の瞳に水滴を溜めていった。暫くの無言の後、男はゆっくりと口を開く。

「……で、改めて聞くぞ。お前の走りってのはなんだ？」

「え……？」

「わかっただろ？ お前の走りなんてのはまだ存在してない。じゃあお前は、どんな走りをしたいんだ」

「アタシの……走り」

「この期に及んでイイ子ぶんなよ？ 全部曝け出せ」

それきり無言で、男は彼女の答えを待っている。最後の問いに、ダイワスカーレットは己の全てを見透かされているような気がした。

“いちばん”に拘る理由が自分でもわからない

——嘘だ。

答えは最初から、ずっと胸の中にあつた。

優等生であろうとする心が、その答えにフタをして、溢れ出さないように鎖で縛り付けていた。

そうあれかしと、自分に言い聞かせてきたから。それが正しいと、自分に言い聞かせてきたから。

しかし今日の敗北と、目の前の男の言葉が、その封印を破ろうとしている。

——アタシが負けるはずがない

一度は冷まして味わった敗北という事実にも、気が狂いそうなほど怒りが込み上げる。

冷静に押し殺したはずの感情が臓腑の底から迫り上がり、彼女の心が熱を持ち始めた。

——こんな結果じゃ、物足りない。

確かに自覚した、その思い。鎖でギチギチに縛りつけた本能が、音を立てて暴れ出す。

曝け出せというのなら。曝け出して良いのなら。

吐き出した答えは、至ってシンプルだった。

「——アタシの最強を証明したい」

そう呟いた彼女の表情は、優等生のカケラもなく、美少女のカケラもなく。

——本能と欲望に塗れた、一頭のケモノのソレだった。

「誰も追いつけないスピードでぶつちぎって、全員を捻じ伏せて1着を搔っ攫って、他の子はアタシを凄いつて崇めて、どう足掻いても敵わないって思わせて——そんな圧倒的なレースを、アタシはやりたい。それが、アタシの目指す、アタシだけの走り……！」

彼女が「いちばん」を志す理由は、他でもない。

——己こそが最強であるという、才能と実力の誇示。それ以外に何も無いのだ。

鎖は解き放たれた。「いい子ぶった」心を捨て去り、彼女自身も初めて自覚した心に巢食う純粹で強烈なエゴ。不思議と不快感はなかった。寧ろ、心は晴々としていた。そんな様子を見ていた男は、心の底から嬉しそうに、声高に笑う。

「やつといい顔になったじゃねえか」

「え……」

「ずっとらしくなかった。優等生ぶって、冷静に負けを受け入れたフリなんてして。心の中で暴れてる闘争本能にフタをして、理性的に振る舞う。そうじゃないんだよ、お前の良さってやつは。自分の負けを素直に認めず、自分以外の勝者を許さない、相手を睨

みつけてしまうほど我儘で自己中なエゴイズム。そのエゴと負けん気こそが、お前の魅力で、お前だけの武器だ」

「……よくわかりましたね」

「隠してたつもりだろう？ 事実上手に隠せてたよ、お前自身を欺く程に。だが完璧な外面の中で、一個だけちぐはぐだったんだよ」

「へえ、どこですか？」

「——目だよ。自分を負かした相手を見据える、ブチ殺しかねないほど殺気の籠った目だ。自分以外の一着を許さない、そんな“エゴイスト”を俺は欲していたんだ。ダイワスカーレット、お前ならやれる。お前なら、他の全てを蹴散らして、お前の最強を証明することができる。俺が保証してやるよ」

「……そう、ですか」

彼女は優しく微笑むと、そっと目を閉じる。自分の中の不要だと切り捨てていた本心を曝け出したのも——肯定されたのも初めてだった。よかったと、彼女は安堵する。

そして彼女は瞳を細め、牙を剥き出しにしながら不敵に笑った。

「——で？　そういうからには、アンタはアタシを勝たせてくれるんでしょうね？」

「やつと本性でしたか、猫被り女」

「うっさいわよバーカ。イイ子ぶんなって言ったのはアンタの方じゃない」

「そうだよ。そっちの方がよっほど好感が持てる。さて、質問の答えだが——YES、だ」

「ふーん……ま、信じてあげる」

「どこまでも上からだなあ、お前。だがまあ何度も言うが嫌いじゃない。俺がお前を、勝たせてやる。ついて来れるか？」

「ふふん、舐めた練習だったら承知しないんだからね？」

「そっちこそ、泣き言言ってもやめねえからな」

「契約成立、ね。よろしく頼むわよ、アタシのトレーナー」

「ああ——スカーレット」

交わされる握手。2人は互いの手を強く、強く握った。

そしてこれが彼女、ダイワスカーレットと運命を共にする相棒——トレーナー、  
田克樹”との、初めての出会いだった。松

## 敗走の回想、或いは才能の解放

「ほい！ というわけでようこそ、俺のチームへ。狭いけどゆつくりしてい——」  
「きつたな!! ちょっと何よこの有り様は!!」

河川敷での契約後、俺は彼女——スカーレットを連れて俺のチームが使うことになるプレハブ小屋へと帰ってきた。そんなスカーレットは、開口一番室内のあまりの汚さに悲鳴を上げる。

「仕方ないだろ？ 半年間、誰も使っていないどころか物置にされてたんだから。これでも片付けた方なんだぜ？」

「は……？ 誰も使っていない？」

「まあその話は追いついて、な。ほら、適当に座ってくれ」

「座る場所なんてないんですけど？」

「じゃあ立ちっぱで。俺は座るけど」

「薄々わかってたけど、アンタかなり畜生よね」



半目で俺を見るスカレットを無視し、俺は自前のタブレットを操作してある動画を探していた。

「えーつと……お、あつたあつた。ほい、これ」

「何……っ！ これって……」

「そ。今日のレース。他のトレーナーが撮影してたやつを貰ってきた。まずは改めて今日の反省会だ」

「……………わかった」

渋々、もしくは嫌々といった様子で彼女は頷く。自分の負ける姿を見たくないという感情と、課題を明確にして次に活かしたいという理性が闘ぎ合っているのだろう。それでいい。その私の強さこそ、俺が彼女を欲した理由の一つなのだから。

そして再生されるレースを2人で眺める。

「……………やつぱりこうして客観的に見ても、飛ばし過ぎよねアタシ」

「俺はお前の最高速を知らんからなんとも言えんが……まあこの表情から見て序盤から必死に走ってるのがわかるな」

「緊張とプレッシャーに負けてペースを乱すなんて……なんて情けない。恥ずかしくもないのかしら」

「自分のこと話してらってわかってる?？」

さらにレースは進み、問題のシーン。

「ここね。最後尾が動いてたから道を塞ごうと横に動いたんだけど、結局無駄だったわね。それでスタミナを使い果たしちや意味がないわ」

「……なあ、お前」

「ん？」

「……いや、なんでもない。お、スパートの場面だな」

「一か八かで巻き返しを狙ったけど、やっぱりスタミナが無くて全然スピードが出てない。これじゃあんな結果も——」

当然だ、と言おうとしたのだろうが、持ち前のプライドがそれを許さない。苦虫を噛み潰したような表情で目の前の動画を見ている。

「まあ、お前はそんな顔してるけど……俺はこの場面、お前の良さっていうか、強みが凝縮された良い場面だと思ってる」

「はあ？ こんなクソみたいなの走りか？」

「自虐の勢い強すぎ。心ん中血塗れだろお前。いやそうじゃなくてさ。例えば——こ  
う」

「加速前の踏み込み……？」

「思い切りのある、良い踏み込みだ。若干捻り込む形で踏み込むことで力がしっかり地

面に伝わってる。誰かに教わったか？」

「いや……別に」

「我流か。なら殊更スゲエよ。教えられてできるものでもないしな」

素直に褒めると、スカレットは暫く呆氣に取られたように目を見開いた後、頬を真つ赤に染めながらそつぽを向いた。

「……フ、フン！ 大したことないわよ別に！ まあでも誰にでもできることじゃないとは思うけど？」

「ちよろ」

「あア!？」

「つてえ!! 叩くんじゃねえよ!」

「アンタが言ったんでしょ？ 本能に従えって」

「そういう意味じゃねえんだよなあ!!」

叩かれた頬をそつと摩る。にしてもコイツのビンタ、マジで痛い。ちよつと洒落にならないレベルで。どうか習慣化しませんように……と祈る俺だった。

そしてこの祈りが儂く砕け散り、事あるごとに頬を摩るハメになることを、俺はまだ知らない。

「……で、踏み込みの話なんだが。それ自体は良かったが、その後がダメだ」

「言われなくてもわかってるわよ。スタミナ切れでスピードが出な」

「違うんだなあ、これが」

「は……？」

「スタミナが切れてスピードが出なかったのは事実だが、これはそんな曖昧な現象じゃない——原因は、ストライドの姿勢だ」

「姿勢？」

「そ。前半のお前の走りとは後半の走り。後半の方は明らかに上体が起ききってるんだよ。だから踏み込みの力が前じゃなくて上に向くし、踏み込みに対して速度が出ない。これがあのスパートのカラクリだ」

「……なるほど」

ふむふむと、頷きながらスカレットは俺の話を聞いている。感覚的な実感から、理論的な理解へ。一度説明しただけで全てを理解するコイツは、やはりかなり賢い。そこまで考えて、俺はふと思いつく。

「あーあと……お前さつきから自分のレース冷静に分析してるよな？ 相手の動きとかまでしつかりと」

「そうだけど？ ダメなの？」

「いや、そうじゃない。寧ろ積極的に行っていかななくちゃいけないことだ。一つ聞くが、お

前、ここに来る前にどつかでレースの映像見たのか？」

「え？ いや、見てないけど」

「だよな、安心した。それなら俺の仮説が当たってそうだ」

「仮説……？」

俺の言葉に要領を得ないというように首を傾げるスカーレット。そんな彼女に、俺は自分の中で組み上がった仮説を告げた。

「スカーレット——お前の分析は、余りにも完璧すぎる」

「っ！」

「河川敷で話した時から思ってたんだ。レースを一度も見えないはずのお前は、対戦相手の動向を適切に言い当てた。そりゃ、前を走ってるヤツならわかる。だが後ろのヤツ、それも最後尾のヤツの動きまでお前は見えていた……ハッキリ言って、ソレは異常だ」

「それ、は……」

「なあスカーレット、正直に答えてくれ。お前、見えてるんだろ」

「……………」

俺の言葉に、そつと目を逸らすスカーレット。

暫くの間、無言が続く。そして彼女は意を決したように、口を開いた。

「……………そう、よ。見えてるなんてのは大袈裟だけだね。集中してる時とか、必死な時とか。そんな時に自分の目じゃなくて、なんか、その……………上から眺めてる、みたいな気がする——そんな感覚になる時があるのよ。自分でも気持ち悪いから、誰にも言ったことなかったけど」

そう言葉を閉じて、スカーレットはバツの悪いような、困ったような笑みを浮かべる。それは先程までの彼女からは想像もつかない、弱々しいものだった。

「……………良いことじゃないか。どうして言わなかった？」

「さつきも言ったでしょ？ 自分でも気持ち悪いし、普通信じて貰えるわけないじゃないこんなの。寧ろ、アンタがすんなり信じてくれることの方が驚きだわ」

「……………ごく稀に居るんだよ、そういう奴が。スポーツ選手……………例を挙げるならサッカーで、パスを出す前から味方選手の位置が分かっていたりするヤツがな。そういうヤツは決まって言うんだ——『まるで上から眺めてるようだ』ってな。そしてそういうヤツは、決まって天才だ」

「……………」

「ニヤケてんじやねえ。調子乗んな」

「う、うるさいわね！」

自分で気持ち悪いと思っていたことを褒められて嬉しかったのだろう、スカーレットは頬を赤くしながらフンと鼻を鳴らした。自信を持つ事は大事だが調子に乗り過ぎるのも問題なので軽く釘を刺しておく。

「…………さて、分析はここまでにして。スカーレット。もう一度聞く、お前の走りつてのはなんだ？」

「もう迷わない。アタシはアタシの最強を証明するために走る。他を寄せ付けない、圧倒的なレース展開を作つてブツちぎる。それがアタシの走り…………アタシのやりたい走りよ」

「素直に言えたじゃねえか」

「アంతに隠す必要もないでしょ」

「それもそうだ…………その走り、俺が実現させてやるよ。お前のその踏み込みと全体を俯瞰する視野、そしてそれを基に組み立てる明確なレースビジョンがあれば——お前はレースそのものを自分の支配領域に置く、最高のレースプランナーになれる」

「レース…………プランナー…………」

「俺はそのためのメニューを作る。楽じゃねえぞ、付いてこれるか？」

「愚問ね。アンタこそ、舐めた練習させたら承知しないわよ？」

俺の挑発に、彼女は瞳を細めてニヤリと笑みを返した。

今日この日、俺とスカレットの、最強への道のりが始まった。

「……なあ、タメ口は別にいいけどさ、そのアンタってのはどうにかならないか？」

「何？ 嫌なの？」

「いや、そういうわけじゃないけど。なんか、な」

「はあ、わかったわよ——松田」

「ごめんやっぱ今の話なしで」

「マツダア……」

「CMつぽく言えばいいってもんじゃねえ!!」

……始まったのだ！



## 来たる初陣、或いは抱く唯心

翌日。早朝のレース場に俺とスカーレットは集まっていた。

「っし。じゃあ始めよう」

「ええー！」

「お、気合い入ってるな」

「当たり前じゃない。アタシは最強になるんだから」

「ほう、じゃあお前は『現時点では最強ではない』って認識でいいんだな？」

「うっ、ぐっ……癩、だ、けど……それは、まだ、事実、だから……」

「いやどんだけ認めたくないんだよ」

まさしく断腸の思いで、と言った表情で言葉を絞り出すプライドの高い彼女の様子を見て、俺は苦笑いを浮かべた。

「まあ気合入っていると申し訳ないが、朝練はテストをするぞ」

「テスト……?」

「そ。俺はあのレースしか実際に見てないから、お前の限界値を知らない。限界値を知

らないとプランが立てられない。故にテストだ」

「ふーん、なるほどね……わかったわ」

「結構細かく項目作ったから時間かかると思うが、予習とか大丈夫か？」

「何の心配してんのよ。その質問、誰にしてると思ってるの？」

「愚問か、〃優等生〃」

「お褒めに預かり、光栄です」

俺のからかいに、彼女は悪戯つぽく八重歯を見せながら笑う。こうやって優等生ぶつてる分には、普通にカワイイヤツだよなあ、とは思う。事実成績優秀らしいし、あながち完全な猫被りってわけでもないんだろうな。

「さて、これが今日のテスト項目だ」

「はーい……げ、かなりあるわね」

「さつきも言っただろ。なんだ？ やめるか？」

「ハア……ハア……敗北者ア……？」

「いや全く言つてねえけど」

「取り消しなさいよ……！ ハア……今の言葉……！！」

「お前マジでどうした??？」

急に息荒くキレ散らかし始めたスカーレットに、流石の俺も若干面食らう。

「やるに決まってんでしょ!? さっさと始めなさいよね!」

「わーっただわーっただ。おら、さっさとスタートラインに付け」

不当な怒りをぶつけられ、若干臍に落ちない点があるものの、スタートラインに向かうスカーレットに向けて、俺は期待の気持ちを寄せる。さて、如何程のものか、改めて見せてもらいますか。



「き、きつつ……」

「おう、お疲れさん。座って休んでていいぞ」

「だから座るところないでしょうが!!」

テストは終了し、部屋へと戻った。

肩で息をするスカーレットにスポーツ飲料が入ったボトルを投げ渡し、俺はデスクへと向かった。

そのままカカタとキーボードを弾いていると、息を整えたスカーレットが不思議そうに画面を覗き込んでくる。

「何してんの?」

「今日のお前のテスト結果を演算ソフトに打ち込んで。グラフ化してあった方が見やすいしな」

「へー……なんて言うか、アンタって意外とちゃんとしてるわよね」

「は？」

「いや、態度とか発言とかはかなりアレだけど、昨日の解説とか今日のテスト項目とか、今やってる作業とか……ちよつと意外」

「完璧な外面貼り付けて中身がアレなお前とは正反对だな」

「素直に褒めてるんだから受け取ればいいでしょ!？」

「つたあ!?! 叩く事ないだろうが!」

ちよつと恥ずかしかつたから弄り返したら1000倍くらいになって帰ってきた。いや、にしても痛い。涙出てきたわ。

「そういうところがアレなのよ、アンタ」

「お前もすぐ人を叩くところアレだぞ」

「もう一回やられたみたいね」

「立ちっぱなしで大丈夫？」

「キツモ」

この椅子使う?? お茶飲む??? プリンもあるよ???

全力の媚に対する返答は、汚物を見るような冷たい視線だった。一部の層には喜ばれ

そうだが生憎俺にそのような性癖はない。

「……ねえ、ひとつ思ったんだけど」

「ん？」

「このチーム、アタシ以外のウマ娘はどこにいるの？」

「……………」

「……………え？」

「お、時計見てみるスカーレット。もう直ぐ授業始まるぞ」

「はあ？ はぐらかすんじゃない！」

「放課後になつたらまたここに来い。それまでにメニユー作つとくから」

「わかつてるわよ！」

俺を振り返る事なく、スカーレットは部屋を飛び出していった。その姿を見送り正面を向いた後、俺はゆっくりと背もたれに体を倒し、彼女の言葉を心の中で反芻する。

——『このチーム、アタシ以外のウマ娘はどこにいるの？』——

「……居ねえんだよなあ」

チーム。

トレセン学園に通うウマ娘達がトウインクル・シリーズに出場する為には、チームへの所属が義務付けられている。各チームに1人ないし数名トレーナーが付き、そこで指導が行われるのだ。簡単に言ってしまうえば、ウマ娘達の『部活』と言った認識で構わない。『レースに出る為に練習する』という活動はどこも変わらないが、その方法はチームによって大きく異なる。故にウマ娘達は実績のあるチームや、自分の気性に合ったチームを選ぶ。

以前までは5人居なければチームとして認められなかったが、数年前に改正されて1人でもチームとして認められるようになった。なんでも、どこかの1人しか所属していないチームのウマ娘が他所へ移籍したがらず、それでも運営を唸らせるだけの結果を残したのを見て、運営が個と個の繋がりを重視するようになって改正に至った……んだ。か。まあ突出した一つの才が、規則を揺るがすのはどの競技でもある事だ。

ただまあ、基本的にその形式は例外で、同じチームのヤツと切磋琢磨して互いを高め合った方がいいに決まっている。だが俺は、今のところ勧誘をしてメンバーを増やすつもりはない。スカーレットがそれを果たして理解してくれるかどうか……。

「……いつ話すかなー……」

後ろめたいわけではない。俺の中のリソースを、彼女に割いていたい。それが最善だと信じているから。だがそれ以外にも、俺の若干の私情が含まれているから、伝えにくいのだろうか。

「……ま、なるようになるだろ」

最善を尽くせば、結果は勝手に付いてくる。

俺がいつも、ウマ娘達に伝えていた事だ。

そう思い直し、俺は再びデータの打ち込みを再開した。



「よし、じゃあ早速トレーニング開始だ」

「……ねえ」

「ん？ どした？」

「いや、トレーニング……するのよね」

「そう言ってるだろ？」

「じゃあなんでアタシはイスに縛られて座ってるわけ？」

うーわおっかな。如何にも怒り心頭、といった様子で俺を睨みつけるスカーレット。彼女は今部屋の中に作られた固定された机とイス……言うなれば、『勉強スペース』に腹部をイスに縛られた状態で座っている。

「いやいや、合意の上だろ？ お前だって素直に縄を受け入れてたじゃんか」

「アンタの手際が鮮やかすぎて気付いたらこうなってたのよ!! どういうつもりよ、トレーニングするんでしょ!？」

「どうどう」

「誰がウマ娘よ!!」

「いやウマ娘だろうが」

俺の冷静かつ的確なツツコミにぐっ、と唸り、スカーレットは押し黙る。未だに納得していない様子で俺を睨み付けてはいるけれど。

「まあ落ち着けて。改めてトレーニンクスタートだ」

「ちよつと、何よコレ!？」

「見りやわかんだろ？ 本だよ、本……つと」

驚くスカーレットを無視して、俺が抱えていた山積みの本を机上にドサリと置いた。

「これ読め。全部な」

「はあッ!? アタシ、練習したいんだけど!」



「バカ言うな、コレが練習だよ。勉強好きだろ？」  
「優等生」。その為に手はフリーに  
しておいたんだから」

「いや、でも、そんな……」

「3分ずつ区切りながら読め。3分経ったら1分休憩だ。テスト入れる時もあるからそのつもりで頑張れよ。はい1回目、よーいドン」

「ちよ……あーもう！ わかった、やればいいんでしょ!？」

「やればいいんだよ」

スカーレットはキレながらも、机上の本を一冊掻っ攫い、開き始めた。ブツブツ呟き、メモを取りながら中身を覚えようとしている。俺が用意した本はレースの基本に応用、走法や呼吸法、メンタルトレーニングの参考書と、様々だ。さて、この練習の意図にコツが気付けるか……俺から彼女に言うつもりはない。自分で気づくと言うことが大事なのだから。

1時間ほどそれを行い、休憩時間に入る。

「ぐっ……これ、案外キツイわね」

「舐めてたろ」

「正直。3分って意外と短いのね」

「とりあえず、これは下地作りだ」

「下地？」

「そ。今はこんなに長時間してるけど、お前が慣れてきたらもつと短時間に変えて行くから。そして今からやるもう一つの練習、これも下地作りだと思ってもらっていい」

「もう一つの……練習……」

「よし、じゃあ外に行くぞ」

俺は椅子から立ち上がり、部屋を移動しようとする。しかし彼女は、そこからピクリとも動く様子はない。

「? どうした? 早く来いよ」

「縄解きなさいよ」

「あつ、ごめん」

素で忘れてたわ。



「ふんぐぬぬぬぬ……!!」

「頑張れー、後10メートルだぞー」

「ぎ、ぐ、ぬうううう!!」

じり、じりところちらへ向かってくるスカートレットの形相は、普段の美少女面の面影は  
なく見るに堪えないほど力んで真っ赤になっている。

今彼女は巨大なタイヤを、腰に巻いた紐を通じて50メートル先のゴールまで引つ張  
るトレーニングをしている。身の丈を超える、なんてもんじやない。自分の何倍もある  
質量を彼女はゆつくりと、渾身の力でこちらへと運ぼうとしている。

「おら足だ！ 足を前に出せ！」

「わがっで、るうううう!!」

「今のお前の顔、相当オモロイな。写メっところ」

「んんんんぐううううああああ!!!」

「……ツツコミ返す余裕もない、か」

しかしまあブチ切れたのは伝わってきた。その証拠に体からなんか出てる。いや、な  
んかオーラみたいなのヤツ。よくわからんけど。

「うううううう……っだはアっ!!」

「よーしお疲れ様。休憩していいぞ」

「はあ……っ、あ、は……」

「流石に疲れたみたいだな。よくやった」

「これ、つぐらい……どーってこと、ないわよ……ッ」

「まだ意地張れるのかお前。大したヤツだ」

ゴールした途端、大の字になって倒れ込んでしまったスカーレット。そんな彼女へと、心からの称賛と共に俺は頭を撫でた。少し驚いた表情をしていたものの、彼女は黙ってそれを受け入れる。

「はあ……案外、やれるものね……最初見たときは殺す気かと思っただけど」

「ははは——そうだぞ。あつ」

「今なんて？」

「いや……なんでもない。忘れてくれ」

「聞き捨てならないのよ!! 今そうだぞって言わなかった!？」

「ニ、モ ミラカ トチンニミキ ニトミ、カ ニカ チ モニトナミシイストカチミ  
シニミキ?」

「謎言語で返すな!!」

「ぎやあぎやあとスカーレットは騒いでいる。それだけはしやぐ元気があれば大丈夫か。」

「さて、起き上がるか？」

「ええ、もう大丈夫よ」

「よしじゃあ次だ」

「何でも来なさい！」

「このタイヤ押して元の位置まで戻れ」

「あつ！ アタシ用事思い出した！ お疲れ様！ うぐツ」

スカーレットは慌てて逃走を図った。しかし彼女の腹に固く結ばれた縄が、それを許しはしない。

「くそ……っ！ このっ、なんて硬い結びしてんのよこれっ!!」

「二重八字結び。命綱にも使われる、絶対解けない安心性の高い結びだ」

「なんていう結び方してんのよアホ!!」

「諦めろスカーレット。さ、練習再開だ」

「いや……イヤアアアア!!」

誰もいないトラックに、彼女の悲鳴が虚しく響いた。



「死ぬ……普通に死ぬ……」

「お疲れ。よく頑張ったな」

日も落ちてきたので、部屋へと戻った。ちなみにスカーレットはあれから相応の時間をかけてタイヤを元の位置へと戻すことに成功しましたとき。

「明日絶対筋肉痛よコレ、はあ……」

「なんだ？ こんなもんで限界か？」

「バカ言うんじゃないわよ。こんくらい余裕よ余裕」

「なんか俺、お前の扱い方がわかってきた気がするわ」

いくらなんでもちよろすぎるだろ。口には出さないけど。

「ま、トレーニングはこんな感じだ。今はとにかく下地づくり。しばらくコレを繰り返して行くからそのつもりでな」

「え、走る練習は？」

「……今はその段階じゃない。走り込みなんかのトレーニングはしばらくやらない」

「……そう。わかった」

「そしてスカーレット。一個朗報があるぞ」

「朗報？」

「——お前のデビュー戦が決まった」

「……………」

「1ヶ月半後の5月下旬。そこがお前の、デビュー戦だ。やるからにはもちろん勝ちに行く、覚悟はできてるか？」

「当たり前じゃない！ 願ってもない機会だわ……………」

そこにあつたのは、あの闘志剥き出しの獰猛な笑みを浮かべる彼女の姿。やりたくてやりたくて仕方ないといったその様子に、俺もつられて微笑んでしまう。

「その気持ち、忘れんじやねえぞ。強い心に、体と気持ちがついてくるんだからな。っし、目下の目標はデビュー戦！ 華々しいスタートを飾ろうぜ」

「ええ！ やってやるわ！ アタシの一番を、みんなに知らしめてやるんだから！」

彼女の声高な宣言が、狭い部屋に響いた。

# 初戦にして緒戦、或いは露見、引目、預言

そして一ヶ月半後。ついにレースの前日となった。今日も今日とて、タイヤが地面と擦れる轟音が響いている。

「ん、ッ、があああああ!!」

「よしそこまで。お疲れ、スカーレット」

「ええ……ありがとう」

水分補給をしながら、彼女は笑顔で俺の労いに応える。終わる度に全身を地面へと投げ出していた練習当初に比べれば、見違えるほど余力を残したままタイヤ引きを終えることができるようになった。

「だいぶ慣れてきたみたいだな。タイム、最初に比べれば半分近く縮まつてるぞ。立つたまま休憩できるようなにもなったじゃないか」

「そりゃ毎日続けてればね。引つ張るコツと押すときのコツをアタシなりに掴んだのよ」



「へえ、そりやめでたいことだ。『勉強』の方もミス減ってきたし、いいことだ」

「そつちもなんとなくやり方がわかってきたのよ。フフン、コレで明日のレースは……  
万全……」

「ん？ どうしたスカーレット」

自信満々の口調が、徐々に弱々しくなる。疑問に思った俺が声をかけると、彼女は泳いだ瞳で俺を見た。

「……ねえ、アタシ、1ヶ月半その2つだけが続けてきたわよね？」

「いや、そうだけど」

「——走る練習は？」

「……………あつ」

「あつ、じゃないでしょうがアツ!!」

「ふべらっ!!」

今回のビンタは、格別だった。

踏み込みで助走をつけて、まるでピッチャーのように体全体を振り切りながら放たれた一撃。鼓膜が破裂したかのような爆音と衝撃に、俺は無様に数メートル後方まで地面をゴロゴロと転げ回る。

「うっ、ぐ、は……ッ」

「何してくれてんのかなンタ!! このままレースに出ろっというわけ!」

「いや、お前だつて今日この日まで何も言つて来なかつただろうが!! 俺だけのせいにしてんじゃねえ!!」

「ぐっ……」

暴力に、正論を返す。俺の言うことにも理があると分かつたのだろう、スカーレットは怒りはそのままに押し黙るしかなかった。

「まあやつちまったもんはしようがない。切り替えていこーぜ?」

「綺麗に纏めようとしてんじやないわよ!! はあ……」

「あー……不安になるのはわかるけど、俺は何も心配してないから。普段通り走れば、勝てると思つてる。お前は最強のウマ娘になるんだろ? このくらいのアクシデント、乗り越えてなんぼじゃねえのか?」

「……ま、アタシはアタシにできることをするだけよね。今回ばかりは、アンタの口車に乗つてあげる」

スカーレットは、不安を滲ませながら微笑んだ。

「さて、部屋に戻って最後のミーティングだ。明日出場するウマ娘のビデオがあるから、相手を分析するぞ」

「ええ。先に行つて。アタシこのタイヤ戻してから行くから」

「おう、じゃあ準備して待つてる」

そう伝えて、俺は一足先に部屋へと戻った。



「はあ……」

タイヤを元の場所へと戻し、部屋へと向かう帰り道。ダイワスカーレットは溜め息を零しながらトボトボと歩いていた。もう何度目になるかもわからないそれが、彼女の心情を如実に表している。

腕が重い、脚が重い、思考が鈍い。初めて迎える大舞台、彼女は緊張と不安に苛まれていた。普段の自信に満ち溢れた発言と高飛車な態度から勘違いされがちだが、それは自分を鼓舞する為のものであり、望む自分でいられるようにという一種の言い聞かせに近いものだ。故に彼女だつて人並みに緊張はするし、それどころか、彼女は人並み以上

の「緊張しい」であつた。

「はあ——」

一際大きい、溜め息を一つ。

自信がないわけではない。寧ろ、あるが故の、それが打ち砕かれた時の恐怖。

自分の力を疑っているわけではない。寧ろ、信じているが故の、それを尽くして及ばなかつた時の恐怖。

緊張というものは、「たら」や「れば」という仮定が齎す想像の産物。彼女は賢い。だからこそ、考えてしまう。彼女は努力を重ねてきた。だからこそ、考えてしまう。

その努力が打ち破られた時、果たして自分は望む自分の姿を見失わずにいられるのだろうか、と。

——勝てるのかしら、アタシ。

普段の彼女からは想像もつかないような弱音が、頭を過ぎる。それほど彼女は精神的に追い詰められていた。

デビュー戦が決まってからの一ヶ月半、彼女は確かに努力を重ねてきた。しかし先程露見したように、トラックを走る練習を全くしていないのだ。そのことに対する不安

が、一番大きい。

——大丈夫よ、大丈夫。アタシはアタシにできることをするだけ。

そう、自分に言い聞かせる。しかしそれでも、彼女の足取りは重い。無意味な自己暗示が、頭の中で何度も行き交う。

——負けたくない。負けるのは嫌だ。

そして緊張と不安から生まれた弱気が、彼女の気高い望みをすり替える。『最強を証明したい』という絶対的な自信からくるそれから、『負けたくない』という酷く受動的なものへ。

部屋に戻って行われたミーティングも、どこか上の空だった。その思いを解消することなく、彼女はその日を終えた。

そして運命のデビュー戦がやってくる。



——『メイクデビュー杯』。

京都レース場、芝2000m。天候晴、良バ場。

ついにこの日がやってきた。

彼女にとって……否、俺にとつても運命の一戦。このレースが、彼女の夢の第一歩。だが俺には一つ、大きな懸念があった。

「やー、やっぱ京都でも5月になるとあちいな」

「……」

「ん？ スカーレット？」

「ふえっ!? ああ、何？ どうしたの？」

「いや、お前がどうしたんだよ」

この通り、スカーレットの様子がどこかおかしいのだ。

俺の言葉に反応が鈍いし、どこか上の空のようにも思える。

「……別に何もないけど？」

「……なあ。まさかとは思うが、お前緊張してんの？」

「……………はあ!!　んなわけないでしょ!　どこをどう見たらそんな考えが浮かんでくるのよ」

「今のお前の全てだよ」

うーん、コイツはそんなのとは無縁の存在とは思っていたが……選抜レースでも、結果こそ振るわなかったものの堂々と走っていたし。

まあでも、気持ちはわからんでもない。何せ初めての大会だしな。直前まで走る練習もしていない——俺のせいでもあるが——し。だが、昨日ははぐらかしたもののそれに關してはちゃんとした理由もあるしなあ……それを伝えて良いものだろうか。自分で気づいて欲しいと思つてここまで黙っていたけど、それを伝えることで緊張が解れるなら伝える方が丸か?　いやーでもなあ。うーん……。

と、考えていたら暫く時間が経っていたらしい。彼女は居心地悪そうに呟いた。

「……………なんか喋りなさいよ」

「えっ?　ああすまん。集中してゐるんだろ?　邪魔しない方がいいかと思つてさ」

「つ……………」

「しつかり気合入つてゐるみたいだし、安心したよ。大丈夫、お前は勝つよ。昨日から言つてゐるだろ?　俺はなーんも心配してないからさ」

「……………そ。ありがとう」

彼女は明後日の方向を向きながら、素っ気無く返した。

必殺、緊張のすり替え作戦。第三者の俺からお前は集中していると言い聞かせることで、自分は緊張ではなく集中をしているんだという暗示をかける。

1ヶ月半、共に練習してきたとはいえ、俺達にはまだそれだけの関係しかない。故に、こんな時に、彼女にどんな言葉をかけてやるのが正解なのか、俺にはわからない。

だからこの作戦の効果も、正直不明だ。だがこれが、今の俺の精一杯。トレーナーとしては失格だろうが、自省も後悔も後でいい。今俺がすべきことは、彼女がベストな状態でターフの上に立てるようにしてやること。

最善は尽くした。後は彼女の持ち前のメンタルコントロールで立て直すことを信じるのみ。元々スカーレットには、その能力がある。彼女の緊張が、彼女のキャパシティを超えていないことを祈るのみ。

そこから一度の会話もなく、俺達は控え室へと向かった。



そして時は来た。

本バ場へと続く地下道を、スカーレットと並んで歩く。俺が行けるのはここまで。最



後の時まで、彼女に寄り添っていく。

「ついに本番だな……心の準備はできてるか？」

「当たり前でしょ。アタシは、アタシに出来ることをするだけよ」

「……そうか」

〃自分出来ることをするだけ〃。

大事なことで、間違いではないのだろう。

だが、普段の彼女の自信から放たれるような言葉では、無い。

結局、直前を迎えたこの期に及んでも、彼女が調子を取り戻すことはなかった。

「……っし、俺はここまでだ。大丈夫。それだけ集中しきってるならお前は勝てるよス

カーレット。自分を信じろ」

「……ええ。じゃあ、行つてくるわ」

「ああ、行つてこい」

彼女は俺を見ることなく、歩き始めた。

その後ろ姿を見送っていると、彼女が不意に立ち止まり、振り返る。

「ねえ」

「ん？」

「——優しいのね、アンタ。ありがとね」

そう呟いた彼女は、弱々しい笑顔を浮かべて、本バ場へと向かっていった。

「……失敗した、か」

賢い彼女は、全てわかってしまっていたのだろう。俺の言葉の意図の、その裏さえも読み取って。

「……優しくなんかねえよ」

吐き捨てるように呟く。俺はお前の、トレーナー失格だ。

何が最善だ。何が出来ることはやった、だ。練習の意図も隠して、投げかけた言葉の意図すらも隠して。全部、何もかもを彼女に隠してばかりだ。

挙句そのせいで彼女の不安を煽り、緊張を悪化させた。しかもそれを改善してやることすらもできずに。相棒のコンディションも整えられなくて、何がトレーナーだ。

最善だと言いついて聞かせて、自分で気づくのが大事だからなんて嘯いて。触れてこない彼女の優しさに甘えていただけだろうが。

「クソ——ッ」

拳を強く握りしめ、歯を食い縛る。

溢れ出す後悔が、自分を決して許そうとしない。だめだ、こんな心境じゃ。わかって

いるのに、わかっているのに。早く行かないと、レースが始まってしまふ。彼女の応援をしないと――

「トレーナー！」

呼ばれた声に、振り返る。

そこには、消えたはずの彼女の姿があつた。

「——ちゃんと見てなさい！ アタシの走り！」

指を突き出し、彼女は不敵に笑う。

「——アタシ達<sup>〃</sup>の力を、見せつけてやるんだから！」

「っ——!!」

その言葉だけを残して、彼女は再び光の中へと姿を消した。

普段の自信は、欠片も感じない。

誰がどう見ても、空元気。

それでも。

アタシ。速  
あんな言葉なんて投げかけられて、奮い立たないトレーナーはいない。

「……俺がアイツに元氣付けられてどうすんだよ」

吐き捨てながらも、笑みが溢れる。

そうだ、まだ何も始まってなんかいない。

積み重ねてきたものが最善か、そうじゃなかったか。それを決めるには、まだ早すぎる。

賽は投げられた。後はその答えを、確かめに行くだけだ。

「——頑張れ、スカーレット」

俺の言葉は、彼女の心に届いているだろうか。

消えた背中に呼びかけて、俺は駆け足で観客席へと向かった。

# 勝利の味、或いは余酔の価値

——不安がないと言えば、嘘になる。

緊張が解れたかといえ、そうじゃない。

ただ振り返った時、アイツが苦しそうな顔してたから。

アタシのせいで、あんな顔にさせてしまったのなら。

何故だかそれが、酷く悲しかったから。

アタシは強がる。笑顔を見せる。

そんな顔してんじゃないわよって、アンタのせいじゃないわよって。

アタシのためにあれだけ尽くしてくれたアンタは、間違つてなんかないんだから。

だからアタシが、証明してやる。

アタシが、アンタが——アタシ達がやってきた事は、間違いなんかじゃなかった、つて。

不安と緊張に悩む心。しかしその足取りに、一切の迷いはなかった。



「あ、松田さん！」

「あれ、君も来てたのか」

観客席に辿り着いた頃には、各ウマ娘がゲートに入ろうとしていた。最前列の空いた席を探していると、俺に手を振る彼——やべ、まだ名前思い出せねえや——『サワ君』の姿を見つけた。

「どうしてここに？ 君のチームの子も出るのか？」

「いやいや！ 今日視察です。まだまだ新米なんで、たくさんレース見て勉強してこいってチーフトレーナーが」

「へえ、まあ確かにそれは大事だな」

「松田さんはどうしてここに？」

「いや、俺のチームのヤツがデビュー戦なんだよ。ほら、覚えてるだろ？ 4月のあの長髪」

「あー！ あの子松田さんのチームに入ったんですね！ へえ、あれからどう成長したのか楽しみだ」

サワ君はニコリと微笑んで、視線をトラックへと移した。見れば8人のゲートインが完了し、後は開幕を待つのみ。

信じてるぞ。スカーレット。

そう心の中で呟くと同時。ゲートは開かれた。

「始まりましたね、各バ良いスタート……と言いたいところですが」

「ああ……スカーレット、少し遅れたな」

「気合いは伝わってきますね。そこまで致命的なわけでもないし、ここからでも巻き返しは十分効くかと」

「頑張れ、スカーレット……!」

スカーレットは現在4位。想定していたレースプランより一つ後方につけているが、誤差の範囲だ。そう慌てることじやない。

レースはそのまま1000mを超え、後半戦に移る。予定ではここからペースをキープするはずが、スカーレットは後続の加速を許し、現在6位。

流石に下がり過ぎだ。彼女もそれを理解しているのだろう。決死の表情で前方集団に追い縋ろうとしているが、差はなかなか縮まらない。その理由は、ここから見れば明白だ。

「アイツ、また……」

「やっぱりあの子、速度に難あり、って感じなんですかね。この前もあんな風に——」

「うるせえッ!! 黙って見てろ!!」

「は、はいっ!!」

諦めるにはまだ早い。一点、その一点にアイツが気づけば、勝ちの目が出る。アイツ



があんなに頑張ってるんだ、俺も最善を尽くせ!!

「っ——!」

「ちよ、松田さん!?!」

俺は手すりから大きく身を乗り出し、大きく息を吸って、腹の底から叫ぶ。

「タイヤあああああああああああああ!!!」



(クソ、クソツ!! どうして……どうして縮まらないの……!?)

ダイワスカーレットは焦っていた。

現在6位に付け、事前のレースプランから大きく外れてしまっている。なんとか順位

を戻そうと加速するものの、その差はなかなか縮まらない。

(負けたくない——いや、勝つ！ 絶対にッ!!)

終盤に差し掛かる直前、彼女は本来の望みを漸く取り戻した。しかしそれだけで調子を取り戻すほど、現実は甘くない。

現にそれまで維持することで精一杯だった差が、少しずつ広がり始めていた。

(このままじゃ……このままじゃ……!)

“敗北”の二文字が、頭を過りそうになる。

その時。

「タイヤあああああああああ!!!」

「……………は？」

その声は、確かにダイワスカーレットの耳まで届いていた。

ただ、あまりにも意味がわからなすぎて、レース中にもかかわらず声が漏れた。

(何意味のわからないこと叫んでんのよアイツ——！)

理解不能な言葉に、急激に怒りが込み上げてきた。

(タイヤ……タイヤ?! 言うに事欠いてタイヤ?! どうせ叫ぶならもつと的確なアドバイスを——)

そこまで考えて、彼女は気付く。

(——タイ、ヤ?)

——『だいぶ慣れてきたみたいだな。タイム、最初に比べたら半分近く縮まつてるぞ。立ったまま休憩できるようなにもなったじゃないか』

『そりゃ毎日続けてればね。引っ張るコツと押すときのコツをアタシなりに掴んだのよ』——

(タイヤを引くコツ……タイヤを、引くように……!)

それを意識した途端。

(っ! これは……!)

自分でも体感できる程に、速度が上がった。

(そう、か……また上体が起きてたんだアタシ)

4月の敗戦が、その時の彼との会話が、頭を過ぎる。

——『スタミナが切れてスピードが出なかったのは事実だが、これはそんな曖昧な現象じゃない——原因は、ストライドの姿勢だ』

『姿勢?』

『そ。前半のお前の走りと後半の走り。後半の方は明らかに上体が起ききってるんだよ。だから踏み込みの力が前じゃなくて上に向くし、踏み込みに対して速度が出ない。これがあのスパートのカラクリだ』

『……なるほど』——

(また同じことを、繰り返そうとしてた。そうならないための、あの練習だったのね)

あれは単なる筋力トレーニングではなかった。練習に込められた意図を彼女は正しく理解した。

(じゃあ、あつちも——)

「ふう——」

深呼吸を、一つ。

それだけで、視界が一気にクリアになる。

今まで見えなかったものが、“見える”ようになる。

音の消えた世界で、プレイヤーがチェス版を眺めるかの様に、彼女はレースを上から観ることを許される。今まで漠然と得ていた視点が、より明確に。レースの全てを、掌で転がす様に。

(——ああ、アイツはアタシに、コレをくれたのね)

積み重ねてきた練習の意図を理解し始めた瞬間、バラバラに動いていた歯車が噛み合い始めた。

(その為の、1ヶ月半だったのね)

練習に含まれていた、彼の彼女への温かな思い。それに触れた心が、微かに熱を帯び始める。

(ありがとう、トレーナー。おかげでアタシは——)

否。

ここから先は、結果で示すだけ。

前方を走る5名の様子を観る。

——なんだ、お前たちは。

アタシの前を小蠅の様にチヨロチヨロと。

巫<sup>ふ</sup>山<sup>ざ</sup>戯<sup>け</sup>るな

そんなヌルい走りで、アタシの前に

立  
つ  
ん  
じ  
や  
な  
い  
わ  
よ  
ッ  
!!!

刹那。

地響きの様な轟音を響かせ、その場から消え去ったかの様に彼女は加速した。

(そうだ、それでいいッ!!)

スパートを掛け始めたダイワスカーレットの様子を見ながら、観客席で克樹は唸る。(トラックを使って走る練習。アイツにはテキストなことを言ったが、それを取り入れなかったのは忘れてたからなんかじゃない——必要なことからだ)

初日の適性テスト。その結果を見た時、彼は衝撃を受けた。

彼女の最高速は、ムラこそあるものの、デビュー前のウマ娘としては抜きん出て余るほどに高かったからだ。

ならばこそ、下半身の筋力を増強し、元から備えていた踏み込みの力で体を前に押し出す走法を身に付けることこそが肝要であり、それさえ備われれば彼女がメイクデビュー杯如きで負ける道理など微塵もない。



故に彼は、ダイワスカーレットにひたすらタイヤ引きとタイヤ押しを繰り返させたのだ。

重いタイヤを引く際、力強く踏み込んで力を前に伝えなければ動かない。さらに自然と上体は前のめりとなる。下半身の強化と同時に、最高の加速に適切な走法を体に染み込ませることができている。押す際もそうだ。力強く踏み込んで、体を前に投げ出す様にならない。タイヤはピクリともしない。あのトレーニングは、現状の彼女に非常に適したものだ。

(だがそのスパートは現状長くは続かない。だからそれを活かす為のタイミングを、適切に読み切る必要がある。そしてその為の武器を、スカーレットは元から持ち合わせていた)

——レースを俯瞰する視点。

(そのために必要になるのが、集中力。あいつの適性上、どれだけレースを走るとしても3分を超える長距離を走ることにはないだろう。だから、3分で良い。3分間、集中したまま走り切ることでできる集中力を与えてやれば良い)

故に、『勉強』。

3分間と1分間のインターバル。

コレを繰り返すことで、元から備えていた集中力を、3分間に全て注ぎ込むことが可



そして彼女は、2位以下に圧倒的な差をつけて、1着を勝ち取った。

「はあ……はあ……ッ」

ゴールラインを超えてしばらく走って止まった後、彼女は膝に手を当てて荒い呼吸をする。

「勝つ、た……?」

眩いた瞬間、込み上げる実感。何よりも美味しい、勝利の味。気づけば両の拳は、勝手に、力強く、爪が食い込むほどに握り込まれていた。

そして彼女は、後ろを振り返る。そこにいたのは、ある者は悔しそうな表情で、ある者は絶望に苛まれた表情で。幾多の敗者たちが、勝者である自分を見つめていた。

その姿に、どうしようもないほど愉悦と快感が込み上げる。

「フフ……ンフフフ……」

そして彼女は、本能のままに恍惚な笑みを浮かべて、敗者達を嗤う。自分の前に項垂

れる、全てを見下して。

(ああ、そうか。これがアタシなんだ——)

そう独りごちる。ああ、なんで醜くて、嫌なヤツなんだろうと、  
“優等生”の自分が罵る。

(でも、これで良い、これが良い)

——だってそんなアタシを、アイツは認めてくれたから。

今はこの勝利という快樂に溺れて、酔っていたい。

視線を上げて観客席を向いた彼女の視界で、手を振りながら彼が笑っていた。

【ダイワスカーレット 戦績：1戦1勝】

メイクデビュー杯——1着

## 火蓋、或いは絆

「ふんふんふーん♪」

「上機嫌だな」

「うるさいわね♪」

「……一周回って突っ込む気も失せるわ」

メイクデビュー杯を終え、寮へと戻る帰り道。1着記念に夕飯を食ってから帰ると、辺りはすっかり暗くなっていた。街灯が照らす夜道を、スカーレットは鼻歌混じりに歩いている。まあでも、今日ばかりは仕方ないか。

「……にしてもお前、いつの間にウイニングライブの練習してたんだよ」

「バカね。常に1番目指してるのにライブが出来なきゃカッコつかないじゃない。毎日欠かしたくないわ」

「ちよつと引いた」

「何か言ったかしら」

「いいえ何も言っておりませんッ」

「よろしい」

殺気の籠った睨みを向けられ、一瞬で閉口した。大事な頬を守るためだ、致し方ない。

「……改めて、1着おめでとうな」

「何回目よソレ。ま、悪い気はしないけどね……ただ、課題も沢山あった。これからちゃんと改善していかないと」

「もう次のレースのことかよ。気が早いな」

「悪い？」

「いや……寧ろ良い事だと思う」

「フフン、そうでしょ」

俺の言葉に、スカーレットは満足そうに笑った。しかしその表情は、急にバツの悪そうな——恥ずかしそうな表情へと変わる。

「スカーレット？」

「その……ありがと、ね。今回の1着は、流石にアタシだけの力じゃないってわかってる。アンタが組んでくれた練習がなかったら、アタシは後半また前と同じ事を繰り返してたと思う。だから……」

「……明日は雪が降んのかな。今俺の隣で心からのありがとうが聞こえた気がした」

「早う去ねッ!!」

「古語スっ!!」

唐突に歴史的仮名遣いで暴言を喰らったと同時に、炸裂する強烈な一撃。前のめりに吹き飛ばされ、無事地面とキスすることに成功した。全く嬉しくないが。

「真面目に感謝の気持ちも受け取れないの!?!」

「いや、だから叩く理由になんのかよそれ!!」

「それはアタシが決めるのよ!!」

「横暴が過ぎるわ! ジャイアンかよお前は!!」

ぎゃあぎゃああと騒いで睨み合い——どちらからともなく声を上げて笑う。何故だかこんなにバカバカしい会話が、どうしようもなく楽しくて。きっと彼女も、同じ気持ちなのだろう。

「はあ……笑いすぎてお腹痛いわアタシ」

「俺はそれ以上に頬が痛てえけどな」

「まあ自業自得よねそれは」

「誠に遺憾です」

「政府答弁してんじやないわよ……ねえ、今度はちゃんと聴いてよね」

「……なんだ?」

「——ありがとう。アンタのおかげで、アタシは勝てた。これからもよろしくね」

頬を微かに染めながら、満面の笑みで彼女は告げた。

その笑顔に、嬉しさと達成感が込み上げると共に——ずっと蓋をしていた、罪悪感が俺の心を塗り潰した。

「……なあ」

「ん？」

「お前、俺のこと疑ってないのか？」

「は……？」

「俺は……俺は、お前に何も伝えてこなかった。練習の意図も、何もかも。お前からすれば、意味不明な練習だったろうし……それでもお前は、それに従ってくれた」

ずっと、不自然だった。

あれだけ自信家でプライドの高い彼女は、俺の言うことを、文句を言うことはあれどなんだかんだ毎回素直に受け入れていた。テストの時もそうだ。



——『まあ気合入つてるところ申し訳ないが、朝練はテストをするぞ』  
『テスト……?』

『そ。俺はあのレースしか実際に見てないから、お前の限界値を知らない。限界値を知らないとプランが立てられない。故にテストだ』

『ふーん、なるほどね……わかったわ』——

練習を始めた時だってそう。

——『ま、トレーニングはこんな感じだ。今はとにかく下地づくり。しばらくコレを繰り返して行くからそのつもりでな』

『え、走る練習は?』

『……今はその段階じゃない。走り込みなんかのトレーニングはしばらくやらない』

『……そう。わかった』——

走るとは、ウマ娘の本能だ。

それを“やらない”と告げられることは、かなりのストレスだろう。普通のウマ娘でもそれは拒絶しかねない。しかし彼女は文句の一つも零さず、剩え前日まで走ることを

忘れるほど、俺の練習プランに従っていたのだ。あんなにプライドの高い彼女が、だ。それがずっと、気掛かりだった。

「……それに、もうわかってると思うが——俺のチームに、お前以外のウマ娘は居ない。だから練習だって個人練が主体になるし、チーム内に競い合うライバルもいない。今まで黙っててすまない。だが俺は、それで良いと思ってる。お前は……良いのか？」

決意と共に、口にした。侮蔑も怒りも、受け入れるつもりだった。しかし彼女は、至極どうでも良さそうに『ふーん』と呟くと、興味がなさそうに言った。

「……そ。それなら仕方ないわね」

「え……」

「アタシも気を遣わないで済むし、気楽で良いわ」

「……なん、で」

「……何その反応、まさかアタシ今の話でアタシが出て行くんじゃないかとも思ってたワケ？ だからずっと黙ってたの？」

「いや、その……まあ」

「ツ!!」

「いって……! だからツ」

「悪いけど、今のはガチだから」

「っ……」

本気でキレているのだろう、荒く強い声色で彼女は俺を黙らせた。怒りのままに俺を睨みつける彼女の視線に耐えられずに、俺はそつと目を逸らす。

「その……ごめん……」

「フン、せつかくの気分が台無しだわ。いい!?!」

「うわっ……!?!」

スカーレットは、俺の胸ぐらを掴んで無理矢理自分の方へと俺の体を引き寄せた。あまりの力に、俺の口から情けない声が漏れる。

「——アタシの目を見なさい」

「……」

「いい、今からアタシの言うこと、しっかり聴いてなさい」

「お、う」

「——アタシは、アタシの意思でアンタの側に居る。これはアタシが決めた道。それを踏み躪るような事を口にするヤツは、例えアンタでも許さない」

「っ——」

「アンタ、アンタがアタシを選んだって思ってるでしょ。逆よバーカ。アタシがアンタを選んだのよ。アンタとなら、アタシは強くなれると思った。アンタになら、アタシの全てを任せていいと思った」

「どう、して……？」

「——目よ。あんな走りをして、それでもアタシの才能を信じてくれるような、力強く、怖いけど優しい目。あの時アンタはアタシのことを、本気で必要としてくれた。外面じゃなくて、アタシの中身に気付いて、それでもアタシを欲してくれた。アンタがアタシに教えてくれたのよ？ 『自分を曝け出していいんだ』、って。だからトレーナー、アタシはアンタを信じる。走る事を禁じられようが構わない。アンタが考えてくれる全ては、アタシのためだって信じてるから。」

——貴方が認めてくれた、私の本能が信じた貴方を、私は信じてるから」

最後、真面目な声色と表情で、彼女はそう口にした。その言葉はお淑やかで気品のあ

る優等生の皮に覆われた、我欲に溢れた、気の強い彼女の本能の中に紛れた——そのどちらでもない、心の底にあるダイワスカーレットという一人の少女の本音なのだろうと、呆けた心で感じた。

「……お前、スゲエな」

「フン、今更気づいたの？」

「いや、改めて。前からスゲエヤツだと思ってたけど」

「は、はあ!? 褒めたって許さないんだからねっ!」

彼女は慌てふためきながら、フンと鼻を鳴らして頬を真っ赤にしながらそっぽを向いた。その様子があまりにも可笑しくて、俺は再び声を上げながら笑った。

スカーレットの言う通り、俺が彼女を選んだ、そう思っていた。だがそうではない。

——彼女もまた、俺を選んでくれていたのだ。

その事実には、涙が出そうになる程心が暖かくなる。 “相棒” から信頼されることが、

どれだけトレーナー冥利に尽きるかを、思い出させられた。

ならばこそ、今ここで彼女と真摯に向き合わなければ、不誠実だろう。

「……なあ、スカーレット」

「何？」

「俺、さ……昔——」

「良いわよ、話さなくて」

「えっ……」

「全くキョーミないし。どうでも良いわ、アンタの辛気臭い昔話なんて。気になった時に適当にアタシから聞くわよ。だから今は……何も言わなくて良い」

「そう、か」

彼女なりに、俺を気遣ってくれているのだろう。たかが1ヶ月半の付き合いだとしても、それくらいはわかる。後ろめたさを感じつつも、ここまで言い切ってくれた彼女の思いを踏みにじって伝える気にもなれなかった。

「……一つだけ、教えて」

「なんだ？」

「——名前。アンタのチームの名前」

「……」

「これくらいいいでしょ?」

「ああ、構わない——」

——レグルス。

獅子座の一等星を冠したその名を告げると、彼女は感慨深そうに頷く。

「レグルス……いい名前じゃない。アンタが考えたの?」

「ああ、まあな」

「この名前、改めて借りてもいい?」

「え?」

「いいじゃない。アタシとアンタのチームの名前は、レグルス。名付けたなら、意味だつ

て知ってるでしょ？ アタシに相応しいと思わない？」

「……ふはっ、そうだな。改めて考えるとお前にぴったりの名前だわ」

「でしょ？」

彼女の言葉に、思わず吹き出してしまった。

だがそれでも、彼女の言わんとしていることがわかる。

獅子座の恒星、レグルス。ラテン語が由来のこの言葉の意味は、唯一にして単純明快。

——王。

それは頂に登り詰め己の最強を証明し、全てを見下さんとする彼女に、これ以上なく相応しい言葉だった。

「これで決まり。私達は、”チーム・レグルス”。チームって言っても、2人しかいないけどね。アタシはその名前に恥じないような走りをするわ。だからアンタは、これからも最強を目指すアタシに相応しい練習を考えなさい」

「……はっ、上から勝手に抜かしやがって」



「嫌いじゃないんでしょ？」

「嫌いじゃねえよ」

発破を掛けるように、俺を見下しながら不敵に笑う彼女に、俺もニヤリと笑みを返した。

心に巢食っていた罪悪感は、消え去った。プライドの高い彼女の不器用な励ましは、確かに俺の心を救っていた。故に感謝は、自然と口から滑り出る。

「ありがとな、スカーレット」

「は、はあ!? いきなり何よ気持ち悪い」

「俺を選んでくれたこと、絶対後悔させないから。お前みたいなスゲエヤツになれるように、俺も頑張るから。『アンタがトレーナーで良かった』って言わせられるように、頑張るから」

「ちよ、やめてよ、そんなっ、は、恥ずっ」

「だからこれからも、お前の走りを、俺の隣で見せてくれ。ずっと側で、応援してるから」

「ッ——うるさあああいい!!!」

「いやなんでベゴス!!」

俺の心からの感謝は、渾身のビンタに上書きされた。

「え、叩くところあった!? 叩くところあったかなあ!?」

「アンタがあんなならこていぶるべらましや!?」

「いやなんて?？」

「うるさいうるさいうるさい!! バーカーバーカー!!」

「致命的に語彙力がねえ!! 近所の小学生でももう少しマシな罵倒できるのでオイ!!」

顔を真っ赤にして怒り散らかしているスカーレット。

すぐに俺の頬を叩く御転婆ウマ娘は、恥ずかしくても頬を叩くんだなあと、今日初めてわかった。

まだまだ、俺は君のことを知らない。

でも、それでいいんだ。

俺と君は、今日この日、始まったばかりだから。

“最強にしてやる” んじやない。“2人で最強になるんだ” って。

羞恥に染まり瞳を潤ませる彼女の表情を見ながら、そう思った。

絆を結んだ2人の姿を、月明かりが優しく照らしていた。

## 2章： 紅き蓮は、泥沼の中で咲く

## 望むティアラ、或いは求む力

「スカーレット！ 見たわよ昨日の桜花賞！ 1着おめでとう！」

「ええ、ありがとう。上手く自分の走りを貫くことができたわ」

桜花賞の翌日。ダイワスカーレットは食堂で同期のウマ娘達から称賛を浴びていた。

優勝候補筆頭とされていたウオッカに勝った彼女の評価は、正に鰻登り。彼女自身は気づいていないが、称賛を与える同期の他にも、鋭い瞳で彼女を見つめるウマ娘が数名居る。今まで格下と思っていた相手が、圧倒的な走りを見せつけた。それだけで、警戒を与えるには十分だった。

ただそれはごく一部で、彼女の日頃の努力が周知であることと、外面の良さもあつて基本的には好意的に受け取られている。

「頑張つてたもんね。私も鼻が高いよ」

「もう、偶々上手くいっただけよ。次もあんな風に勝てるかなんてわからないし、これからもちゃんと練習していかないかね」

「凄いなあスカーレットは。もう次を見てるなんて」

「私たちもスカーレットみたいに頑張らないとね」

「ふふ、ありがとう。これからもライバルとして切磋琢磨していきましょう」

微笑みながら、彼女は言う。しかしその内心は、自分を讃える称賛に愉悦が溢れ出さないように必死である。

「——スカーレット」

そんな時、彼女は現れた。

「あ、ウオツカ！ 昨日のレース見てたよ、惜しかったね」

「あらウオツカ。どうしたの？ アタシに何か用かしら？」

「まあな、ちよつとツラ貸せよ」

「ええ、構わないけど」

ウオツカの促しに従って、彼女は食堂を後にした。



「どうしたの？ こんな所に呼び出して」

「気持ち悪りイんだよ、優等生その面外せ。だからわざわざサシで話す場所用意したんだろー」

が」

ウオツカの言葉に、ダイワスカーレットは無言で目を瞬かせていた。その言葉の意味を察すると、彼女はフン、と鼻を鳴らし、意地悪い笑みを浮かべてウオツカへと問いかける。

「——で、何？ 負け惜しみでも言いに来たわけ？」

「……そうだ」

「え……？」

挑発のつもりで発した言葉が素直に受け止められ、ダイワスカーレットは面食らう。そんな彼女の様子を意に介さず、ウオツカは苦しげな表情で言葉が続けた。

「……スカーレット。正直言つて、俺はお前を舐めてた」

「……へえ」

「また今回も勝てるつて、勝手にそう思ってた。でも昨日お前と走つて……思い知らされた。お前は今、俺とは違う次元に居る」

「……」

「それぐらい、昨日のお前の走りは『化物』染みてた。映像を見返しても、鳥肌が立つちまうくらいに」

「『化物』、ね……」

ウオツカが放った“化物”という言葉、スカーレットは物憂げに呟く。どこか引つかかったのだろうか、気にはなるものの、ウオツカは自分の話を続けた。

「だからって俺は、このまま終わるつもりはねー。スカーレット、俺は——」

そこで言葉を切ると、ウオツカは目を見開き、真つ直ぐにスカーレットを見つめた。

「——俺はもう、誰にも負けねー。次こそはお前をぶちのめしてやるよ」

ユラ——と。見開かれたウオツカの瞳の中で、何かが小さく燃えていた。

それを見たダイワスカーレットは、本能を刺激されたかのように、獯猛に嗤う。

「ふふ……そう。アンタも来たのね、こつち側に」

「こつち側……う？」

「ええ。すぐにわかるわよ。精々頑張つてね。アタシとしても戦う相手は強い方が——」

そこで言葉を切ると、彼女は顎を突き出し、顎に指を添えながら全てを見下すような

冷たい視線で、瞳からバチ、バチ——と紅い稲妻を撒き散らし、告げた。

「——踏み潰し甲斐があるから」

「ツ——!! お前、やっぱ変わったよな」

全身から噴き出す冷たい脂汗を感じながら、ウオツカは呟く。彼女の仇敵は、やはり自分とは一段階違う次元にいることを、嫌でも感じさせられた。

「……変わらざるを得なかったのよ」

「……?」

「あそこ<sup>G</sup>は、文字通り魑魅魍魎の世界。極限の才能と理不尽が闊歩し、闘ぎ合う場所。普通<sup>1</sup>のままでも、いい勝負はできるかもしれない。運が良ければ、勝てるかもしれない。でも、それだけ。アタシが目指す最強のウマ娘には、絶対になれっこない。そんな世界で最強を夢見ることが許されるのは、文字通りの“ばけもの”だけ。アタシはそれを嫌と言うほど突きつけられて——一度は折れかけた。それでも、そんな“ばけもの”塗れの場所で1番を取ろうって言うんなら——」



——アタシ自身も、*「ばけもの」*になるしかないじゃない。

そう口にしたダイワスカーレットの表情は悲しそうで、それでもどこか嬉しそうに見えるた。

「他人事みたいな顔してるけどウオツカ、アンタも今、そこに半歩足を踏み入れたのよ？」

「え、俺が？」

「自覚はないでしょうけどね……アタシは、アタシの望む自分で在る為に、望んで*「ばけもの」*になった。アンタはどうなるのかしらね。楽しみに待ってるわ、それじゃ」

微笑みを浮かべながら、ダイワスカーレットはその場を去っていった。残されたウオツカの心の中で、彼女の言葉が響いている。

「——*「ばけもの」*、か」

彼女がどんな経験をしてきたのか、どんな思いを抱いてきたのか、ウオツカは知らない。ただあまりにも実感が籠ったその言葉から、ダイワスカーレットは実際に*「ばけもの」*を目にしてきた、ということだけは伝わった。

「——俺も、強くなりてえ」

呟いて、拳を強く握りしめる。負けてなるものかと、アイツに置いていかれるものかと、怒りにも似た感情が湧き上がる。

覚悟を決めたウオツカの瞳は、やはり小さな何かが燃えて揺らいでいた。



「おう、来たかスカレット」

「来るわよ。当たり前じゃない」

訪れた部屋で彼女を迎え入れたのは、トレーナーの松田克樹。彼の呼びかけに対する彼女の返事は、あまりにもぶっきらぼうが過ぎた。

「なんだ？　なんか機嫌悪いな」

「はあ？　アンタの目は節穴ね——最ツ高よ。こんなに気分が良い日なんて、そうそうない」

「……本当に「良い事」あったみてえだな。わかった、わかったからその牙収めろ」

獯猛に笑う彼女の姿を見て、克樹は苦笑いしながら嘆息した。

「さて。今日はトレーニングの前に昨日の『桜花賞』の反省会するぞ」

「ええ。昨日はやっと自分を扱いきれたレースだった気がするから、擦り切れるまで確

認しなおさない」と

「実際、俺もそう思う。なんか色々なモンが噛み合ってたよな、お前」

「アンタもそう思う？ 最近一段階上に登った自覚があるのよ。負ける気がしないっていうか、自分のポテンシャルの使い方がわかったっていうかなんていうか……上手く言えないんだけど」

「語彙力無いな、優等生（笑）」

「ウルア!!」

「ブツピガン!!」

克樹の挑発に、彼女は一瞬で沸騰した。

ビンタを身構えていた——構えるくらいなら言わなければ良いのに——彼に突き刺さったのは、残像すら見えない両手刀交差振り下ろし。予想外の衝撃が頸椎に突き刺さり、彼は情けない悲鳴を漏らしながら悶絶する。

「し、新技は卑怯だろ……サンドロックかよ……」

「アタシも日々進化してるのよ、走りだけじゃなくてね。これはアンタの好きなアニメから着想を得たわ」

「はあ!?! お前勝手に人のPC触ってんじゃねえよ」

「『ここから居なくなれーッ!』」

「せめて作品は統一しろ」

迫真の声真似に、克樹はちよつと引いた。

確かにヒステリックにキレるところがちよつと似てるかもな、とも思った。

「……真面目な話、昨日のお前の走りは今までの中でも最高峰だろう。結果に中身が伴った走りだったと観客席から見ても思った。あれが現時点での、お前が目指す走りの完成形だと思つていい」

「……そう。自分でも思つてたけど、アンタにそう言われたなら安心ね」

「だが、ここで満足するなよ。昨日の走りを、デフォルトと思え。これからのレース、俺は『桜花賞』以上を常に求めていくからそのつもりでな」

「わかつてる。アタシも昨日で満足するつもりはないわ。昨日のレースを糧にして、アタシはまた一つ強くなつてみせる」

「それでいい。さて、次のレースだが……わかつてるな?」

「勿論」

克樹の言葉にスカレットは強く頷いた。『桜花賞』を取ったウマ娘が次に目指すレースは、一つしかない。

「——『オークス』。アタシはそこでも一番になつて、ティアラを獲りにいく」

決意の籠った瞳で、彼女は克樹へと告げた。その様子を見て、克樹は嬉しげに頷く。「覚悟はできてるみたいだな」

「ええ。『あの日』誓った目標。それに漸く指が掛かった。あとは順当に掻つ攫つていくだけよ」

『ティアアラ』。正式名称、『トリプルティアアラ』。

トウインクル・シリーズには、『三冠レース』とカテゴリーズされているレースが複数存在する。

最も有名なのは、『皐月賞』、『日本ダービー』、『菊花賞』の3つを合わせた、『クラシック三冠』。

そしてその次に名が上がるのは、『桜花賞』、『オークス』、『秋華賞』を合わせた『トリプルティアアラ』である。

これらの三冠レースは出場制限がある上に、それぞれ一生に一度しか出走することができない。故にどちらの三冠を目指すかは、ウマ娘にとって非常に重要な進路選択なのだ。

「大丈夫、お前なら勝てるよスカレット」

「その言葉、もう言われ慣れすぎて何の感情も沸かないわ。ただまあ、一応その言葉を信

じてあげる」

「の割には嬉しそうにニヤニヤ笑ってんじゃねえか」

「……」

「おいやめろ、無言で手刀構えるのやめろ。こっち来んな、おいこっち来んなって！ごめんって！ マジごめんって！！ ねえ！！ 話を聞いて！！ お願ひ！！」

叩かれる前から涙目で懇願する克樹の様子を見て満足したのか、彼女は静かに手刀を下ろした。

「……ほら、ぐずぐず泣いてないでさっさと反省会始めるわよ」

「覚えとけよ……いつか必ず……」

「スツ——」

「何でもありません!!」

「はあ、ふざけてる場合じゃないっての。『オークス』まであと1ヶ月しかないんだから。限られた時間、アタシはより強くなってみせる——」

——アタシに敗北は、これ以上要らない

唐突に殺気立ち、鬼気迫る表情で漏らした彼女の眩きに、克樹は瞠目した。彼女の言

葉の意味が、よくわかったから。彼女が何を思い出しながら吐き捨てたのかを、理解してしまつたから。

「……そうだな、悪かつた」

「ほら、さつさとしなさいよね」

「ああ。じゃあまずはスタートから——」

そうして反省会は行われる。

そんな中でも、ダイワスカーレットは頭の片隅で、先程思い出した……思い出してしまった、今尚苦い敗北の記憶について思いを馳せていた。

「トレーナー！ 決めたわ。アタシは『テイアラ』を獲りに行く！」

「お、やっぱりそっちにすんのか」

それは彼女が克樹と出会って暫く経ち、桜が散り、木々も色付いた11月下旬のある

日のこと。

5月のデビュー戦から彼女はその次のレースでも、デビュー戦とは打って変わった危なげない走りを見せ、現在2戦2勝。今後の路線選択の時期が迫っていた。

「となると、『チューリップ賞』に出ることになるな」

「ええ、『桜花賞』の前哨戦トライアルと呼ばれる『チューリップ賞』も勿論出るし、勝つわよ」

「自信满满だな」

「負ける気がしないのよ、悲しいことにね」

フフンと、鼻を鳴らしながら彼女は笑う。

「つてなると、『チューリップ賞』までにもう一戦挟んだ方が良いか……」

「そこら辺の判断はアンタに任せる。アタシは別にぶつつけでも良いけど?」

「いや、『チューリップ賞』はG2重賞レースだ。お前が今まで走ってきたレースとは訳が違う。だから一度、重賞の空気を味わっておいた方が良い」

「ふーん……そういうもんなのね」

「そういうもんなんだ」

「わかった。アンタが言うならそうなんですよ。で?」

「どのレースに出るの?」

「そうだな……『チューリップ賞』にできるだけ近いような、そして直前になりすぎない

重賞レースつてなると……」



そう眩きながら克樹は、椅子をクルリと回してPCを操作する。そして彼女が出場すべきレースに当たったりをつけると、指をパチンと指を鳴らした。

「つし、これだ。『シンザン記念』」

——『シンザン記念』。

1月上旬に行われる、長年の歴史を積み重ねてきた由緒あるG3<sup>重賞</sup>レース。『チューリップ賞』を、そしてその先の『桜花賞』を目標に据えて考えると、日程が近すぎず、離れすぎない。彼女が経験する重賞レースとして、申し分なかった。

「良いじゃない。じゃ、さっさとトレーニング始めましょ」

「軽いなお前。結構重要なこと話してんだけど」

「わかってるわよ。でも、どんなレースでもアタシは勝つ。アタシの走りを貫いて、全員を黙らせてやるんだから。そのために、1秒たりとも止まってなんかられないのよ」

どうやら、慢心しているわけではないらしい。

決意漲る彼女の瞳を見て、克樹は笑みを浮かべながら安堵した。

「……わかった、じゃあトレーニングを始めよう。『桜花賞』に『チューリップ賞』、そして『シンザン記念』。全部勝とうぜ」

「当たり前よ！ アタシの最強を証明してやるんだから！」

「じゃあまずはタイヤの数増やすか」

「え、っ」

だ。決意を固めたスカーレットの表情が、これから始まるであろう猛練習を悟って歪んだ。

## 接敵せし怪物、或いは前衛的雷風

「よーし、今日はここまで。お疲れ様、スカーレット」

「ええ、ありがと」

更に季節が巡り、年が明けた。

一月初週、『シンザン記念』へと残り2週間を切っている。

「調子、良いみたいだな」

「そうね、なんか身体が軽い。腕も脚もよく動くし、何より良く観える。ゴール直前に欠伸してたアンタの顔すらね」

「ぐっ……そ、それは良かったあはは」

笑いながら痛いところを突いてくる彼女に、彼は貼り付けた笑みで答えた。

「そのコンデイション、本番まで維持していけるか？」

「当然。ただ待ちきれないわ、早くレースがしたい」

「焦んなよ。まだ2週間もあるんだ。怪我なんかしたら元も子もない」

「わかってる。だからアンタが口煩く言ってるオーバーワークには気を付けてるでしょ

? じゃ、ラスト一本、締めてくるからしつかりタイム測つてなさい」

「はいはい、頑張れ頑張れオジョーサマ」

「……ムカつく」

ガンを飛ばしながら、彼女はスタートラインに向けて駆け出していった。その後ろ姿を眺めながら、克樹は溜息を一つ溢した。

（——まあそりや気合も入らあな。あんなことがあっちゃ）



「……マジ、かよ」

「なに? どうしたの神妙な顔して」

それは今から約2週間前、12月下旬に差し掛かる頃。URAからの通知に顔を顰める克樹の姿を見て、ダイワスカーレットは声を掛けた。

「……『シンザン記念』の出バ表が届いた。そこに、本来こんなところにいるはずのない名前がある」

「……どう(う)と(よ)と(よ)」

「オグリキャップ。アイツが出てくる」

「ツ!? 芦毛の……怪物……!?!」

オグリキャップ。それは言わずと知れた生きる伝説。芦毛の怪物、スーパーホース。その伝説故未だにその人気は根強い。

「知ってるか?」

「知らないわけないでしょ。この人は、その辺のウマ娘とは格が違う……その実力だけで、U.R.A.の規則を2度改正させた真正銘の怪物」

以前、克樹がトウインクル・シリーズのチーム規則に関する話をしたのを覚えているだろうか。それを成し遂げたのがこのオグリキャップ。そして彼女は、もう一つ規則の改正を成し遂げている。

それが、クラシック登録における例外規制だ。彼女は地方から来たウマ娘で、クラシック登録を行っていないなかった。その為圧倒的な実力を持ちながらもクラシックレース出走が叶わず、“幻のダービーウマ娘”とも呼ばれている。しかし同世代を圧倒するレース展開と実力はU.R.A.を唸らせ、クラシック登録における例外規制を設定させるまでに至ったのだ。

「最近怪我で療養していたはずだが……復帰前の調整か……？　なんだってこんなレーズに」

「なんて情けない顔してんのよアンタ」

慌てふためく克樹に対して、ダイワスカーレットは溜息をついた後笑顔を見せた。怪訝に思った克樹は彼女へと問いかける。

「お前、全然動揺してないな」

「そりゃアタシだつてビックリしたわよ、想像してないような名前だもの。ただそれ以上、ワクワクしてるだけ。アンタは見てみたくない？」

「何を？」

「——あの怪物を倒して、アタシが1着を取る姿。見たいでしょ？」

自信に満ち足りた様子で、彼女は不適に笑う。あまりにも根拠のない、一見絵空事のようなその姿を思い描く彼女の様子を見て、彼は思わず声を出して笑ってしまう。今の彼女の様子もそうだが、『コイツなら本当にやりかねないな』、と想像を働かせてしまった自分を省みて。

「な、なによ!?!　無理だつて言うの!?!」

「悪い悪い……スカーレット、俺は見たい。お前があゝの『芦毛の怪物』を倒して、頂点で笑う姿がな。俺は、お前ならやれると思ってるよ」

「……………ふ、フン！ 最初から素直にそう言えばいいのよ」

口ではあんな事を言いながらも不安だったのだろう、スカーレットは内心安堵していた。それを隠すべく、彼女はそつぽを向きながら吐き捨てた。

「……アンタがそこまで言うなら見せてやるわよ。アタシの力、あの怪物に見せつけてやるんだから」

「おう、楽しみにしてるぜ」

克樹からの期待に、彼女は満足げに笑った。



（あれから2週間——スカーレットの状態は、アイツ自身も言っていたようにベストと言つていいはずだ。俺もそう思う）

過去を回顧しながら、克樹は考える。

高く厚い目標を目指して、鍛錬を重ねてきた。彼女の實力は『メイクデビュー杯』の頃と比べれば、別人と言いい切れる程高まっている。そこに対オグリキャップに対しての

気力の充実もある。間違ひなく、過去ベストだと言い切つて良いだろう。

——ただそれでも、届くかどうか。

彼女の積み重ねた努力と、それに付随する勝利を疑っているわけではない。寧ろ、相棒として信じてすらいる。しかし彼は彼女のトレーナーとして、客観的かつ現実的な判断を下さなければならぬ。努力するだけで、信じるだけで勝てる程、勝負は甘くない。だから彼は、“その先の事”を考え続けなければならぬ。

(とはいえ、ここからレース前に俺だけで伸ばせる部分は殆ど皆無だ……俺に出来るのは精々現状維持が限界。それだけじゃレース前に不安が残る)

自分の指導力と彼女の伸び代を勘定する。そして彼女がこれからどうしていけば良いのか答えを弾き出す。

(——指導者が必要だ。俺以外の、それも彼女と共に走り、体感的にスキルを伝えることのできる、ウマ娘の指導者——言うなれば、師匠が)

弾き出した答えを見据え、彼は目を細めた。





「と言うわけで師匠です」

「師匠や」

「待って。お願いだから待って。一から那由多まで説明して」

翌日、部屋に入るなり告げられた言葉は、完全に彼女を置き去りにしていた。ドヤ顔で立つ克樹と、ひよつとこのお面を身に付けて仁王立ちする小柄な少女。理解の範疇を光年単位で超えられたスカーレットは、白目を剥いて倒れそうだった。

「あれ、言ってなかったっけ？」

「なにも聞いてないわよバカ!! 自己完結してる事をさも知ってるかのように伝えられても困るんだけど!」

「そっか。じゃあそういうことだから」

「勝手に諦めんな!! 義務を全うしろ!!」

克樹の全く悪びれない態度に、ダイワスカーレットはキレた。口調が荒れまくるくらいには。

「つていうか誰よこの人!!」

「誰? ほう、ワイの顔見てもまだそんなことが言えるんか?」

「え?」

ダイワスカーレットの言葉にひよつとこの少女は不敵に笑うと、そのお面を投げ捨て

て素顔を晒した。

「は——!?!」

「……この顔見ても、まだわからんか？」

「う、そ……なんで……?」

わからない、なんて筈がない。

今彼女の目の前で灰褐色の髪を靡かせるのは、圧倒的末脚を以って史上初の『天皇賞』春秋連覇を成し遂げた、伝説のウマ娘。

「——タマモクロス先輩……ッ!?!」

ダイワスカーレットの言葉に、彼女——タマモクロスはニヤリと口角を釣り上げた。

「せや。今日からお前の師匠を務めることになった。よろしく頼むで、ダイワスカーレット」

「えっ……あ、はい！ 光栄です、どうぞよろしくお願いします」

会釈と共に頭を下げる。優等生の顔を急いで貼り付けたスカーレットの様子を見て、克樹は『いや手遅れだろ』と思った。あれだけ怒り散らかしといてそりゃ無理があるぞ、

と。

「で、でもなんでアタシのために……？」

「まあ色々あつてな。俺とタマモクロスは知らない間柄じゃないんだよ」

「え？ そうなの……んですか？」

「いやもう諦め……あ、ハイ」

有無を言わさぬ鋭い視線で黙らせられる克樹。その様子に気づく様子もなく、タマモクロスは快活に笑う。

「まあそういうことやな。このトレーナーとは何度もタコ焼きを食いつた仲間や。タコ焼き仲間の頼み、無碍に断ればタコ焼きの名が腐るつてもんや」

「……そういう、ものなんですな」

「そういうもんや」

「へえ……トレーナー、あのタマモクロス先輩とそんな仲だったなんて知らなかったです。どうして言ってくれなかったんですか？」

「タコ焼きを一方的に奢るだけの関係を仲間って言うなら俺とコイツは仲間だ」

「あつ」

死んだ目で虚空を見据えながら呟く克樹の様子を見て、ダイワスカーレットは何かを察した。しかし彼女は何も気づかない振りをする。それがこの場を円滑に進める手段

だと理解していたから。

「そ、そうなんです……でも、本当にありがとうございます。心強いです。なんとと言ってもタマモクロス先輩は、あのオグリキャップ先輩と凌ぎを削ったライバルですから」「せやな。今は怪我の療養中——まあ大したことないし完治して様子見なんやが、聞けばオマエ、オグリに勝つ気で走るつもりらしいやないか。その心意気に惚れた。ウチが可愛い後輩の為に直々に指導してやろう、というワケや」

「はい。これからよろしくお願」

「ただ」

「え……」

ダイワスカーレットの感謝の言葉を遮り、タマモクロスは続ける。

「タダで教えるってワケにはいかん」

「え……お前これ以上俺の財布から筆取り取るつもりかタマモクロス!？」

「アンタは黙つとれ! いいかダイワスカーレット、よう聞け」

「は、はい」

「——オマエの力を示してもらおう」

「アタシの……力？」

「オグリに勝つ、その気概は買う。やがウチは口だけの奴は好かん。その目標を口にすだけのモンがオマエにあるんか……それを示してもらうで」

「——『資格』、つてことですか」

「そう思つてもらつて構わんわ」

真面目な表情で告げるタマモクロスに、ダイワスカーレットはゴクリと唾を飲む。突如与えられた試練と重圧、しかしそれでも彼女は気丈にも笑つた。

「わかりました。アタシの力、示してみせます」

「よく言つた。じゃあスカーレット、今からウチと勝負しろ」

「っ……!？」

「ウチが直々にオマエの力、見極めたる」

「ちよ、ちよつと待てタマモクロス！ お前怪我で療養中だろ!？ 大丈夫なのか……?」

「心配せんでええ！ 言つたら、もう完治してるんや。安全のために経過観察しとるだけや、一回走るくらいどーつてことないわ。確かに実戦感覚は鈍ってるかもしれないが……まあええハンデやろ。で。やるんか？ スカーレット」

「……勿論です」

眩きと共に浮かべた彼女の表情に、克樹とタマモクロスは目を見張つた。

そこにいたのは、貼り付けた優等生面の皮を引き千切り、抑えきれずに溢れ出した本能のままに嗤う、鬪争に飢えた一匹の獣。

(願ってもないチャンス……！ あの伝説と競って走ることができる機会なんてそうそうないわ……！)

彼女の心は、未だ見ぬ強敵との鬪争に震えていた。

「……ええ顔しとるやないか、見直したで」

そんな彼女の様子を見て、タマモクロスはニヤリと笑う。

「……さー！ とつとと始めるで。表出えや」

「はー！」

嬉しそうに部屋を後にする2人。残された克樹の心は、ダイワスカーレットがタマモクロス相手にどのような走りを見せてくれるのか……その期待で満ちていた。

## “白い稲妻”、或いは酷い火達磨

それから2人は準備を済ませ、スタートライン上に立った。

「2人共、準備はいいか？」

「ええ」

「完璧や」

「よし、距離は直近の『シンザン記念』に合わせて1600mで行く。タマモクロス、スカーレットの為に走ってくれるのはありがたいが、絶対に無理するな」

「わかつとるわかつとる。心配症な所は相変わらずやな、アンタも」

「……？」

克樹の念押しに、タマモクロスは鬱陶しそうに応えた。その返しに、ダイワスカーレットは若干引つかかる何かを感じた。しかしその違和感の正体を掴むには時間が足りないし、何よりそれに集中を割くわけにはいかない。これからのレース、自分の全てを出し切らなければ勝負にすらならないだろう。彼女はそのことを重々理解していた。

「……それじゃ、始めるぞ。合図は俺のホイッスルだ。スカーレット」

「……なんですか？」

「思いつきりやれ。胸を借りるなんて思わなくていい、死ぬ気で勝ちにいけ」

「言われなくてもわかつてるわよいます」

「お前もうめちやくちやだな」

本能と理性が混ざり合って意味がわからないことになっているスカレットの姿を見て嘆息し、克樹はトラック端へと移動した。

「……トレーナーも言っとったが、遠慮なんてせんでええからな」

「大丈夫です。遠慮する余裕なんて、アタシにはありませんから。先輩こそ、負けた時の言い訳を考えておいてくださいね」

「……せやな、五七五でカマしたるわ」

両者共に、これからの戦いに高揚する心を抑えられず笑みを浮かべている。そして開戦の号砲は、高らかに鳴り響いた。

（——先行したのは、やはりスカレットか）

中盤に差し掛かったレース、克樹は現在の状況を見ながら心中で呟く。

見ればダイワスカーレットは、タマモクロスに大きく差をつけて前を走り続けてい



る。

(だがそれはタマモクロスを相手取るなら当たり前と言って差し支えない、言うならばタマモクロスから与えられたリード。そのこと、ちゃんとわかっているか……?)

(——とか思ってたんでしょね、アイツのあの顔)

タマモクロスに後方から追われながらも、彼女の唯一無二俯視の武器は、心配そうに目を細める克樹の表情を的確に捉えていた。

(わかっている。タマモクロス先輩の武器は、後方からの強烈な追い込みを可能にする、尋常じゃない未脚)

彼女は相手の戦法を、正確に理解していた。勉強熱心な彼女は、常日頃から情報収集に余念がない。故にタマモクロスが1着を取ったレースなど、何度見たかもわからないほど目に焼き付けてきている。

(ただその映像よりも、明らかに走りにキレがない。やつぱり休養明けで本調子じゃないのか、それともアタシの様子を伺っているのか——いや、前者に期待するのはダメ、タダの油断。とりあえず後者だと思って走らなきや)

克樹の心配は不要なもので、大きなリードをつけながらも彼女の心に一切の油断も慢心もなかった。

そして第四コーナーを終え、勝負は最後の直線へと持ち込まれる。タマモクロスは、未だに仕掛ける気配がない。

(まだ来ないっ!!? いくらなんでも残りの距離でそこから巻き返すのは不可能じゃないの……!?)

彼女の目は、不適に笑いながら後方に付けるタマモクロスを捉えている。そしてそんな様子を見て彼女の心に湧き上がったのは、苛立ち。

(……巫山戯るな、勝ちを譲るつもりなのかアタシを舐めてるのか知らないけど、どっちにせよ——気に食わないわねエツ!!)

そしてターフに響く、力強い踏み込みの音。ダイワスカーレットが一瞬でトップギアに移行し、タマモクロスをどんどん突き放していく。

(これがアタシの全力ツ!! 追いつけるモンなら追いついて——)

「——なんや、もう終いか?」



——その瞳孔の開いた澄み渡る水色の瞳から、文字通り白い稲妻が音を鳴らして迸っていた。

(これが……「最強」と謳われた、「白い稲妻」——ッ！)

想像以上の強さに、思わず苦笑いが漏れる。突き付けられた実力と敗北。だが悔しさよりも押し寄せたのは、これから自分はこの人に稽古をつけて貰えるかもしれないという期待と高揚感だった。



「お疲れ様、2人とも」

「おう！ 久々に走ると気持ちええな！」

「……」

トラツクから帰ってきた2人を、克樹が労う。それに対してタマモクロスは快活な笑顔で、ダイワスカーレットは無言で答えた。

タマモクロスは先程の鬼神が憑いたような表情からは想像もつかないほど、瞳を輝か

せてダイワスカーレットに話しかける。

「スカーレット、やるやないかお前！ いい勝負やった、口だけやないみたいやな！」

「……あれだけ大差つけられて、いい勝負だなんて口が裂けても言えませんよ。ありがたいございます。『白い稲妻』と呼ばれる所以、この身で感じさせて頂きました」

「堅苦しいわ！ 遠慮なんかせんでええ。スカーレット、オマエにはオグリと戦う資格がある。ウチが保証するわ。これからよろしく頼むで！」

「……そう、ですか。ありがとうございます、タマモクロス先輩」

「なんやあ敬語なんて使つて。遠慮せんでええつて言うてるのに」

「これがアタシにとつて自然体なんです」

どの口が言つてんだよ、と克樹は半目でダイワスカーレットを見た。

「ま、ええわ。これから慣れていくやろ。んじやスカーレット、ウチはこのトレーナーと少し話してくるから、そこで待つとき」

「あ、はい。わかりました」

「ほな行くで、トレーナー」

「わかった」

一足先に歩きだしたタマモクロスの後を追うように、克樹も踵を返す。最後にダイワスカーレットの方をチラリと見ると、彼女は本性丸出しの鋭い瞳で克樹を睨みつけてい

た。『余計なことを言うんじゃないわよ』と、言わんばかりに。

「……わーってるよ」

溜息を零しながら片手をヒョイヒョイとふり、彼はその場を後にした。



「どうだった？ アイツの走りは」

部屋へと向かう道すがら、彼はタマモクロスに話しかけた。彼女はうんうん、と頷きながら、質問への答えを返す。

「いいモン持つとる。加速し始めてからトツプに入るまでもスムーズやし、なんや色々考えながら走つとるのもわかる。しかもアイツ、途中でウチが前に出にくいように、徹底的にウチの横移動に合わせて軸をズラしてきおった……見えとるんかってぐらいに。伸びるで、あの子は」

「……そうか。きつとアイツも喜ぶだろ」

「ただ……」

そこで言葉を切ると、彼女は立ち止まって振り返り、続きを告げた。

「——それだけ、やな」

「……手厳しいな」

「今のところ、の話や。ウチはスカーレットを充分評価しとる。ただ今のままじゃ、十中八九オグリには勝てんやろう」

「そう、か」

「アンタが暗い顔してどないすんねん。言うたやろ？ 今のところ、やって……なあトレーナー、一つ質問ええか？」

「ん……？」

「あの子は今日これまで、順当な勝利を重ねてきた。違うか？」

「……そう、だな。苦戦っていう苦戦は最初の『メイクデビュー杯』だけだ」

克樹はこれまでの彼女のレースを振り返る。二戦目のレースでも危なげない、織り込み済みのレース展開で完勝し、その後で行われた他チームのウマ娘との練習レースでも、事前のプラン通りの試合運びをして、圧勝している。

そこまで告げると、静かに話を聞いていたタマモクロスはやけに神妙な面持ちで口を

開いた。

「……ええかトレーナー。これからウチの言うこと、ちゃんと聞きいや」

「お、う」

神妙な顔で見つめてくるタマモクロスを見て、克樹はゴクリと息を飲む。

「……トレーナー、アンタは良くあの子のこと考えとる。今持つとるスカーレットの武器は、アンタが伸ばしたものでやろう。でもその結果——アンタはあの子の武器を、一つ殺した」

「え……?」

「わかつとらんやろ。それはきつとスカーレットが走る為には必要ないモンで、それでもスカーレットが勝つ為には必要だったモンや。アンタがあの子から切り捨てたモンの重さは、それくらい重い」

「……」

タマモクロスの言葉に、克樹は胸が締め付けられる思いだった。何より、彼女の言葉



に見当がつかない、ということが彼にとつて辛いことだった。

「……ええんや。あの子の積み重ねてきたモノは、間違いやない。それはウチも保証する。やからトレーナー、これからのこと、ウチも一緒に決めさせて欲しい」

「……ああ、元よりそのつもりだった」

「あの子にとつて、厳しい道になるかも知れん。それでも、ええか？」

「……俺は信じてるよ。アイツは折れたりしない。どんな目にあつても、必ず立ち上がるさ」

克樹の言葉に、タマモクロスは満足げに笑った。



（何が「気に食わない」よ——舐めてたのはどっちだつて話だわ）

その頃スカレットは、木陰に腰を下ろし、背を預けながら先程のレースの内容を振り返っていた。

（タマモクロス先輩、凄かった……あれが伝説と呼ばれたウマ娘の実力）

瞳を閉じれば、鮮明に思い出せる。あの距離を一瞬で詰め寄られ、剩え大差を付けられた。「白い稲妻」の名に恥じない、まさに雷速。心の奥底から湧き上がる震えに抗う

ことができずに、彼女は思わず身震いした。

(そしてアタシが今度戦う相手は、そのタマモクロス先輩に勝つことの出来る、怪物)  
思考は『シンザン記念』で相見える、オグリキャップへと移り変わる。彼女は本気で勝つ気でいるし、自分の全力をぶつけければ勝てる、本気で思っていた。だが現状の實力不足を、今日突き付けられた。

(——本当に勝てるのかしら)

故に弱気が、彼女の心の中で生じてしまう。

それを振り払う様に、彼女は握り拳を力強く地面へと叩きつけた。

「——冗談じゃない」

彼に誓った。最強いちばんになると。

彼と誓った。共に頂に登り詰める、と。

その誓いに、恥じない自分でありたい。

だからこんな弱気は、許されない。

(――待ってなさいオグリキャップ、アタシはアンタに勝ってみせる)  
己に巢食う弱気を燃料に、彼女は闘志を燃やした。

## 火脚猛る、或いは誓い蹉跌

そして迎えた、『シンザン記念』当日。

『メイクデビュー杯』以来となる京都は、季節相応の冷え込みを見せていた。

「外さつぶ……！ これアップで結構体動かさないと上手く走れないだろうな」

「せやな、それだけならええけど最悪怪我にも繋がりがねんわ。スカーレット、アップは念入りにな」

「はい。タマ先輩も、わざわざここまで応援に来てくれて、ありがとうございます」

克樹達は、控室の中で出番を待っていた。そこには東京から観戦と応援に来たタマモクロス姿もある。

「当たり前やろ。弟子の一番や、最前列で応援してやるさかい楽しみにしときや？」

「あはは。心強いです」

「おう、俺も大声で応援してやるからな」

「アンタは別にいいわ」

「んだとゴラア!!」

「あら、温まったみたいで良かったじゃない」

フフン、と彼女は鼻を鳴らしながら憎たらしく笑う。その様子を見てタマモクロスも声を上げて笑った。

ちなみに彼女はもうタマモクロスに素の自分を隠し通すのは諦めた。克樹に対しては普通に接し、タマモクロスには優等生モードのまま接するという、側からみれば奇妙な口調をしている。

「さて、スカーレット。ウチと練習した2週間で、オマエは確実に成長した。そこは自信をもってええ」

「はい。先輩から教えてもらった末脚の極意……とても勉強になりました」

「最後にモノを言うのは心や。気合い入れえや。勝算は十分か？」

「はい！ 対戦相手のデータや過去のレースを見て、アタシなりに考えたプランをトレーナーと話し合って綿密に組み上げてます。後はそれ通りに走るだけです」

「……………そうか」

「タマモクロス？」

どこか物憂げに相槌を打ったタマモクロスを不審に思った克樹が、声を掛ける。

「……いや、なんでもない。さ！ そろそろ時間や、かましてこい、スカーレット！」

「はいッ！ 行つてきます！」

「いやそれ俺の台詞」

克樹の言葉を無視して、スカーレットは控え室を飛び出して行つた。

「……俺も言いたいことあつただけだな」

「まあまあ、普段通りみたいやし、良かったやないか」

「いやそうなんだけどさ」

「トレーナー！」

「うおっ!？」

行つてしまつたと思つていたスカーレットが、ドアからひよっこりと顔を出しながら自分を呼んだことに、克樹は声を出して驚く。彼女は不敵に笑うと、克樹に指を差しながら言う。

「見てなさいよ、アタシがああ“怪物”を倒して1着を取る姿！」

「……はっ、頼まれたつて1秒たりとも見逃してやんねえよ」

「それでいいのよ。それじゃあね、勝つてくるわ」

「おう、いつも通り勝つてこい」

克樹の言葉に満足そうに笑った彼女は、今度こそ控え室を後にした。



「えーつと……何処にいるのかしら」

パドックでの入念なアップを終え、ダイワスカーレットは周囲を見回して、あるウマ娘を探していた。それは勿論、今回の彼女の目標である彼女。

「……あ、居た！ すいませーん！」

目当てを見つけた彼女は、手を振りながらそのウマ娘の元へと向かった。

「……？ 私に何か用か？」

「はい！どうも初めまして——オグリキャップ先輩」

彼女——オグリキャップは、スカーレットの言葉に不思議そうに首を傾げていた。

「君は？」

「アタシは、ダイワスカーレットって言います。先輩の事は良く知ってます。先輩のレース、映像で何回も観ました」

「ああ、ありがとう。ダイワスカーレット……と言ったか。私にとって久々の復帰戦だが今日はいいレースにしよう」

「はい、でも——」

そこで言葉を切り、彼女は滾る闘志を剥き出しにして、笑いながら宣言する。

「——勝つのはアタシです。アナタには、絶対に負けない」

その言葉に暫く驚いていたオグリキャップ。しかしその表情を笑顔に変えて、返事をしようとした瞬間。

オグリキャップの腹が、盛大に鳴った。

「……………」

「……………」

「…………お腹空いた」

「そう…………みたいですね」

悲しそうに腹部を抑えるオグリキャップの姿を見て、ダイワスカーレットは毒気を抜かれて思わず苦笑いしてしまう。その姿は、どこをどう見ても「芦毛の怪物」と呼ばれる伝説からは程遠い。



「控室でも食べてきたばかりなんだが……どうにも燃費が悪くて困る」

「先輩、大食漢食いしん坊でも有名ですもんね」

「ああ、トレーナーにも良く怒られる。私を追ってわざわざ『地方』から『中央』に来てくれたんだが、私の食費の所為で財布がいつも寂しいと」

「あはは！ それは大変」

楽しげに語るオグリキャップとダイワスカーレット。一頻り笑った後、オグリキャップが再び会話を切り出した。

「さて、ダイワスカーレット」

「……？」

「さっき言ったな、自分が勝つと」

「……はい」

「いい自信だ、悪くない。だが私は君も知つての通り、食い意地の張った欲張りなのでな——勝利の方も、私が美味しく頂くとしよう」

「ッ!?!」

寸前のところで、ダイワスカーレットは身動きを堪えた。視界に入るのは、不敵に笑うオグリキャップの姿。それだけなのに、一瞬それ以上の“何か”を感じたのだ。

「……さあ、そろそろゲートインの時間だ。行こうか」

「あ……はいっ」

彼女が感じたモノ。その正体に辿り着くことはないまま、歩き始めたオグリキャップの背を追って彼女もゲートへと向かった。



——『シンザン記念』

京都レース場、芝1600m。天候曇、バ場状態ややおも稍重。

ダイワスカーレットとオグリキャップを含む総計12名のウマ娘達が、パドックからゲートへと入った。

（大丈夫、体も軽い。いつも通りのコンディション）

ゲートの中で、ダイワスカーレットは瞳を閉じて精神統一を図る。開戦を間近に控え、周囲で緊張の糸が張り詰めているのを感じる。しかし彼女はそれに飲まれることなく、克樹と組み上げた事前のレースプラン、己の勝利だけを思い描いていた。

（オグリキャップ先輩は——ッ!?!）

しかし2つ隣のゲートに居るオグリキャップの姿を見て、彼女は驚愕する。

そこにいたのは、先程までの様子からは想像も付かない、全身からドス黒い殺気と闘気を撒き散らし、瞳で灰色の焔を燃やす一頭の怪物。瞳孔の見開かれた目が見据えるのは、対戦相手ではない。己の勝利、ただそれだけ。歯向かう者は、誰であろうと容赦なく蹂躪するのみ。

(はは——笑えてくるわね)

張り詰めた緊張の糸の正体を、彼女は理解した。これは緊張感ではない。周囲のウマ娘達はこの怪物の殺気に当てられ、恐怖しているのだ。そこに立っているだけで相手を威圧する、悪魔の化身。それは最早怪物という言葉では生温い。

(英雄っていうよりも悪役——まるで魔王ね)

ゴクリ、と唾を飲み込もうとして彼女は自分の口内がカラカラに乾き切っている事にようやく気づいた。

(けど、勝つのはアタシ。負けて這いつくばるのは——アンタの方よッ!!)

そしてゲートが開いた——瞬間。

(いっくわよオ——ッ!!)

「な——ッ!？」

周囲のウマ娘達が驚きの声を上げた。

ダイワスカールレットが、出だしからトップスピードで駆け上がっていく姿が見えたからだ。

観客席からも、動揺のざわめきが響き始める。その姿を見ていたタマモクロスが、口を開いた。

「やっぱ驚いとるな」

「スカールレットのことを知ってるか、スカウティングしてきた奴ほど驚くだろうな」

そう、今回の作戦は、*“逃げ”*。

今まで見せて来なかった作戦は奇襲となり、対戦相手達に大きな動揺を与えた。特に普段から*“逃げ”*で走っているウマ娘達は、そのスピードの違いに大きく戸惑っている様子が見て取れる。

「奇襲としては百点満点やろうな。せやけど、最後まであのスピードが保つんか？ かなり全力でスパート掛けとるみたいやけど。あれってラストスパート並未脚の速度出てる

んちやうか？」

「まあ無理だろうな。いくら練習重ねてきたとはいえ、スタミナの前に脚が壊れる。だからある程度引き離れたらラストスパート分のスタミナを残して中盤は流せ、って指示してある。不安も多い作戦だが、それ以上にアイツは逃げで走るメリットを取った」

「メリット？」

「そう。一つはまあ、今の現状のように対戦相手に動揺を与えること。焦りは思考を削ぎ、冷静な判断力を奪う。これは後半のゲームメイクへの布石だ。そしてもう一つが……ほら、見てみる」

克樹の促しに、タマモクロスはトラックに視線を移す。見ればダイワスカーレットが後続に大差をつけて第一コーナーを曲がり切るところだった。そして最後尾が曲がり終えたところで、克樹が手にするストップウォッチのタイムを見た彼女は驚愕する。

「なんやこの異様なハイペース……！」

「そう、それがアイツの狙いだ。早いレース展開を作ること。自分が先頭を走ってペースを作ることで、他のウマ娘達に自分の作ったペースでレースをさせているんだ。あれだけ先頭に出て引き離されれば、流石に後続も離されすぎないようにペースを上げざるを得ない。自分のペースで走れないのはストレスになり、スタミナをガリガリと削っていく。そこに最初の動揺が加われば、アイツはレースをより支配しやすくなる。これ

が、アイツと俺が考えた「逃げ」の利点」

「えげつないこと考えるでホンマ……ウチ、別にこの為逃げのに末脚教えたわけやないんやけど」

克樹の解説を一通り聞いて、タマモクロスは引き笑いを浮かべた。

(……さあ、ここまでは及第点。だけどこっからが本番。全てはあの「怪物」を斃す為)  
レース中盤に差し掛かり、徐々にペースを落としていくスカーレットの姿を見ながら、克樹は思いを巡らせる。

(俺達の牙がアイツに届くかどうか——お前次第だ、スカーレット……！)

(——今のところは、事前の打ち合わせ通り)

中盤で一息入れながら、スカーレットも勝つ為に思考を走らせていた。

(オグリキャップは——今10位か。結構後続につけてるわね)

研ぎ澄まされた集中は彼女に天からの視点を与える。それにより、標的の正確な位置を把握することが出来ていた。

(思ったより後ろなのは——そうか、アイツの前が横スに広ブがレつッて走ドつシてるから、抜け出す

ルートが無いのね)

鍛錬を重ね、彼女は5月当初よりも更に広く、正確な視野を手に入れることができた。もう一度深呼吸をして、彼女は今後の動き方について脳内でシミュレーションを行う。

(大丈夫、落ち着け、焦るな——今から必ず、アタシと後続の距離は縮まっていく。それはわかっている。勝負は、アイツが動き出してから……!)

そして第2、第3コーナーとレースは動いていく。彼女の懸念通り、彼女と後続の差は徐々に縮まっていた。そのまま迎えた運命の最終コーナー。後続のウマ娘達が一斉にスパートをかけ始めた。その時。

——ドクン

後続に位置付けていたウマ娘達は、確かにその音を聞いた。それは脈動、或いは怪物の降臨を知らせし胎動。

1人が堪えきれずに、音源を振り返る。

刹那。

「ヒッ——!!」

彼女は迫り上がった悲鳴を、抑えることができなかった。

“芦毛の怪物”が、暴風を纏い、両目から灰色の焰を噴き出しながら加速した。

横開きになった先行集団を嘲笑うように、常識外の大外から彼女は駆け上がる。これが幾度も奇跡を起こした、オグリキャップの必勝パターン。周囲のウマ娘は驚きを隠せないでいる。しかしこの展開は。

(来たわね——待つてたわよッ!!)

——彼女にとつては、織り込み済み。

「ッ!?!」

オグリキャップは驚愕した。

自分だけに許されたウイニングロード、大外。そこに、まるで自分がそこに来ること



がわかつていたかのようになり、一人のウマ娘が進路を防ぎに来たのだ。

(これでアンタが抜ける道なんてもう何処にもないツ!! あとはアタシがスパートをかけて引き離すだけ……!)

勝利を確信し、ダイワスカーレットは内心でニヤリと笑みを溢した。

(オグリキャップ……いや、〃芦毛の怪物〃。アタシはアンタを——超えて行くツツ!!) 力強い踏み込み、それは半年以上の鍛錬と、タマモクロスの指導を経てより強力となった。精神状態に左右され、姿勢を崩していた彼女の面影など疾うに皆無。

故に結果は必然。ダイワスカーレットは芦毛の怪物を置き去りに、鮮やかに後続を引き離して行った。

(計算通り! アタシの——勝ちだツ!!)

だが彼女は失念していた。

今自分が対峙しているのは、有象無象のウマ娘ではなく、〃怪物〃であるということ。を。

故にその結果も、必然であった。

（——は？）

自分のプラン通りの展開だった。

相手の加速のタイミングも、自分が先頭に立つタイミングも、自分が支配していた。なのに何故、どうして。

（なんであんなに前にいるのよ!?!）

スパートをかけていたはずの芦毛の怪物は、それ以上の速度を以て、彼女の視界から離れていく。

理由は単純にして明解。ダイワスカーレットがスパートと思っていたものは、トップギアではなかった。それだけのことだ。

（やば、い、どうしたら……!）

彼女は考える。この現状を打破する方策を。しかしその間にも、みるみる内に引き離されていく。

(なにか、なにか………あ)

そしてそのまま、無情にも勝負の幕は降りる。

“芦毛の怪物”は、堂々の一位を飾り、大々的な復活を遂げた。

「はあ……ッ、はあ……」

遅れて2着となったのは、ダイワスカーレット。

ゴールラインを切った後、膝に手を置いて肩で息をしている。

(勝て、なかった——あれだけ練習してきたのに)

強くなった自覚はあった、事実その通りだった。

しかしその努力など無駄だと言わんばかりの、圧倒的で、暴力的な才。自分如きがどれだけ策を弄そうとも、意味がないと身をもって思い知らされた。

(じゃあアタシが積み重ねてきたものって——一体何?)

ピシリ、と。

何かが砕ける音がした。

ふと顔を上げる。そこには観客の歓声に笑顔で答えるオグリキャップの姿があった。

(あれが——「怪物」)

逆立ちしても届かない、異形の存在。

(これが——重賞)

克樹の言っていた事を、ダイワスカーレットは理解した。空気の違い、勝利の重み——敗北の辛酸。

何もかもが違う。今までの自分が積み重ねたものの価値を見失うような絶望感、そして圧倒的な力で自分を斃して行った相手は自分のことを見向きもしないという無力感。さらに誰一人として2着を取った自分を見てくれないという虚無感。

彼女は理解した、理解してしまった。観客が望むのは圧倒的実力を備えし「だけもの」達の勝利。井の中の蛙の善戦など、誰一人の記憶にも残らないのだと。

そして何より——見せつけられてしまった。

(こんな「ばけもの」——勝てるワケないじゃない)

アタシは今まで——何をやってきたんだろう。

「バカみたい」

その眩きは、彼女の心の中の何かを木っ端微塵に砕いた。

(なんつー前傾姿勢してやがんだ、あの怪物……！)

オグリキヤップのスパートを見た克樹は、観客席で息を飲んでいた。

(60度近い角度を維持したままの全力のストライド。常人離れなんて言葉でも生温い、そんな走りができるものなのか？ 普通にやったら前にぶつ倒れる……そうか、足首と膝か。異常なまでに柔軟<sup>やわ</sup>らかい膝と足首でバランスを支えているんだ。そして、一步一步踏み締める度に、地面にめり込む足跡。あの形……足の指で土を搔くようにして加速してるのか。スカレットの踏み込みとはまた別物だ)

驚きながらも、彼は冷静な分析を重ねていた。

負けを負けで終わらせない為に、次に繋ぐことができるように。

「——こんなところで止まんないよな？ スカーレット……」

彼の視線は、呆然と俯く紅い少女へと向けられていた。



「惜しかったな、今日のレース」

「あのオグリ相手によう善戦したわ。スカーレット、アンタはよーやったで」

「……」

レース場からの帰り道、克樹とタマモク羅斯はダイワスカーレットを労っていた。しかし彼女は、視線を下げたまま何も返さない。

「……まあ、アンタの気持ちもわかるわ。今はその悔しさを噛み締めとき」

「……ええ」

タマモク羅斯が、パンパンと彼女の肩を叩く。それを受けて彼女はぎこちない笑みを浮かべながら言葉を返した。

「……さて、どうする？ いつもみたい部屋で反省会するか？」

彼は知っている。彼女は自分のレースを振り返り、反省して次に繋げる事の重要性を

理解している事を。故にその問いが出るのは自然。そして彼女がそれに是と答えるのも自然だった。

——自然なはずだった。

「ごめんつ、今日はもう——帰らせて……——ッ」

「お、おいスカーレット!」

歯を食い縛り、震える声で呟きを漏らすと、彼女は克樹とタマモクロス置き去りに駆け出していった。去りゆく彼女の背中に一声かけることしかできずに、彼はそのまま固まってしまふ。

「……これは想像以上に——」

——重傷かもしれんな。

タマモクロスの言葉が、彼の中で何度も響いていた。



【ダイワスカーレット：3戦2勝】  
『シンザン記念』——2着

失ったモノ、或いは培ったコト

「……」

「……残念やったな、今日のレース」

「……そう、だな」

部屋の中、椅子に座っているのは2人だけ。来るはずだった3人目は、1人先に姿を消してしまった。

そんな重苦しい沈黙の中で言葉を放ったタママクロスに、どこか虚に返事をする克樹。彼の頭の中では、別れ際のダイワスカーレットの姿が何度もリフレインしていた。

——『ごめんっ、今日はもう——帰らせて……——ッ——』

あんなに弱々しい……触れるだけで彼女を構成する全てが砕けてしまいそうな表情

を浮かべた姿は、克樹も見たことがなかった。

それほど彼女にとって衝撃的な出来事だったのだろう。努力を重ねてきた、自信をもって臨んだ、それに伴う実力も付けてきた。それでも「芦毛の怪物」は、彼女を歯牙にも掛けず、他の有象無象の一つとして薙ぎ倒していった。

そのことが、彼女のプライドを深く、強く傷つけたのだろう。

——だが克樹は、それでも良いと思っていた。

彼女はどれだけ傷つこうとも、立ち止まることはあるかもしれないが、歩くことを止めはしない。その敗北すら喰らい尽くし、血反吐を吐きながらも再び歩み出すだろう。彼はそう信じていたから。

しかし今日の彼女の表情を見て、彼は思う。「果たしてこれで良かったのだろうか」「と。

「……正直、善戦した方やと思うで。それくらい、今日のオグリは凄かった。全盛期を彷彿とさせる超大外からの差し。ウチでも追いつけたかどうかからんわ」

「ああ、俺もそう思ってるよ。それでも、スカーレットが欲しかったのは「善戦」なんかじゃなくて——」

「『勝利』と『称賛』、か」

タマモクロスの言葉に、克樹は頷く。

「初めて経験した、大舞台での敗者。観衆は勝者のみを称えて、敗者のアイツに残るのは、圧倒的な実力への畏怖と、自分への無力感だけだ」

「アンタは、それも織り込み済みやったんやないんか？」

「……その経験も糧に変えて、アイツは前に進むって、今でもそう信じてる。ただ、アイツのあんな顔見たら、少し心が痛むだけさ」

「少し、なんて顔や無さそうやけどな」

「……俺が傷ついてどーすんだ、って話だよ全く」

彼女の指摘に、克樹は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「アイツは今、苦しんでるだろう。だからこそ、俺が止まってなんかいられない。力を貸してくれ、タマモクロス」

「勿論や。ウチも最後まで付き合うで」

克樹の懇願に、彼女はドン、と胸を叩いて笑顔で答える。その姿を見て、彼は心の底から安堵した。

「ありがとう、助かるよ。じゃあ今日の反省を」

「その前に、一つ確認したいことがあるわ」

「え？」

「……そろそろわかつたんやないか？ アンタが、あの子から奪ったモノが」

「……なんとなく、だけど」

そうか、と呟いて、タマモクロスは言葉が続ける。

「……初めて一緒に走った時、あの子はウチに抜かれて驚いとつた——そう、それだけやつたんや。そして驚きの後に我に帰って、ウチの観察と分析を始めよつたわ。大層殊勝な心掛けやな……せやけどウチからすればそれは、勝つことを諦めたに等しい。わかるかトレーナー。これが、アンタが彼女から奪ったモノや」

そこまで言われれば、最早答えも同然だった。

自分の中で組み上がっていた仮説が答えであると知り、彼は顔を顰める。それでも、ゆつくりと時間をかけて彼は答えを口にした。

「——俺がさせた『理性的な走り』をするための練習が、レース中のアイツの『本能』にフタをした……？」

震える声で絞り出された克樹の言葉に、タマモクロスは頷いた。

彼女の目指す、他者を圧倒する走り。それを実現する為に、克樹は彼女が元より持ち

合わせていた。『俯瞰する視点』を活かして、レース展開を支配するレースプランナーになる為のトレーニングを重ねさせた。それにより、彼女は冷静な試合運びを行い、理性的な走りをする事ができるようになった。

——つまりは、そういうことだ。

彼女が失ったモノ——それ即ち、『野性』。

「理性的に走るが故に、あの子は想定外の事態が起こると動揺しとった。いや、しすぎなんや。あの子は考えて走つとる。やから考えて修正しようとする。理性だけで走つとるから、野性的な走りをしとらんから——勝つ為に必要な死んでも勝つていう感情が湧き上がって来とらんかった。最終盤に於いて、何よりのガソリンエネルギーになるはずのそれが」

彼が惚れた、スカーレットの中に巢食う獰猛な本能とエゴイズム。奇しくも彼と彼女が積み重ねてきた練習は、2人の気づかぬうちに彼女の魅力を曇らせてしまっていたのだ。

現に彼女は自分がスパートをかけてオグリキャップに抜かれた後、すぐ抜き返そうとせずに、どうすればいいかを考えた。考える事で、現状を打破しようとした。

だが刹那を競う最終盤においてその思考は、停滞に等しい。抜かれた後に、即差し返そうとしない相手など、タマモクロスに——否、全てのウマ娘にとつて何の障害にもならない。その相手はもう、死んでいる。だからあの時タマモクロスは、克樹に「長所を殺した」とまで強い言葉を使ったのだ。

どちらが良い、という話ではない。野性に身を任せただけの走りでは、勝つことなど到底不可能だろう。だが、逆もまた然り。理性的に、冷静な走りをするだけでもまた、勝つことは不可能なのだ。

「ウチに隠しとつたんかもしれんが、あの子は心に獰猛な本能を飼ひ慣らしとる。イイ子ぶつてたけど所々漏れ出しとつたしな。そして、きつとそれをトレーナーのアンタの前では曝け出しとつたんやろう。ましてや、アンタはあの子とレースで競うこともない。やから、アンタは気づかつたんやろうな。あれだけ強い本能が、肝心なレースでチラリとも顔を見せんやつたんや」

「そう、なのか……」

「“冷静に落ち着いて走る”。そら大事なことや。それができるのは、あの子の立派な長所になる。やがそれだけで勝てる程——G1は甘くない。今まではそれだけで勝ててしまつていたつていうのもあるとは思うけどな。これが、今日の敗北でウチがスカ—レットに伝えたかつたことや」

苦々しくも、ハッキリと言い切るタマモクロス。彼女もまた、ダイワスカーレットの身を案じていてくれた事を克樹は理解した。

「……後はあの子次第やろ。ウチらがどうこうできるコトやない。やからトレーナー、アンタが腐ったらアカン。アンタだけは前を向いて、歩き続けんといかんのや……ま、わかつてるとは思うけどな」

「当たり前だ」

強い口調で、彼は言い切った。

現に後悔も反省もあれど、思考は既に次の『チューリップ賞』に向けてどうしていくかへと切り替わっている。

彼は信じているから。最強を誓った彼女は、自分の信じた相棒は、こんなところで立ち止まるようなヤワなウマ娘ではないと。

「……明日からは、『チューリップ賞』に向けての練習に切り替えていく」

「その前に、アンタが気持ち切り替えとくんやで？ そんな顔で前に立たれたらスカーレットもたまらんわ」

「……わかった」

自分は、今どんな顔をしているのだろうか。少なからず、タマモクロスが心配を隠し切れずに言葉をかけるくらいには、酷い顔をしているんだろうなどと、克樹はぼんやりと



思った。



「っし!!」

次の日の朝。克樹は普段より早くチーム部屋へと到着し、スカーレットの到着を待っていた。改めて気合を入れるべく、克樹は己の両頬を強く打った。

(タマモクロスにも言われたけど……俺がアイツの足を引つ張るわけにはいかねえ。『チューリップ賞』まで残り約2ヶ月、やるべき事は沢山ある)

彼の手元に用意されているのは、彼女の為に考案した練習プラン。彼女の意見ともすり合わせるべく、内容を精査したものを複数用意していた。

(昨日アイツに足りなかったものと、これからアイツが走るために足りないもの。アイツ自身が昨日のレースを反省して、見つけてもらわなきゃ意味がない)

そんなことを考えていると、部屋のドアがゆっくりと開かれた。

「お、来たな。おはようスカーレット」

「え……ああ、おはよ。早いわね」

「まあな。早めに来て今日からの練習プラン組んだ。見るか?」

「……そうね、後で良いわ」

「ん？ そうか」

克樹に返事をしながら、彼女はソファに鞆を置いて腰掛ける。その様子に、克樹は微かな違和感を抱いた。

「それよりトレーナー。昨日のレース、見せて」

「え？」

「あるんでしょ？ 早く用意して」

「お、おう」

ダイワスカーレットの促しに、克樹は素直に従った。やはりどこかおかしい。そう思うものの昨日の反省をしようとしているのは良い傾向だと、彼は自分に言い聞かせた。

「ほら、これだ」

「ありがとう」

そして彼女は、昨日のレースを見始めた。その間、彼女も克樹も口を開かない。重苦しい沈黙が流れる。

「……………」

そして映像は最後の場面——オグリキャップに抜かれ、遅れてゴールする彼女の姿へと移った。彼女はその様子を何も言わず……無表情のまま、瞬き一つせずに眺め続けて

いる。まるでその瞬間を、心の奥底に噛み締めるように。

「……なんて顔してんのよ、アタシ」

一頻り映像を見終わって、彼女が漏らしたのは、己を嘲笑うかのような苦笑。彼女は克樹の方を見ることなく、問いかけた。

「ねえ、トレーナー」

「……なんだ？」

「昨日のアタシの走りは、どうだった？」

「え……」

「あんまり上手に走れてなかったのかしら、アタシ」

表情が見えない。真意が読めない。

だがこれは、ただの質問ではない。

違いれば、致命傷になる。克樹はそう感じていた。

ゆつくりと熟考し、彼は正直に思いを伝えることにした。

「——最高だったよ。途中までプラン通りのレース展開だったし、末脚も格段に早く

「なつてた。これまででベストの走りだったと思う」

彼女は何も答えない。永遠に思えるような沈黙。そして彼女はゆっくりと彼を振り返り、告げた。

「——そっか」

——なんだ、その顔は。

克樹は目を疑った。喜んでいられるわけでもなければ、怒っているわけでもない。笑っているが笑っていない。言うならばその笑顔は。

——空っぽ、だった。

「……さ！ 練習始めるわよトレーナー！ 早くそのプラン見せなさい？」

「え、あ」

「ほら早く！ 『チューリップ賞』までに、アタシはもつと強くなって見せるんだから！」  
ともすれば、普段の調子を取り戻したかのように見える。事実、友人程度の付き合い

の人物が今の彼女を見ても、何も違和感を覚える事はないだろう。

だが、彼は違う。苦楽を分かち合い共に成長してきた彼は、目の前の彼女が己を構成する大切な「ナニカ」を喪つてしまったことを、理解してしまった。

「スカーレット、お前」

「大丈夫よ、トレーナー」

克樹の言葉を、彼女は無理やり遮った。

「——アタシはもう、絶対に負けないから」

彼の眼前で、  
「抜け殻」が満面の笑みを浮かべていた。

# 猿も木から落ちる、或いは覚悟、力、虚実

「よーし終わり！ クールダウンや！」

「は、はい……ありがとう、ございました」

それから更に時は流れ、2月末。

『チューリップ賞』まで約2週間を切り、タマモクロスとダイワスカーレットの練習も佳境を迎えていた。

あれから彼女は、克樹の最悪の予想を裏切り、毎日練習へと参加し続けていた。練習もしつかりとこなし、『シンザン記念』よりも気合が入っているようにすら見える。しかしダイワスカーレットを見る克樹の目は鋭い。

「あ、あのタマ先輩……もう一本、もう一本だけ併走お願いします」

「はあ!? 何言つとるんやオマエ！ いくら何でも……」

「お願い、しますッ」

彼とタマモクロスには、大きな懸念があった。

(気合が入ってるのはわかる。だが——空回ってる、何もかもが)

事実、練習への打ち込み方と能力の上昇が、全く以って比例していない。有り余るポテンシャルを十全に発揮させ、見違えるような成長を見せ続けてきた彼女の面影は、一切ないと言っている。そのことに彼女は焦っているのだ。

「——アタシはもう、負けられないんです」

鬼気迫る表情で、彼女はタマモクロスに訴えかける。瞳は血走り、よく見れば目元に隈もある。

寮のウマ娘達も言っていた。彼女が夜抜け出して、ひっそりと練習していると。夜、何かにうなされてあまり眠れていないようだ。

「……スカーレット、来い」

「ツ……何よ」

「今日は終わりだ。さっさとクールダウンしろ」

「はあ!? 勝手に決めないでツ! アタシはまだっ」

「スカーレット!!」

「っ……」

克樹が本気で怒っていることを感じさせられたスカーレットが、悔しさを滲ませながら閉口する。

「……ちったあ頭冷えたか？」

「……ごめん、なさい」

「わかったなら良い。早く帰って飯食って寝ろ。以上」

「……」

返事をする事なく、彼女はその場を去っていった。



「なあ、本当にあれでええんか？」

その後、克樹とタマモクロスは2人で彼ら行きつけのたこ焼き屋に来ていた。地元でも有名で大変美味なたこ焼きを目の前にしているはずの彼らの表情は暗い。

「……良いか良くないかって言われたら、そりや良くないだろうな」

「それなら……!」

「わかってるよ……! でも俺だって無理すんなって再三口煩く言ってる、それが『あの日』からずっと続いているんだぞ!」

これ以上どうすりゃいいんだよ、という苦しいなげな呟きが、克樹の口から漏れた。

『あの日』というのは勿論、『シンザン記念』翌日の部室での一件のことだ。あの日以



降、彼女の異変は続いている。

「……悪い、お前に当たっちゃって」

「気にせんでええ。まあ、アンタの気持ちはわかる」

「……タマモクロス、お前から見てスカーレットはどう思う？」

「……せやなあ」

眩きながら、彼女はたこ焼きを一つ口へと運んだ。瞳を閉じてモグモグと咀嚼して飲み込んだ後、彼女は厳しい表情で口を開く。

「厳しい言い方をするなら、練習してるだけやな」

「……やっぱそう思うよな」

「そら熱心に練習してるとは思うで。気合いも入つとる、ただアイツは今、勝つために練習しとらん、負けないために練習しとる。受動的で、向上心のカケラもありやせんわ。強迫観念に背を押されて、惰性で練習しとるって言うても違わん」

「そうなんだよな……アイツ、あれから一度も言わなくなったんだよ——」  
 「絶対勝つ」と、  
 「絶対負けない」。

前者は己の全てを掛けて、勝利を掴みに行くもの。

後者は己の全てを掛けて、敗北を回避しに行くもの。

どちらが前向きでどちらが後ろ向きか、火を見るよりも明らかである。

以前の彼女は、後者を使う事はなかった。だが今はどうだ、後者しか使わなくなった。心が前も上も向いていない、後ろを向いている何よりの証拠である。

焦燥と憔悴から来る、負の循環。彼女は見事にそれに陥り、ずっと抜け出せずにいるのだ。

「……だから結局、俺から何も伝えられてない。あの時の敗北の理由も、きつと今のアイツの耳には入らないだろうから」

「……賢明な判断やろうな。今のスカーレットが聞いても逆効果やろう。アイツの本能は、今死んだ。あの日からどっかに忘れてきたまんまや」

「……情けないよ、本当に。アイツが苦しんでいるのに、俺は何もしてやれない」

焦っている人に、『焦るなよ』と言って焦るのをやめることができるのか。答えは否である。この問題は彼女自身が解決しない限り、改善される事は決してないのだ。その事が、克樹にとって苦しいものだった。

「なあ、トレーナー」

「……なんだ？」

「ウチが練習を降りる、って言うたらどうする?」

「な……!?!」

「もしもの話や。ここまで来てアンタらを見捨てるような真似するワケないやろ。ただウチはこのまま続けても意味がないし、時間の無駄やとも思つとる。アンタはどう思う?」

克樹は感じていた。自分は今、タマモクロスに試されていると。自分を納得させるだけの答えを出してみろと。それが出来なければ、彼女は本当に練習を降りてしまうだろう。口ではああ言ってくれているものの、タマモクロスも暇ではない。療養を終え、それでも自分とダイワスカーレットの為に時間を割いてくれているのだ。

事実として、タマモクロスの言う事は正しい。今のままではタマモクロスの成長にも繋がらず、ダイワスカーレットの成長にもならない。何の生産性もない、正しく時間の無駄。

それでも自分を納得させるだけの価値を示せ、と彼女は言外に示しているのだ。  
「俺は、俺は——」

そこから綴られた彼の思いを、タマモクロスは真剣な眼差しで聞いていた。



——『チューリップ賞』。

阪神レース場、芝1600m。天候曇、良バ場。

遂に、その日が訪れた。

ダイワスカーレットの、2度目の重賞レース。『ティアラ』を目指す彼女にとって、『桜花賞』の前哨戦トライアルとなる重要な一戦。

「……」

当の彼女は、控え室の椅子に座ったまま無言で目を見開いていた。

(集中は……してるな)

あれから2週間、彼女が本調子を取り戻す事はなかった。オーバーワークこそやめたものの、それだけで精神状態が改善される程単純な話でもない。最悪の事態を避けられただけでも良しとすべきなのだろうか。

「ついに本番やな、スカーレット！一発かましたれ！」

そんな彼女の様子を見て、努めて明るく声を掛けたのはタマモクロス。彼女は結局、最後までダイワスカーレットの練習に付き合う道を選んだ。

「……ありがとうございます、タマ先輩」

「強張んのもわかるけど、せっかくのレースや、楽しんでこい」

「……一つ、聞いても良いですか？」

「なんや？」

「先輩なら、もしレースが自分の想定外の展開になった時、どうしますか？」

「……！」

ダイワスカーレットの質問に、誰よりも驚いたのは克樹だった。奇しくもそれは、彼女の現状を改善するためのきっかけになるものだったから。

「んー……」

質問を受けたタママクロスは、暫し考える。そして如何にもあっけらかんと答えを返した。

「——いや、そんなモンやろ」

「え……？」

「そりゃレース前にいろいろ考えるけど、想定通りに行けばラッキーで、上手くいかんのが普通や。オマエには出来るかもしれないけど、ウチには無理や。やから、そんなモンで割り切る。それがウチにできることやろうな」

「……なるほど」

タマモクロスの言葉を、彼女は真剣に聞いていた。

「……ありがとうございます。じゃあ、行ってきます」

「おう！ 行ってこい！」

「あと、トレーナー」

「ん？」

「——行ってきます」

「………ああ、頑張れよ！」

ぎこちない笑みを浮かべながら、彼女は本バ場へと向かっていった。

「結局、最後まで言わなかったな」

「そう、だな」

「アンタ愛されとるよ。自分自身だつて苦しいやろうに、最後笑つてアンタを安心させようとしとつた」

「……だと、良いんだがな」

「あーもう!! シャキツとせえ!!」

「あぎやつ!？」

感情に浸る克樹の微笑みに飛んできたのは、渾身の張り手。それにどこか懐かしさを覚える。そういえばここ2ヶ月、アイツに叩かれてないな——と、そんなことを思ったのは一瞬。克樹は普通にキレた。

「え!?! お前も!?! お前も頬叩くタイプ!?!」

「アンタが腑抜けてて、叩いて欲しそうに頬晒してたから思わず叩き込んでもーたわ」

「いや別に叩いて欲しくはねえよ!!」

「その元氣やろ、今必要なのは」

「っ……」

「トレーナー、逃げるな、見届けろ。一分一秒たりとも、これからのスカーレットから目を離すな」

真剣な眼差しを向けるタマモクロスの威圧感に、克樹は押し黙った。

「……わかつてる」

そして彼は、観客席へと歩き出した。

たとえ今からターフに立つのが、ダイワスカーレットではなく彼女の“抜け殻”だとしても。

それがこれからの彼女に必要なことであると信じて。



「……」

パドックでアップをこなすダイワスカーレット。その表情は暗い。

（体が重い。全身に重りをつけて走ってる感じ……何これ、アタシの体じゃないみたい）  
全身を蝕む倦怠感。彼女は約2ヶ月それに悩まされてきたワケだが、本番を迎えたこの期に及んで、それが改善される事はなかった。

（それでも、アタシは——）

「よー、スカーレット」

そんな彼女に声を掛けてきたのは。

「つ……！ ウオツカ」

「どうしたんだよ、そんな辛気臭い顔して。折角のレースだ、楽しんで行こうぜ？」

ウオツカは内心の興奮と高揚を抑える事なく、楽しげに笑っている。そんな彼女の様子を見て、ダイワスカーレットは溜息をついた。



「気楽で良いわね。アタシはアンタみたいに頭空っぽじゃないのよ」  
「なんだと!？」

「……そういえばアンタ、戦績は？」

「あ？ 4戦3勝だけど」

「……!」

「なんだよ、なんか文句でもあんのか？」

ウオツカの戦績を聞いたダイワスカーレットは、瞠目する。不審に思ったウオツカの問いかけも、今の彼女には聞こえていない。

彼女は暫く考え込み、意を決して口を開く。

「……ねえ、アンタさ」

「なんだ？」

「……………いや、何でもない。良い勝負にしましょ」

「あ、おいスカーレット!!」

しかし彼女は結局何も問う事なく、ウオツカの前を後にした。

——アンタは、どうやって敗北から立ち直ったの？

一瞬でも頭を過つた疑問を、振り払う。

それではまるで、自分が敗北の記憶に取り憑かれているみたいではないか、と。

その“事実”を彼女が理解する事は、遂に無かった。

(アタシは——もう二度と負けない)

見せかけの覚悟、鍍金の力。その全ては彼女が“何も抜ない”殺の心を慰めるための虚実。

その事実を彼女が少しでも受け入れていたのなら。

このレースの結果は、変わっていたのかもしれない。

そして始まった『チューリップ賞』。

ダイワスカーレットは現在3位に、ライバルのウオツカは8位に付けている。

「……良いとここに付けとる、って言いたいところやが……」

その様子を観客席から見ていたタマモクロスは、目を細めて言葉を漏らす。それに克樹も強く頷いた。

「ああ、力みすぎだ。フォームは乱れてないけど要らん力が入ってるせいでペースコントロールがめちやくちやだ。順位こそ事前のプランから外れてるわけじゃないが、あんな走り続けてスタミナが保つ訳がない。自分でガソリンばら撒きながら走り続けてるようなモンだ」

「ラストスパートに支障が出る、どころかそれまで勝負が続くかも危ういで」

「落ち着け……落ち着け、スカーレット……！」

歯を食いしばりながら、克樹は祈る。

(ハア……ハア——っ)

中盤を終え、終盤に差し掛かる頃。

克樹とタマモクロスの懸念通り、彼女はスタミナ切れ間近に陥っていた。

(苦し、い……なんでっ、別に飛ばしてるわけじゃないのに……！)

足が鉛のように重い。両腕は何かにしがみつかれてるかのよう。

(落ち着け——大丈夫、順位は悪くない、むしろ計算通り、最後に捲り返せば採算は取れ

る)

少しでも体力を掻き集めようと、彼女は深呼吸を重ねる。しかし氣道が何かに締め付けられているように息が入っている感覚がない。焦りと苛立ちだけが、彼女の心に募っていく。

そして迎えた最終コーナー。普段より狭まった視野が、それでも“ライバル”の姿を捉えていた。

(ツ!! 来た——!!)

ウオツカがペースを上げて前方へと一気に躍り出てくる。徐々に彼女との距離が縮まっていく。

(ここだ、アタシもここでスパートを掛けて、一気に引き離すツ!!)

事前のレースプランでは、そうだった。

しかし体は最善とは程遠く、客観的に見て彼女は息も絶え絶えでスパートが可能な状態ではない。しかし彼女は——タマモクロスのアドバイスのアドバイスも虚しく、それに縋る。

(ここで行かなきゃ、いつ行っていくのよ……! 動け、動けアタシの脚ツ!! その為のこれまででしょ!?)

拘泥、固執、視野狭窄。普段の余裕の掻き消えた醜い走りに縋る彼女は、それでも現状出せる全ての力を込めて、強く踏み込んだ。

「うッ、ああああああ、ああああアアアアアア!!!」

絶叫と共に、彼女のスパートが始まる。

残りの体力からは信じられないほどスピードが上がる。

——それだけだった。

(どうして——縮まらないの……!?)

ウオツカとの差は縮まる事なく、広がるばかり。

現実的に考えて、速度が上がった事すら脅威なのだ。それ自体が収穫であり、彼女の地力が上がったことの何よりの証明。しかし現状の彼女がそれに気づく事は無かった。

彼女に湧き上がった感情は、勝利への閃きでも、自分の前を走る相手への怒りでも、ましてや本能的な飢えでも渴望でもない。



勝利に手を伸ばそうとしない者に、女神は微笑まない。  
故にその結果は、必然だった。

「——あ」

自分の眼前で、ライバルが笑っている。

喝采と歓声が、勝者を称えてレース場を揺らしている。

自分の着順よりも、真っ先にそれを理解したのは。

走る前から心のどこかで、こうなるのがわかってしまっていたから。

「……………」

息が荒れている。酸欠で視界が揺らぐ。地に足がついていないような浮遊感。それから一切を外に出す事なく、彼女は勝者を見据えて直立していた。

その様子に気づいたウオツカが、スカーレットを指差しながら叫んだ。

「見たかスカーレット！ 俺の勝ちだ!!」

その様子が余りにも眩しくて、彼女は瞳を逸らそうとした。しかし何故だか、それができなかった。

「……？ スカーレット？」

その様子を不審に思ったウオツカが、怪訝な表情で彼女に問いかける。暫く固まっていた彼女は小さく微笑むと、好敵手の肩へと優しく手を乗せながら、眩いた。

「——おめでと。アタシの負けよ」

「え、ああ、おう……」

「それじゃーね」

そしてそのまま、彼女はターフの上から去っていった。

ウオツカと、その様子を上から見ていた克樹に、言葉にできない不安を残して。



『チューリップ賞』——2着

## 夢の終わり、或いはそれを拒み

「……………あれ」

「お疲れ様」

レース場の外へ出たダイワスカーレットを迎えたのは、優しい笑みを浮かべる克樹。  
「タマ先輩は？」

「先帰ってもらった。今日はお前と、ゆっくり話したくってな」

「……………そう」

「飯は？ 向こうに帰ってから食うか？」

「……………そうする。あんま食欲ないかも」

「わかった。じゃあ行こうぜ」

克樹の促しに返事をする事なく、彼女は彼を追うように歩き始めた。



「……………」

「……………」

そして無言のまま、彼らは東京まで帰り着いてしまった。新幹線を降りた後、克樹が『付いてこい』と彼女に向けて放った言葉が最初で最後だ。

「……………いい加減にして。話があるんじゃないの？」

「まあ落ち着けて。ちゃんと話すからもう少し待てよ——お、見えてきたな」

「はあ？　こんなところに一体——って、ここ……………」

彼女の眼前に飛び込んできたのは、河川敷。

彼と彼女の、〃始まりの場所〃だった。

「懐かしいな——もう一年近く前になんのか」

「……………」

「まあ座りなよ、ダイワスカーレット」

「……ふはっ、何同じ事してんの。バカじゃないの?」

口ではバカにしながらも、彼女は思わず吹き出してしまった。先に座った克樹の隣に、彼女もサツと座り込む。

「で? なんでココな訳?」

「——この場所なら、嘘はないだろ」

「え……」

「俺もお前も、この場所に嘘は付けない。腹割って話そうぜ、スカーレット。俺はちゃんと向き合って、これからのことをしっかりと見据えていきたいんだ」

克樹の目に、迷いはなかった。

この場所で嘘をつくこと。それは彼と彼女の「あの日」への冒瀆。それがわかっていたから、克樹はこの場所を選んだのだと、彼女は理解した。

「——わかった」

「ありがとな、さてスカーレット。今度は時間はやらねえぞ——今日のレースの敗因は?」

「……」

それはあの日と同じ問いかけ。

あの日と違っているのは、夕焼けの有無。

街灯の薄明かりに照らされて揺れる暗い水面が、まるで自分の心象を表しているかのよう  
 方で、彼女は強く歯を食いしばる。

「——自分のレースが出来なかった」

奇しくも、それもまたあの日と同じ答え。

「原因は？」

「事前の調整不足。焦りからくるオーバーワークの疲労が抜けきらなかった。迷いながら走った。悩みながら走った。まだまだ沢山あるけど何より今日アタシは——勝つ為に、走ってなかった」

半ばヤケクソのように、彼女は敗因を吐き散らす。それでも彼女は今、この期に及んで漸く——己を縛り付け続けた弱音を、受け入れた。

「そうなったのは——『シンザン記念』で、オグリキャップ先輩に完膚なきまでに負けてから」

そして弱音を受け入れた心は、自分を客観視する強さを手に入れた。

「勝てると思つてたのよアタシ。練習して強くなった自覚もあつた。作戦も上手く決

まったし、あのレースは自分の中で最高の走りだったって、自覚してた」

「……俺もそう思ってたし、その通りだと思う。映像見た日にも言ったけどな」

「そう。アンタもそう言ってくれたわよね……じゃあ——」

——アタシはどうして負けたの？

その問いかけに、克樹はすぐに答えを返す事が出来なかった。だが彼女の視線は、彼に答えを求めている。どんな答えでも受け入れると、訴えかけている。克樹は彼女の覚悟を受け止め、静かにその答えを告げた。

「——お前より、オグリキャップの方が強かったからだ」

「……やっぱ優しいわね、アンタ。この期に及んでまだアタシの心配してくれてる。キツパリと言えればいいのに。『アタシが弱いから』だって」

「いや、俺はそんな……」

「わかつてる。重々承知なの、そんな事。オグリキャップ先輩は、アタシなんかより遥かに強い。はー、なんか口にしたらスツキリした！」

そう言って彼女は、憑物が落ちたかのように笑った。事実彼女の心は晴々としていた。今まで一人で抱えてきた潰れそうなほどの肩の重荷を、漸く下ろすことができたのだから。

「……そう、強かつたのよ。笑っちゃうくらいにね。まるで勝てるビジョンが湧かないの、あの日から。それですつと思つてた。必死に練習して強くなって、最高の走りをして、それでも勝てないのなら——アタシは一体何のために練習してきたんだろうって。これから何のために練習していけばいいんだろう、つて」

水面を見据えながら、彼女は呟く。その呟きを、克樹は黙つて聞き続けていた。

「……そしてその気持ちは、今でも変わらない」

「えっ」

「アタシもう、わからなくなっちゃつた。これから何のために練習して、何を目指して走ればいいのか」

「お前、何言つてッ」

「だからね、トレーナー」

彼女は笑う。色々な物がぐちゃぐちゃになつて混沌と化した心情とは掛け離れた綺麗な笑顔で。

「——アタシもう、走るのやめる。アンタとアタシの夢は、今日で終わり」

「……本気で……言っつてんのか……？」

「今までありがとね。アタシなんかのために色々考えてくれて。嬉しかったわ。それじゃ」

そして彼女は立ち上がってその場から去ろうとする。克樹も遅れて立ち上がり、彼女を引き止めるべく腕を掴んだ。

「おい、スカーレット——」

「触るなッ!!」

しかし返ってきたのは、怒声と拒絶。

面食らった克樹は思わず手を離してしまった。

「もうこれ以上……ッ、何の意味があるのよ……!!」



俯いたまま、彼女の口から出たとは思えないような低い唸り声が、河川敷に響く。  
やがて彼女は、心に巢食った負の感情を凝縮したような歪んだ表情で、克樹を睨みつけながら叫んだ。

「どんなに練習して成長したって、ばけもの」達に届きはしない……！ それならもう練習の意味なんてないじゃない!! それでもまだアタシに練習しろって言うのなら、その意味を教えてよ……！ 何のために走れば良いのよ、勝てもしないのにッ!! 答えてよ!! ねえってばッ!!」

それは彼女が、『シンザン記念』から溜め込んできた苦痛の思いだった。口に出せば、より傷ついてしまうから。誰も良い思いをしないから。それを押し殺す為、忘れ去る為に彼女は練習へと没頭していたのだ。

しかしそれは、今日の敗北で遂に心から溢れ出してしまった。

「勝ちたい、そう願うだけなら簡単よ……！ でも現実はその上手くないかない、アタシがどれだけ練習して強くなったって、アタシより強いウマ娘なんて沢山居る！ 努力すれば勝てる、努力は裏切らない、そんな言葉は全部嘘ッ!! 努力に縋ってきた凡才如きが、その努力さえ否定されたらっ、一体何が残るって言うのよオッ!!!」

半ば狂乱しながら、彼女は叫ぶ。溢れ出した彼女の感情が、濁流のように渦巻いて克

樹へと流れ込んで行く。

「一番にしか価値がない、それを改めて思い知らされた……現に『シンザン記念』も、『チューリップ賞』も、誰もアタシなんて見てなかった……！ アタシなんて所詮その程度の存在、誰の記憶にも残らないまま自然に消えていく！ それが怖いよツ、どうしようもなく……!! アンタにはわからないでしょうけどねエツ!!」

憤怒の形相で、彼女は克樹を睨み付ける。微かに残った彼女の理性は、彼が何一つ悪くないことを理解していた。だがそれでも、誰かに聞いて欲しかった。矛先を向けるしかなかった。そんな自分自身の気持ちには気づかぬまま、彼女は胸の前で拳を強く握りしめたまま俯き、呟く。

「どうせ誰も見てくれない、アタシの走りになんて興味ももってくれない。興味あるのは『ばけもの』達がどう勝つかだけ……っ、それならっ、アタシがつ、アタシが走る意味なんてもう——」

「俺が居るだろうが!!!」

「——え」

「誰もお前を見てない？ ふざけんじゃねえぞ!! ここに!! 俺が……ツ!! 居るだろうがよオツ!!」

彼女の胸ぐらを掴みながら、克樹は吠える。その瞳には、涙が滲んでいた。

「俺は見てるぞスカーレット、お前だけを見てるツ!! 俺以上にお前を見ているやつなんて居てたまるかよ……!! お前の走りに惚れた、お前の勝ち姿に惚れた……お前の負

ける姿なんて、弱気な姿なんて俺だつて見たくねえ……ッ！　でもッ!!」

感情的な相手に感情的に返す。それが最大の悪手であることは、彼も重々理解している。

だがそれでも、見過ごせなかった。

自分がどんな思いで彼女の側に居たのかを、彼女は1ミリも理解していなかったから。

「それでも俺は、お前を見てる!!　ずっとお前の側で、お前だけを見てるッ!!　一瞬たりとも、お前から目を逸らさない!!　それだけが、俺にできることなんだよ……!!　負けたからなんだ、相手が『ばけもの』だからなんだ……!!　お前も負けなくらいの『ばけもの』になればいいだけの話だろうが……!!」

「アタ、シも……」

「お前は勝てる、俺が勝たせてやる!!　そのためなら、どんなことだつてやってみせる!!　後はお前だ、スカーレット……!!　お前にまだ少しでもその気があるなら、俺と一緒に戦つてくれるなら……!!」

そこで苦しそうな表情を浮かべたまま克樹は言葉を切り、彼女から手を離れた。

「……悪イ、感情的になつちまった」

「……」

「でも、俺の言ったことに、嘘はないから。俺は今でも、お前と二人で最強いちばんになりたい」  
「……」

彼女は俯いたまま、何も返さない。しかし彼の言葉は、確かに彼女の心に響いていた。

「……なあ、スカーレット……」

「……——っ」

呼び掛けに応じ、顔を上げたスカーレットの眼前に飛び込んできたのは。

涙を溢れさせながら優しげに笑う、*“相棒”*の姿。

「勝たせてやれなくて……っ、ごめんなあ……」

「——あ」

その言葉は、彼女の中の何かを壊した。

「あ……ああ……」

信じてくれていた。

誰よりも側で、彼女の勝利を願っていた。

「——ごめん、なさい……」

それなのに、誰よりも先に自分自身が諦めてしまっていた。

彼はずっと自分を責めていたのに。

自分よりも傷ついていたのに、それを悟らせることすらせずに。

「んぐつ、ごめん、なさいっ、トレーナー……アタシっ、あたしっ」

——裏切りたくなかった。

貴方と2人で、最強になりたかった。

それなのに、それなのに。

勝手に諦めて、彼を傷つけて。

なんて酷いことを、重ねてきたのだろう。

「違う、違うの。ごめんなさいっ、ごめんなさい、トレーナーあ、うつ、えぐつ、うわあああ  
……」

彼女は頰れ、その場で顔を覆いながら泣き出してしまふ。そんな彼女の様子を見た克樹の体は、全ての感情を置き去りに勝手に動き出していた。

「——え……っ？」

彼女の体を包む、優しい温もり。

自分が彼に抱き締められていると気づいたのは、暫くしてからだった。

「……違う。謝るのは俺なんだ、俺の方なんだ。ごめん、ごめん、本当にごめんスカー」

レット……！ お前を信じるって決めてから、本当に信じておこなった。お前一人に全部背負い込ませて、こんなことになるまで何も出来なくて。重かったよな、辛かったよな」

頭を撫でながら告げられる、彼からの懺悔。

その優しい暖かさが、荒れ狂った彼女の心を鎮めていく。

そして不意にその手を離すと、克樹は彼女の目を見て、涙を流した表情のまま微笑した。

「……俺は無力だ、お前と一緒に走ってやる事はできない。だから俺にも背負わせてくれ。忘れんな、お前の痛みと苦しみは、俺とお前2人のモンだ。俺は信じて側に居てやることしかできないけど、それだけはできるからさ」

「……ああっ、あああ……アタシっ、アタシ……っ」

彼女の瞳からこぼれ落ち続けていく、大粒の涙。心の中で溜め込まれ続けたモノが、形となって解き放たれてゆく。泣きじやくつてぐちやぐちやになった顔。誰にも見せたことのない、絶対に誰にも見せないと決めていたその顔を隠すこともせずに克樹を見つめながら、嗚咽混じりの掠れた声で彼女は呟く。

「アタシっ、勝ちたいの。1番がいいの、1番じゃないと嫌なの。絶対に嫌なの」



「ああ、知ってるよ」

「勝ちたい、勝ちたい……貴方と勝ちたいつ、貴方と一緒に最強いちばんになりたい……っ!!」  
でも、どうしたらいいかつ、わからなくて、貴方を傷つけて、さつきだつて、酷いこと沢  
山、たくさんっ」

「気にすんな」

「また、負けるかもしれない、みつともないところ、見せちゃうかもしれない……それで  
も貴方は——アタシの側に、居てくれる?」

「居させてくれよ。俺はお前の側に居てやることしかできないんだからさ」

「うっ、ううっ……」

「もう一回、頑張ってみようぜ。どんなに無様に負けても、泥だらけになつても、それす  
ら糧にして立ち上がる。俺が知ってるダイワスカーレットは、そういう奴なんだよ。そ  
れでも苦しい時は、俺が背中を押してやる。そうやって何回でも、何回でも立ち上がっ  
て行こう」

「うん……うん……っ」

そして彼女も、克樹を強く抱きしめた。

まるでがみつくように、弱さを曝け出すように強く、強く。そのまま彼の胸に顔を

押し付けて、嗚咽を上げる。頂点を志ざす孤高の少女は、いつも隣に彼が居てくれたと  
いうことに、漸く気づいた。

彼女が泣いている。全てを曝け出しながら。  
彼も泣いている。全てを包み込みながら。

そんな2人の姿を、5月と同じように月明かりだけが照らしていた。



「……みつともないとこ見せたわね」

「いや、俺の方こそだ」

改めて帰路に着いた2人。その表情は互いにどこか気まずさを滲ませていた。

それもそのはず、互いにガチ泣きして、あろうことか抱き締め合いましたのだ。羞恥心がメーターを振り切り、気まずさが天元突破していた。

それでも、忘れたいとは思わない。

少なくとも、彼女の方はそうだった。

触れ合った彼の暖かさが、確かに彼女の心を救ってくれたから。

それを自覚した途端、彼女は自分の頬が微かに熱を帯び始めていくのを感じた。

(冗談でしょ？ そんな、そんな——)

彼女は理性的に、それを否定する。

それでも、彼女の手は——

隣を歩く克樹の手を、そっと握っていた。

「……何してんの？」

「はっ!? あ、いや、これはそのっ」

彼女は動揺し、手を離そうとする。

しかし強く握り返された克樹の手が、それを許してくれなかった。

「いいよ別に。そんな気分なのも……ちよつとわかるしな」

「……あ、う」

茹だつた頬を見られぬようにと、ダイワスカーレットは俯く。それと同時に感じる、

彼の手の暖かき。自分を支え続けてくれたその手の優しさに、言葉にはできない感情が込み上げてくる。

彼の方はどうなのだろうとそつと様子を伺うと——彼もまた、居心地悪そうに視線を泳がせながら、頬を染めていた。

そんな様子を見て、彼女は。

「——ふふっ」

心の底からの笑みを浮かべた。

その姿を見てしまった克樹は、驚きのあまり目を見開く。

(……やば、かわいい——)

そこから先の思考を、無理やり遮った。

そして次の瞬間、照れ隠しで放たれた彼の一言は、端的に言つて最悪だった。

「——春先なのに手汗凄いな、お前」

「YAWWARAAアツ!!」

「イツポオン!?!?」

現役選手と遜色ない鮮やかすぎる神速の一本背負いに、克樹の体は無様に宙を舞い、受け身をとることにすらままならず地面へと叩きつけられた。

「アンタマジでデリカシーなさすぎ!! アホ! ボケ!! なすび!! 童貞!?!」

「おい待て!! 最後のは関係ねえだろ!! 女が平然とそんな言葉を口にするんじゃねえ!!」

「うるさい人の気も知らないで! バカバカ!!」

「あつ……たま来たア!! 事あるごとにバカバカ言ってるきやがって!! 大体お前がこんな春先で手汗凄いのが悪いんだろが!!」

「はあ!?! 誰のせいだと思ってるのよ!?!」

「俺のせいなのかよ!?!」

「そうよ!!」

「なんでだよ!?!」

「えっ……………バーカ!!」

「つたあ!?! なんぞえ!?!」

炸裂したビンタ。久々に味わうその痛みに克樹は懐かしさを覚え——ることなど微塵もなく、普通にキレた。

—そのあともぎやあぎやあと騒ぎながら歩き続ける2人。その両手が繋がれたままだという事にツツコミを入れる存在は、この場には居ない。

それでも2人は、こんなくだらないやり取りに、漸くいつも通りを取り戻したんだという安堵を感じた。

## そして赤は、真紅へと至る

「じゃーん！ どう？ 似合ってる？」

「おー。 いいじゃんか、お前の『勝負服』」

『チューリップ賞』から数週間が過ぎ、3月下旬。

彼女は目前に迫った『桜花賞』に向けて新調した勝負服を見に纏い、満足そうに笑っていた。

「でしょ？ はあ、最高……」

「青基調つてのが良いよな。お淑やかに見えるから本性隠すのにピッタリじゃねえか……ヒエツ」

自分の眼前に鋭く突き立てられたダイワスカーレットの指を見て、克樹は情けない悲鳴を上げた。

「次は外さないわよ？」

「ハイ！ 仰せのままに！」

「全く……いつも一言余計なのよ、アンタは」

「自覚はある」

「あるのね……」

「誇りもある」

「さっさと捨てなさいそんなゴミ」

ドヤ顔で見つめてくる克樹に、彼女は半目で返した。

「さて……やれそうか？ 今日のレース」

「ま、この服に恥じない走りをしてみせるわ」

そう、彼女が勝負服を見に纏っているのは、今日が年に数度行われている〃チーム対抗レース〃の日だからだ。

各チームから代表のウマ娘を選抜し、ぶつけ合うことで互いに実力を高め合う。言っ  
てしまえばただの練習試合で、何のレコードにもなりはしないが、普段走ることない相  
手と競うことは、貴重な経験である。故にたかが練習試合で終わることはなく、ウマ娘  
たちは気合を入れてそのレースに臨むのだ。

「代表に選ばれた気分はどうだ？」

「いや、このチームアタシしか居ないからいつもアタシが代表じゃない」

「違うないぜ、H A H A H A !!」

「アメリカン気取ってんじゃないわよ」



高笑いする克樹を見ながら、彼女は嘆息する。すると唐突に真顔になった克樹が、真面目な声色で話し始める。

「……正直な話、このレースを辞退するって選択肢もあつた。それでもお前は、走るんだな？」

「何を今更。覚悟ならとづくにできてるわよ」

「……そうか、なら良い」

「じゃ、行つてくるわね」

「ああ、頑張れよ——見てるからな、スカーレット」

「ええ、精々焼き付けておきなさい——アタシの勝ち姿」

不敵に笑う彼女の姿。それは完全に『シンザン記念』以前の自信に満ち溢れた——  
「抜け殻」ではない、彼女の姿だつた。

「トレーナー、アタシは勝つわよ。だからアンタは上で踏ん反り返つて見てれば良い。最高の勝利を、アンタにも味わわせてあげる」

「はっ、久々の勝利に浮かれて一人で食い散らかすんじゃないやねえぞ？ 俺の分も取つてくれないと困るぜ？」

「それはアタシの気分次第かもね」

「抜かせ……信じてるよ、相棒」

「信じられたわよ、  
『相棒』」

克樹から差し出された拳に自分の拳をコツンとぶつけ、彼女は笑顔で控え室を後にした。



「スカーレット!」

「あ、タマ先輩!」

本バ場へと向かう途中、彼女に声を掛けたのはタマモクロスだった。

「応援に来てくれたんですか?」

「まあな。えらい自信あげやないか」

「ええ。前2回は情けない所見せちゃいましたけど、今回こそは良い所見せられそうです」

「おう、そろそろウチに弟子の勝ち姿を見せてくれや」

タマモクロスは快活に笑う。そんな様子を見て、ダイワスカーレットはバツの悪そうな表情を浮かべた。

「……あの、タマ先輩」

「ん？ どした？」

「その……すいませんでした。先輩からせつかく指導してもらったのに、不甲斐ない姿見せて」

「……あのなあ、スカーレット」

頭を掻きながら、タマモクロスはため息と共に呟いた。

「——正直、オグリに負けてからのオマエは見てられんやったわ」

「っ……」

「ただ練習に参加して、与えられた練習をただこなすだけ。強くなりたくとか勝ちたいとか、そんな気概は毛ほども感じられんやったわ。ぶつちやけた話、何度も『時間の無駄や、早うやめてしまえ』って、ずっと言ってるやられたかった」

「……」

「……それでもウチがそうせんやったのは、トレーナーがおったからや」

「え……」

「アイツは、ずっとアンタのことを信じとった。ウチが練習を降りるって言っても、頑なにそれを譲らんやった。アイツがなんて言いよったか、わかるか？」

タマモクロスの問いかけに、ダイワスカーレットはゆつくりと首を横に振る。その様子にタマモクロスは小さく溜息を吐くと、答えを明かした。

「——『今度は、俺の番なんだ』」

「——ッ」

「こうも言うとうつた。『アイツはずつと、俺を信じて付いて来てくれた。だから今度は、俺がアイツについていくんだ。アイツはこんな事で諦めたりしない。絶対にまた立ち上がる。今は意味が無いかもしれないけど、この積み重ねはいつか必ずアイツの糧になるから』……つてな」

「……」

タマモクロスから告げられた克樹の思いに、ダイワスカーレットは口角が上がるのを抑えられなかった。

「……ええトレーナーや、ウチらウマ娘のことを何より大事にしてくれとる。アンタも大切にせなあかんで？」

「はい、勿論です」

「ほな行つてこい！ アイツに良いところ見せたれ」

「はい！行つてきますす！」

笑みを浮かべながら元気良く返事をして、彼女はパドックへと走り出した。その後ろ

姿を見ながら、タマモクロスは呟く。

「……全く否定せんやつたな、アイツ」

まあ良いことやろ、と口にして、タマモクロスも笑いながら観客席へと歩き出した。



「ダイワスカーレット」

アップを済ませゲートインしたダイワスカーレットは、既に隣のゲート内に居たあるウマ娘に話しかけられた。

「あ——こんにちは、エアグルーヴ先輩」

名を呼ばれたウマ娘——エアグルーヴは優しく微笑む。しかし青と黄色を基調とした勝負服を纏った線の細い体からは、勝利への決意と覚悟を孕んだ蒼い気炎が立ち昇っている。その気品のある佇まいと、不利状況を翻す優雅な勝ち姿から、人々は彼女を、『女帝』と呼ぶ。G1でも複数の勝利を重ね、トレセン学園では副会長も務める実力を兼ね備えた優等生で、後輩からも尊敬されている。

「共に走るの初めてだな。一度お前とは走ってみたいと思っていた」

「光栄です、あのエアグルーヴ先輩と同じレースを走れるなんて」

「フフ……あれだけ夜抜け出して練習していたんだ、善戦してくれないと張り合いがないぞ?」

「うっ……そ、その節は本当に申し訳ありませんでした……」

エアグルーヴが言っているのは、ダイワスカーレットが『チューリップ賞』に向けてオーバーワークを重ねていた時のこと。彼女は規則を何度も破り続けていたダイワスカーレットに副会長として幾度も注意を重ねていた。

「……吹っ切れたようだな」

「え?」

「あの時のお前は何かに追われているように切羽詰まった様子だったからな。迷いは晴れたか?」

「……はい。このレースで、それを証明して見せます」

「フン、見せてもらおうか——ただし、勝てるなどとは、思わないことだ」

「いいえ違います」

「?」

強く否定したダイワスカーレットの様子に、エアグルーヴは首を傾げる。ダイワスカーレットは、視線を前に向けて、静かに笑っていた。

「——このレース、勝つのはアタシです。誰にも、アタシの前には立たせない」

「……ハツ、巫山戯ろ小娘」

エアグルーヴ  
G1ウマ娘は、獯猛な笑みを浮かべた。

そしてレースが幕を開ける。

「おい、トレーナー！」

「ん？ なんだよタマモクロス」

観客席では、合流した克樹とタマモクロスが、いつものように2人でレースを観戦していた。現在第2コーナーを終えたレース展開を見たタマモクロスが、焦ったように克樹に声を掛けている。

「あれで良いんか!? スカレット、今6位やぞ!」

「確かに事前のプランから3つ後ろにつけているが……まあ大丈夫だろ」

「大丈夫って……! オマエそんなんっ」

「落ち着けてタマモクロス。アイツの顔見えるか?」

「え……あ」

克樹の促しに従い、彼女はダイワスカレットの顔色を窺う。

「アイツ……笑つとる」

「な? 言つたら、大丈夫だって。まあ大人しく見とけ」

克樹は腕を組みながら、静かにレースを眺めている。

(本当に、何も心配してないぜ——スカーレット)

心中で、彼はそつと呟く。

(お前から久しぶりに聞いたよ。 “勝つ” って言葉。帰ってきたんだなって、心の底から嬉しかった。だから俺に見せてくれ、生まれ変わったお前の走りを)

(——不思議。なんなのかしら、この気持ち)

現在6位に付けるスカーレット。事前のレースプランから崩れてしまっている現状においても、彼女の心には波一つなかった。

(想定より相手が強い。気合の入り方が違う。エアグルーヴ先輩なんて、まだ全然本気で走ってない。 “先行” 策なのに “逃げ” を差し置いて先頭に居るじゃない)

いつもより、観える。



いつもより、解る。

(このままだと負けるかもしれない。それなのにどうしようアタシ——ワクワクして  
る)

それは彼女が、あの日理解したから。

敗北は終わりではなく、始まりなのだ。

(たとえここで無様に負けても、アタシは絶対に立ち上がれる。だってアタシには、アイツが側にいてくれるから)

観客席を、〃観る〃。そこで彼が、優しく笑っている。確かに自分を見ている。

(ありがとう、本当にありがとう。アタシはまだまだ、強くなれる。そう思えたのは、ア  
ンタが居たからよ)

——貴方に誇れる、最強アタシでありたい。

負けたからなんだ。勝てるまで、走れば良いだけ。

貴方が信じてくれるなら、私は何度だって立ち上がれるから。

(その為にも、このレース——)

——絶対負けない。

弱い。足りない。

——絶対勝ちたい。

まだ弱い。まだ足りない。

——アタシが勝つツ!!!

見開かれた紅玉は、戦局の全てを見渡した。  
その全ての情報を瞬間的に把握、演算開始。  
勝利以外の要素<sup>ファクター</sup>を、排除せよ。

(考えるな——感じる、感じるな——考える)

それは理性にあつて、野性に非ず。  
それは野性にあつて、理性に非ず。

——野性的に導き出した、理性的な方程式。

それは、刹那に実行された。

目障りだ、其処を退け

最強いちばんはアタシだ、アタシの前に道を開けろ——

平伏せ

その瞬間を眺めていた克樹とタマモクロスは、目を疑った。

彼女が位置を横にズラした瞬間、前のウマ娘達が道を開けるように動いた。

そしてその瞬間がわかっていたかのように、ダイワスカーレットが踏み込む。

——グシヤアツ

湯豆腐のように、ひしやげながら潰れる堅い地面。脚を起点に、全身を深く、深く沈める。

(まだまだ、まだ行ける——)

力を溜める。自分の力の全てを膝に、脹脛に、足首に、土踏まずに、母子球に、指先に。

(——いイッツけええエエエツツ!!)

そして極限まで溜められた力は、彼女自身を弾丸へと変えて、解き放たれた。

「——は?」

先頭を走っていたエアグルーブは、素つ頓狂な声を上げた。何かが来る、と感じた刹那。自分の体が、勝手に横に動いた。そうして出来た道を、紅い閃光が残照を残しながら、流星の様に消えていった。

(待て今何が——何が起きたッ!?)

理解不能の事象に混乱したのは一瞬、彼女は本能に釣られるがままに紅い閃光に追いつく。しかしそれは、触れる事の許されない閃光。紅瞳を釣り上げ、鋭い牙を剥き出しに、普段の可愛らしい顔からは想像できないような獰猛な形相でターフを貫く紅——

否、真紅。

エアグルーヴの必死の猛追も意に介さず、真紅は勝利へのレッドカーペットを優雅に進んでいく。

そして彼女は、デビュー戦と同じように2位以下に圧倒的な大差をつけて、交流戦の勝利を飾った。

息一つ乱さずに立ち止まり、後ろを振り返った彼女の瞳は。

—— 全てを見下しながら、紅い稲妻を撒き散らしていた。

「——スツゲエ」

「想像、以上やな……」

勝利のスタンディングを魅せるダイワスカーレットの様子を見て、克樹は震えが、タマモクロスは冷たい汗が止まらなかった。

成長は段階、進化は一瞬。

克樹が撒いた種を彼女が努力で育て、タマモクロスが添え木となり、彼女自身の心象改革が特段の栄養となつて。彼女のこれまで積み上げてきたモノが、一足飛びに一斉に開花した。

「……見たか？ タマモクロス」

「当たり前やろ——アイツ、前を走るウマ娘を退かして道を作らせよつた」

スパートの直前。彼女は前後のウマ娘達のレース前の知識、これまでの走り、現在の走り方、残りの距離から、対戦相手達がこれから描く走りの軌跡を瞬時に導き出した。そして自分という駒を使って、邪魔なウマ娘達のポジションを、自分の望むように動かしたのだ。それは彼女の、『最強は自分だ』という本能から来る存在証明、即ち『本能で野性的に導き出した、理性的な演算』。

まさしく彼女は、自分以外のウマ娘を支配し、自分の望むレース展開をその場で作り出したのだ。

「『理性的かつ野性的に走る』。口で言うだけなら簡単やが、正しく体現しよつたな……」

予想外の事態に動揺していた彼女の面影はもう無い。事前に組み上げたレースプランが上手いかないのは、そんなモンだと割り切つて——その場で瞬間的に勝利への最適なレースプランを新たに構築する。そしてそれをアクティベートするだけの技能を、

彼女は十全に持ち合わせている。

練習は嘘をつかない。惰性しかなくとも、彼が彼女の為を思つて作つた練習は、確実に彼女の地力の底上げにつながつていたのだ。

そして師匠タケモトとの練習で譲り受けた盗み取った、稲妻迸る埒外の末脚。これにより、元からあつた逃げを可能にするほどの脚力が更に強化され、あらゆる状況から勝利を掴み取ることが可能となつた。

観客席から湧き起こる、拍手と歓声。

それは彼女の圧倒的な走りに対する称賛であると同時に。

——新たな「ばけもの」の誕生を謳う、祝福の凱歌だつた。

「……さて、これでウチのスカーレットへの指導は終いや。あとは頼んだでトレーナー」

「え？　もういいのかよ。やることなかつたんじや」

「アホ吐かせ。やることならたつた今できたわ」

「どういふこと——ッ!？」

意味がわからずに隣を見て、克樹はゾツとした。



見れば、牙を剥き出しにして獐猛に笑う、瞳から白い稲妻を迸らせた一匹のケモノがそこに居た。

「——あんな走り見せられて、黙ってられるかい。今すぐにも走りたくて、ウズウズしとるわ……ウチも、あそこに戻らせてもらう。一線を退いた古豪なんて、誰にも言わせへん」

「……これからはライバルだな」

「せや。スカーレットにも伝えとつてくれ」

「タマモクロス。本当にありがとう。スカーレットをここまで導いてくれて。お前が居なかつたら……」

「やめてくれや、今生の別れでもあるまいし。トレーナー、ここからはアンタの仕事や。あの子は今、ウチらと同じ次元に立った。それでもまだひよつこや。辛いことや苦しいことも沢山あるやろう。アンタが隣で、あの子を支えてやるんやで」

「ああ。誓うよ、必ず」

「ほなな。世話になった！ 楽しかったで！」

またたこ焼き奢ってな——！ という言葉を残して、彼女はレース場を去っていった。

そんな彼女を笑顔で見送っていた克樹は、小さく呟く。

「——それは勘弁してほしいかな」

彼女と食事に行く度消えていく諭吉さんのことを思い、彼は涙目になった。



「お疲れ様、スカーレット」

「ええ、ありがとう」

選抜レースを終え、チーム部屋までの道のりを2人は歩いていた。『チューリップ賞』の時とは違い、彼女の顔色は明るい。

「……久々の勝ち、だな」

「そうね。待たせちゃった?」

「そりゃあな。ただやっぱ、お前には勝ち姿が似合ってるよ。今日改めて、そう思った」

「……そう、かしら」

「ブチのめした相手見ながらニヤニヤ笑ってるところが性格悪そうでイイ」  
「アタシの喜びを返せ」

笑顔で告げる克樹を、彼女は鋭く睨みつけた。

「にしても、スゲエなお前。アレ、狙ってやったのか？」

「……まあそうね。なんかできる気がしたのよ。ここでアタシがこう動けば相手はこう考えてこう動くから、それにつられた相手がこう動いて——結果的にああなるみたい  
な」

「なるほどわからん」

彼女自身も、戸惑っているのだろう。それもそのはず、アレは本能的に起こした行動を、後から理論付けしたものだ。言うなれば、『考えている途中で体が動いた』状態。即ち先に答えを書き、後から途中式を書いているのだ。しかもその解答は百点満点。彼女の勝利に飢えた本能と、卓越した洞察力。それが見事に融合した、彼女が挫折と苦悩の先  
に手に入れた唯一無二の武器。

ただ今はまだ、それを手に入れただけに過ぎない。扱いは未熟で、理解も足りていない。それでも確かに、それは彼女の手中にある。これからの方向性が、定まった。

「……とりあえず『桜花賞』までに、少しでも扱えるようになってかないとな。力に振るわれるようじゃ綱渡りもいいトコだ」

「わかってるわよ。今日見えた、アタシの新しい可能性……絶対形にして見せるんだから」

気合十分、と言った様子で彼女は拳を握りしめる。すると突如彼女は立ち止まって、克樹の方を見た。彼もまた立ち止まって、彼女を見つめ返す。

「……スカーレット？」

「…………あり、がとね」

「は？」

「これは……アンタがアタシにくれたものだと思ってる。アンタが居なかったら、アタシはきつとあの日に終わってた。だから、だから……」

「お、おう」

普段と違う、しおらしい彼女の様子に克樹の心臓が一気に走り出す。

ダイワスカーレットが、一步、また一步と克樹へと歩みを進めていく。そしてそのまま時は流れる。互いの心音だけが聞こえるような距離。

そしてそのまま、ゆっくりと――

「やっぱ無理イ!!!」

「アガペエツ?!?!?」

渾身のビンタが、炸裂した。

「いや、今のは流石におかしい！ 絶対におかしい!!」

「あがつ、がつ、かはッ、ハッ、ハッ——」

「え？ なんて過呼吸になってんのお前」

「ヒッヒッフー……ヒッヒッフー——」

「出産!? え、出産すんのお前!?!」

慌てふためく克樹に背を向け、彼女は浅い呼吸を繰り返す。

言えない。面と向かってなんて絶対言えない。

——これからも、アタシの側に居て。

なんて。

「はあっ……はあ……ッ」

「お、落ち着いたか」

「え、ええ、何とか」

「焦るわお前……ラマーズ法なんて使いやがって」

「う、うるさいわね……アタシだってやりたくない時があるのよ」

「普通はねえよんな時」

冷静に克樹は指摘する。凶星を突かれた彼女は苦々しい表情を浮かべてそっぽを向いた。

すると克樹は何かを思い出したかのように『あっ』と呟き、背を向けたままの彼女に声を掛けた。

「そうだ、言い忘れてたわ」

「……なに？」

「おかえり、スカーレット」

その言葉に彼を振り返り、頬を真紅に染めた彼女は、笑顔の大輪を咲かせた。

それは泥の中でも確かに咲き誇る、気高き蓮の花。  
彼女の輝かしき未来を暗示する、光輝なる紅蓮華。

絆を強く結び直した2人が、桜花を貫くその日は近い。

### 3章： 真紅と炎帝、夏を超えその手に秋を掴むか 近づく常夏、或いは見破る思惑

「くわああ……—つ」

6月上旬。気温と湿度が日に日に上がり、蝉達も鳴き声を上げ始める初夏の陽気。そこから逃れるように、俺は冷房の効いたチーム部屋でPCを操作しながら欠伸を噛み殺していた。

「いやー、やっぱ冷房って最高だな、たまんねえつすわ」

三下口調で呟いてみるものの、いつものように突っ込んでくる彼女の姿はない。それもそのはず、今は15時過ぎで学園は先ほど放課後を迎えたばかり。スカレットが来るまでの日中、俺は今後のトレーニングのプランを考えたり、出場レースの吟味をしていたのだ。

「さて、と……そろそろアイツもくるし、トレーニングの用意を……ふわあ」

再び込み上げてくる欠伸に、俺は争うことができなかった。眠気覚ましに、と手元に



あつたアイスコーヒーへと手を伸ばし、ストローで一気に啜る。甘味を感じさせない、俺好みの苦味が口内に広がり、鼻腔まで突き抜けていく。それを味わうようにゆっくりと飲み干し、俺はモニター上に表示されているデジタル新聞の記事のタイトルを眺めた。

「『ダイワスカーレット、オークスも快勝！』

止まらない快進撃、トリプルティアラなるか!?!」

「あれからもう2週間か——……」

ストローを咥え、歯先で弄びながら呟く。

5月下旬に開かれたレース——『オークス』。スカーレットはそのレースでも『桜花賞』の勢いをそのままに、他を寄せ付けない圧倒的な走りを見せて勝りした。昨年度末に開花させた才能を十全に扱いこなし、快進撃を続けるスカーレットは、『トリプルティアラ』の二冠目というのもあつて世間からも注目を浴びており、期待が高まっている。

「アイツのことだから心配ないとは思うけど、一応釘は刺しとかないとなー……。要らん世話かもしれんが」

勝利の価値、敗北の重みを身を以て知ったスカーレットに、一切の奢りも慢心も無いだろう。それでも一応気を引き締めてやるのも、トレーナーの仕事、つてやつだ。

その時、ガチャリとドアが開く。

「お、来たかスカーレット……つて、え？」

しかし訪れてきたのは、予想外の人物だった。



「じゃあね、スカーレット！ また明日！」

「ええ、また明日」

教室に居たクラスメイトに別れを告げ、チーム部屋へと向かうダイワスカーレット。

周囲からの視線を感じつつ、彼女は優雅に歩いていく。

(なーんか……見られてる気がするのよねー、良くも悪くも)

その視線が孕んだ感情はプラスからマイナスのものまで様々である。

(……ま、悪い気はしないけどね、フフン)

注目されるのは良いことだ。注目されないことの辛さを強く実感している彼女は、内心の喜びを努めて隠しながら歩いていった。

(でも浮かれている場合じゃない。『秋華賞』まで後約3ヶ月。自惚れなんかじゃなく、きつとみんなアタシを対策してくる)

克樹の想像通り、彼女の心に油断はない。

自らの状況を客観的に見据え、次どうするべきかについて思考を走らせている。

(大丈夫。アタシはアタシの力と——アイツを信じて進んでいくだけ)

そう心中で呟いて、彼女は小さく微笑む。

(アイツのことだわ、きつともう練習プランを考えているはず——)

そして辿り着いた部屋の前に立ち、彼女はゆっくりとドアを開けた。

「やーん、やめてよカツキー！」

「良いではないか、良いではないか」

「あははは！ くすぐったいってば——！」

そこでは信頼を置いた自分のトレーナーが、他の女と遊んでいた。

「……………」

「あ、やつほースカーレット！ お邪魔してるよ〜！」

「おう、来たか。待ってたぜ」

「……………」

部屋の中の空気が急激に冷えていく。

しかし冷房の沼に全身浸かった克樹は、そのことに微塵も気づかない。

「……………」

「スカー、レット…………？」

無言で詰め寄ってくる彼女の様子をみて、漸く鈍感な克樹は異常事態に気付いた。

そして彼女は彼の眼前で立ち止まると、机上から紙とペンを引ったくり、そつと線を引いて彼に叩きつけた。

「——三行半です」

「江戸時代かよ。いやそうじゃなくてなんで？」

「我慢の限界です。さようなら」

「おい待ってつてスカーレット、待ってつてば!!」

本当にその場を去ろうとする彼女の肩に手を置いて、克樹は必死で引き留めた。

「どうしたんだよ、俺なんか悪いことしたか？」

「自分の胸に聞いてみたらどうですか？ トレーナーさん」

「あつれースツゴイ外面。本気で怒ってるねえキミ」

「怒ってません」

「怒ってるよね？」

「怒ってません」

「実は？」

「怒ってません」

「俺のことどう思ってる？」

「くたばればいいのに」

「やっぱ怒ってるねえ!!」

汚物に唾を吐き掛けるかのように告げられた殺意に、克樹はツツコミながらも身震いした。そして彼女は怒りを露わに鋭く克樹を睨みつけた。

「……そうよ怒ってるわよ、怒るに決まってるでしょ!?! 何遊んでんのよ人の気も知らないで!!」

「いや、別に遊んでたわけじゃ」

「——口を閉じろ」

「バチバチ鳴ってます、目からなんか出てますよスカレットトさん」

こっわ、と呟いて克樹は額に冷や汗を浮かべた。するとそれまで傍観を貫いていた少女が、怒れる真紅へと無謀にも声を掛けた。

「まあまあ、そんな怒んないですよスカレット。いきなり押し掛けてきたボクが悪いんだからさ」

「……そうよ、どうしてアンタが此処に居るの——テイオー」  
名を呼ばれた彼女はニツとはにかんだ。

テイオー——トウカイテイオー。

ダイワスカレットと同学年のウマ娘で、今年の『日本ダービー』優勝者である。同時にクラシック二冠目であり、なおかつ無敗。現生徒会長、『皇帝』シンボリルドルフに続いて史上2人目の『無敗の三冠ウマ娘』への期待が高まっている。衆民の期待は『トリプルティアラ』にチエックを掛けたダイワスカレットと、『クラシック三冠』に王手を掛けたトウカイテイオーに集まっていると言っても過言ではない。

ちなみに同学年というのもあり、彼女らはプライベートでも仲が良い。ダイワスカレットがありのままの自分を曝け出せる、数少ない友人である。

「ちよつと用事があつてね、カツキに」

「……カツキ？」

「うん、そうだよ」

ダイワスカーレットは怪訝な顔を抑えられなかった。トウカイテイオーが、何の躊躇いもなく自分のトレーナーの名を呼んでいることに。

「ボク、この前の『日本ダービー』で足を少し痛めちゃつてさ。それで、カツキの所にアドバイスを貰いにきたの」

「え？　なんでトレーナーに？」

「前に骨折しちゃつた時も、カツキにお世話になつたから。今回も適切なアドバイスくれるかなあつて思つて」

「……そうなの？」

「いや、まあそうなんだけど。ほら、俺とテイオーは昔軽く絡んでた時期があつてだな」  
「……アンタ、そういうの多いわよね」

都合悪そうに頬を掻く克樹を、彼女はジト目で睨みつけた。

「で？　なんで名前呼びなのよ」

「え？　だつてカツキはボクのトレーナーじゃないでしょ？　ボクにはボクのトレーナーがいるし、それなのにカツキをトレーナーと呼ぶのはおかしい話じゃない？」

「……………まあ確かにそうね」

とは言ったものの、心の中で何処か釈然としないものを抱えるダイワスカーレット。それが表情に漏れ出てしまっていたのだろう、トウカイテイオーはニヤリと笑うと、とんでもない爆弾を投下した。

「あーわかった。スカーレット、ボクがトレーナーの名前呼んでるから嫉妬してるんでしょ〜！」

「は、はあ!? どうしてアタシがコイツの名前を呼ばなきゃいけないのよ!」

「またまたあ、顔赤くしちゃって! 呼びたいなら呼べばいいのに〜!」

「ち、違うわよ! 誰がコイツの名前なんか……………! 頼まれたって呼んでやらないわ!」

「前科持ちだもんな」

「人を受刑者みたいに言うな」

唐突に出会った当初の出来事を掘り返され、ダイワスカーレットはキレた。それを口笛で受け流す克樹。そんな様子を見ていたトウカイテイオーは、声を上げて笑った。

「あはは! 面白いね2人は! 漫才師みたい!」

「いやどこが面白いってのよ、耳腐ってるんじゃないの?」

「心外極まりない。ってかスカーレット、これでわかっただろ? 別に遊んでたわけ

じゃなくて、俺はテイオーの脚の様子をみてたんだよ」



「そうだよ。カツキの触り方が妙にくすぐったくて、ボクが笑っちゃっただけ。だから安心して！」

「……まあ、そういうことにしといてあげる」

嘆息しながらも、ダイワスカーレットは渋々納得した様子を見せた。

「で、カツキ。ボクの脚の状態はどうなの？」

「医者も言ってたんだろ？ 別に折れてねえよ。暫く安静にしてりや勝手に治るだろうさ」

「そっか！ 良かったら、『菊花賞』に間に合わなかったらどうしようかと思ってたよ！」  
トウカイテイオーは、ほっと一息ついて笑顔を浮かべる。その様子に、ダイワスカーレットも安堵した。

彼女は友人として、トウカイテイオーの『クラシック三冠』を心から応援していた。故にそれが怪我によつて希望が絶たれてしまうことがあれば、きつと彼女はまるで自分のことのように深く傷ついていただろう。

「良かったわね、テイオー」

「うん！ これで心置きなく走れる！ よーし、練習に行くぞー！」

「アホかお前。無理に走つてたらいつまで経つても治らないぞ。最低でも2、いや、3週間は絶対走んな」

「ええ!? そんなに!？」

「焦る気持ちもわかるけど、しつかり治しとかなないとクセになる。走らなくても『菊花賞』に向けて鍛えられるメニューを考えてお前のトレーナーに渡しとくから、キチンとそれをこなせ」

「はーい……」

意気消沈して、トウカイテイオーは克樹の言葉に頷いた。すると突如部屋に着信音が響く。それに反応した克樹がスマホを起動し、届いたメッセージの中身を確認。内容を把握して、彼はニヤリと笑った。

「よっし。テイオー、さっきの話、お前のトレーナーからも承諾が出た」

「え、いいの? やった!」

「さっきの話?」

「ああ。スカーレット、今後お前はテイオーと合同練習する運びになった」

「はあッ!？」

突然の決定に、ダイワスカーレットは思わず叫んだ。

「落ち着け。これにはちゃんとした理由があるから」

「いや、そういうことじゃなくて……はあ、もう良いわよ、続けて」

彼女は呆れ顔で溜息を吐いた。

彼女が叫んだのは、合同練習に不満があるからではない。むしろ願ったり叶ったりである。

それよりも、克樹の癖——大事なことを自分に話を通さずに決定してしまうところに、少しムツとしてしまったのだ。

(少しくらいアタシに話してくれても良いじゃない——アタシはアンタが決めたことに、不満なんてないんだから)

内心で呟き、唇を尖らせる。しかしプライドの高い彼女が、それを直接克樹に伝えることはなかった。

「……そうか、じゃあまず理由一つ目。『レグルス』にはお前以外のウマ娘は居ない。これはまあ俺の我儘だから申し訳なく思ってるけど……それによって俺は自分のリソースを全てお前に注ぐことができているわけだが、やっぱり弊害はある。わかるよな？」

「……対人形式の練習不足、でしょ？」

「そうだ、だから俺はこれまでタマモクロスにお願いすることでお前の経験値を補ってきた。1人の練習で成長できる範囲には、限界があるからな。今回のテイオーとの練習も、そのの一環と思つて貰つて良い」

「なるほど……で、次は？ まだあるんでしょう？」

「……もう一つは」

そこで克樹は一瞬言い淀む。何か言いにくいことなのだろうか。とダイワスカーレットが思案を巡らせていると、苦々しい表情で克樹は続けた。

「……『中央』からの提案、だ」

「は？」

「お前とテイオーは、『トリプルテイアラ』と『クラシック三冠』、それに手を掛けているウマ娘だ。一つリーチが掛かるだけでも大騒ぎになるのに、今年はそれが一気に二つときた。この二つが一気に達成されたことなんて、今まで無いんだ。だから『中央』は、お前達が思っている以上にお前達に期待してるんだよ」

「そう、なのね……」

「どうやら事は自分が想像している以上に大きなものらしい。『中央』などというスケールの大きな単語が出てきて、ダイワスカーレットは眉根を寄せた。

「そしてお前達2人が共に競い合うことで、更なる実力の飛躍——マッチアップに期待してるってことさ」

「なるほどね……」

「提案っていうか、殆ど要請に近いものだったけどな。まあ裏がある話ってわけじゃないけど、純粹にお前達2人に期待しての提案だったぜ？ 実際俺達に不利益は無いしな。

それに俺は、『中央』から何も言われなくても、テイオーに合同練習を申し込むつもり

だったんだ」

「えっ？ そうなの？」

驚愕に目を見開くダイワスカーレットに、克樹は頷く。

「ああ。お前にテイオーから学ばせたいことがあつてな。同学年で実力の近い者同士、得られる物は大きいはずだって思つてな。それなのに『中央』のせいで、アイツらの思惑に従つてみるみたいになつちまつてなんか癪なんだよ」

「あー、それであんな顔してたのね」

合点が行つたダイワスカーレットは、『なるほど』と呟きながら頷いた。

「まあ実際、これでチーム外で合同練習しても角が立たない。『中央』からの提案ですつて言い張れるからな」

「嬉しいのか癪に障るのかどっちなのよ」

「やー、半々だな。ただまあタマモクロスん時、ぶつちやけ色々言われたんだわ。結構な長期間世話になつたからな……」

「あ、そうだったの……」

今まで知らなかつた裏話に、彼女は素直に驚いた。克樹の表情を見るに、それは大概に煩かつたのだらうということがわかる。

「とにかく、これで障害はクリアだ。スカーレットは『秋華賞』、テイオーは『菊花賞』に

向けて、これから気合入れて行こうぜ」

「うん！ よろしくね、スカレット！」

「ええ、こちらこそよろしく。あ、そういえば……テイオーは『レグルス』預かりになるの？」

「いや、タマモクロスの時とは違って、だいたい週一回から二回合同練習つて形になる。こつちか向こうは日によりけりだな。ただ今はテイオーは療養中だから、本格的に始動するのはそれが完治してから。それまでは……これをやる」

『？』

疑問符を浮かべる2人の眼前に差し出されているのは、克樹が使用しているタブレット端末。

「——スカウティング。お前ら2人のこれまでのレースと、対戦することになるだろう相手のレース。それを出来る限り映像データを掻き集めて用意した。これを見て、語り合え。それがお前らの練習の第一段階だ」

「へえ、これが練習になるの？」

「多人数で見れば、より様々な視点で物事を捉えられるからな。スカレットに言うまでも無いと思うが……テイオー、お前そんな風にして実は色々考えて走る側のヤツだろ？」

「むーっ、失礼だよカツキ！ 見た目で判断しないで欲しいなあ」

「悪い悪い。だからこれは双方に取って効果的な練習になる。理解したか？」

「ええ」

「はーい！」

「よし、じゃあ練習開始だ」

克樹の言葉に、2人は力強く頷く。

こうしてダイワスカーレットとトウカイテイオー、それぞれの偉業に向けての合同練習が始まった。

## 魂滅入る男、或いは私に出来ることを

最初の動画は、ダイワスカーレットの直近のレース、『オークス』だった。

彼女が先頭集団を抜け出してトップへと躍り出た場面を見て、トウカイテイオーは瞳を輝かせながら歓声を上げた。

「わあ、すごいスパート！ スカーレットってここ一年でスツゴク末脚速くなったよね」「フン。まあね」

「確かに先頭は完全に息切れしてるし、その後ろの2人は仕掛けるタイミングを見失ってるみたいだ。それにスパートかける寸前、スカーレットの目の前の相手が左に開いたよね。その隙間を縫って飛び出してたけど……まさかわかってたの？」

「……」

トウカイテイオーの冷静な分析に、ダイワスカーレットは瞠目した。言ってしまうと怒られるだろうが、まさかテイオーがここまでの観察眼を持っているとは思ってもいなかったからだ。



「……そうね。信じて貰えないかもしれないけど、アタシ、観えてるのよ。周囲の様子とか、上から眺めてるみたいに」

「へえ、そうなんだ！ スゴイよスカーレット！ それ自体もだけど、観えたからつて有利になるわけじゃない。その情報を捌いて武器に出来るのは、スカーレットがそれ処理できる能力を持つてるからだよね！ それつて誰にでもできることじゃないよ！」

「……あ、ありが、とう」

トウカイテイオーの褒め殺しに、彼女は赤面する。

「上から眺める、かあ……ボクには多分それを受け入れるだけで精一杯だなあ。精々後ろが差しにくいようなポジションを取るくらいかなー。うん、やっぱスゴイよスカーレットはー！」

「も、もういいから！ ほらトレーナー、次の映像出しなさい！」

「……ん、おう。じゃあ次はテイオーの『日本ダービー』だ」

「うん……？ どうしたのボーツとして」

「悪い悪い。ほら、始まるぞ」

どこか呆けた返事をする克樹に、ダイワスカーレットは疑念を抱いた。しかしそれを追求する暇もなく『日本ダービー』の再生が始まり、彼女は意識をそちらに移した。

レースは終盤、トウカイテイオーがスパートを掛けた場面を映している。

「出たわね……」テイオーステップ」

「ボクとしてはそうやって一括りにされてるのは心外なんだけどね」

——「テイオーステップ」。

トウカイテイオーの代名詞であり、必殺技。彼女が使いこなす3つのステップ走法を統括して、それを世間が呼称しているものだ。

1つ目が、「軽やかライトステップ」。彼女がレース序盤から中盤にかけて使う、軽い足取りで足を溜める走法。

2つ目が、「巧みなテクニカルステップ」。彼女が主に中盤でコース取りに用いる、終盤に向けてポジシオンを整えるための走法。

そして3つ目が——最大の武器、「イナズマステップ」。

彼女が終盤で相手を差す場合に用いる、減速をしない雷速の切り返し。

これら3種類のステップを総称して、世間は「テイオーステップ」と呼んでいる。その卓越した走法は、彼女を勝利へと導く、彼女だけが持つ武器だ。

「『テイオーステップ』……そう呼ぶだけなら簡単だけど、誰にだって出来ることじゃないわ。特に「軽やかステップ」と「イナズマステップ」。前者は普通のウマ娘がやつ

たつて速度の維持なんてできない。力を入れずして速度を出すなんて、矛盾もいい所だわ。あれのミソは最小限の力を、最大限に伝達すること」

「……へえ、よく見てるね」

「そして後者。普通のウマ娘は自分の横軸を動かす時、前進しながら少しずつ横へ……つまり、緩やかに斜めに移動する形になる。でもテイオー、アンタのステップは違う。速度を維持しながら、鋭角に横軸をズラすことができる。見たところクロスオーバーステップの亜種……派生……？　ともかく、これは刹那を競う最終盤で、とんでもないアドバンテージになるわ。ただこれも普通のウマ娘には出来ることじゃない……最高速を維持したままそんなことすれば、無茶な筋稼働と衝撃に、確実に脚が壊れる」

「……スカーレット、ボクのこと研究でもしてた？」

「いいえ。今レースを見て考えた分析よ」

「こっわー……」

「褒め言葉として受け取っておくわね」

的確な分析を述べるダイワスカーレットを見て、トウカイテイオーは引き笑いを浮かべる。そんな彼女の様子を見て、ダイワスカーレットは微笑んだ。

「で、これがアタシの答えよテイオー。アンタの最強の武器は『テイオーステップ』そのものじゃなくて——それを可能にする、常人離れした柔軟性。これ無くして、アンタ

の凄さは語れない」

「……スゴイ、スゴイよスカーレット！ ボクのこと、トレーナーみたいにわかってる！」

彼女が出した解答に、トウカイテイオーは我が意を得たとばかりに嬉々として喜んだ。

（成る程……これは確かに、勉強になる）

そんな彼女の様子を見ながら、ダイワスカーレットは内心で感嘆する。

自分以外の走り方を、これ程まで深く分析したことはなかった。それは自分の思考回路を鍛え、分析能力を向上させることに繋がり、自分の知識をより広げることができる。知識を広げれば、レースプランの構築に幅を作ることができ——自身の勝利へと繋がる。

「よし、トレーナー！ 次いきましょ！」

意気揚々と、振り返って克樹に呼びかけるダイワスカーレット。しかしそこに居たのは。

「……………」

「トレーナー？」

「——すう…………」

「ええ……」

屍と化して机に突つ伏した、克樹の姿だった。

「寝てるって……ええ……う？」

「あはは、さつきからぼーつとしてたもんね」

「信じらんない。どういふ神経してるのよ練習中に……つたく」

ダイワスカーレットは立ち上がり、克樹を起こさんと机へと詰め寄る。

「ほらトレーナー！ 起き——」

その肩に手をかけようとして、気付く。

（居眠り、なんてもんじやない。口開けて熟睡——そしてよく見たら、隈もある）

見れば見るほど気付く——過労の跡。

それに彼女は動揺してしまう。

そんなダイワスカーレットの姿を見たトウカイテイオーは、彼女に呼び掛けた。

「カツキ、最近あんまり寝てないって言ってたよ？」

「えっ……」

「練習メニューとか分析とか、あとはスカーレットのトレーナーとしてのインタビューが回ってきたりしてるんだって。あとご飯もあんまり食べてないみたい。時短で冷食とかインスタントでパパッと済ませちゃってるって言ってた」

「そう、なのね……」

彼女はもう一度、寢息を立てる克樹を見た。

(アタシの為に色々してくれてるのは知ってたけど……そんなに無理してたんだ)

「——まだ若いのに、無理なんてしちゃって」

「え？ 若い?? コイツが??」

「えー！ スカレット知らないの!?!」

彼女は驚く。『トレーナー』とは言うまでもなくライセンス国家資格を有する存在である。故に大卒がマストであり、ましてやトレーナー資格の試験は、合格率1桁以下の狭き門。更にトレーナー経験もそこそこありそうな発言から、彼女は克樹の事をそれ相応の年齢だと思っていた。

しかし事実を知っているらしいトウカイテイオーは、彼女の言葉に心底驚いていた。そしてその事実を、彼女に告げる。

「——カツキはアメリカのトレーナー養成の三年制大学に飛び級で入学して、そつちでライセンスを取ったエリートだよ？ そしてまだトレーナー歴は4年で、確か今年22歳になったばっかのはずだけだ」

「アメリカ、飛び級、エリート……4年、22歳……?」

想像だにしない事実のオンパレードに、ダイワスカーレットの聡明な頭脳は軽くバグった。

（え……じゃあアタシと出会ったときは、20歳<sup>はたち</sup>? トレーナー歴は3年入ったばかりか……?）

「……それ、冗談なら笑えないわよ?」

「本当だよ! だってこれカツキ本人から聞いた話だもん」

「……やつば、頭痛くなって来た」

膝に肘を置き、彼女は頭を抱えた。その様子を見て、トウカイテイオーは再び苦笑いを浮かべる。

「まあ気持ちはわかるよ、カツキ中々男前だし、かなり年上に見えるよね」

「いや、余りにもギャップがあり過ぎてなんか……」

「……スカーレット、カツキの事何歳だと思ってたの?」

「38くらい」

「カツキが泣くよ!」

「流石に冗談よ。ただ20代後半だとは思ってたわ」

「あー……それならまあ」

トウカイテイオーを聞きつつ、彼女は三度克樹を見た。そしてそのまま、そつと目を伏せる。

「……………」

「ん…………どうしたの？ スカーレット」

「いや…………アタシ、つてさ」

眩いた声は、自嘲が多分に含まれていた。

そして乾いた笑みを貼り付けたまま、彼女は続ける。

「アタシ、トレーナーのことなーんにも知らないんだな、つて」

「…………これから知っていけばいいじゃん」

「今更照れ臭いのよ、なんか。アタシが前にキョーミないって言っちゃった手前、蒸し返すのもなんか悪くて」

「そうなんだ…………」

自嘲的な笑みを浮かべるダイワスカーレットの姿を見て、トウカイテイオーは困った



ように笑う。

——『……なあ、スカーレット』

『何?』

『俺、さ……昔——』

『良いわよ、話さなくて』

『えっ……』

『全くキョーミないし。どうでも良いわ、アンタの辛気臭い昔話なんて。気になった時に適当にアタシから聞くわよ。だから今は……何も言わなくて良い』

『そう、か』——

彼が何か抱えているのは、わかっていた。

それで苦しんでいることも、わかっていた。

しかし彼女は、それを掘り返させる事をしなかった。過ぎ去った過去を自分が知ったところで、何かしてあげられるとは思えなかったから。

だが今は違う。

——知りたい。彼のことを、より深く。

今の自分なら、彼の心に寄り添ってあげられると思うから。

「……」

彼女はそつと、視線を移す。机に力尽きたように突つ伏し、小さな寝息を立てる克樹へ。

「……なんか、してあげたい」

「え？」

「アタシのために、これだけ頑張ってくれてるんだもの。何か返してあげないと、イーブンにならないじゃない」

「……あはは！ 素直じゃないなあ本当に。ま、スカーレットらしいと思うけどね」

「どういう意味よ」

「なんにもなーい！ えへへ！」

悪びれもせず笑うトウカイテイオーを、彼女は睨みつける。そして、小さく呟いた。

「——アタシにも背負わせなさいよ、バカ」

——誓ったじゃない。2人で支え合っていくって。

負けとか苦しみも、2人で背負っていくって。

アタシを置いて、そんなになるまで1人で抱え込んでんじやないわよ。

「……スカーレット、なんで怒ってるの？」

「コイツが1人で勝手に苦しんでるからよ。アタシと2人で支え合っていくって約束したのに、それを破ってるから腹立たしいったらありやしないわ」

「……普通、さ」

「え？」

「いや、説明したのボクだからこんなこと言うのもアレだけど。こういう時に感じるのって、『申し訳なさ』とかじゃない？」

「……ま、まあそう……かも、ね」

「真つ先に怒ってたから、ちよつとビックリしたよ。スカーレット、カツキとそんなに仲良いんだなーって」

「は……はアツ!? アイツと、アタシが!?」  
「っていうかそんなに仲良くて、〃支え合う〃とか約束してるんだよね!? それってさあ、なんか——」

——夫婦み t

そこから先の言葉は、強烈な破裂音と、トウカイテイオーの悲鳴に掻き消された。

## 宅食仕様、或いは約束しよう

それは、テイオーとの練習が決まった次の日のことだった。

『トレーナー。明後日の夜、アンタの家行くから開けときなさい』

スカーレットからの一方的過ぎる物言いに、俺は頷くしかなかった。そしてそれが、今日。幸いにもオフ日——アイツも狙ってたんだろうが——だったので、そそくさと定時帰宅をかまし、爆速でシャワーを浴びた。部屋の片付けは、アイツが来ると決まった時から済ませてある。

「あ……食うモンなんもねえわ」

ふと思いい立ち、近くのコンビニへと急ぐ。お菓子売り場からテキトーに見繕って袋菓子や数個カゴにぶち込み、さらにオレンジジュースと炭酸水を数本手に取る。夜だから

……なんか腹に溜まるやつがあったほうがいいか。冷食のチャーハンと惣菜を選んで、最後に向かったのはデザートコーナー。

「何が好きだっけか、アイツ……」

こんなことになるならそういう話もしくんだった。とりあえずシユークリームとプリンパフェを手に取り、カゴに入れた。好きな方選ばせて、残りを俺が食べばいいだろう。

会計を済ませて、即帰宅。買ってきた諸々を片付けて、俺はリビングの座椅子へと腰掛けた。

「暑っちな」

出る前に冷房消したのはミスだったな。じんわりと滲み出す汗に、思わず舌打ちする。シャワーを浴びた意味がまるでない。

「はあ……」

大きな溜息を一つ吐いて、俺は再びシャワーを浴びることにした。

全てが一段落したのは、スカーレットと約束した時間の5分前だった。ほっとして安堵の息を吐き、ふと思う。

「いやなんでこんなに焦ってんだ俺」

落ち着いた瞬間、冷静に自分の慌て加減に突っ込むことができた。

「別に相手はスカーレットだぞ……？　なんでこんなにソワソワしてんだよ」

その事に、今に至るまで気付くことがなかった。よほど焦っていたらしいと、思わず苦笑してしまう。

スカーレットが家に来るのは、今回が初めてじゃない。あれは去年の夏だったか、秋だったか。学園が工事で立ち入り禁止になった際、練習ができないことに不満を垂れ流していたアイツに、俺から提案したのだ。『じゃあ俺の家でスカウティングするか？』と。その時部屋がちよつと……ほんのちよつとだけ散らかってたからスカーレットがキレ散らかしてたっけ。

そう思うと、こんなに焦る必要なんてないし、ましてや気合い入れて買い出ししたり、部屋を片付ける必要なんてなかった。

「何してんだか全く……」

もう一度、溜息を吐いた。しかし、今日は一体何の用件だろうか。断言的な口調はいつものことだが、アイツは意味も無く家に押し掛けてくるようなヤツじゃない。何か重要な何かがあるのだろうか。

するとそこで、来客を知らせるチャイムが部屋に鳴り響いた。

「お、来たか」

立ち上がり、玄関へと向かう。

鍵を開けて、ドアをゆっくりと開いた。

そこには。

「よ、スカー……」

「待たせたわね」

銀色の岡持ちを両肩に乗せた俺の相棒が、ドヤ顔で立っていた。

「……部屋、間違えてますよ。出前なんて取ってませんさようなら」

「シバき倒すわよマジで」

「おい待てまさかソレ岡持ちで殴るつもりか!? そつと手を添えてんじゃねえ!」

「いいから早く入れなさいよ! コレ担いで走ってきたから暑くてたまんないのよこつちほー!」

「悪かったって……ほら、上がりな」



「お邪魔しまーす」

リビングに入るなり、ドスン!! と岡持ちを床に置き、彼女は歓喜の声を上げた。

「はあー涼しいっ! トレーナー、制汗剤貸して欲しいんだけど持つてる? 汗が気になって」

「いや、俺は今更お前の汗なんて気にしないけど」

「アタシは気にすんのかな」

「そうか……お前の汗、別に臭くないけどな」

「は……はあ!? キツモ、サイテー! 変態!」

「ちよ、やめろ叩くな痛い痛い!」

素直な感想を言っただけなのに、スカートレットは顔を赤くして腕を振り回しながら俺を殴ってきた。

「わ、わかった、わかったって! ほら、シートで良いならあるから!」

「最初から渡してれば良かったのよ、つたく……」

俺から渡されたシートを一枚取り、彼女は自分の体を拭き始めた。何故か目を逸らす事ができずに、俺はその様子をじっと眺める。

彼女が身に纏っているのは、オフシヨルダールの白いブラウスに、膝上の青いスカート。客観的に見て魅力的が過ぎるその肢体を惜し気も無く晒している。

首から流れ落ちた汗が、鎖骨で留まっている。それを彼女は艶かしい吐息と共に優しく拭った。そして膝裏から太腿を拭い、その手はスカートの中へ。

そしてその時、彼女は見られている事に気づき、頬を染めながら俺を睨みつけた。

「……何ジロジロ見てんのよ」

「……見てねえよ」

「嘘つき、変態」

「ぐっ……」

ぐうの音も出ない正論を言われて、俺は閉口せざるを得なかった。

そんな俺の様子を見て、スカーレットは大きな溜息を吐いた。

「……まあ、今回はいきなり目の前で始めたアタシにも非があるし、許してあげる」

「……どうも」

「何？ 文句があるならとことん話し合っただけさ」

「手刀構えながら言うんじゃないよ。殴り合うことを話し合いとは言わねーんだわ。肉体言語しか使えないのかよボケが」

「よし決めた、磨り潰す」

「それは人間に対して使う表現じゃねえ!!」

「ニッコリ」と笑顔で擦り寄ってくるスカーレットから素早く数歩後退り、俺は言っ

た。

「そ、そうだ、飯にしようぜ。コンビニの惣菜とかしか無いけど、今準備するから待つて

——」

「あ、良いわよ別に準備しなくて。アタシ、ご飯持つてきたから」

「へ？」

「アంత、アタシが何担いで来たか忘れたの？」

「あ、そういえば……」

彼女が持つてきていたのは、2つの大きな岡持ち。あれに今日食べる分の料理を入れてきたのだろう。

「全然気付かなかったわ」

「……アంత、アタシが何のためにあれ持つてきたと思つてたのよ」

「愛用の鈍器かと思つてたわ」

「お望み通りにしてあげても良いのよ？」  
フツ 潰す ぞクッ 野郎

「勘弁して下さい」

今なんか聞こえた気がする。言葉の裏に込められた真意が。

「ほら、用意するから食器用意してそこ座つてなさい」

「はい」

スカーレットの言葉に従い、俺はキッチンへと取り皿を取りに向かった。



「なん、だよ、コレ……」

岡持ちちから、続々と飛び出してくる料理。その一つ一つがさながら高級料亭の一品のようにとてつもなく美味しそうで、目眩がした。

全てがテーブルに並べ終えられた俺の質素な机は、和洋中入り混じった豪華なフルコースを乗せて輝きを放っていた。口から滴りそうなほど湧き出した涎、そして暫く冷食とインスタントで凌いできた腹が唸りを上げた。

「これ……食って、いいのか？」

「そのために持ってきたんだけど？」

「いた、いただきますっ！」

箸を持ち、俺は目の前の料理へと飛び付いた。

「う……うめえ、美味すぎるぞこれ!!」

料理を食べて、初めて感動という名の感情を抱いた。デミグラスソースのかかったハンバーグ、野菜の旨味が染み込んだ酢豚、素材そのものの味を活かした天ぷら、その他

諸々。そのどれもが充分メインディッシュを張れるレベルの料理で、一気に食べてしま  
うのが勿体無い代物だった。

「そ、そう……良かったわ」

「これ、どこの店の料理だ？ 高かったんじゃないのか？」

「……」

「ん……？ まさかそんなに高えのかこれ……!? バクバク食ったらやばいやつか!」

店名を言い淀み、頬を朱に染めて目を伏せるスカーレットに、俺は想像を働かせて額  
から冷たい汗を流す。しかし彼女から返ってきた言葉は、あまりにも予想外のものだっ  
た。

「……た、のよ」

「え？」

「——作ったのよ、ソレ。アタシが」

「え……これ、お前が？」

「そう」

「全部？」

「……うん」

「恥ずかしいのか、唇を尖らせながらスカーレットはそっぽを向いた。これ、全部コイツが作ったってのか……!?!」

「お前、めつつつちや料理上手いんだな！ 走る事以外にも才能あるとかびつくりだわ」「ふ、フン！ 当然でしょ！ こんなのちやつちやと作ったただけなんだから」

「いやそれは嘘だろ。この量を帰ってから一気に作るなんて不可能だ。何日も前から少しずつ仕込んでくれてたんだろ？ 俺のためにわざわざ準備してくれてありがとな」

「ち、ちがっ……わ、ない、けど……」

手を振り上げた瞬間、いつものが来るかな、と思つて身構えたが、彼女は目を泳がせながら振り上げた手の行き場を失くしていた。そしてその手はそのままゆつくりと彼女の膝まで帰っていった。

「……アンタが最近ご飯食べてないって聞いたから、それで、ちゃんと食べて欲しいと思つて……」

「作つてくれたつてワケ、か」

「うん……何が好きか知らなかったから、とりあえず沢山作ろうつて思つて。まあ作り過ぎちやつたけどね」

「確かに、結構量多いわな」

俺の笑顔と共に放たれた言葉に、彼女も優しく笑った。

「じゃあ一緒に食おうぜ、スカーレット」

「えっ、でもこれアンタのために」

「流石に1人じゃ食い切れねえよ。それに飯は2人で食う方が美味しいだろ？　いつも1人で食ってるし、何よりお前と食う飯は楽しいからな」

「……そういうことなら」

俺の説得に納得したスカーレットは、笑顔で頷く。そして両眼を輝かせて卓上に並んだ料理を見た。

「……なんだよ、お前も食べたかったんじゃないか」

「う、うるさいわね！　早く食べないと無くなっちゃうわよ！」

「へいへい、仰せのままに」

照れ隠しに怒鳴るスカーレットを適当に遇らい、俺は笑った。



「……えーつと」

「?　どうしたの?」

「いや、あの、スカーレットさん。これは一体どういう状況でしょうか」  
食事を終え、暫くして。

久々の満腹感に、日々の疲れも相まって眠気を覚えた俺の様子を見たスカーレットが、『もう寝なさいよ』と提案してきた。

それ自体は悪い事じゃない。最近あんまり寝てなかったし、ここらで一呼吸を返しておくのもアリだと思っただから。

俺は彼女に『そうするわ』と返した。『今日はありがとな』とも言った。そりゃそうだろう。俺が寝る、イコール彼女は帰る。それが自然で、普通。しかしどうだろうか。

彼女は今、俺の隣で一緒にベッドの上で横になっている。

「アンタが寝るまで居てあげるから、早く寝なさいよ」

「いやなんで？ おかしくないか？」

「最近寝てないんですよ？ 遠慮しないで良いから」

裏のない、純粹な瞳。何の他意も無く、本気で俺が寝るまで側にいるつもりだコイツ。

「いや……眠れねえよ」

「……やっぱり不眠気味なのね」



……あれ、コイツなんか勘違いしてないか？

俺の言葉に、彼女は苦しそうに顔を歪めた。

いや、純粹に隣で横になられて落ち着かないだけなんですけど。

「スカーレット、違」

「少し、ジツとしてなさい」

「へ——あつ」

俺の言葉を遮って彼女は手を伸ばし——俺の頭を、優しく撫でた。

「スカー、レット……？」

「……アタシが眠れない時、ママによくやって貰ってたの。どう？ 落ち着くでしょ？」

「ああ……まあ、な」

あなたが隣で寝てるせいで一向に落ち着きません。

とは、口が裂けても言えないが。

だが実際、悪い気はしなかった。

「スカー、レット………さん？」

「う、うるさいわね！ アンタは黙って寝てればいいのよ！」

暗くとも見える、彼女の真っ赤に染まった表情。羞恥に焦がれていることが、一目でわかる。

その様子に耐えられずに、俺はスカーレットに背を向けるように寝返りを打った。

するとスカーレットは、そんな俺を後ろから優しく抱きしめてきた。

「は………!？」

「ど、うかしら………よく、眠れそう………?」

「あ、いや、その………まあな、あはは」

近い!! なんか色々当たってんだよ!!

しかもなんかいい匂いするし、頭がクラクラする………!

ドクドクと、何かが鼓膜を震わせて喧しい。

それが自分の心音だと気付くのに、時間が掛かった。

普段は全く意識なんてしていない。俺達はトレーナーとウマ娘で、パートナーに欲情するなんて言語道断。信頼を裏切る、最低の行動だと俺は思っている。だから練習中は

意識をしつかりと切り替えて、間違つた気を起こさずに、パートナーのことを第一に考えてやるのがトレーナー、教育者としての勤めだ。

だが、今はどうだろうか。

家で完全にオフモード、夜、月明かり、就寝前。更に実際コイツはかなりの美少女で、しかもその……発育も良い。ドラが乗り過ぎて、三倍満を超えて数え役満まで見えている。ヤケを起こすつもりは絶対に無いと断言出来るが——精神衛生上全くよろしくないのも事実。お前は一体、何を考えているんだ……！

「だあああああああッ!!」

「うわああっ!?!」

耐えられずに、叫びながら飛び上がった。驚いたスカーレットが悲鳴を上げる。その勢いのまま胡座をかき、スカーレットの正面に座つた。

「……スカーレット、正座」

「え、なんで」

「正座」

「は、はい……」

俺の言葉の圧を感じたのだろう、スカーレットは萎れながら俺と向き合う形で正座した。

「お前、何のつもりだよ」

「え、何が」

「何のつもりで、こんなことしてるんだって聞いてんだ」

「ど、どうして怒ってるの？ アタシ、なんか悪いことした？」

「無自覚かよ、ったく……良いか」

「え——きやつ」

そして俺は——彼女をそのまま押し倒した。

彼女の両手首を上から押さえつけ、身動きを封じる。顔を寄せ、お互いの吐息が掛かる距離まで近づける。

突然だったからか、全く抵抗はなかった。頭の方の理解が徐々に追いついてきたのだろう、彼女の顔が少しずつ赤く、紅く染まっていく。

「——あ、っ」

潤んだ瞳、蕩けた表情、朱が刺した頬

浅い吐息、柔そうな唇、豊かな肢体

その全てが扇情的で、情欲を唆る。

——俺がトレーナーでなければ、の話だが。

理性はある。大丈夫だ、雰囲気流されるようなことはしない。

「……………こうなる、つてことだぞ」

「え……………あたしつ、そんな、つもりじゃつ」

「わかっている。わかっているからこうして教えてやっているんだ。無自覚だろうからタチが悪いんだよ……………良いか、スカーレット。他の誰にも、こんなこと簡単にするんじゃない。お前可愛いんだから、変な男にこんなことすれば一発でアウトだぞ。気を付けろ」

「はう、あ、う……………」

虚な呻き声を上げながら、彼女はブンブンと縦に首を振る。理解してもらえたらならば、これ以上こんなことをする必要もない。

俺はスカーレットを解放し、元の位置に戻って再び胡座をかいた。それを追うように、彼女も体を起き上げらせ、正座をして俯く。

「……………」

「はあ、取り敢えず電気を——」

「待って、やめてっ。点けないで」

「あ……………」

「アタシ今——顔見られたく、ない」

見られたら死んじやう、と消えてしまいいそうな程小さな声で、彼女は俯いたまま呟いた。

お前そういうところだぞ、と思うもののそれを伝えることはしない。そういえば俺が発した言葉は——よく考えれば色々気恥ずかしいものだった気がするから…………やべ、なんか俺も気まづくなってきた。

俺は居心地悪く頬を掻き、改めて疑問を口にした。

「あ…………その、今日どうしたんだよお前さ。なんか色々必死なのは伝わってきたけど…………らしくなかったぞ？」

「っ……………」

何気なく放ったその言葉に、彼女は表情を硬らせた。

「…………そう、よね。らしく、なかったわよね…………ははっ」

「スカーレット…………？」

自嘲めいた笑みで呟く彼女の姿を見て、俺の心は騒めき始める。そして彼女はその表情のまま、自分の心情をゆっくりと語り始めた。

「……テイオーから聞いたの。アンタ最近寝てないって、ご飯もちやんと食べてないって。だからアタシ、心配で」

「……それで、今日こんな事を？」

「アタシ、アンタに元気になってほしくて、何かしてあげたいって思ってた、それで料理とか色々頑張ったけど——そうよね、らしくなかったわよね、ごめんなさい」

「っ！」

「バカみたいよね、一人で張り切っちゃって、空回りして……迷惑、だったでしょ」

「そ、そんなこと」

「いいの、わかってる……わかっているから、もう何も、言わないで……あ、れ」

漸く顔を上げたスカーレット。その表情を見て、俺は胸を締め付けられた。

「なんで……あれ、おかしいわね……っ」

彼女の両眼から、滴が伝っていたから。

「ちよつとやめてよ、止まってよっ、この、このっ」

止まれと言いつながら、彼女は自分の両眼を強く拭う。しかしそれは拭けども拭けども、彼女の瞳から止め処なく溢れ続けていて。そして彼女の声は震え、嗚咽が混じり始めた。

動揺して、言葉がうまく見つからない。

考え無しに放った俺の言葉が、彼女を深く傷つけてしまった。

——また、傷つけてしまった。

彼女の姿に、彼女の姿が重なる。

それは今尚俺の心を縛る荆棘。

あの日の俺は無力で、何もできなかつた。

去りゆく彼女に、言葉を掛けることすら。

でも今は——違うだろ？

あの日の過ちを、また繰り返すつもりか？

「……」

息を飲み、スカーレットを見据える。

それだけじゃダメだ。

見ているだけじゃ、あの日の俺と同じ。

自分のことを思ってくれた彼女に、精一杯の誠意を。



「——えっ……」

涙を拭う彼女の頬に、俺はそつと手を添えた。

「……ありがとな、スカーレット」

「なんでっ、アタシ、アンタに迷惑かけてっ」

「誰が言ったよそんなこと。嬉しかったに決まってるだろうが」

「え……?」

泣きながら驚いている彼女に、俺は精一杯笑ってみせた。

「迷惑なものか。相棒が自分の為に色々考えてくれて、喜ばないトレーナーなんて居ねえよ。ただほんのちよつとビックリしただけさ」

「……ほんと?」

「嘘じゃない。これは俺の本心だ。心配かけてごめんな。色々不安にさせちまったみたいで、本当に申し訳ない」

頬に添えた手を、彼女の頭上へと移してそつと頭を撫でる。彼女は驚いた顔のまま、微かに頬を染めてそれを受け入れた。

「……飯、また作ってくれよ。めっちゃ美味かった」

「……うん」

「添い寝は……しんどいけど、気持ちはすっげえ嬉しいよ」

「うん、うん……」

「またいつもみたいなのに、下らない話で笑おうぜ。そしてずっとお前の側で、お前の勝ちを見届けさせてくれ。俺はそれだけで元気が出るような単純な男だからさ」

「！ うん……っ！」

「俺からの約束だ。だからスカーレット、お前も俺の側に居てくれよな」

「……もう、しようがないんだから」

彼女は、泣きながら笑った。

それは先程までの悲しみの涙ではなく、安堵の涙だとわかった。

彼女が落ち着くまで、俺は優しく頭を撫で続けていた。



「すう——」

「いやお前が寝るんかい」

俺の横で安らかな寝息を立てるスカートレットを見て、思わず突っ込む。こいつ本当に反省してんのかよ。

「はあ……しよすがねえな」

寝ている彼女に布団を掛けながら、その横に俺も潜り込んだ。俺のベッドだ、何を言われようが知らん。

「……………」

そつと、俺の隣で眠る彼女の寝顔を眺めた。その頬を優しく指で突つしてみたが、起きる様子は全く無い。安心し切っているのだろうか。

「——やっぱ可愛いよ、お前」

その言葉にも、返事は無い。いやされたら困るのだが。今のを聞かれていたら普通に俺は死ぬる。

そして俺は、彼女の手をそつと握った。

俺より小さくて、柔らかい手。その手が掴もうとしているのは、最強いちばんというとてもなく膨大な夢。

——心配を掛けた。

彼女の不器用な励ましを、素直に受け取れなくて、  
あろうことか、彼女を泣かせてしまった。  
それがどうしようもなく苦しくて——悲しくて。

「——ごめんな。ありがとう、スカーレット」

そう呟いて、俺は彼女の頭を優しく撫でた。  
すると彼女は。

「——えへへ……」

照れたように、笑った。

「つ——!!」

起きているのかと、息を飲む。

しかし次の瞬間にはその笑顔のまま彼女は再び寝息を立て始めた。

ほつと一息吐いたのは一瞬。自分の心臓が、バクバクと踊り始めていることに気付いた。

冗談だろ、まさかそんな——。

俺はゆつくりと頭を振って、冷静に「ソレ」を否定した。

俺はそつと目を閉じる。月明かりに照らされた彼女の貌かおを、これ以上直視できそうに無かったから。

そうしている間に、触れた指先。

俺は優しく、再びその手を握った。

「おやすみ、スカーレット」

今夜は、良い夢が見られそうな気がした。

## 夏合宿の刻、或いは錯乱する思い

「ぐ、この……!」

「ほらスカーレット頑張つてー! あと30秒も残つてるよー!」

「わかつてるわよ……つとあ!」

「あー言わんこつちやない。ダメダメ、最初からやり直ーし!」

「クソ、次こそは……!」

スカーレット来訪から1週間後。今日も今日とてテイオーとの合同練習。今日はトラックではなく、ウイニングライブの練習等で用いられるホールで練習を行っている。

事のきっかけは、スカーレットがテイオーにある質問をしたことだった。

『——テイオー、柔軟性を鍛えるトレーニングって何か知ってる?』

スカウティング以降、スカーレットなりにテイオーがもつ武器に何かを感じたのだから。自分に不足しているものを考え、積極的に取り入れようとする姿勢。良い傾向だ。

互いが互いを貪り合って向上していく。これこそが正に俺が今回の合同練習で求めたものだ。

というわけで、未だ療養中のテイオーはスカーレットに自分がやっていたという練習を教えている。現在やっているのは片足を軸に立ち、両腕と片足を限界まで伸ばしてバランスを取るトレーニング。普段やらないポーズにスカーレットはなかなか苦戦している。

「良いトレーニングだな、コレ」

「でしょ？ ボクがトレーナーに発案したんだよ？」

「ああ。柔軟性つてのは、簡単に言えばどこまで筋肉と腱が伸びるかという話だ。柔軟性が高まる事で怪我をしにくくなるし、衝撃吸収能力や力の伝導率も高まる。さらに疲労軽減や、回復力の向上も見込めし、まさに良い事尽くめだ」

「流石カツキ、詳しいね」

「まあな。で、このトレーニングは筋肉の柔軟性を高めると同時に、体幹を鍛える事ができる。効率の塊みたいな練習だぞコレ。よく思いついたな」

「色々試行錯誤したけどね。ほら、ボクの柔軟性は最初からもってたものだから、どっちかっていうと維持の側面が強くて。だから同時に体幹を高めるためにこのトレーニングをしてるんだよ。この後は、スカーレットに柔軟性に特化したストレッチを教えるつ

もり。最初はかなり痛いと思うけど、続ければスカーレットならできるとなると思  
うよ?」

「継続は力なり、ってか……そういうえばお前、惜しげもなく自分のトレーニング法をス  
カーレットに教えてるけど、そういうの気にしないのか? そりゃあ俺達からすればあり  
がたいけど」

「え? んー……」

俺の質問に、顎に指を当てて悩んだ表情を見せるテイオー。暫くしてその表情は、笑  
顔へと変わった。

「別に教えたところで、ボクが弱くなつちやうワケじゃないしね! 僕のトレーニン  
グ法で学んだことは、れっきとしたスカーレットのモノだよ。それにボクも今度スカー  
レットのレースプランの話とか思考法とか教えて貰うつもりだし!」

「ふーん……そうか」

「そして何より——教えた上で勝ちたいんだよ。自分の為に隠すなんて、そんなズル  
ヤツにボクはなりたくない」

そう言つて、テイオーは笑みを深める。しかしその小さな身体から滲み出た、大気を  
揺らがせるような濃密な殺気に、俺は全身がビリビリと痺れるような錯覚を起こした。  
驚きながらも思う——そういうえば、コイツも立派な“ばけもの”だったな、と。



「ありがとなテイオー。本当に助かるよ」

「良いよ良いよ！ ボクの大事な友達と、大切な恩人の頼みだしね——ね、センサー？」

「よせよ、そんな大層なことはしてない——あとその呼び方やめろ」

「はいはい、気を付けまーすっ」

「テイオー!? アンタちゃんと時間測ってるんでしょうね!?!」

「わ、やば……!」

スカーレットからの怒号に、テイオーは焦りながら走っていった。

その後ろ姿を見ながら、俺は小さく呟く。

「ありがとなテイオー。ここまでは、計画通りだよ」

その呟きを聞き取った者は、俺以外には居なかった。



「夏合宿？」

「そう。七月まるっと一ヶ月、環境を変えて合宿をしようと思うんだが……どうだ？」

トウカイテイオーの考案する柔軟性向上トレーニングを終えてチーム部屋に戻ったスカーレットに提案されたのは、夏合宿だった。

（合宿、ねえ……）

タオルで汗を拭き、スクイズボトルでドリンクを飲みながら彼女は思案する。

環境を変えて練習する事、それ自体は悪い事ではない。普段と違う環境に身を置き、学園にいるときではできない練習で自身の技能を新たな側面から伸ばす。表情には出さないが、彼女はかなりワクワクしていた。

「いいじゃない。行きましよ、合宿」

「そうか。納得してくれるなら助かる」

「元より、アタシはアンタの決めた事に異論なんてないわよ。ちゃんと事前に相談してくれば文句なんて言わない」

「わかってるって。気をつけるよ」

「どうだか。内心で彼女は呟いた。」

その宣言は、全くもって信用ならない。

ただあの日——彼女が克樹の家を訪れて以降、克樹と話すことが増えたのは事実。以前も話していなかったわけではないが、練習メニューやレースのことなど、指導的側面

が大きかった。それが他愛もない日常会話を積極的に持ち掛けるくらいには、克樹は積極的に彼女と関わりをもとうとするようになった。彼女が打ち明けた本音は、彼と彼女の関係を少しだけ変えたのだ。

「で？ 場所は？」

「茨城」

「その心は？」

「……………当てがあるから」

「当てが無いと行けないワケ？」

「詳しいことはタマモクロスに聞いたらどうだ」

「あっ」

唐突に顔が死んだ克樹を見て、聡明な彼女は全てを察した。そういえば指導が終わってから定期的にご飯を食べに行っていると言っていたことを思い出した。

「い、いいわよね茨城！ ほら……………あの……………その……………く、空気が美味しいし！」

「お前今すぐ全茨城県民に土下座しろ」

「ふお、フォローしてあげたんだからそんな言い方しないでしょ!？」

あまりに酷すぎる克樹の物言いに、彼女は怒り心頭といった様子。いや彼女の茨城に對する感想も大概だが。

「あ、そういうえば学校ってどうなるの？　七月頭って、まだ夏休みにならないんじゃないの？」

「特別申請書ってシステムがあつてな。トレーナーから学園に申請して、該当のウマ娘を公欠扱いにして貰えるんだよ。審査もあるが、まあお前なら通るだろう。成績も優秀で普段の外面が完璧な分印象も良いし、『秋華賞』のためって言い張れば最悪『中央』だって動いてくれるだろう」

「なんか余計な言葉が聞こえた気がしたけど……まあ良いわ。でもなんか、ズルしてるみたいでちよつと申し訳ないわね」

「学園に設けられた正式な権利だから気にすんな。お前が望むなら補講も開いて貰えるから、学業の遅れも心配しないで良いぞ」

「……そう、助かるわ」

自分が心配していた部分をピンポイントでフォローされ、彼女は戸惑った。

「てなわけで、1週間後に茨城に出発だ。土日挟んでるからその間に諸々の準備は済ませておけよ」

「わかった。じゃ、アタシ帰るわね」

「おう、俺ももう少ししたら帰るわ」

「……無理しないでね？」

「わかつてる。あと30分もすれば帰るよ」

「……そ。じゃあ、お疲れ様」

「お疲れ様。また明日な。気をつけて帰れよ」

椅子に座り、彼女に背を向けながら克樹は手を振る。それを眺めながら、彼女はチム部屋を後にした。



「……」

寮へと続く夜道を一人で歩く。その心中で思うのは、先程自分を送り出した彼のこ  
と。

(——どうしちゃったのかしら、アタシ。最近ずっと、アイツのこと考えてる)

鼓動の高まりを感じた彼女は、握り拳を作って胸を押さえた。

キツカケは、わかっている。克樹の家を訪れたあの日。克樹が眠れるようにと、彼女は純粹に、何の他意もなく彼の横で添い寝をした。自分がよく母親してもらっていたか  
らと頭を撫で、あろうことがハグまでした。

それに対して、彼が返したのは。

(——あんな顔、初めて見た)

自分を押し倒した彼の表情は、いつもの凜々しい顔でも、時折見せる優しい笑顔でもなかった。

『トレーナー』という皮を剥ぎかけた、『松田克樹』という一人の男が、そこにいたのだ。

彼は勿論それ以上をするつもりもなかったし、結果本当に何もしていないのだが、それでも彼の雄の部分が、彼女を目の前にしてほんの少しだけ溢れ出していた事に、本人は気付いていない。

そしてそれ以上に彼女を戸惑わせるのは。

それを不快と思わなかった自分が居たこと。

気の迷いだ、と言い聞かせる。

雰囲気は流されかけたただけだ、と言いつ聞かせる。

何度も、強く言い聞かせている。

克樹のアレはあまりにも無防備が過ぎた自分に対する警告行為であり、そこから先をする気は一切無かつたという事も重々承知している。

それなのに、それなのに。

(アイツがあんなこと言うから——！)

それは克樹自身も反省していた、彼女に向けた言葉の中身だった。

——『良いか、スカーレット。他の誰にも、こんなこと簡単にするんじやねえ』——  
他の誰にも。

それは深読みすれば、自分以外の男にはして欲しくないという、独占欲を孕んだようにも聞こえる。

——『お前可愛いんだから、変な男にこんなことすれば一発でアウトだぞ』——

普段そんなことを思っている様な素振りは一切出さなくせに、あんな状況で、可愛  
い、なんて言われたら。

(アタシ、まるで、トレーナーを——)

「ツツ!!!」

夜の市街地に、轟音が響いた。

それは彼女が昂った感情を押しさえ付けるために、近場の電信柱に思い切りヘッドバツ  
トをカマした音だった。

見れば電信柱には小さなクレーターが発生し、周囲に小さく破片が舞っている。鍛え  
上げられた彼女の力が、しようもない場面で発揮された一幕だった。

額から滴り落ちる血が唇に触れ、彼女はそれを煩わしそうにペロリと舐めた。

「ひっ、ひああああああアアアアッ!!」

そんな彼女の様子を見ていた近所に住むサラリーマンが、悲鳴を上げながら逃走して



いった事に、彼女は気付かない。

(落ち着け……落ち着くのをアタシ。アイツはアタシのトレーナー、それ以上でもそれ以下でもない。こんな事にうつつを抜かしてる暇なんてない。アタシには『秋華賞』を取って、『トリプルティアラ』を戴くってという目標があるんだから)

「フウウウウウ——」

バチ、バチと瞳から出た紅い稲妻が夜闇を照らす。痛みと闘争本能、その二つを駆使して彼女の心は漸く平静を取り戻した。

(大体アイツにそんなつもりがあるわけない。あんなのを本気にしたところで、惨めな気持ちになるだけよ。はあ、どうかしてたわ全く)

先程までの自分を、冷めた心で客観視することができた。

「——っあ」

その際生まれた、小さな心の疼き。

心を刺すようなその疼きに対して、彼女はまだ名前を付けることが出来なかった。

「——痛った」

そしてその疼きは、額から広がる猛烈な鈍痛に上書きされて消えていった。早急に何とかしなければ酷く腫れてしまう事は明白だった。

「……なんて言い訳しようかしら、コレ」

はあ、と溜息を吐いて、彼女は再び寮までの道のりをトボトボと歩き始めた。



そして、迎えた七月。

トレセン学園から克樹が車を走らせて、高速道路で1時間半程。

「もうすぐ着くぞ、スカーレット」

「あら、思ったよりも早かったわね」

目的地を目前にして、彼女の心は興奮に包まれていた。見慣れぬ土地、新たな練習。全てが楽しみでしようがない。

「っし、見えてきた」

「え……？ こんな所に施設があるの？」

「いやいや、ここは住宅街だから施設なんてものはないぜ？」

克樹の言葉に、彼女は疑問を抱かざるを得ない。

一見そこは、辺り一帯が民間で固められた住宅街。そして道沿いには砂浜が見える。普通、合宿といえれば彼女の想像しているようにそれなりの施設を用いるだろう。だから克樹はその施設に当てがあるのだろうか、彼女は勝手に思っていた。

——嫌な予感がする。

彼女の本能が、警鐘を鳴らした。

「……ねえ、合宿先って、どこなの？」

「ん？ 言ってなかったっけか」

「また悪びれずそういう事を……この前約束したばっかじゃない」

「ごめんって。合宿先は——」

——俺の実家だけだ。

「……………は、はああああアアアアア!?」

迫真の絶叫が、車内を貫いて雲一つ無い蒼穹に響いた。

斯くして彼女の夏合宿——もとい、家庭訪問が幕を開けたのだ。

熱砂日差し、或いは滅多に無い

「いらつしやい。貴女がスカーレットさんね。克樹の母です、どうぞよろしくお願いします  
ます」

「は、はい。ダイワスカーレットです。今日からよろしくお願いします……」

克樹の家に到着すると、出迎えてくれたのは克樹の母と名乗る女性だった。ダイワスカーレットは彼女の挨拶に対して、困惑と共に言葉を返し——鋭く克樹を睨みつけた。

——これはどういふことなのか、と。

克樹の母と名乗る女性の頭頂部には——耳がある。更に尻尾も生えている。

——そう。誰がどう見ても、ウマ娘だ。

克樹はそんな彼女の疑問に答えることなく、母親へと声をかけた。

「ただいま、お袋」

「お帰り、克樹。急に連絡してきてびっくりしたじゃない」

「まあ良いだろ？ それよりスカーレットの部屋開けてある？ 荷物置いたら即練習に行くから案内してやって欲しいんだけど」

「もう……変わらないわね、克樹は。ええ勿論開けてあるわよ」

「ありがとう。じゃあスカーレット、お袋に家の中の説明して貰った後、準備して来い。

俺は外で待つてるから」

「え、ええわかったわ」

「即、とか言ったけど少しはゆっくりして良いからな。長時間の移動で疲れてるだろうし。じゃ」

それだけ残して、克樹は家の外へと向かった。そんな彼の様子を見て、克樹の母は苦笑を浮かべた。

「相変わらず言うだけ言って勝手なんだから。スカーレットさん、ごめんなさいね。克樹がいつも迷惑かけてるでしょ？」

「い、いえ、そんな！　とてもお世話になってます」

「うふふ、謙遜が上手ね。さあ上がって上がって。広くはないけど、最大限のおもてなしができるように頑張るから」

「あ、ありがとうございます！　お邪魔しまーす……」

克樹の母に促されるまま、彼女は家上がった。その頭の片隅で、克樹への不信感を募らせながら。



「ここが貴女に使ってもらう部屋よ」

「わ、すごい……！」

彼女が案内されたのは、階段を上つてすぐにある十畳程の和室だった。入つてすぐ目につくのは、正面の床の間に置かれた大きな花瓶で、白い花が生けられてある。中央と左側に敷居があり、それぞれ襖で仕切ることが可能になっている。左側の敷居からは格式のある細い木の床が顔を覗かせ、そこにある窓からは海が見える。

その整った形式美の中で異質なのは、洋風の勉強机だった。机上はしっかりと整理されており、長らく使われていない感じがする。そこまで観察し終えて、ダイワスカーレッツ

トはある疑問を抱いた。

「……………ここ、もしかして誰かの部屋なんじゃないですか?」

「そう、ここは私の娘の部屋よ」

「え……………娘……………」

つまりそれは、克樹の兄妹、或いは姉弟ということだろうか。

しかし彼女は視界に捉えてしまっていた——机上のケースの中にある大事そうに磨かれた蹄鉄を。つまり克樹の妹もしくは姉も、やはりウマ娘ということになる。彼女はますます疑問を深めた。

「……………私が使ってしまったても良いんでしょうか?」

「大丈夫よ。もう暫く帰ってきてないし、連絡も寄越して来てないから。綺麗にはしてあるから、好きに使って頂戴な」

「は、はい……………それなら。有難く使わせて頂きます。あの、それと……………」

「ん? どうしたの?」

「……………いえ、なんでもありません。案内ありがとうございます」

「良いのよ別に。それじゃ私はこれで」

見惚れるような微笑みを残して、克樹の母は去っていった。残されたダイワスカレットトは、足元に荷物を置き、もう一度部屋を眺める。



「……娘、か」

彼女がここまで怪訝に思う理由はそこにある。通常、それが普通なのだ。ウマ娘の母から生まれる子は——九割九分ウマ娘となる。

そうでないのならば、何かしらの理由があるのだ。例えばそう、克樹は——  
（——いや、穿ち過ぎよアタシ。流石に勝手な想像を働かせすぎ）

それは余りにも彼に対しても失礼だ。彼女は自分の過ぎた思考を反省した。  
ともかく、彼の過去に関する謎が、また一つ増えた。

この部屋の本当の主は、何処の誰で、どんな人なのか。

（——やっぱりアタシ、アイツのことな——んも知らない）

そして思考は、自虐へとすり替わる。自分の心が、触れて来なかった、知ろうとして来なかった自分の姿勢を貶していく。

——ビジネスパートナー。

世間から見たウマ娘とトレーナーの、一般認識を言葉にするなら、この言葉が相応しいだろう。

事実、それは間違っていないのだ。ウマ娘を勝たせる為に努力するトレーナーと、

自身に尽くしてくれるトレーナーに報いる為に走るウマ娘。言い切つて仕舞えば、利害の一致。そこが本質であることに、ダイワスカーレットにも異論はない。

だが、それだけでは無いのだ。

それだけが、ウマ娘とトレーナーを結びつけるものでは無いと、彼女は断言できる。彼と彼女を最も強く結び付けているモノ——それは即ち、信頼。彼女は出会った時から、克樹のトレーナーとしての腕を信頼していた。故に克樹の指示に従い、その実力を高めてきた。それだけで良かったのだ。彼のパーソナルデータを知ったところで、その腕に揺らぎは生じないのだから。

だが彼女は、苦楽を共にした克樹との月日の中で、松田克樹という一人の人間の全てを信頼するようになった。それ故に発芽したのだ——彼のことを、より深く知りたいという思いが。

「はあああ……」

大きな溜息を吐きながら、彼女は畳へと倒れ込んだ。嗅ぎ慣れない井草の香りは、不思議と彼女の心を落ち着かせていく。

(……聞けば、答えてくれるのかしら)

先日トウカイトイオーにも零していた、彼女の心を縛る後ろめたさ。それは未だに、彼の彼女の間に一枚の壁を築き上げてしまっている。

(……行かなくちや、アイツが待つてる)

気が付けば、到着してからのかなりの時間が経っている。彼女はゆっくりと起き上がり、練習の為の準備を始めた。

▼  
「お、もう来たのか。少しは休めたか？」

着替えを終えたダイワスカーレットが外へ出ると、準備を済ませていた克樹が出迎えた。

「ええ、ちよつとだけゆっくりさせて貰ったわ。ありがとね」

「そんなに広くないけど、1ヶ月暮らす場所だから多少は慣れてくれ。精一杯おもてなしするつもりだからさ」

「……………ふふっ」

克樹の言葉を聞いていた彼女は、堪えきれなかったように吹き出した。

「ん？　なんかおかしくないこと言ったか？」

「ううん。アンタのお母さんも同じこと言ってたわよ？ 流石親子って感じ……あ」

彼女は、自分の失言にすぐ気づいた。

彼女の言葉を聞いていた克樹が——困ったように笑っていたから。

「……流石に今のは狙って言っただろ、お前」

困り笑顔のまま、彼は言う。

「……んなわけないでしょ、何の話よ」

「じゃあバカだなお前、自分から墓穴掘りやがって」

「だから、何が……！」

「気付いてんだろ？ 氣い遣わせてごめんな」

「っ……」

「ちゃんと話すよ、折を見て。ただ今は練習に集中してくれ。完全に俺のワガママだけど……いいか？」

「……わかった。アンタの方こそ散漫な真似したらタダじゃ置かないんだからね！」

彼女は指を克樹に突き出しながら、不敵に笑った。その様子を見た克樹もまた、安堵したように笑う。

（……そう、アタシは別に探偵ごっこをしに此処に来たわけじゃない——アタシは、強く

なる為に此処に居る。それだけは、変わらない)

彼女は本質を見失つてはいなかった。

瞳から弾けた稲妻は、彼女の心の中の葛藤や迷いを根刮ぎ焼き払つていった。するとその時、突如現れた大型トラックが家の目の前に停車した。

「松田さん！お届け物でーす！」

「あ、ありがとうございます！ すいませーんお手数なんですけど、ココじゃなくて向かいの砂浜に置いてもらつて良いですか？」

「了解でーす！」

ドライバーとのやり取りを終えた克樹は、笑いながら腕を組んだ。

「来たぜ来たぜ……………」

「何あれ、宅配便？ にはしては随分大きなトラックだけど」

「ああ——今回の合宿で使う、とびきりの特注品を届けて貰つた」

「特注、品……………」

克樹の言葉に、彼女の胸は高鳴る。

いかにも興味津々といった様子の彼女に、克樹は笑顔で声を掛けた。

「さあスカーレット、俺からのプレゼントだ。受け取れ」

「何、新しい練習器具!? ワクワクするわね……………」

彼女は嬉々として大型トラックの荷台から下ろされるそれを見た。

そしてその表情は、みるみるうちに引き攣っていった。

「……………ねえ、あれってまさか…………」

「いや、タイヤだけだ」

「だと思った！ ええそうだと思ったわよ!! なんと無くそんな気がしてたわよおツ!!」

「え、なんで怒ってんだよ。タイヤだぞ? 喜べよ」

「タイヤで喜ぶのは全世界探してもアンタだけよバーカ!!」

怒り散らかしている彼女の姿を見て、克樹は理由がわからずにあたふたしている。

「どうして……………タイヤ、嬉しくなかったか?」

「うるさいこのタイヤ中毒者あ!!」

「いや、そんな急に褒められても……………困る」

「貶してんのにニヤニヤするな!!」

頬を染めて恥ずかしそうに自分の頭を撫でながら笑う克樹に、彼女の怒りはますます加速していく。

「まあ冗談はさておいて。お前、いつも通りの練習だと思ってるだろ」

「は……………？ 違うっていうの？」

「やる事は変わらないかもしれない。だがいつもと同じ感覚でやろうとしてるなら……………かなり痛い目みることになるぜ？」

「……………？」

要領を得ない克樹の問答に、彼女は首を傾げた。

「さ、練習開始だ。さっさと準備しな」

「ちよ……………！ 待ちなさいよ！」

浜辺へと歩き出した克樹の背を追って、彼女もまた走り出した。

## 飢えた爪痕、或いは触れた傷痕

「ぐつきぬぬぬぬぬあああつ!!」

「オラ気合い入れろー! 全然進んでねえぞ!」

「るッさいわねえええエエエツ!!」

開始された練習。それは一見学園でやっているのと何ら変わらない。しかし現在、アイワスカーレットは苦戦を強いられていた。見ればタイヤは時間から考えると普段の半分も進んでいない。

「行け行けえ! 頑張ったら夕飯は俺のお袋の作ったカレーだぞ!」

「しょッばいイツ!! 頑張りに対しての見返りが致命的にシヨボすぎんのおツツ!!」

「お袋のカレーをバカにすんじゃねえツツ!!」

「やッばなんかクリティカル入ったア!?!」

克樹に母親に関する話題は今後絶対に振らないでおこう、色んな意味で。頭の片隅でそう思いながら彼女は現在のタイヤ引きへと思考を巡らせる。

(にしてもこれ、きつつ——! 普段学園でやってるのは別次元だわ! タイヤの重



さは変わらないはずなのにどうして……そうか、砂ね——!?)

鍛われた彼女の観察眼は、練習の要となる部分を正確に見抜いていた。

(海の砂は、地面と違って踏み込んだ力をそのまま跳ね返してくれない! だから出鱈目に力強く踏み込んだって無意味……なるほど、見えてきたわよ……!)

彼女の武器、力強い踏み込みも砂浜の前では威力大幅減。では、どうすればいいのか。  
(——低く。普段意識してるよりも、もっと低くて良い)

彼女は腰を落とし、重心を下げた。そしてそのまま前のめりに、腹部の紐に体重を預けながら前傾姿勢を取る。

(引つ張って歩くんじゃない——押しながら引き摺るツ!)

「うツ、おおおおおオオオアアアアア!!」

渾身の裂哮が砂浜に轟く。

すると先程まで苦戦していたのが嘘のように、彼女な身体は前進を始めた。

彼女の言う押す、とはタイヤの事ではない。自分自身のことだ。

何度も言うが劣悪な砂場の上では通常の走り方では無意味。故に、タイヤを引くのではなく、自分の体を押し出す。

踏み込んだ後、全身を倒れる寸前まで投げ出し、前に飛び出すイメージ。少しでもベ

クトルが斜めに向けば、このタイヤは動かない。

このタイヤ引き練習で克樹が自分に学ばせたいこと。それに彼女は気付きつつあった。

(——走り方の改善。これがこの練習の答え……そうでしょ!?)

(もう気付きやがった——流石だな)

重心を落とし、先程とは比べ物にならない速度で前進を始めたダイワスカーレットの様子を見て、克樹は内心で称賛を送った。

(……一年以上の鍛錬で、スカーレットの足腰は最初期とは比べ物にならないほど成長してる。自分の速度に振り回されることもなく、力強い踏み込みで脚を壊すこともない。土台が漸く形になった、と言っている。だからこそ次にアイツが伸ばすべきは、<sup>トップスピード</sup>最高速度)。ここからはタマモクロスから教わった末脚に、更に磨きをかける)

彼はこれからの彼女に必要となる要素について、しっかりと見当を付けていた。

(最高速度を上げるには、方法が幾つかある。一つは地道なトレーニング。確かに地味

で爆発的な伸びこそないが、実際これ以上の近道もないのも事実。だが、裏道はある——、それが走り方の改善)

走り方。それは多種多様、千差万別。個人それぞれが自分だけの走り方をもち、それを磨き上げていく。一度磨いたそれを変えろということとは、輝きを放つ宝石を一度木っ端微塵に砕き、一から原石を探し直してもう一度研磨するのと同義。故にその行為には大きなリスクが伴う。

しかしそれでも、彼はそれに伴うリターンを取った。そこには、明確な理由が存在する。

(タマモクロスの指導で、アイツの末脚は格段に伸びた。だがそれは彼女の末脚とは似て非なる全くの別物。あれはスカーレットが自分に合わせて再構築した、贗作コピイじゃなくて真作オリジナル。だから今までの走り方じゃなくて、それを最大限に活かす走り方に変えることでアイツの末脚はさらに輝く。そしてそこに第三者の力を足してやることで、アイツの最高速度は格段に伸びるはずだ。そう、それは即ち——)

——重力。

(——重力で前に倒れる力を踏み込みに足してやることで、膂力を底上げする。砂浜で

のタイヤ引きは、それを掴むのに絶好の機会だ。一見無理に思える走法だが……俺とアイツは、それを可能にした“ばけもの”を、身を以て知っている)

今年の冬、克樹は『シンザン記念』でオグリキャップの走りを見たときから、この走法の着想を得ていた。彼女は先天的な身体技能によつて無理矢理前傾姿勢をキープして加速をしていたが、それはトウカイテイオーの“テイオーステップ”と同じく、下手に真似をすれば足を破壊しかねない諸刃の走法。

だがこれもタマモクロスの末脚と同じ。核となるエッセンスだけを抽出し、別の要素で補つてやればいい。

(アイツみたいにならぬ60度とまではいかなくても良い。スカーレットがやれる範囲でその角度に近づければ、あとはそれ以外の要素でどうとでも補える。そうしてできたものはやはり贋作じゃなくて——スカーレットだけの、真作となり、またとない武器になる)「わわっ!」

叫び声に反応してみれば、ダイワスカーレットが無様に顔を砂に減り込ませていた。(……ま、最初はそうだろう。自分が倒れない限界を見極めつつ、脚を抜くタイミングを探す。更に踏み込みは今まで通りの力なのにベクトルは今までと変わっている。それによつて歩幅は前とは比べ物にならないほど大きくなっている。今お前の頭の中は、グチャグチャな筈だ)

新しいものを掴もうとする時枷となるのは、それに対する不慣れは勿論——今まで積み上げてきた経験そのもの。染み付いた感覚や癖は、そう簡単には消えてくれない。身体の髓まで深く根付いたそれを抜きながら、新たな感覚を染み込ませる。それは決して簡単なことではなく、大きな苦難が伴う。

(けどお前は——負けないだろ?)

不敵に笑いながら、彼はダイワスカーレットを見つめる。

彼女は砂塗れの顔で、瞳から稲妻を撒き散らし——牙を煌めかせながら嗤っていた。

(最初は失敗ばかりだろう。けど、それでいいんだ。失敗の理由から目を逸らさず、要因を噛み砕いて、タイヤを引くみたいに一歩ずつ進んでいけばいい。そのための砂だ。そこならどれだけ倒れようが怪我のリスクも無く、お前を優しく受け止めてくれる。だから何度でも這いつくばって、何度でも立ち上がれ。そうやって、お前は少しずつ強くなっていける)

相棒に必要な要素を吟味し、それに対して最早狂氣的と言えるほど効率的な練習プランを構築する。

松田克樹というトレーナーの才能が遺憾なく発揮されている瞬間だった。



「……トレーナー」

「お、来たか。待ってたぜ」

その日の夜。夕食と入浴を終えたダイワスカーレットは、克樹の部屋に呼び出しを受けていた。

「……」

「なんだよ、人の部屋ジロジロ見回して」

「いや……なんか、トレーナーの部屋だなって感じ」

「意味わかんねえよ」

克樹の部屋にあるのは、あくまで生活に必要な家具。しかし中がぎっしり詰まった本棚が、部屋の二辺を隙間なく埋め尽くしている。それは漫画や小説といった嗜好品の類ではなく、その全てが理論書やトレーニング書などの、ウマ娘のレースに関するバイブル。松田克樹というトレーナーの腕を支えているのは、常人を遥かに凌ぐ知識量。彼女はその源泉が此処にあることを理解した。

よく見れば、練習開始当初の『勉強』で自分が読んだことある本の背表紙が幾つか見える。あれは克樹が此処から学園へ送って貰った私物なのだろうと察した。

「まあ座れよ」

「椅子アンタの分しか無いじゃない」

「座布団があるだろ、椅子にしか座れねえのかよお嬢様」

「強いつてなんですかあ!!」

「イツポマクノウチツ!!」

無防備な克樹の脇腹に突き刺さったのは、ダイワスカーレット渾身の肝臓<sup>リバープロ</sup>打ち。重心を落とし、下半身の回転を連動させて放たれる、重く鋭い一撃だった。モロに食らった克樹は悶絶し、無様な呼吸を晒しながら酸素を求めて喘ぐ。

「か、はっ……おま、え、冗談にも程があるぞ」

「それこそ冗談。アタシはいつだって全身全霊よ」

「にしてもお前、素人の動きじゃねえぞ今の。『トウインクルシリーズ』じゃなくてWBCで最強<sup>いちばん</sup>獲ってこいよ、ライト級<sup>いちばん</sup>くらいで」

「第二の人生の参考にしておくれ」

フンと鼻を鳴らしながら、彼女は恍惚な笑みを浮かべた。やっぱ人を見下してる時が一番生き生きしてるよなあと克樹は思った。口にしたら今度こそ脇腹が抉れそうなので絶対に言わないが、心の底からそう思った。

「……で、何の用? 明日の練習の話?」

「いやお前が椅子に座るんかい」

「良いじゃないの、細かいことは。ほら、早く質問に答えて」  
「つたく……」

彼女は椅子に座りながら、克樹へと問いかけた。その様子を不満に思いつつも、克樹は脇腹を磨りながら座布団へと座り直し、告げた。

「……それもあるがまあ一番は——俺の話、だな」

「……」

克樹の言葉に、彼女は眉根を寄せた。

確かに折を見て話すと言っていたが、まさか当日中とは思っていなかったからだ。

「まあお前が興味ないって言ってたのは覚えてるんだけど、さ。俺がお前に知って欲しいんだ。だからまあ、聞いてくれると嬉しい。いいか？」

ダイワスカーレットは知る由もないが、克樹自身、わかっている。かつて彼女が言った『興味ない』という発言は、自分の心情を慮つてのことだということ。

だがそれでも後ろめたさを感じているのだろうか、克樹の笑顔はどこかぎこちない。彼女はその笑顔に、胸を刺されたような感覚を覚えた。

『興味ない』と言ってしまった過去の自分。それを責めている暇はない。今改めて自分に語ろうとしている彼の気持ちに報いること。それだけが今すべきことだと彼女は自分に強く言い聞かせた。



「……聞かせて。アタシも知りたい。アンタのこと、もっと」

「……ありがとな。まず、もう気付いてるだろうと思うけど——お袋は、俺の本当の母親じゃない」

「……それは何となく……わかった。昼は不用意な発言しちやつて、ごめんなさい」  
「気にすんなよ。つてかアレ、本当にわざとじゃなかったんだな。鎌掛けてきたかと思つたわ」

「違わよ。流星にアタシでも言つていいことと悪いことはわかる。だからアレはアタシの失言、完全に過失よ」

苦虫を噛み潰したかのような表情で、彼女は呟いた。

「そうか……続けていいか？」

「ええ、遮つてごめんなさい」

「ありがとう。家族の前に、まずは俺自身の話をしようか。俺は日本人だけど——アメリカ生まれのアメリカ育ち。こっちに帰ってきたのは、18の時だ——」

そうして彼は紡ぎ始める。自分の過去を、出自とこれまでの歩みを。

それは重く、辛く——苦しいものだった。

「……随分長く話しちまったな」

ふと克樹が時計を見れば、30分もの時間が経過していた。

「長々と悪かったなスカーレッツ——」

謝罪をしていた彼の言葉は、途中で途切れてしまう。

その目に映ったのは、呆然とした表情で瞳から涙を溢す、彼女の姿。

「……大丈夫、か？」

「へっ……ああ、ごめんなさい。なんか、変に感情移入しちゃって……嫌ねアタシ、最近なんか涙脆くなっちゃったみたい」

不器用に笑いながら、彼女は涙を拭った。

「……ありがとう。聞けてよかった」

「そう言ってくれて助かるよ。俺の方こそ聞いてくれてありがとう。あと、俺がトレセン学園に来てからの話だけ……」

「そっちは今度でいい。アタシはもうお腹一杯。それに……辛いんでしょ、アンタも。」

自分が今どんな顔してるかわかってる？」

「……」

「だから、大丈夫。でもいつか絶対教えてね？」

「……おう、約束する。ごめんな」

力無く、それでも確かに笑った克樹の姿を見て、ダイワスカーレットは胸を撫で下ろした。

「はー、スッキリした！」

「え？」

「……アタシ、ずっと気になってたの。アンタがどんな人生を送ってきて、今アタシの隣に立ってくれてるのか。その一部分でも聞けて、本当に嬉しい」

「……そうか」

「トレーナー」

「ん……？」

呼び掛けに応じた克樹の目に映るのは、真面目な顔をして自分を見つめるダイワスカーレットの姿。彼女は椅子から降りると、克樹の方へと歩き出し、彼の目の前へと座った。

「もう一回、確認するわよ。アンタがアタシの側に居てくれるなら、アタシもアンタの側

に居る。アンタの苦しみは、アンタだけのモノじゃない……アタシにも、しつかり背負わせなさいよ——っ」

「え、お、おいお前……！」

すとん、と。

彼女は額を、優しく克樹の胸に落とした。

「……嫌よ、アタシ。アンタが苦しい時に何もできないなんて。アタシだって、アンタの力になりたい」

部屋に響く、弱々しく震えたダイワスカーレットの声。彼女の拳に、力が籠る。そしてそのまま、彼女は右拳を彼の胸へと添えた。

「だからトレーナー、約束して。アタシと2人で、背負って行くって。アタシを支えるなんて、思わなくてもいい。アタシと2人で、支えていけばいい。だから、だから——えっ」

不意に感じた、優しい温もり。

克樹が頭を撫でている、と彼女はすぐに気付いた。

「……一丁前なこと抜かしてんじゃねえ、ガキのクセして」

「は、はあ!? アタシは本気でっ」

「でも、ありがとう」

「えっ——」

「俺はお前のトレーナーで——お前が俺のウマ娘で、本当に良かった」

自分を見つめるスカレットに、克樹は心からの笑顔を見せた。

それを見た彼女の心臓が普通のレースのように走り出す。顔が真っ赤に染まっていくのを彼女は止められなかった。

「ふ、ふん！ はー疲れた！ アタシもう寝る！」

「え、急だな」

「眠い!! おやすみ!!」

「あ、おい！」

克樹の静止を振り切って、彼女は部屋を飛び出した。

勢いよく閉めた扉にもたれ掛かり、彼女は胸に手を当てる。

「~~~~~!!」

そしてそのままぺたりと地面に座り込み、両手で顔を押しさえて悶絶した。

——アタシ今、どんな顔してるんだろう。

全身が熱っている。両手に触れた顔が、焼けそうなほど熱を持っているような錯覚すら感じる。

(ダメ、なんか——わかんない)

喜びでもなければ、苦しみでもない、自分の胸を占めるその感情。

彼女はまだ、“ソレ”を知らない。

故に、名前が付けられない。

(——アンタのせいよ、バカ)

部屋の外に出ようとした克樹がドアを叩くまで、彼女はそこから動くことができない

かつた。

# 夜空に咲く光華、或いは君の横顔

「っバアツ!!」

「よし、休憩！ 乗れ、陸に帰るぞー」

それから月日は流れ、あつという間に合宿最終週。ダイワスカーレットは今、海で遠泳を行っていた。克樹の促しを受け、彼女は海上に浮かぶジェットスキーへと乗り移った。

「へー、案外乗り心地良いわねコレ」

「良いから捕まってる。舌噛む、ぞッ!!」

「あぎやつッ」

轟音と白い水飛沫を上げて、ジェットスキーは海上を走る。唐突な急加速に、克樹の注意も虚しくダイワスカーレットは猛烈に舌を噛んだ。

「ひゆうひがおほひのほ!!」

「ああ!? 何言ってるんだ聞こえねえよ!!」



「あーは!! あーはあーは!!」

「おい今のは流石にわかったぞ teme。誰がバカだ陸に上がったら覚えとけよ」

ジエツトスキーを走らせること数分。遙か遠方に見えた陸地がどんどん近づいてきた。

そのまま砂浜へと乗り上げ、克樹とダイワスカーレットは降りて砂浜に差してあるパラソル、簡易キャンプ地へと歩き出した。

「あー疲れた。泳ぐってこんなに疲れんのね」

「遠泳は良い。全身運動で心肺機能の向上が見込めるのは勿論、水の抵抗と波の揺れが適度な負荷になる。更に水中では溺れる心配はあるものの怪我の心配はほぼ皆無だ。こんな練習、学園じゃ絶対できないからな。沢山やらないと損だ損」

「だからって10kmはやり過ぎだと思うのよねアタシ」

ダイワスカーレットの睨み付けるような視線から、克樹はそつと顔を背けた。

「ほら……良いだろ、遠泳。好きだろ、遠泳。沢山したいだろ、ほら、な?」

「せめて理論的な反論を試してみなさいよ。中身スカスカでトツポだったら訴訟案件だわ」

「お、今のツツコミ方なんか俺っぽかったな。あれか、真似か? やってみたいくなったか??」

「砂とキスでもしてろツ!!」

「ぶふオツツ」

後頭部をアイアンクローで掴まれた克樹は、そのまま砂浜へと顔面から叩きつけられた。首から先がすっぽり埋まり、彼はバタバタと手足を振り回す。もがくこと数秒、克樹は決死の思いで砂から脱出した。

「だはあツ!! し、死ぬかと思つた……」

「あら残念ね」

「殺る気満々!?!」

「冗談よ。流石に足が付くような方法は取らないから安心して」

「今の話の何処に安心を見出せばいいんですかねえ!!」

「ほら早くドリンク取つてよ。アタシ疲れたんだから、10kmも泳いで」

10kmも、の部分を嫌味つたらしく強調してダイワスカーレットは笑う。その様子を舌打ちをしながら克樹はスクイズボトルをクーラーボックスから取り出し、放り投げた。

「精々ゆつくり飲みやがれ。一気に飲むと体に悪いからな」

「ご親切にどうも」

「お前覚えとけよマジで、いつか必ず後悔させ——」

「——ああ？」

「るとかマジで無いっす、スカーレットさんパネエっすわ、へへっ」

「三下口調がお似合いね」

瞳からバチバチ音を鳴らし、最近のトレンドである手刀を構えた彼女の様子を見て、克樹は先程までの威勢を一転、ヘコヘコと媚を売り始める。そんな様子を見て、ダイワスカーレットは機嫌よさそうに笑った。



「うっ、ぐぬううッ!!」

今日も今日とてタイヤ引き。ダイワスカーレットの全身全霊の唸り声が砂浜に響く。

しかしその速度は初日に比べれば雲泥の差。幾度も積み重ねた練習は、確かに彼女の新走法を完成へと近づけていた。

（——流石に新しい走り方にも慣れてきた。タイミングも掴めてきたし、少し慣らせば芝でもすぐにやれそうね）

彼女自身も、成長を確かに実感していた。

（……ただ、流石にしんどい。足腰が強化されてる感覚もあるけど、それ以上に限界が近

いわ)

彼女は冷静に、自分の体を分析する。

無理もない。休息日もあるとはいえ、彼女は劣悪な砂場でのタイヤ引きを1ヶ月近く続けてきた。タイヤの重さは、彼女が引くことができる限界ギリギリの重さに克樹によつて調整されているため、ほんの僅かでも彼女が妥協すれば、動くことはない。故に彼女は、一步一步を全力で踏み締めることに注力していた。

(クソっ……駄目ね、脚に力が入らない——！)

踏み込みが甘いと、彼女は感覚的に理解する。数秒後に砂浜に倒れ込む自分の姿を予想した。それでも彼女は今出せる全ての力を以つて砂を踏み締めた——すると。

「え——っ!？」

驚きのあまり、声が出た。

結果を言えば、彼女が無様に倒れることはなかった。

それどころか、タイヤが今までにないほど楽に動いたのだ。

(何、今の……)

不思議な感覚に、彼女は思わず立ち止まる。確かに今自分は、踏み込む直前にしか力を入れることができなかつた。にも関わらず普段と同様、否、それ以上に進んだタイヤ。

(……もしかして)

合宿終了間近、彼女は新たな気付きを得る。

(力強く踏み込むことって——力を入れることじゃないの……?)

そんな様子を見ていた克樹が不敵な笑みを浮かべていることに、彼女は気付かない。



「ねえ、トレーナー……」

「んー、なんだ?」

その日の練習を終え、荷物を片付けて撤収しようとしていた時。俺は変に萎らしい様子のスカーレットから声を掛けられた。

「その……あの……」

「なんだお前なよなよして。ワカメかよ」

「っ……………!」

「痛ってえ!!」

久々のストレートなビンタ。弾けた痛みに、自分の頬が懐かしさを覚えているのがわかる。いや気持ち悪過ぎだろそれ。

「アンタ人が下手に出れば調子に乗って……!」

「悪かった、悪かったよ揶揄って。ほらなんだ、言ってみ?」

「……アンタのお母さんから聞いたんだけど。明日、あるんでしょ?」

「え、何が?」

「だからその……『夏祭り』よ」

「は……? ああ、そういやそんな季節だな」

ウチの地元の近くでは、毎年7月末に夏祭りが行われる。規模自体もそこそこなもの、夜には花火も上がるのだ。俺自身、それに行ったわけがあるわけでもなく、特別な思入れがあるわけではないが、俺が住む地域の一大イベントであることは認識していた。

ふむ……ここでのこの話を持ち出してきたということは、つまり。

「行きたいのか?」

「へっ!? ああ、まあ……そう、ね、どちらかと言えば」

「どっちだ、ハッキリしろ。行かぬーなら明日も普通に練習すんぞ」

「ああもうわかったわよわかったわよっ!! 行きたい! 夏祭り行きたい行きたい行き

たーい!! はいコレで満足!」

「何にキレてんだよお前。わーったわーった、行きたけりや行つてこ」

「アンタと!!」

「えっ」

「——アンタと行きたいのよ、夏祭り。わ、悪い……!!」

——それはイロイロと、ズルすぎませんか。

顔を羞恥で真つ赤に染めて、彼女は俺を睨み付けている。突如投下されたダイナマイトは、的確に俺の心臓を爆破した。

気まずい沈黙が流れる。耐えられずに口を開いたのは、スカーレットの方だった。

「どうなのよ!?! ああん!?!」

「いやガラ悪いなあお前!」

「答えなさいよ!! ここまで言わせといて!!」

「わかった! 行くよ! 行こうぜウエイ!!」

「ウエーイ!!」

『Fo~~~~~!!!』

俺は壊れた。彼女も壊れた。壊れないとやってられなかったんだわ、恥ずかすぎ  
て。

「……明日の練習は、早めに切り上げよう。それで……準備して夏祭り行こう」

「……ええ、ありがとう」

「……よろしいでしょうか」

「……よろしいわ」

いや気まず。誰かこの空気なんとかしてくれよ。

「……はい! この話は終わり! 帰るわよ!」

「えっ……ああ、おう」

スカーレットは唐突に立ち上がった。

そしてそのまま数歩歩いて、俺の方を振り返ることなく呟く。

「——ありがとう。楽しみにしてる」



言うだけ言って、彼女はそのまま家の方へと走り出していった。

「……せつん」

そう絞り出すのが、精一杯だった。

溜息を吐いて呼吸を落ち着かせた俺は、彼女を追いかけるべく立ち上がった。



そして次の日の午後4時。

予定通り練習を早めに切り上げ夏祭りへと向かうべく、俺は家の外で準備中のスカートレットを待っていた。

「……」

スマホで「トウインクル・シリーズ」関連のスレッドを眺めながら立っているものの、その中身は一向として頭に入ってきて来ず、ただ目を滑らせているだけ。頭は昨日のスカートレットの誘いのことを考えてしまっている。

—— 『アンタと行きたいのよ、夏祭り。わ、悪い……!?!』 ——

「どういふつもりだよ……ったく」

心臓に悪い出来事だった。そう済ませてしまえば簡単だが、俺の心はあ的一幕にそれ以上の何かを感じていることを誤魔化せずにした。あの時俺が本当に感じたのは――

「……待たせたわね」

「ん……おお準備できた……か」

思考を止めて、玄関に立つスカーレットに声を掛けようとした。しかしそれは途中で途切れてしまった。

俺の目の前に立つ彼女は――浴衣姿だった。

「……お前どうしたんだよ、それ」

「……準備してたら、その……お母さんから声掛けられて。是非着て行きなさいって、それで……どうかしら？ アタシこういうの着るの初めてなんだけど」

ソワソワと、彼女は自分の浴衣姿を見回している。彼女が見に纏うのは、澄み渡った水面のような淡い水色の浴衣。胸元に白百合が大きく拵えられてあり、アクセントに

なっている。帯は群青色で、その上に巻かれた帯締めは、彼女に相応しい真紅色だ。お袋が着せたウマ娘用の浴衣だからだろうか、しっかりと尻尾を通すための穴も開いている。さらに髪は普段のツインテールではなく丁寧に編み込まれ、髪留めにも浴衣と同じく百合が添えられていた。

まあここまでガン見しておいてなんだが、端的に言う。

「……似合ってるじゃん」

「つ、そう……かしら」

及第点の感想だったらしく、彼女は嬉しそうに顔を綻ばせていた。

「……マゴにも衣装だな。常に浴衣着てりやいいのに」

「アンタマジで一言余計ね」

「そういう性格なんだ、いい加減慣れてくれ」

「はあ……メンドクサイ」

「それはおまいやなんでもないですごめんなさい」

彼女が何かを投擲しようとしている姿を見て、俺は言葉を止めた。見間違ひじゃなければ、今アイツが握り締めてるのは石だ。普通に死ぬる。

「ほら、行こうぜ。早くしないと混んじまうぞ」

「そうね、行きましょ」

歩き出した俺を追うように、スカーレットは下駄を鳴らしながら俺の隣へと立った。

「うう……歩き辛いわね、コレ」

「下駄も初めてか？」

「下駄だけ履くことなんてあるの？」

「まあ男はサンダル代わりに履く人も居るんじゃないか？ 俺は履かんが」

「へえ……よくわかんないわね」

「鉄でも仕込んだらどうだ、トレーニングがてら」

「情緒も風情も無いわね」

「そうかあ、結構名案だと思ったんだがな。」

その後は他愛ない世間話をしながら、俺達は祭りの会場へと向かっていった。



「わあ凄いい！ 屋台が沢山……！」

「へえー、本当にそこそこ賑わってんだなあ」

15分ほど歩いて、俺達は無事会場へと到着した。

海岸に面した大型駐車場を丸々スペースとして、ぱつと見では数え切れないほど沢山

の屋台が立ち並んでいる。そんな様子を見てスカーレットは驚いたように瞳を輝かせていた。

「お前、夏祭りとか来たことねえの？」

「え……ば、バカじゃないの、あるに決まってるでしょ？」

「無いんだな、よくわかったわ」

そんなところ意地張らなくて良いだろ別に。

凶星を突かれて唸っている彼女の様子を見て俺は思わず苦笑した。

「まあ俺も正直ここまでデカいと思ってなかったよ。折角だから楽しもうぜ」

「……うん、ありがと」

俺からの提案に、彼女は照れたように笑った。

心の揺らぎを感じつつも、俺はそれを気のせいだと自分に言い聞かせる。

人混みをかき分けながら歩くこと数分。

スカーレットがある屋台を指差しながら声を上げた。

「あ！ アタシあれ食べたい！」

「へえ、どれだ……ってアレ」

「たこ焼き！」

「……」

「あつ」

彼女は何かを悟ったように呟いた。自分の顔が死んでいくのを悟りながらも、止められなかった。

「……お前も、俺から奪るのか」

「ち、ちがつ……!」

「ははつ。冗談だよ、わかっているって。ほら、コレで買ってこい」

俺は笑いながら、スカーレットに諭吉さんを握らせた。

「……良いの?」

「合宿頑張ってるからな。好きだけ食べよ」

「……ありがとう! じゃあ買ってくるわね!」

「おう。俺はここで待つてるから」

釣りは返せよー、という俺の言葉に手を振りながら、スカーレットは行列の中へと消えていった。流石にヤツ程の量は食わんだろう、スカーレットは。ヤツのせいでたこ焼きにいい思い出が無いのは事実だが、別に嫌いなわけじゃない。好きだからなんだかんだ言いながらもヤツと食いに行くわけだしな、ヤツと。ただちよつと食う量がおかしいだけなんだよ、ヤツの。誰とは言わんが、ヤツの。誰とは言わないけどね。

『食える時に食つとかんと損やる！ 折角の奢りやしな！』

「ツ——!?!」

聞き慣れたヤタマモクロスツの関西弁を幻聴して、俺は思わず周囲を見回した。すると面白い物を終えたスカーレットがこちらへと戻ってくる姿を見つけた。

その手には、軽く二桁を超えるパックが載せられていた。

「お待ちせー!」

「……あの、スカーレットさん」

「ん？ なに？」

「参考までに聞きたいんだけど、何パック買ってきたの？」

「20万パ円ック分だけど」

「バカ!! バカバカバカ、バーーーーカ!!」

「えっ、何？ アタシまたなんかやつちやいました？」

「うるせえ!! お前を信じた俺がバカだったよバーーーーカ!」

5000円×20パック＝1諭吉さん。

こうして今日も俺の諭吉さんは、たこ焼きへと消えて行きましたとき。



「はー満足！ もうお腹一杯」

「そうであつてくれないと困るよ俺は」

祭りの会場から少し離れた砂浜の、舗装された岩壁の上。そこに腰掛けた俺とスカーレットは、大量に購入したたこ焼きを無事消化することができた。量的に言えば俺が2割で、スカーレットが8割。成長期のウマ娘の食欲を決してバカにはしてはならないと、俺は肝に命じた。

そんな彼女は食後のデザートだと言いながら、口の中でリング飴を転がしている。いや俺からいくら筆り取るつもりだマジで。

「ふふん♪」

「……上機嫌だな」

「そりやそうよ。アタシ夏祭りつて初めてだし」

「来たことあるに決まってるじゃなかったのかよ」



「あつ……それは、無しで」

「へいへい」

失言だった、という感情を露骨に出しているスカーレットを、俺はテキトーにあしらった。深く掘り返せばロクな目には合わないことは目に見えていたから。

「でも……本当に良かった」

「あ？」

「んーん、何でもない。気にしないで」

「何だよ……気になるだろうが」

「しつこい男は嫌われるわよ？」

「ぐっ……」

「……ねえ、一つだけ聞いてもいい？」

「……なんだ？」

「アンタにとって、ウマ娘ってどんな存在なの？」

「……真面目な質問？」

「結構ね」

だろうな。わかつてはいたが。

彼女は俺を見ず、日が沈んで薄暗くなった海を眺めている。その表情から、問いかけ

の真意を汲み取ることにはできない。

「……どんな存在、か」

「答えたくない？」

「いや、そうじゃなくてさ……考えたことなかったんだ。なんか今更、つていうかさ。それくらい俺にとつてウマ娘つてのは身近な存在で……側に居るのが当たり前、つて感じだからさ」

「……まあ、トレーナーの境遇考えればそうよね」

「だからなんていうんだろ……なんでも当てはまるかな。夢、仲間、戦友、あとそれから——」

贖罪かな、なんて。

「それから？」

「……いや、なんでもない。まあそんな感じだな。端的に言うなら、〃かけがえのないもの〃って言葉が、しつくりくると思う。勿論、お前も含めてな」

「……………そう」

「ん？ どうした？」

「な、なんでもないわよ。こっち見ないでよねっ」

歯切れ悪い返事を不審に思い様子を伺おうとしたら、釘を刺されてしまった。

「……………じゃあ、お前にとつて〃トレーナー〃ってなんだ？」

「へっ!？」

「いや、俺に聞いてきたんだからお前も答えろよ」

「えっ……………ああ、そうね。えーつと……………」

なんだコイツ、急にソワソワし始めたぞ。

その様子を暫し眺めていると、彼女は突如手に持ったりんご飴のように真っ赤になった顔を俺に向けた。

「あ、アタシにとつて、〃トレーナー〃は……………アンタは——」

そこから先の言葉を、閃光と轟音が掻き消した。

「きゃ——つて、うわぁ……!!」

「おー、もうそんな時間か。久々に見たなあ」

夜空を埋め尽くす程の色彩豊かな花火が、夏祭りのクライマックスを告げるように視界一面に咲き誇っていた。

「綺麗……これが、花火……」

「なんだお前、花火見たこと無いのか？」

「は、はぁ!? あるに……いや、無いわ」

「どうしてすぐ強がろうとするかなお前は」

「う、うるさいわね!」

「良いからしつかり見とけて。別におちよくったりしないからさ」

「……うん」

そう呟いて、彼女は再び夜空へと視線を上げた。初めてで興奮しているのだろう、彼女は普段の勝気な様子を微塵も見せずに、夜空を彩る光華に見惚れていた。

その微笑ましい様子を眺めつつ、俺も彼女に倣って視線を上げた。

そのままどれくらいの時が経っただろうか、スカーレットが不意に俺に声をかける。

「ねえ、トレーナー」

「ん？」

「——アタシ、来年も見たい。ここの花火、またアンタと2人で」

「お……………」

「だからトレーナー。また連れてきてくれる？」

「……………そうだな。お前が『トリプルティアアラ』獲ったら考えてやるよ」

「言ったわね？ 俄然やる気が出てきたわ！」

そう言つて、スカーレットは視線を上空へと戻す。彩豊かな光に照らされた彼女の姿は、優等生でも、勝利に飢えた獣でもない。

綺麗な花火に瞳を輝かせる、年相応で等身大の、ただの女の子だった。

思わず見惚れた、見惚れてしまった彼女の余りにも美しいその横顔を。

俺は一生、忘れることはないのだろう。

何故だか、そう思った。

## 風に舞う紅葉、或いは猛り立つ紅華

「よーし！ コレで僕の15勝目だねー」

「ぐっ……も、もう一回……勝負しなさいよ……！」

夏合宿が終わり、季節は流れて秋になった。

木々が色付き始めた10月下旬。ゆだる様な夏の暑さは鳴りを潜め、過ごしやすい気が続いている。そんな中ダイワスカーレットは、脚の負傷が完治し医者からの許可も出たトウカイテイオーと共に、トラックで競争をしていた。勝つたのはトウカイテイオー、彼女は満面の笑みでピースサインをダイワスカーレットに見せつけている。それを悔しそうに歯噛みしているダイワスカーレットは、気が狂いそうな程の怒りに襲われていた。

「ダーメ。今日はもう終わりってカツキもいってたでしょ？ クールダウンにしようよ」

「はあ!? アタシが負け越したままで追われるわけないでしょ!? ほらもう一回や」

「るわけねえだろボケが!! 明日本番だぞいい加減にしろ!!」

「ひっ……………」

克樹の怒声が、トラックに響き渡る。ダイワスカーレットは勿論、その場にいたテイオーも身を竦めた。

「さっさとクールダウン!! 行け!!」

『サーイエツサー!!』

克樹の勢いに押され、2人は綺麗な敬礼と共にクールダウンへと駆け出して行った。

「いよいよ明日だねー、『秋華賞』」

「ええ。明日が待ち遠しいわ」

ジヨグを流しながら、2人は明日に控えたダイワスカーレットの大舞台、『秋華賞』について話していた。

「緊張してないの?」

「流石にしてるわよ。『トリプルティアラ』の三冠目だし、一応アタシにとつての集大成にもなる。けど、それよりも楽しみで仕方ない…………この3ヶ月の練習の成果を、早く証明したい」

「確かに、スカーレットの成長は著しいよね。ボクも鼻が高いよ!」



「なんか癩だけど……実際アンタのおかげだからなんとも言い難いわ」

フンと鼻を鳴らすトウカイテイオーの姿を見て、彼女は苦笑を浮かべる。

トウカイテイオーとの合同練習では、併走をメインに合宿で身に付けた走り方の調整を行っていた。当初は砂との感覚のギャップに苦労していたものの、程なく修正が終わり彼女はすぐに芝での新走法を確立させた。そして練習の最後には、2人で本気の勝負を距離を調整しながら行っていた。戦績はトウカイテイオーが圧倒的に勝ち越している。

「やっぱり凄いわね、アンタの『イナズマステップ』。タイミングがわかってもらえただけキレてたらそうそう逃げ切れないわ」

「スカーレットがレース中の思考法を教えてくださいましたからだよ。相手の仕掛けるタイムミングとか、なんかわかるようになってきたんだよね。スカーレットの精度には程遠いけど、『あ、だいたいここで来るんだろうなあ』ぐらいにはわかるようになってきたよ」

ダイワスカーレットがそうであるように、トウカイテイオーもまた彼女の技能を吸収していた。互いが互いを高め合い、3ヶ月前の練習開始前とは、違う方面で強みを得ることが出来ている。

「アンタなら、その内使いこなせるようになるわよ。見た目の割に頭イイし」

「もう！ カツキもスカーレットもボクに対する評価が酷くない!？」

「日頃の行いよ」

「ぐぬぬぬぬ……！」

頬を膨らませて怒りを露わにするトウカイテイオーの様子を見て、ダイワスカーレットは苦笑した。怒りが喉元を過ぎ去ったのか、トウカイテイオーは小さな溜息を吐くと、快活な笑みを浮かべてダイワスカーレットを見る。

「明日は頑張つてね！ スカーレットなら大丈夫だよ」

「ありがと。テイオー、アタシの心配は嬉しいけど、アンタの方こそ気合い入れなさいよ？ 一週間後には、『菊花賞』も迫ってるんだから」

「大丈夫、ボクは負けないから」

「あら、アタシだつて負けないわよ？」

「じゃあしつかり勝つて、ボクを安心して『菊花賞』に送り出してくれるよね？」

「当たり前じゃない」

不敵なやり取りの応酬。それは確かにダイワスカーレットの心を解していった。

（ありがとうね、テイオー）

照れくさくて面とは言えなかったその眩きが、彼女の心の中で消えていった。

「知ってるか、スカーレット」

「何を？」

「『秋華賞』の『秋華』ってのは、昔の詩人が使ってた言葉なんだと。『秋』には大きく実る、『華』には、名誉とか容姿が美しいって意味があるらしいぞ」

「……つまりどういう事？」

「頑張れよってことだ」

「致命的に応援の仕方がヘタクソね」

ダイワスカーレットは溜息を吐いた。

本番直前のこの頼りなさはいつか叩き直す必要があるなと頭の片隅で考えながら。

それはさておき、夜が開け、遂に『秋華賞』当日。

彼と彼女は控え室でその時を待っていた。

「……けどまあ、一応感謝してあげる」

「……緊張、してるか？」

「そりゃまあ、それなりに。今日のレースは掛かっているモノの重さが違うし——何より、

対戦相手達はきつとアタシを目の敵にしてくるわ。緊張してないって言ったら、嘘になる。けど、アタシは負けない。どんな思惑も置き去りにして、1番を掴み取ってやるんだから！」

彼女は笑う。その笑顔は、*「勝ち」*への活力で漲っている。それは確かに、克樹を安心させた。

「……大丈夫そうだな」

「アタシはアンタの方が心配だわ。酷い顔してるわよ？ 緊張で吐きそうなワケ？」

「正直吐いていいよって言われれば今すぐ出せる」

「早くトイレ行け」

口調を荒げながら、彼女は鋭く突っ込んだ。情けない、と内心で呆れ返っていた。そんな内心を他所に、彼女は笑う。

「心配しないで。アタシはいつも通り勝っただけだから」

「……そうだな。悪りい、俺の方が浮き足立っちまつて」

「今に始まったことじゃないから大丈夫……じゃあ、アタシ行ってくる」

「おう、勝つてこい」

「ええ、勝つてくるわ」

拳をぶつけ合い、2人はそれぞれの道へと歩き出した。その表情に、不安の色は無い。

どちら共が、勝利の確信に笑っていた。



「あ、いたいた！　おーいカツキー！」

観客席へと辿り着いた克樹を迎えたのは、トウカイテイオーだった。

「おー、来てくれてたのかテイオー」

「当たり前じゃん、スカーレットの大一番だからね。ボクも一番近くで応援させてもらうよ」

「そうか。アイツもきつと喜ぶだろ」

「えへへ。スカーレットの調子はどうだった？」

「少し緊張してたけど……ま、影響が出るほどじゃない」

「良かった良かった！　でも……どちらか言えば克樹の方がヤバそうだね。大丈夫？　なんかげっそりしてるけど」

「3回くらい吐いてきただけだから大丈夫」

「あつ……ふーん」

トウカイテイオーは全てを理解した。

情けない、あまりにも情けなさすぎる。ダイワスカーレットと同じ感情を、彼女は抱いた。もしも自分のトレーナーが自分のレース前にこんな醜態を晒していたら、愛想を尽かしてしまうかもしれない。

スカーレットは優しいなあ、と心の中で呟いて、トウカイテイオーは再び笑った。

「ほらしつかりしなよカツキ！ そんなんじやスカーレットも集中できないよ?！」

「わかってる、もう大じよウブツ」

「ええっ?!? ちよつとカツキいい!!」

(——ごめんなさいテイオー、本当にごめんなさい)

彼女はゲートの中でバツチリと、トウカイテイオーに介抱される無様な自分のトレーナーの姿を“観て”いた。

(本当にもう……どうしてアイツはこう試合前になるとこんなに頼りないのかしら)

練習中の克樹は頼りになる。的確な指導と練習プランの構築。自分の力を100%、いや、それ以上に引き出してくれるような指導力に、彼女は何度も救われてきた。

しかし試合前の緊張の仕方は、まるで別人なのではないかと言うほど頼りにならな

い。よくわからない励まし方をするし、実際に走る自分より緊張している始末。

(……けどまあ、それがアイツの良いところよね)

緊張は、自分への思いと信頼の裏返し。

期待しているから、信じているからこそ、彼は自分の事のように心配し、不安を感じているのだ。それが妙にくすぐったくて、彼女は試合前にもかかわらず気の抜けた笑みを浮かべてしまう。

(……さ。あの心配性を安心させる為にも——)

しかしその表情は、一瞬で獰猛な笑みへと変わる。

勝利に飢えた獣が、彼女の中で低い唸り声を上げていた。

(さくつと獲るわよ——『トリプルティアラ』!!)

最後の王冠を目指して、彼女は一気に駆け出した。

ついに始まった『秋華賞』。中盤まで運んだレース展開を見ている克樹とトウカイテイオーの目つきは鋭い。

「やっぱりスカーレットを潰しに来てるね」

「そうだな……ま、想定通りだけど」

観客席に居るトウカイテイオーと克樹は、前方と側方を囲われ、現在10位に着けているダイワスカーレットの姿を見ていた。開始直後から周囲のウマ娘達が彼女の進行方向に向かって加速することで、彼女が抜け出すことを防いだのだ。それによって、彼女は思うように順位を上げられずにいる。

「自然とそうなつてるといえばそう見えなくもないけど……十中八九、あれは仕組まれた作戦だね」

「ああ。そしてそれは卑怯でもなんでもない。勝ちの目を潰しに行くことは立派な戦略だ。スカーレットはこれまでのレース、*“逃げ”*か*“先行”*で戦ってきてる。脚質的に*“差し”*が合っていないと予想されてるんだろうな。困ってるウマ娘の数は1、2……6、いや7人か」

「前に3、左に2、右にも2。そして先頭の*“逃げ”*が2人。確かにそれだけの人数で囲まれると動きにくい。ただ——」

そこでトウカイテイオーは言葉を切ると、手摺りで頬杖を突きながら、笑った。



「——それくらいじゃ、足りてないよねえ？」

（予想はしてたけど——邪魔くさいわね全く！）

周囲を囲まれたダイワスカーレットは、内心で舌打ちを打つ。

（結託してるわけでもないでしょうに、憎たらしいくらいに息ピッタリじゃない。それだけアタシを警戒してるってことね）

苛立ちながらも、彼女は極めて冷静だった。この程度の逆境で掛かってしまう程、彼女は柔なメンタルをしていない。

（——振り払うタイミングは今じゃない。だったら思う存分脚を溜めさせて貰うわね）  
今はまだ、流されるだけでいい。

そう結論づけた彼女は、動きを見せることなくペースを維持していった。

そして迎えた最終直線。彼女はまだ動かない。それどころか、前半よりも明らかに速度が落ちていた。

作戦が上手くいっているのだと、周囲のウマ娘達はほくそ笑む。あとはこのまま、自

分が勝つただけだと、本能のままに勝利を狙う。団子状になっていた集団が、徐々に縦長に変わり始めた。

——その趨勢を、彼女の真紅眼は見逃さない。

(待つてたわよオツ!!)

演算、開始。

(——相手はアタシを潰すために走っているわけじゃない。あくまで自分の勝利のために走ってる。アタシを潰すのは、そのための手段に過ぎない。だからそれは、絶対に最後まで続かない。どこかで必ず、綻びが生まれるはず)

故に彼女は、敢えて速度を落とした。

作戦が上手くいっているのだと、誤解させるために。

自身への囲いを、本来より早く綻ばせるために。

(フフン、随分と風通しが良くなったじゃない)

演算、終了。

徐々に広がっていく突破口。

活路は開いた。あとはそれを、突き進むだけ。

(さあ、暴れるわよ——練習の成果、見せてやる!!)

怯えろ、竦め

アタシの力に震えたまま、そこで眠ってる——

跪  
け

稲妻が、弾けた。

「ちよ、ハッ!?!」

あるウマ娘が、驚きに声を上げる。

自分の腰の下を、紅いナニカが通り過ぎて行ったからだ。

それは瞬く間に紫電と成つて、彼女の視界から消えていく。  
 (いや、どんな姿勢してんのよおツ!?)

地を這うような姿勢で、紫電は駆ける。

それは合宿で会得した、彼女の新たな戦闘態勢。ストライトフォーム彼女はそれを習熟し、完全に我が

物としていた。

(余計な力は要らない——必要なのは、地面に踏み込む刹那の一瞬だけ)

砂浜での走法改革は、彼女に様々なモノを齎した。その中で最も収穫となったのは、踏み込みの際の新たな視点。

力強く踏み込むために必要なのは、力では無い。

——脱力だ。

無駄な力みはかえって力を削ぎ落としてしまい、そして踏み込んだ力を地面から四方に分散してしまう。故にベクトルがバラバラになり、最大限に速度を上げることができない。

だからスパートの直前、踏み込む一瞬にだけ全力を注ぎ込む。そうすることで力は地面で分散せずにそのまま返ってくる。そのことに彼女が気づけたのは、疲労した脚でタイヤ引きを続ける内に、普段より力を入れてないにもかかわらず楽にタイヤを引けたあの瞬間があつたからだ。そうして完成した戦闘態勢は、彼女の末脚を新たな次元へと昇華させた。

（わかる、わかる……！ アタシは今、最高にアタシを使いこなしてる。あの練習が、確かにアタシの力になってる！）

歓喜と共に、口角を釣り上げる。

瞬く間に5人を抜き去り、残るは2人。見れば彼女達もスパートを掛けて、決死の逃走を図っている。それは確かに速い。風を切り裂きながら走る彼女達は、立派な末脚を備えていると断言できる。並のウマ娘では、触れることすら許されないだろう。

だが、それでも。

(——ヌルい。アタシがこの1ヶ月半、誰と走ってきたと思ってるの?)

ダイワスカーレットは幻視する。

先行する2人の先に、共にターフを駆け抜けてきた彼女の背中を。辿り着いたゴールの先で、どうだと言わんばかりに彼女の笑顔を。

(さっさと——其処を退けエツ!!)

ダイワスカーレットが、トップギアへと移行した。まだ速度が上がるのかと、対戦相手達は驚愕に包まれる。

瞬く間に自分達を取り残して行った紫電に、彼女達は決死の形相で追い縋る。しかし届かない。愚民では、彼女に近づくことすら許されない。

——紫電一閃。

真紅は全てを貫いて、最後のティアラをその手に勝ち取った。

「ハア……ハア……っ」

湧き上がる歓声を一身に浴びながら、彼女は浅い呼吸を重ねる。

（やっぱり負担が大きいわね、新走法……いや、それ以上に、思った以上に緊張してたみたいだわアタシ）

『トリプルティアラ』。それを手にした喜びより真っ先に彼女の心中を満たしていたのは、安堵だった。

「……ふう」

腰に手を当て、彼女は天を見上げて息を吐き——そして笑った。

「……勝った」

それは既知の味。しかし何度味わっても飽きない、甘美な響き。

「……獲った」

それは未知の味。選ばれし者のみが味わうことを許される、耽美な栄光。

「ツ——!!」



声にならない咆哮を上げながら、彼女は感情のままに拳を突き上げる。その瞬間、一際大きな歓声が京都レース場を揺らした。

そして彼女は、観客席を見上げる。

その瞳は、心の底から嬉しそうな笑みを浮かべる克樹の姿と、自分の事のように喜んで両手を突き上げたトウカイテイオーの姿を捉えた。

「——ありがとう」

小さく呟いて、彼女は2人に手を振った。

祝福の陽光が、彼女が戴冠している白銀のティアラを、眩く照らしていた。

【ダイワスカーレット 戦績：7戦5勝】

『秋華賞』——1着

『トリプルティアラ』 戴冠

## 降臨する炎帝、或いは押印する返礼

ダイワスカーレットが『トリプルティアラ』を獲つて、数日が経つた。

世間はその話題で沸きに沸いて、学園内外を問わず彼女の栄光を称えた。

それによつて「チーム・レグルス」に山の様な入部希望が来たり、克樹に尋常じやない取材とインタビュウが来て、四六時中パラツチに追いかけて回されるようになったり、ダイワスカーレットが学園内で圧倒的なファンを獲得して何故か下駄箱にラブレターが届くようになったりと、色々な変化が起きたが——どれも些細事である。本人達が届いたら怒り狂うだろうが。

『秋華賞』の熱狂冷めやらぬ中、もう一つの「三冠」が近づいている。未だ達成された事の無い、両三冠同時達成の偉業。世間の期待は膨らむばかり。

そして遂に、その時は訪れた。



## ——『菊花賞』。

京都レース場、芝3000m。天候晴、良バ場。

ついにその日が来た。トウカイテイオーの、『無敗のクラシック三冠』が懸かった大舞台。ダイワスカーレットと克樹も、彼女を応援すべく会場へと駆けつけていた。

「うーわ、凄い歓声ね。鼓膜破れそ」

「いや、『秋華賞』の時もこんな感じだったぞ？ 聞こえてなかったのか？」

「え、それ本気で言ってる？」

「んなしよーもねえ嘘つかねえよ。ま、それだけ集中してたってことだろ……お、出てきたぜ」

克樹の促しを受けて、彼女もまた視線をトラックへと移す。すると本バ場へと現れたトウカイテイオーが、一際大きくなった歓声に応えるように、笑顔で手を振っていた。

「あれ？ アイツの勝負服あんなだったっけ？」

「新調したらしいわよ。付き纏う怪我のイメージを払拭したいっていうのと、〃再起〃って言う意味が込められているらしいわ」

「……〃再起〃、ねえ」

彼女が見に纏うのは、見慣れた白い勝負服とは対照的な、燃え盛る炎の様に赤い勝負

服。トウカイテイオーは、常に怪我に悩まされていた。その事実を克樹は知っている――それこそ、常人よりも深く。それを克服するために、彼女が積み重ねてきた努力もまた誰よりも理解している。だからこそ、彼女が纏うあの赤色が何をモチーフにしているのか、感づくことができた。

「……陽はまた昇る、か。アイツらしい」

「え？　なんて？」

「なんでもねえよ。ほら、レース始まんぞ」

「わ、本当、もうゲートインし始めてる……！」

克樹の促しに、慌ててトラックへと目を向けたダイワスカーレット。

「……頑張つて、テイオー」

小さく呟いた彼女の拳は、祈る様に強く握り締められていた。

そして始まった『クラシック三冠』最後の戦い。先頭集団のラップペースは早く、全体的に縦長の様相を示している。

「…… “逃げ” がやけに多い気がするわね」

「ああ。テイオーは “差し” の名手だ。前半の内にはできるだけ差をつけて、後半への脚

を溜めるつもりなんだろう。後半アイツがスパートを掛けても、巻き返せないようにな」

件のトウカイテイオーは現在13位。『秋華賞』のダイワスカーレットの様に囲まれていると言ったこともなく、先を行く先頭集団のペースに飲まれることもなく、只管に自分の走りを貫いている。

「ふーん」

克樹の説明を聞いていたダイワスカーレットは、興味なさげに呟いた。

「……まあやりたい事はわかるけど、意味ないでしょそんな小技。相手はあのテイオーなのよ？ アイツがその程度で自分のペースを乱すとは思えない」

「だろ。だがやる価値はある。見込みは薄くとも、ほんの僅かでもアイツが乱れてくれれば僥倖だからな。っていうかそうでもしないと勝ち目がないんだろ。勝率0%を0.1%にできるならどんな小技でもやらなきゃ損だ……それぐらい、今のテイオーはやばい」

「……そうね」

少なからず克樹の最後の言葉には、彼女も同意だった。

「自分に足りないものを探して、貪欲に取り入れようとする姿勢……天才は居るのよ、悔しいけどね。まさしくアイツは、努力の天才」

「そういえばお前、アイツに思考法教えたんだろ？ どうだったんだ？」

「ええ盗まれたわよ、殆どね」

「……マジか」

「だから意味ないのよ——アタシにあの小技が効かない以上テイオーにだって効果は無い。以上、わかった？」

「……南無三」

克樹はトラック上の「逃げ」ウマ娘達に、合掌を送った。

そして迎えた最終コーナー直前。トウカイテイオーは一つ順位を上げて現在12位。

「ここからがアイツの本領ね」

「ああ、「巧みなステップ」でポジション取りもバツチリ。視界も良好で垂れウマの心配もない。完全にアイツの勝ちパターンだ」

そう呟き、克樹は笑う——しかし次の瞬間、その笑みは崩れ去った。

「なっ……!!?」

「はあッ!?!」

克樹とダイワスカーレットが、悲鳴にも近い声を上げる。彼らの視界には、見る見るうちに速度を落として順位を下げるトウカイテイオーの姿が映っていた。

不調？ アクシデント？ 否である。

彼女は今、不敵な笑みを浮かべている。つまり、あえて順位を落としているということに他ならない。

「何考えてんのよテイオー……!?!」

不可解な行動に、ダイワスカーレットが苦悶の表情を浮かべながら呟いた。

（——よし、これで最後尾つと）

そんな彼女の心配を尻目に、トウカイテイオーは想定通りに事が運んだことに安堵していた。現在彼女は18着の最後尾、にもかかわらずその心は少しも揺らいでいない。『クラシック三冠』、勿論ボクは本気で獲りに行く。でもそれから先のことを考えると

——もう一つ、どうしても欲しいものがある）

内心で呟き、そつと観客席に視線を移す。その瞳に、不安げな顔でこちらを見ている彼女の姿を捉えた。

——見ててね、スカーレット。

これが今のボクの——全力だ!!!

極限の逆境状態。その中で、一頭の「ばけもの」の中の、ナニかが羽化した。

「……おいおい、冗談だろ!？」

「テイオー、アンタまさか……!？」

踏み込んで力を溜めるトウカイテイオー。

その姿を見た2人は、彼女の真意を悟る。

「——そこから全員抜くつていうの!？」

刹那。

彼女はまるで飛び立ったかのように、瞬時に加速した。



1人、また1人と、彼女は鮮やかに相手を抜き去って行く。

その全てが、「イナズマステップ」による最短距離。ダイワスカーレットのように道を開けさせる必要すらない——そもそもとして、障害になり得ていない。

ターフの上を縦横無尽に駆け巡る、『帝王』の凱旋。瞳に携えるは、地の底から迫り上がるような紅蓮の業火。勝利への執念を焚べ、『帝王』は——否、『炎帝』は全てを灼き払って突き進む。

残り200mを切って、現在3位。『炎帝』の行進は止まらない、それはまるで対戦相手を嘲笑うかのようにだった。

懸命に逃げる先頭集団の2人。彼女達もまたジリジリと背中を焦がすような熱を感じていた。

懸命に走れば、逃げ切れられる？

足を止めなければ、生き延びられる？

否、断じて否。

これは地平線の全てを無に帰す、業火なのだから。

会場を包む、興奮の熱気。

それを一身に浴びて、『炎帝』は笑顔で拳を突き上げた。

前人未到、17人抜きを達成しながらの『クラシック三冠』。その歴史的偉業に、会場の興奮は一向に収まらなかつた。

「……やばすぎんだろ、アイツ」

あまりに現実離れた光景に、克樹は動揺を隠せなかつた。かくいう彼自身も、高揚から来る震えが止まっていな。それほどの瞬間を今日にしたのだと、彼は理解していたから。

「……」

一方彼の隣に立つダイワスカーレットは、茫然とトウカイテイオーを眺めていた。

「……凄、い」

時間をかけ口にした言葉は、ただそれだけ。戦友が達成した偉業を喜ぶ気持ちも、圧倒的実力への恐怖も、微塵も湧いてこない。

敬意。

彼女が今胸に抱くのは、ただそれだけだった。

(テイオー、やっぱりアンタは凄い。こんなこと普段なら絶対言わないけど——アンタは、今最強に最も近いウマ娘だわ)

戦友に、心からの称賛を。

彼女が抱いた感情は、かつて『シンザン記念』でオグリキャップに感じたそれに近い。その時の彼女は、あまりに絶望的な実力差に、心が折れてしまっていた。

だが、今は違う。

(そうよ、だからこそ——超えてみたい、アンタを)

力無き自分に打ちひしがれる彼女は、もう居ない。今の彼女は、自分の先を走るトウカイテイオーを超えて最強いちばんを獲る自分の姿しか考えられない。

ただ、今は。

「——おめでどう、テイオー」

彼女は微笑みながら、親友へと拍手を送った。



「はー楽しかった！ やっぱレースは良いね！」

「そうね。『クラシック三冠』、おめでどうテイオー」

「えへへ、ありがとうスカーレット！」

『菊花賞』を終えた後、京都で夕食を済ませてから寮へ戻ると辺りはすっかり暗くなっていた。克樹は2人を寮の前まで送り届けた後、自宅へと帰っていった為、今は2人きりで寮への道を歩いている。

「凄かったわ、アンタの走り。『クラシック三冠』が懸かった大舞台でやるなんて、正気の沙汰じゃないけどね」

「あ、酷ーい！ ボク頑張ったのに！」

「褒め言葉よ、素直に受け取っていいのに」

「どこをどう聞いても褒め要素はなかったよね？」

頬を膨らませながら睨みつけるトウカイテイオーの様子を見て、ダイワスカーレットが笑う。そして不意に、トウカイテイオーは眩く。

「——これでやっと本気で戦えるね、スカーレット」

「え……?」

「待ってた、ボクはこの時をずっと待ってた。『トリプルティアラ』の君と、『三冠ウマ娘』のボク。同世代に、最強は2人も要らないよね?」

彼女は、笑っている。

その目以外の全ての部位で。

見開かれた瞳は、ダイワスカーレットただ1人を見据えて燃え盛っている。

暑い——否、熱い。

夜のはずなのに、灼熱の太陽に晒されて気温が急激に上昇した様な、全てを焼き尽くす大火に身を晒している様な感覚に、ダイワスカーレットの全身から汗が吹き出していく。

そして彼女の背中にダイワスカーレットは。

——不死鳥の様な、炎の翼を幻視した。

「——『エリザベス女王杯』。そこで決着を付けよう、スカーレット。ボクからの挑戦、勿論受けてくれるよね？」

叩きつけられた挑戦状。ダイワスカーレットはそれを心の奥底に仕舞い込み、獯猛に笑う。

「……ええ、ええ勿論よ、テイオー。アタシもアンタと一度戦いたいと思ってた……！」

「ありがとう、スカーレット」

「白黒付けましょう、アタシとアンタ、どっちが最強なのか」

「うん。でもスカーレット、ボクは負けないよ——」

絶対は、ボクだ

炎の翼が、轟音を立てて羽撃いた。



## 真紅、或いは炎帝

『——ボクはトウカイテイオー！ よろしくね！』

それは、未だに褪せない記憶。

彼女と彼女の、記憶の最初の1ページ。

彼女は、笑っている。

彼女は、戸惑っている。

なぜなら彼女にとって彼女は、遠い存在で、追いかける背中で——越えるべき壁だったから。

そんなことを露にも思わない彼女は、彼女へと手を伸ばす。

なぜなら彼女にとって彼女は、漸く現れた存在で、自分を超えようとする相手で——好敵手足り得るウマ娘だったから。



それが彼女と彼女の、はじまり最初の記憶。

2人はまだ、これから訪れる運命を知らない。

「——ツト、おいスカーレット！ 聞いてんのか？」

「え……ああごめん、ぼーっとしてた」

「しつかりしろよ。もうすぐ本番なんだぞ？」

回想の深海から、克樹の呼び掛けによってダイワスカーレットが浮上する。

ふと前を見れば、彼は心配そうに彼女を覗き込んでいた。

「わかつてるわよ。ちゃんと集中してるから安心して」

「それならいいけど、本当に大丈夫か？ 相手はあのテイオーだ、気合い入れないと一瞬

でケリが付いちまうぞ」

「大丈夫だってば。そんなの、アタシが1番わかってる」

本当に呆けていたわけではない。

『菊花賞』から2週間が過ぎて、11月中旬。

今日はG1レース、『エリザベス女王杯』。

彼女とトウカイテイオーの、決戦の日だった。

「ならいい。さて、スカーレット……『秋華賞』から約1ヶ月も経っていないスケジュール、正直俺は今回の出走、反対だった。だからお前が出たいって言った時は、耳を疑ったよ。そのリスクを、お前が理解していないはずがないからな」

「……重々承知よ」

「そして相手はトウカイテイオー。お前が合同練習で、圧倒的に負け越している相手だ。そのことも、わかってるな？」

「ええ、大丈夫」

「その上で聞くぞ、お前は今日、何のために走るんだ？」

一見すれば、彼女の無謀な挑戦を貶しているようにも聞こえる。しかしそれは、断じて違う。彼は改めて確認しているのだ。彼女が今日、何を思い、何を目指して走るのかを。

「——愚問ね」

彼女は心底面倒くさそうに吐き捨てた。

「——アタシは今日も、アタシの最強いちばんを証明するために走る。それ以外の理由なんて、あるわけないでしょ？」

瞳孔の開いた瞳から、紅い稲妻が音を鳴らした。

「……いい返事だ」

克樹はニヤリと笑う。それは彼自身を納得させ得る答えだったから。

「さ、そろそろ時間だ」

「ええ……行つてくるわね」

「ああ、行つてこい」

克樹の促しに応じて、ダイワスカーレットは席を立った。そして出口まで歩み寄りドアノブを掴んだところで——不意に静止した。

「……トレーナー」

「どうした」

「……今回ばかりは、流石に負けるかもしれない」

「は……？」

久しく聞いていなかった、彼女の弱音。克樹はその言葉に、かつての“あの日”をフラッシュバックした。

「お前、どうい……」

「相手はテイオーだもの……絶対勝てるなんて、口が裂けても言えないわ」

「……」

「……でも、でもね」

そこで彼女は言葉を切り、克樹を振り返った。

「アタシ、勝ちたいの。アイツに、トウカイテイオーに。そこからアタシは、漸く始まる気がするから」

笑顔はぎこちなく、声にいつもの自信はない。

それでも心は、死んでいない。

表情とは裏腹に、その瞳は本能のままにギラついている。己の存在証明に、打ち震えている。

だから彼は、何も心配しなかった。

「……まあそうだよな。テイオーは、練習で散々ボコボコにされた相手だもんな」  
「ちよつと、そんな言い方……!」

「仕方ないさ、ビビって震える気持ちもわかるからな……で、それがどうした?」

「えっ……」

「それを抱えたまま走んのかって聞いてんだよボケが」

「っ——」

強い口調での問いかけに、ダイワスカーレットは思わず閉口する。

「お前、自分よりテイオーの方が強いって思ってたんだろ」

「……悔しいけど」

「だろうな。でもそれは違う——違うぜ、スカーレット」

「え……」

「——それを決めるために今から走るんだろうが」

「あ……」

「勝者と敗者は、勝負の結果によって定められる。練習で何度勝とうが、何度負けようが、それ自体は大したことじゃない。本番で勝たなきゃ、何の意味もねえんだからな。」

いいかスカーレット、覚えとけ——強いヤツが勝つんじゃない、勝ったヤツが強えんだ」  
「……そうね、そうよね。どうかしてたわアタシ」

彼女の表情に、力が戻った。

「アタシはアイツに、勝つ。そしてアタシの最強を証明して見せる……!」

「それで良いんだよ。気持ちで負けてちや、ハナから勝負になんねえからな。負けそうとかそんな邪魔なモン、俺に預けて此処に置いて行け」

調子を取り戻した彼女の様子を見て、克樹は嬉しそうに笑った。

「ありがとう。初めて試合前にアンタが頼りになると思ったわ」

「るっせえ余計なお世話だ。さあ行つてこいスカーレット。結果はどうあれ、俺はずつとお前の側に居るから」

「……! ええ、行つてくる! いいえ……勝つてくるわ!」

「それでこそお前らしい。頑張れよ!」

「勝つたら死ぬほど奢ってもらうから、ちゃんとATM行つときなさいよ!」

「ちよつと待つてそれは話が違くない??」

急に現実へと叩き落とされた克樹の情けない声を背に受けながら、彼女は満面の笑みで本バ場へと向かつて行つた。

無事に済んだダイワスカーレットと、無事では済まなそうな己の財布を秤にかけて、

克樹の感情はめちやくちやだった。

「……っはは」

そして彼は、心情とはかけ離れた穏やかな笑みを浮かべた。

「幾らでも奢ってやるから——勝てよ、スカーレット」

その言葉と共に彼の頬を伝った滴の意味を知るものは、何処にも居なかった。



トウカイテイオー。

端的に言つて彼女は、*“天才”*である。

恵まれた身体技能——柔軟性。それを最大限に活かす為、彼女は幼い頃から努力を惜しまなかった。

かつて見た、シンボリックドルフ憧れの背中。それが彼女の走りの根幹だった。

——ボクもあの人みたいになりたい。

それが彼女の走る理由。『無敗の三冠ウマ娘』を目指したのもそうだ。事実それから彼女は鍛錬を重ね、自身の才能を磨き続けた。そうして夢を現実に変えるだけの技量と覚悟をもって、『トレセン学園』の門を叩いたのだ。

その結果は——無双。

同期のウマ娘に、彼女に敵う存在など居なかった。

——この程度か。

『“トウインクル・シリーズ”で走りたい』。そう夢を語るウマ娘が居た。レベルが低いと、彼女は嫌悪した。

『G1で勝ってみせる』。そう決意を述べるウマ娘が居た。程度が知れると、彼女は唾棄した。

彼女にとって、それらは通過点に過ぎない。見ているレベルが違うのだと、彼女は入学して数ヶ月で察した。

——ここはぬるま湯だ。浸かれば自分は腐っていくだけ。



彼女はそう自分に言い聞かせ、クラスメイトとの切磋琢磨を、時間の無駄だと切り捨てた。

ふと振り返れば見える、遙か後方で自分の背中を見つめる同期達の姿。その目は、  
“死んでいる”。勝とうという意志もなく、悪戯に夢を語るだけ。そこに至る為の努力もしていないくせに、本気で叶える気もないくせに。

——おかしい。ボクはこんなに頑張ってるのに。

どうしてキミたちも頑張らないの？

彼女は終ぞ、異常なのは自分の方だとは、気付くことはなかった。

思春期に青春全てをかなぐり捨て、自身の鍛錬と修身に費やす彼女の姿は、ハッキリ言つて異常である。しかしその異常性アブノーマルが、彼女をより高みへと押し上げたのも事実。狂氣的なまでに強さを追い求める求道者、それがトウカイテイオーの本質だった。

しかしある日、彼女は遂に見つけたのだ。

切り捨てた有象無象の中から、心の奥底で何よりも欲していた存在を。

「はあ……全く、時間の無駄だよこんなの」

それはある日、彼女が同期達との模擬レースを終えた後のことだった。

その結果は勿論、トウカイテイオーが大差をつけての一着。走る前から見えていた結果だけに、そこに驚きも感動もない。ただあるのは、時間を無駄にしたという苛立ちだけ。

「ん……あれは」

自主トレのためにトレーニング室に向かっていた彼女は、その先に歩く数名の同期のウマ娘を見つけた。

「やー、惜しかったねえ、スカーレット」

「そうね……一着を目指してたけど、悔しいわ」

トウカイテイオーは、冷めた目でその様子を見ていた。吐き気のような傷の舐め合いだ、と内心では思った。

「まあでも、テイオーなら仕方ないよねー」

「うんうん。なんか私達とは違うって感じだしね」

何気なしに呟いた、同期のその言葉。

それは小さく——確かにトウカイテイオーを傷つけた。

(ほら——そうやってみんな、勝手に諦めて)

ギリツ、と嫌な音が虚しく響く。

勝つかか負けるとか、そう言う話じゃない。勝負の場にすら立てていない。彼女には理解できなかつた。

——どうして戦う前から決着を急ぐ？

そんなのもう、死んでいるのと一緒にじゃないか。

孤高の天才は、決意を固める。

要らない。友情も信頼も鎬も切磋も琢磨も協力も——何もかも。自分の力だけで、のし上がって見せる——そう決意した瞬間。

「——勝てないからって、諦める理由になるの？」

空気が、凍った。

周囲のウマ娘達も驚きに息を飲む。

琴線に触れた不用意な発言が、彼女の器用に被った優等生の皮を引き剥がし始め、そこから飢えた本能が漏れ出し始めていた。

「アタシにとつて、トウカイテイオーは越えるべき壁。アタシは“いちばん”になる。そのためなら何度だって挑戦してみせるし——最後には、アタシが勝つわ」

「……………」

トウカイテイオーは目を見開く。

その発言は、まさに彼女が心の奥底で欲していたモノだった。

(…………本気だ。あの子は本気で言ってるんだ)

今は負けても、最後に咲<sup>わ</sup>うのは自分だと、根拠のない自信に裏打ちされた言葉よりも雄弁に、彼女の鋭い視線とオーラがそう告げている。

実力はまだ無くとも、彼女は資格を有している。

トウカイテイオーの心は歓喜に震えた。

「……と、とか言ってみたり？ あはは……」

友人達の様子を見て、ダイワスカーレットは焦ったように優等生モードを取り繕って笑う。

程なく解散した彼女達を見て、トウカイテイオーは意気揚々と話しかけた。

「やあ！ こんにちは！」

「わあっ!? えっ、貴女……」

「ボクはトウカイテイオー！ よろしくね！」

「……知ってる、けど」

「そっかそっか！ ねえ、キミの名前は？」

「えっ……わ、私達、クラスメイト……よね？」

「そうだよ！ で、キミの名前は？」

「……ダイワ、スカーレット」

「ダイワスカーレットちゃんか！ ねえ、スカーレットって呼んでも良い？」

「構わない、けど……？」

それからトウカイテイオーは、認識を改めた。曇天の中でも消えぬ輝きを放つ者達  
が、同期にも居る。それはダイワスカーレットだけではなかった。曇っていたのは、自  
分の目だと気付かされた。

その日、トウカイテイオーの世界は変わったのだ。

ダイワスカーレットもまた、認識を改めた。彼女は才能に驕った怠け者ではない。努  
力する天才、とは彼女のことを言うのだろうと悟った。そんな天才に、認められた。越  
えたいと願う壁は、いつも自分を振り返り、笑っている。『越えられるものなら越えてみ  
ろ』と。それはウオツカと共に、彼女にとって大きなモチベーションとなった。

その日、ダイワスカーレットの世界は変わったのだ。

いつしか彼女の仮面が外れ、ありのままを曝け出せる存在になるまでに、そう時間は  
かからなかった。

トウカイテイオーは待っていた。

彼女が自身と雌雄を決するに相応しい存在となるその日を。

ダイワスカーレットは待っていた。

自身が彼女と雌雄を決するに相応しい存在となるその日を。

そして出会いから時は流れて――



「テイオー」

回想から引き戻す、その声。

隣のゲートからの呼び掛けに反応して、トウカイテイオーはそつと横を見た。

「……やつほー、スカーレット」

「調子はどう？ アタシの方は、最高よ。今日はアタシが勝たせてもらおうわね」

腰に手を当て、ダイワスカーレットは不適に笑う。その瞳からは、滾る闘志が稲妻となつて溢れ出している。

そんな彼女の様子を見て、トウカイテイオーは小さく笑い、呟く。

「……ありがとう、スカーレット」

「は……？」

「キミがボクにくれたもの、忘れないよ」

「ちよ、アンタ何言つてんの？」

肩透かしを食らったかのように、ダイワスカーレットは怪訝な表情で吐き捨てた。

「まさか腑抜けてるんじゃないでしょうね？」

「——それこそまさかだよ、スカーレット」

「っ!？」

彼女が見に纏う雰囲気の変化に、ダイワスカーレットは気づいた。

灼熱の勝負服を突き破るかのように燃え盛る業火。

宿敵が自分を焼き殺そうとせんばかりに、瞳孔の消え去った瞳で笑いながら見つめてくる。

「ボクは勝つよ。他の全てはどうでもいい。キミに勝つことしか——考えられない」

「ツ——!!」

灼熱が、彼女の表皮を焼いた。

一刻もこの場を離れなければ、自分は灰すら残らず消え失せてしまうだろう。そう思った、思わされた。



——冗談じゃない

「……」

今度は、トウカイテイオーの番だった。

地響きが、ターフに轟く。まるで落雷が直撃したかの様な轟音。それはダイワスカーレットが自分を鼓舞すべく、力強くその場で踏み込んだ音だった。

その刹那、トウカイテイオーの全身を貫く痺れ。正面に鎮座しているのは、ダイワスカーレットという名の依代。万象一切を消炭に変える、紅い雷神。

「——勝つのはアタシよ。アタシはアンタを、超えて往く」

（——一体キミは、どこまで強くなるんだろうね）

全身から汗を吹き出しながら、トウカイテイオーは苦笑する。紅い稲妻が奔流となつて大気に溢れ出して、彼女の瞳を焼いていく。それでも彼女は、ダイワスカーレットから目を逸らさなかった。

燃え盛る業火、迸る紅雷。

一種の地獄と化したトラック上。

周囲のウマ娘達はその重圧に完全に気圧されている。

静まり返る観客席。彼らもこの異様な雰囲気を感じ取っている。開戦まであとわず  
か。

両者は既に前を向き、今か今かと解き放たれる瞬間を待っている。

(アタシが勝つ——)

(ボクが勝つ——)

奇しくも両者が目指すものは同じ。

最強いちばんはアタシだ!!

最強ぜったいはボクだア!!

そして二頭の勝利に飢えたケモノが、タワーへと解き放たれた。

# 決戦、或いは全てを賭けて

——『エリザベス女王杯』。

京都レース場、芝2200m。天候晴、良バ場。

例年11月中旬を目処に開催されるこのレースは、今年に限って名前の通りの意味をもっていた。

ダイワスカーレットとトウカイテイオー。真紅と炎帝。『トリプルティアラ』と『クラシック三冠』。

偉業を成し遂げたウマ娘同士が、真の最強を賭けてしのぎを削る——文字通りの、  
女王決定戦”。

そのレースは、観衆の期待とは裏腹に静かな立ち上がりを見せた。

（スカーレットは打ち合わせ通りの3位、トウカイテイオーは……9位か。普段より少

し前目か?)

克樹はレースの流れを見守りながら、分析を重ねる。

(今回スカーレットは「先行」策を選択した。逃げでない理由はこの前の『菊花賞』で本人が言っていた通り——テイオーに意味がないから。アイツには、スカーレットが「逃げ」で作った展開を無茶苦茶にブチ壊して一着を搔つ攫う程の理不尽な実力がある)

それならば、最も適性がある位置で全体の趨勢を窺いながら走った方が良い。彼女のプランニングに、克樹も同意した。

(一方のテイオー……スカーレットを意識しているからか、いつもより若干前のポジションニング。ただそれによる影響なんてアイツには皆無だろう。「軽やかステップ」と「巧みなステップ」もあるしな。アイツは、どんな場所からも有利ポジションを取れるという明確な強みがある)

そしてそのまま、観客の期待とは裏腹にややスローペースな展開が続く。周囲のウマ娘達も、ダイワスカーレットとトウカイテイオーの末脚を警戒して、無計画にスタミナを使い果たす訳にはいかず、全体的に後ろ気味のレースになっているのだ。

そして最終コーナーに入る——直前。

先に仕掛けたのは、トウカイテイオー。

(来るぞ——スカーレットッ！)

克樹の拳に、力が籠った。

(さあ、勝負だ——今日のボクなら、ここからスパートを掛けても最後まで耐えられる。そのためにもここまで我慢して、スタミナを調整したんだから。それに……)

トウカイテイオーは、自分の先を行く彼女の姿を捉える。

(どうせボクがどこから仕掛けたって、スカーレットは直ぐに対応してくる！ それならボクの1番速度が乗るタイミングで——いっただけだッ!!)

地響きを鳴らしながら、トウカイテイオーは踏み込んだ。爪先を内側に向け、地面を抉るように打ち込む——ダイワスカーレットの踏み込みの擬似模倣<sup>イミテーション</sup>。完全再現とまでは行かなかったが、彼女は持ち前の柔軟性で踏み込みの力をロス無く伝達することができる。故に例え微かな威力の向上であろうとも、その恩恵は計り知れない。

(行くよスカーレット——勝負だアッ!!)

溜め込んだ脚を解き放ち、トウカイテイオーがスパートを掛ける。立ち塞がるウマ娘達を意にも介さず、「イナズマステップ」で最短距離を貫いて行く。それはまさしく、先の『菊花賞』の再現——『炎帝』の凱旋。

そして彼女は、瞬く間に一位へと躍り出た。

(さあ、キミはどうする——?)

(……想定より早い。けど、慌てることじゃない)

最終コーナー終了目前、ダイワスカーレットは現在3位。スパートを掛けて先頭を走るトウカイテイオーを見ながらも、彼女の心に焦りはない。

(普段より早めのタイミングでのスパート。それを維持し続けるので精一杯なんじゃないの? それでアタシから逃げ切るつもりなのかしら)

彼女の観察眼が、結論を出した。あれは紛れもなく全力のスパート。ゴールするまで、トウカイテイオーはそれを続けるつもりでいる。

(それならアタシは、アンタにとつて致命的なタイミングで仕掛けるだけ)

他のウマ娘が、徐々に速度を上げ始める。しかしダイワスカーレットは、まだ動かない。

(——まだ来ないの? スカーレット……!)

不気味な沈黙を見せる彼女に、トウカイテイオーの疑念は深まっていく。彼女が仕掛けるタイミングを伺いながら、スパートを掛け続ける。

それと言わば——雑念の混じったスパート。

彼女の足に、躊躇いの蔦が絡みつく。

その瞬間を、真紅は待つていた。

（——思考がお粗末ねえ、『炎帝』さんツ!?!）

ニヤリと口角を釣り上げた刹那、ダイワスカーレットが低姿勢から一気に飛び出した。踏み込みから、一瞬で最高速へ。

彼女は終盤でトウカイテイオーを仕留めるための猛毒を仕込んだ。それは、〃自分自身への疑念〃。相手は自分を意識している。故に自らの想定外が起きれば、必ず無駄な思考を走らせると、彼女は信じていた。トウカイテイオーの純粹な勝利への渴望に、不純物が混じり込む。その瞬間の為だけに、彼女はスパートのタイミングをズラしたのだ。

（しま——ツ）

トウカイテイオーが己の失策を悟ったときには、既にダイワスカーレットは隣に居た。

そしてそのまま、真紅は鮮やかに炎帝を置き去りに一気に先頭を駆け抜けていった。



(いける！ このままアタシが勝つツ!!)

勝利への確信。しかしそれは一瞬で消え去った。

極限の集中下、彼女の俯瞰する視点はトウカイテイオーを捉えている。しかしその表情に、彼女は今日初めてレース中に動揺せざるを得なかった。

(……どうして、笑ってるの……?)

(——スカーレット、やっぱりキミは凄い。ボクは嬉しかった……嬉しかったんだ。同世代で、ボクと同じ目線に立ってくれる、ボクと対等に戦うことが出来るキミみたいな存在に——好敵手<sup>ライバル</sup>に、やっと出会えたんだ)

トウカイテイオーは、同世代の中で端的に言って最強だった。

天賦の柔軟性と、それを遺憾無く発揮した走り、他を寄せ付けない程圧倒的だった。

いつしか、彼女に挑戦するクラスメイトは、居なくなっていた。

そんな日々に、退屈していなかったといえれば嘘になる。

(——だけどスカーレット、キミは違った)

確かに、同世代の中では強い方の相手だった。

それでも自分より、格段に弱い筈だった。

それがどうだ、今こうして自分とギリギリの勝負を演じ、あろうことか自分の不敗神話を喰い千切ろうとしている。

(キミは凄<sup>ぜつ</sup>い、心から尊敬してる。だからこそ、ボクは負けられない。最強はボクだ、キミに勝つことこそが、ボクのゴール。キミを倒して、ボクは更に頂点へ進むツ!!)

「スカアアレットオオオオツツ!!」

瞳から、業火が吹き上がる。

偽・装・解・除。再度『炎帝』の凱旋が始まった。

「な、ア——ツ!?!」

ダイワスカーレットは驚きを隠せない。彼女が見たのは、全力のスパートを掛けてい

たはずの炎帝が、全身から業火を吹き出しながら接近してくる姿。

全てが掌の上のはずだった。差し切ったと思っていた。そのつもりのスパートだった。しかし相手はまだ、スタミナを使い果たしてなどおらず、脚をまだ残していた。

それはダイワスカーレットの超高精度分析をも欺く、トウカイテイオー迫真のフェイク。スパートを掛けながら「軽やかステップ」をする事で、二度目のスパートへの足を残していたのだ。

背後に付けられた、まずい。彼女がそう感じたのはほんの刹那。

次の瞬間、炎翼を羽撃かせた炎帝は、更なる加速を以て飛び立つかのように消えていった。

遠ざかっていく炎帝の後ろ姿。ダイワスカーレットはその様子に、驚きを隠せない。

（「軽やかステップ」と「イナズマステップ」の複合!?!）

冗談じゃない。

彼女は内心で吐き捨てた。そうだとすれば、最悪の事態だ。

今のトウカイテイオーは、最高速度を維持しながらスタミナ消費を抑えて走っている。最早スタミナ切れによる速度低下を祈るのは絶望的。勝利を掴むためには、純粹な速度勝負で勝ち、もう一度差し返すしかない。

首の皮一枚で繋がっている勝機、それはさながらピアノ線の上の綱渡り。しかしそれでも彼女の心に、諦めの感情は微塵もない。

（——テイオー、やっぱりアンタは凄い。アタシ、嬉しかった……嬉しかったの。アンタに好敵手ライバルって言って貰えて、心の底から）

同世代の中で、確かに自分は頭一つ抜けていた。

だがその遙か先に、テイオーが居た。

そんな存在に好敵手と認めて貰えることが、どれだけ嬉しかったか——誇らしかったか。

（——でも、アタシは違う、そうじゃない。アンタは「敵」、アタシの最強いちばんを阻む、巨大な壁）

歓喜の感情を、本能が喰らい尽くす。

勝利に飢えた手負いの獣が、怒りを露わに牙を煌かせる。

（アンタは凄い、心から尊敬してる。だからこそ、アタシは負けられない。最強いちばんはアタシだ、アタシにとってアンタはゴールじゃない、通過点よ！ アンタを越えて、アタシは頂点へ進むツ!!）

「テイツ……オオオウウツツ!!!」

見開かれた紅眼から、紅い稲妻が迸る。

勝利への方程式を即座に再構築。彼女は再びスパートを掛けた。

(そうだよね……キミがこのまま負けてくれるわけないよね!!)

頬から汗を伝わせながら、トウカイテイオーは獯猛に嗤う。背後から猛烈に迫りくる重圧を感じる。雷鳴を轟かせながら、紫電が自分を貫こうとしているのがわかる。それでもトウカイテイオーは動じない。

(来る、わかるッ!! こっしかないよねッ!!)

ダイワスカーレットの本能を本物とするならば。

トウカイテイオーの本能も、また本物だ。

彼女はダイワスカーレットが自分を抜き去ろうと左へと踏み込んだ刹那、本能のままに「イナズマステップ」で瞬時に左へ。タイミングはドンピシャ、彼女の抜け道を塞いだ。それは従来の使用法である、相手を差すためのものではない。

相手の勝機を根刮ぎ刈り取る、「イナズマステップ」の守勢転用。

まさに攻防を兼ね備えた、変幻自在のステップ。炎帝は、この瞬間新たな次元へと昇華した。

(ボクの——勝ちだあッ!!)

しかしトウカイテイオーは気付いていない。

左へ踏み込んだ筈のダイワスカーレットの重心が、右側に残っていることに——!

(か・か・つ・た・わ・ね、テイオオオッ!!)

彼女が浮かべたのは絶望の表情ではなく、獰猛な笑み。彼女が導き出した勝利の方程式は、まだ終わっていない!

(そうよねテイオー、ここしかない!! だからこそわかる、アンタも必ずここで来るッ!! アンタはこの土壇場で更に進化した——だったらアタシは、それすらも超えて往くだけだアッ!!)

「うツ、おおおおオオオアアアツツ!!」

——筋繊維の引き千切れる音がする。

無茶な稼働に、下半身が悲鳴を上げています。

それでも構わない。ここで壊れても構わない。

ここで負けるくらいなら——あした未来なんて要らないツ!!

「ぐつ、が、ああああああアアアアアアア!!」

脚から放たれるは轟音と——紅い稲妻。

そしてダイワスカーレットは、フェイクを入れた左脚を弾いて大きく右側へ跨ぎ、減速をせずに切り返した。



(な、ん——ッ!?)

抜け道は確かに塞いだ。

そのはずなのに、気が付けば真紅は横に並んでいる。

動揺が隠せない。何故ならばダイワスカーレットが今見せたそれは。

(——ボクの「イナズマステップ」!? どうして!?)

見間違はずもない。それはトウカイテイオー本人が、一番理解している技だからだ。

下地は既に完成していた。

合同練習で、彼女は重点的に柔軟性を鍛えてきた。さらに彼女は、何度もそれを観る機会があった。映像の分析で咀嚼し、練習での観察で飲み込み——そして今、試合中の極限の集中下で、それを体感し、消化した。ならばこそ、彼女がそれを再現できない道理なども、何処にも無い。

そして問おう。そこに彼女が元来持ち合わせていた踏み込みの力が合わさった時、それは「イナズマステップ」の再現などという枠に収まるだろうか? 答えは、否である。

彼女は減速をしないどころか——加速しながら切り返すことが出来る。

故に横並びは一瞬で終わりを告げた。

ダイワスカーレットは切り返して得た加速のまま、トップギアでトウカイテイオーを引き離していった。

(速い——疾、すぎる)

それは最早、「イナズマステップ」ではない。

それは蒼穹を寸断せし落雷、真紅の残光、瞬きの間に消える霹靂。

ダイワスカーレットが極限状態で掴み取った究極奥義。

——【電ライトニング紅石火のステップ】。

（ありがとう、テイオー。アンタが居たからアタシは——）

無二の友に、感謝と敬意を。

勝利を以て、伝えよう。

再び差し返した真紅は、紫電と成ってターフを焦がしていく。その路を遮るものは、最早何も無い。

そして決着は訪れた。

「はあ……はあ……つ、あッ」

オーバーラン後、立ち止まったダイワスカーレットの両脚に、鋭い痛みが突き抜けた。そしてそのまま、立つこともままならないような震えに襲われ、ガクガクと膝が笑い出す。

(切れた、かな……アドレナリンが……よく……保ってくれたわね……)

無理もない、全速力のスパートからのぶつつけ本番で「イナズマステップ」——否、それ以上に負荷のかかる「電紅石火のステップ」。彼女が以前話していたように、そんなことをすれば並のウマ娘では脚が壊れる。

(そうならなかつたのは……アタシの脚に……トレーナーのくれた強韌性ダフネスと……テイオーのくれた柔軟性フレイキシビリティが……あつたから)

それで尚、立っているのが限界。

これを毎試合平然とやってのけるトウカイテイオーの凄さを、彼女は改めて理解した。

(ああ……ダメ……だ……眠い……)

頭が茹つて、溶けてしまいそうだった。脳が、高熱を持っている。限界を超えた駆動に、完全に処理限界オーバーヒートしていた。それ程までに全てを出し切らなければ、勝てないレースだった。

(あ——もう、む、り)

そして彼女は、今この瞬間に限界を迎えた。体が弛緩して力を失い、前のめりに倒れる――

「――もう、何してんのさ」

それを、トウカイテイオーが後ろから抱き留めた。

「……テイ……オー……」

「シャキツとしなよ、最後まで。ほら、聞こえるでしょ？」

「え……」

虚な目で呆けているダイワスカーレットに、トウカイテイオーは笑いながら観客席へと視線を移す。

そこには鳴り止まない歓声と熱狂に包まれた、何万人もの観客達が居た。

「凄かったぞダイワスカーレットー!!」

「こんなレース、今まで見た事ない!」

「こっち向いてー!」



優等生の仮面も忘れて、只管に勝利に酔って。

「アタシの……勝ちだああああアッ!!!」

突き上げた拳は、空を指差している。

己こそが1着だと——最強だと。

自分はまだまだ、先に行ってみせると。

『ワアアアアアアア!!!』

そんな彼女の姿を見た観客達の歓声が、京都レース場を揺らしている。冬の寒さは微塵も無く、そこに在るのは常夏の様な熱気だけ。

「はあ……はあ……」

彼女はその姿勢のまま、荒い呼吸を重ねていた。

「……結局、そこが勝敗を分けたのかな」

「……テイオー?」

そんな彼女に、トウカイテイオーは苦笑いを浮かべながら声を掛けた。

「ボクにとつて、キミはゴールだった。でもキミにとつてのボクは、そうじゃなかった」

「……」

「完敗だよスカーレット。最後のアレ……本当に凄かった」

「……狙ってやったわけじゃないわよ。ただなんとなく、やれそうな気がしただけ。アンタに負けるもんかって、絶対勝つんだって……子どもみたいな意地を張っただけよ」

「……そっか」

ダイワスカーレットが笑う。トウカイテイオーも笑う。後腐れなく、勝敗に拘泥せず。ただレースの熱の余韻のままに、2人は優しい笑みを浮かべていた。

「スカーレット。ボク、本っ当に楽しかった! ボクはキミに出会えて、本当に——」

「そこから先は、アタシの台詞よ」

「えっ」

言葉を切られたトウカイテイオーが、驚きに目を見開く。そしてダイワスカーレットは、心の底から笑みを浮かべて、彼女に告げた。

「——ありがとう、テイオー。アタシ、アンタに出会えて本当に良かった」



「……えへへ！ それっ！」

「きやつ!? ちよ、ちよつと何してんのおよテイオー!」

トウカイテイオーは、笑顔でダイワスカーレットへと飛びついた。

「いいじゃないいいじゃないん！ なんかこうしたい気分だったの！」

「ちよ、やめ、やめてよ恥ずかしい！」

「スカーレット、大好きだよスカーレットー！」

「は、はアツ!? バカじゃないのアンタ……！」

「大好き、大好きー!!」

「も、もう！ やめてつてばー!!!」

悲鳴をあげながらも、彼女は嬉しそうに笑っている。

後に「女王決定戦」と呼ばれる、世紀の一戦。

その勝者と敗者、両者ともに、心からの笑みを浮かべていた。

「おめでとう、スカーレット」

克樹は呟く。敗北に足掻き、苦しんだ彼女はもう居ない。

「おめでとう、テイオー」

克樹は呟く。才能故に孤立し、苦しんだ孤高の天才はもう居ない。

「——最高だよ、お前ら」

見る者全てを感動の渦に包み込んだ、2人の“ばけもの”に、彼は心からの称賛を送った。

（ああ楽しみだ——楽しみで仕方ない）

これから君達は、どんなレースを見せてくれるのだろう。

どんな伝説を作っていくのだろう。

ターフ上に立つ、2つの“赤”。

彼は今も——そしてこれからも、絶対に目を離さないことを、改めて誓った。

【ダイワスカーレット 戦績：8戦6勝】

『エリザベス女王杯』——1着

## 4章： 領域と資格、真紅よ屍の上で嗤え

## 快勝の代償、或いは最高の対極

「つ……」

「おい、マジで大丈夫か？」

「気にしないで。処置して貰ったし、昨日よりは全然マシだから」

トウカイテイオーとの激闘、『エリザベス女王杯』の次の日。

克樹とダイワスカーレットは彼女の脚の様子を診て貰うための病院に向かった。

試合後、左脚を引きずりながらレース場の外へと出てきた彼女の姿を見た克樹は、心臓が止まるような思いだった。彼はすぐにでも彼女を救急病院に運びかねない勢いだったが、ダイワスカーレットはそれを拒否したのだ。ただの筋肉痛だと。心配するよ  
うなことはない。

その言葉を受けて、彼は考えた。確かに、引き摺って歩いているが自立はできていること、見る限り脚に変色や腫れは無いこと。その二点から骨折では無いと判断。彼女の意思を尊重することにした。

しかし次の日は学校を休んで朝一で自分と病院に向かう約束を取り付けた。そして今はその帰り。ダイワスカーレットは今、松葉杖を突きながらゆっくりと歩いている。「お医者さんも言つてたでしょ？ 軽い捻挫と筋肉痛だって。大袈裟なのよ、この松葉杖も。ちよつと休めばすぐに治るわ」

「ああそうだな。でもこうも言つてたよな？ 『それだけで済んでいるのは最早奇跡です。常人なら骨折しててもおかしくないです』 って」

「うっ……それは……」

克樹の指摘に、彼女はバツの悪そうに視線を逸らした。

「……ま、裏を返せばそれだけで済んで良かったって話でもあるけどな。鍛えた筋肉の鎧がお前を守ってくれたんだろうさ。そうじゃなかったら今頃お前の脚はバキボキに折れてただろうぜ」

「……言い返せないわ」

「取り敢えず、お前あれ暫く使用禁止な」

「えっ？ あれって？」

「【電ライト石火ニングのステップ】。俺が許可を出すまであの技は使用禁止だ」

「ちよ………！ なんてそうなるのよ!?!」

「言わなきゃ……わかんないか？」

「っ……」

彼女は閉口する。克樹の言わんとしていることは正しい。あの技は、リスクが余りにも大きすぎる。リターンは大きいが、一回の使用で彼女自身も自分の寿命を縮めている自覚があった。

しかしあれが、彼女自身の大きな武器であることもまた事実。手に入れたそれを手放すのに、彼女は大きな抵抗を感じていた。

そんな葛藤する彼女の様子を見ていた克樹は、小さく笑う。

「そんな顔すんなよ、別に捨てろって言うてるわけじゃないんだからさ。取り敢えず、怪我が治ったらまた下地作りから始めよう。〔電ライトニング紅石火のステップ〕を使っても、お前の脚が壊れないように」

「……ええ」

「焦んなよ。焦ったって急に強くなったりはしないし、待つてるのは故障だけだ」

「わかってるわよ」

「なら良い」

「……さ、取り敢えず直近一週間は練習もナシにするか」

「え、っ」

「いやそりゃそうだろ。向こう一週間は完全休息日にする。当たり前だけど自主トレも

禁止な」

「……………わか、り、まし、た」

「なんだその死ぬほど不服そうな返事は」

「……………滅相もございません」

「わーっ! わーっ! 筋トレはしていい。上半身だけな」

「いいの?!?」

「ば、バ! 接近えって!」

克樹の妥協に、ダイワスカーレットは瞳を輝かせながら身を乗り出した。それを煩わしそうに宥め、克樹はため息を吐いた。

「…………モチベーション下げられても困るしな。ただ程々にしとけ。上半身と下半身のバランスが崩れると、フォームも乱れるし走り方もブレるぞ」

「わかってる! ありがとうトレーナー!」

「お前本当にわかって……………はあもういいや」

後半の自分の説明は、聞こえていないだろうと悟った。飛び上がりそうなほどの有頂天を見せるダイワスカーレットに、克樹は思わず苦笑する。

「とにかく自主練も明日から。今日は帰って休んどけ」

「あ……………ねえトレーナー」

「ん？ どうした？」

「練習しなきゃ、別に今日は何してもいいのよね？」

「……いや、まあ足に負荷を掛けないのなら」

「そう。じゃあこれから買い物付き合ってくれない？」

「は？　なんで俺が」

「あら？　怪我人の荷物を持ちたいとは思わないの？」

「思わないけど」

「ありがとう。それじゃよろしくね」

「話聞いている??？」

とは言いながらも、克樹は理解していた。

自分の返事など最初から期待してないし、彼女が『行く』と言い出した時点で、拒否権など存在していないのだと。

こうして急遽、彼らは買い物へと向かうことになったのだ。



そして俺たちが到着したのは、様々な店舗が入り混じった総合商業施設。松葉杖を突



くスカーレットの速度に合わせながら、俺は眩く。

「なんか、人少ないな。こういうところでもうちよつと人が多いイメージだったけど」  
「バカねアンタ。今は平日の昼よ？ そんなに沢山人が居るワケがないじゃない」

「あー、そつか。感覚狂ってたわ……っーかスカーレット」

「ん？ なに？」

「今お前は客観的に見て学校サボって買い物を楽しもうとしてるクズになるワケだが、その辺はいいのかよ優等生として」

俺の指摘に、彼女は無言で俺から顔を背けた。

「……………セーフよ」

「いやアウトだろ」

「セーフ、セーフ！」

「アンパイア風に言ってもアウトはアウトだぞ」

「あーもううるさいツ!!」

「おわっ!! 松葉杖振り回してんじゃねえよ！」

「仕方ないでしょ!! 練習続きで買い物に行く暇なんてなかったんだから!! 悪い!？」

「いや、俺は別に悪いとは言ってねえだろうが！」

「だったら大人しく付いて来てればよかったでしょ!？」

ぎやあぎやあと騒ぐ俺とスカーレット。そんな俺たちを周囲の客達がヒソヒソと小声で何か呟きながら見ていることに気づいた。

「……スカーレット」

「何よ!？」

「落ち着け、周りの人が見てるぞ。お前一応、『トリプルティアラ』の有名なだから、周囲の目を気にした方がいい」

「ぐっ……アンタ……この……ッ!」

微塵も納得いかない様子ではあるが、スカーレットは松葉杖オを収めて溜息を一つ。そして見事に貼り付けた「優等生スマイル」で、見物していた人々へと上品に手を振った。

「……面の皮どうなってんだお前」

呟きながら、半目でスカーレットを睨む。

「——誰のせいだと思ってるの?」

百倍にして睨み返されましたとき。



「はー楽しかった！」

「お、まえ、どんだけ買うんだよ……！」

それから彼女の買い物に付き合う事数時間。

ストレスを解き放つかのように爆買いを重ねた彼女の購入物を、俺は全身で抱えていた。あまりの重さに身を引きずりながら苦言を漏らすも、彼女はそれを意にも介さない。

「折角だから沢山買わないと損でしょ？　こんな機会滅多にないし」

「どん、な、機会だよ」

「荷物持ち同伴」

「俺をなんだと思ってるんだテメエ!!」

叫び散らかしても、彼女はフフン、と鼻を鳴らすばかり。

そんなこんなでチーム部屋へと帰り着いた頃には、日は完全に落ちてしまっていた。

「だつはア!!」

「はい、お疲れ様。ありがとね」

「お、お前……覚えとけよ……」

荷物を床に撒き散らし、肩で息をしながらソファへと倒れ込んだ。そんな俺に、冷蔵庫から取り出したお茶を憎らしい笑顔で差し出すスカーレット。俺はそれを力強く

引ったくりながら彼女を睨みつけた。

「……トレーナー」

「あア？」

半ギレ状態のまま彼女の問いかけに言葉を返すと、やけにソワソワしているスカレットの姿が目に入った。

「……なんだよ」

「えっと、その……」

モジモジ、ソワソワ、クネクネ。

そんな擬音が聞こえてきそうな、普段の彼女からは想像も付かない弱々しい態度。今日の仕返しにイジリ散らかしてやろうとも思ったが、どうもそんな雰囲気ではない。すると不意に、彼女は手に握っていた紙袋を俺へと差し出した。

「……ん」

「え？」

「ん」

「はい？」

「ん！ ん!!」

「カントアみたいになってんぞお前」

ムスツとした表情のまま、彼女は手に待っていた紙袋を俺に突きつけてくる。受け取れということらしい。恐る恐る受け取り、俺は中身を確認した。

「……………これ」

「……………お礼。『秋華賞』と『エリザベス女王杯』の……………ううん、それよりずっと前の、『メイクデビュー杯』からアタシをここまで育ててくれたお礼よ」

「あ、ありがとう……………?」

「プレゼント? スカーレットが? 俺に?」

突然のことに、理解が追いついていない。

『早く開けなさいよ』と、彼女に促されるまで俺はそれを抱えて呆けることしかできなかった。

中に入っていたのは、触れただけでわかる、グレーの上質なジャケット。

途中スカーレットに『そこで休んでて』と言われてフードコートに座っていたが、その時に買ってきたのだろうか。

「…、こんな高いモン受け取れるかよ。悪いって」

「アタシじゃ着れないわよソレ。良いから黙って受け取りなさい」

「……じゃあ、貰っとくわ。ありがとな。でも、どうして服を？」

「アンタの私服ダサすぎなのよ」

「グボア」

齒に衣着せぬ、それでも心当たりがありすぎる物言いに俺は思わず吐血した。

「二年近くも一緒に居ればわかるけど、アンタブランドとかファッションとか、そういうの死ぬほど興味ないでしょ」

「は、ハイ」

「だから着るもの全てあくまで着心地と機能性重視。色味とか季節とかトレンドとか、そういうのは全くの度外視」

「仰る通りです」

「……これからもずっとアタシの隣に立つ以上、そんな服装は認めない。以上、理由。お分かり？」

「わかりました………つて、え？」

顔を上げると、そこには頬を染めながら瞳を逸らすスカーレットの姿があった。

「……ありがとね。これからも、その………よろしく」

あまりにも言葉足らず、顔は無愛想で、声は棒読み。  
それでもそれは、紛うこと無き彼女の本心。

「つはは、あははははは！」

「なツ……?!? なによ、なんか文句でもあるわけ!?!」

「いやいや、無いよ、あるわけないだろ」

「だつたらなんで笑つてるわけ!?!」

「嬉しくて笑つてんだよ」

「嘘つくんじゃないわよ!!」

顔中を真っ赤にしてぎやあぎやあと喚くスカーレット。そんな彼女に、俺は心からの言葉告げる。

「——よろしくなスカーレット。これからもずっと」

「……!」

「俺も、同じ気持ちだよ。二人で見に行こうぜ、”いちばん”の景色を見に」

——これからもずっと。

それを君が俺に望んでくれるなら。

こんなに嬉しいことはないから。

「……ふ、フン！ 仕方ないわねえ、そこまで言うなら一緒に居てあげるわよ」

「お前が言い出したんだろ」

「あーもううっさい！ ほらどきなさい！」

「わ、ちよ、おまつ」

松葉杖を放り捨て、俺の隣へと勢いよく座り込む彼女。

そしてそのまま、俺へと体重を預けた。

「な、何してんだよお前……！」

「あー疲れた。アンタの肩って案外寝心地いいのね」

「いや、だから……はあ」

左肩に感じる、彼女の温もり。

何故だかそれが心地良くて、俺は言及するのをやめてしまった。



「……ねえ、トレーナー」

「ん？」

「……ううん、なんでもない」

「そうかよ」

そして訪れる沈黙。不思議と重苦しさはなかった。

それはきつと、俺に身を預けながら本当に眠ってしまった彼女の寝顔が——嬉しそうに微笑んでいたからなのだろう。

## 天秤、或いは決心

それから一週間が経った。医者も唸るような驚異の回復力で、スカーレットは練習復帰への許可を得た。

痛みも完全に引いたようで、彼女は今心の底から嬉しそうにターフの上を走っている。勿論全力ではなく、体を慣らすためにゆっくりと。

「ふー……」

「お疲れ。どうだ？」

「全然。寧ろしつかり休んだ分調子が良いくらいだわ。結果的に見れば良い休暇になったって感じね」

「そうか……一応言うが、無理はすんなよ」

「わかっているってば。じゃあアタシ、もう少し慣らしてくるわね。次のレースも近いし、頑張らなくっちゃ」

「……」

「……嘘が上手だな、優等生」

彼女の背を見送りながら、俺は呟いた。

怪我をしました。治りました。全て元通りです。

——そんな話が、あるわけがない。

痛みは無かろうと、必ずあるはずなのだ——前とは違う、漠然とした違和感。そして再発への恐怖が。

だから彼女は、それを振り払う為にジョグを重ねている。スカーレットの言った通り、本当に全てが元通りになっているのならば、彼女の性格上あそこで出てくる言葉は『慣らしてくる』ではない。『走ってくる』のはずなのだ。

これがウマ娘の怪我の恐ろしい所。外傷が完治しようと、心に負った傷は簡単には癒えない。彼女らにとって脚は武器であり、相棒であり——命そのものなだから。

——それを失えば、彼女達は文字通り選手生命を絶たれて、死ぬ。

故にウマ娘とトレーナーは、足の負傷に対して非常にナイーブになる。それはあの勝ち気で自信家の彼女として例外ではない。

走つてもう一度怪我をしてしまったら？

全力で走つたのに、タイムが落ちていたら？

そんな *if*<sup>もしも</sup> が、心を縛り付ける。

それが負傷というものの本当の恐ろしさだ。

そしてそれはスカーレットにとって、初めての経験。

「……まあ乗り越えられるとは思いますが、時間はかかるだろう」

俺は信じている。彼女はこの経験すら糧に、更に飛躍していくだろうと。だがそれ

は、簡単なことじゃないと重々理解している。これは一日二日で治るような、単純な話ではないのだから。

「……次のレース、か」

スカレットの言う通り、予定してある次のレースは近い。そしてそれは、俺と彼女の“夢”の到達点でもある。

——『有《font:ul40》馬《font》記念』。

ファン投票で選ばれたウマ娘だけが走ることを許される、文字通りのオールスターマッチ。そこで勝利することは、文字通り“いちばん”のウマ娘となることを意味する。

そんなオールスターマッチに、今年度の『トリプルティアラ』である彼女が選ばれないはずもなく、彼女は見事に出場権を勝ち取ったのだ。その時の彼女の表情は、今でも鮮明に思い出せる。彼女が心からの笑みを浮かべた、数少ない場面だったから。

——ソレとコレとは、話は別だ。

俺が下すべきは、客観的な判断。

彼女の思いだとか願いだとか、そういうもの一切を切り捨て、己の目で見た事実だけを勘定し、結論を出す必要がある。

「……」

静かに、ターフへと視線を移す。

瞳に映るのは、必死に駆ける彼女の横顔。

それは確かに、次なる目標を見据えていた。だが同時に、何かを振り払うかの様に必死に走っているだけのようにも見えた。

「……」

わかっている。答えはもう、ハナから決まっている。

「——恨めよ、スカーレット」

お前自身じゃなくて、俺を。死ぬほど。

心の中でそう呟いて、俺は一周を終えた彼女の元へと歩きだした。



「何？ 話って」

「ああ、次のレースのことだよ」

練習を終えてチーム部屋に戻った克樹とスカーレットは、テーブルを間にして向かい合う形でソファに腰掛けていた。

「ふーん、何？」

「……」

「ちよつと、トレナー？」

「あ……ああ悪イ」

神妙な面持ちをしている克樹を不信に思ったダイワスカーレットは、思わず克樹へと問いかけた。そんな彼から帰ってきたのは取ってつけたような笑顔と生返事だけ。

そんな彼女を他所に、克樹は己の気持ちを固めていた。

「……………ふう」

溜息を、一つ。

それだけで、彼は己の心の靄を振り払う。

揺るがぬように、流されぬように、覚悟を鋼のように固める。

そして彼は、ゆつくりとそれを言い放った。

「——辞退しよう、『有』font:ul40『馬』font『記念』」

「……………は？」

驚きのあまり、ダイワスカーレットの口からは吐息の様な声が溢れた。

「なん、で……………なんでっ、そうなるのよっ!？」

テーブルを力強く叩きながら、彼女は克樹へと問いかける。

「折角ここまで来たのに……………どうしてそんなこと言うわけ……………? ねえ、アタシと『いちばん』になるんじゃないかったの? こんなまたとないチャンス、みすみす見逃せつて言うの……………!？」

「落ち着け、スカーレット」

「落ち着いていられるわけじゃないでしょ!？」

もう一度、彼女は感情のままに机に掌を叩きつけた。そんな様子を目にしながらも、覚悟を決めた克樹の表情はピクリとも動かない。そしてその表情のまま、彼は彼女へと告げる。



「端的に、客観的事実だけを言う——今のままじゃ、お前は勝てない」

「は？」

「勝てないって、言ってるんだよ」

「巫山戯るのも大概にしなさいよ。何を根拠に……っ」

「新走法の身体的負担、『秋華賞』と『エリザベス女王杯』の連続出走、負傷明けのバツドコンディションに再発の危険性。これだけ言えば十分か？」

言葉通り、端的に羅列された理由。しかしその一つ一つが理に適っているのも事実。ダイワスカーレットは唸りながら顔を顰めた。

一つ。新走法は従来よりも脚への負担——主に膝への負担が大きい。これは彼女の最高速度が、克樹の想定を上回っていたことによる誤差が原因だ。故にその誤差を修正し、新走法に耐え得る下半身が完成するまで、基礎練に重点をおくべきだと彼は考えているから。

一つ。間隔の詰まったG1レースへの連続出走。一度のレースでウマ娘にかかる心身的負担は決して軽いものではない。ましてG1となれば尚更だ。更に先の『エリザベ

ス女王杯』では、トウカイテイオーと文字通りの限界を超えた『死闘』を演じた。その疲労は、すぐに抜け切るものではない。それが抜け切らないまま『有馬記念』の為の調整を行うことには、大きなりスクが伴うから。

一つ。練習中にも言ったが、負傷を甘く見てはならない。それが心身に与える影響は大きい。癒えたはずの負傷の影に、暫くの間彼女は苛まれ続けるだろう。そんな状態で最高の走りなど出来るはずもないから。

その正しさを、彼女は重々理解している。

そう、理解しているのだ。

しかしそれを受け入れられるかは、別の話。

「——なにソレ」

絞り出した声は、彼女自身も驚くほど低いものだった。

「“信じてる”なんて嘯いて、アンタアタシの気持ち——アタシのこと何にもわかってないじゃない”

怒りが込み上げた、失望が込み上げた。

だがそれでも、彼が自分のコンディションを心から慮ってくれているのもわかっていてた。

両者に折り合いをつけ、現実にも目を向けることができるようになるには——彼女はただ若すぎた。

「……」

その点で言えば、克樹は彼女よりも精神的に成熟している。故に彼女の非難を無表情のままに受け入れることが出来ている。

「——言いたいことは、それだけか？」

あくまで静かに、克樹は問いかける。それは何を言われようが自分の意思を曲げるつもりは無いという、明確な意思表示。そんな彼の態度がまた、ダイワスカーレットの神経を逆撫でする。

「ッ——!!」

そして彼女は突如立ち上がり、感情のままに手を振り上げた。

しかしその手は行き場を無くし、力無くぶらりと垂れ下がった。そして彼女は大きく息を吐きながら勢いよくソファへと座り込んだ。

「……惨めね、アタシ」

「……何がだ」

「ここでアンタに手を上げたら、本当に思い通りにならなくて力に訴えかける子どもみたいじゃない——ええそうね、アンタが正しいわ」

自嘲めいた笑みを浮かべたまま、ダイワスカーレットは吐き捨てた。

「はあ……そうね、アンタの言う通り。アンタが正しい」

「……お前ならわかつてくれる——いや、わかっていると思った。俺が何もしなくたって、お前はちゃんと気付いていただろうさ」

鉄面皮を貫いていた彼が、初めて柔らかな笑顔を見せた。

克樹は終始、彼女と話し合うということに重きを置いていた。感情的に思いをぶつけ合うのではなく、あくまで冷静に話し合うことでしか、この問題が解決することはないだろうと考えていたから。

「……そう、アンタが正しい。でもね、トレーナー」

——だからこそ。

「——例えアンタの言葉がどれだけ正しかろうと、アタシは……アタシの思いが、間違い

だとは思わない」

「ここからが、本番なのだ。」

溢れた激情のままに克樹を睨みつける彼女との、彼が望んだ話し合いの。

「……あくまで出走を諦めない、っていうことか？」

「そう捉えてもらって結構よ」

「無理無茶無謀は、承知の上か？」

「それが正しいって言ったじゃない」

「……最後に一つだけ。それがわかった上で、何のために走るんだ？」

「アタシの “いちばん” を、証明するためよ」

「言ってること無茶苦茶だぞお前」

「あら、そうかしら？」

事もなげに笑う彼女の姿を見て、克樹は顔を顰めた。

「……じゃあ、どうやって一着を取るんだ」

「……」

「もっと現実的な話をしろ。 “でたいものはでたい” とか、 “勝ちたい” とか抽象的な

理由は言語道断、検討にも値しない。聞かせてみるよ、お前のプランニングを。どんな戦略で練習をして、どんな戦術で本番走るつもりなんだ。お前の今の状況と、これからの推移を勘定して俺を納得させてみせろよ」

「それ、は……」

克樹の問いかけに、彼女はそつと視線を逸らした。

「言えないんだろ」

「……そんなにパツと出てくるわけじゃない。今までだつて何度も相手のレースを見て、アンタと話し合いながら決めてきたんだから」

「んな屁理屈で俺は許可しねえぞ」

「わかつてる……わかつてるわよ……!」

苦しい言い訳だと、彼女自身も理解している。あくまで理論的に、克樹はダイワスカーレットの反撃の糸口を潰していく。

「アタシは……アタシ、は」

口内が乾いて、カラカラだった。

思考が上滑りし、答えを導き出すことができない。

彼女が出走を志す理由——その根元はただ一つ、克樹も言い当てた通り、*“走りたい”* という気持ち。それとチャンスを手放したくないという気持ちが入り混じって、彼女

は引くに引けずにいる。客観的に見た自分の状態——怪我のリスクやコンディション——を理解しているにもかかわらずだ。

（——言つてしまえば、アンタはきつと怒るでしょうね）

彼女自身——此処で壊れても良いと思つている。

彼女は、自分の本能に従うことを是としている。それは『エリザベス女王杯』での彼女の走りを見ても明らか。

——筋繊維の引き千切れる音がする。

無茶な稼働に、下半身が悲鳴を上げている。

それでも構わない。ここで壊れても構わない。

ここで負けるくらいなら——未来あしたなんて要らないッ!!——

勝利への欲求、己の存在証明。本能が叫ぶままに、彼女は“今”を生きている。それ

はあまりにも刹那的思考、しかしその尋常ならざる思いが彼女の底力になつてゐるのもまた事実。彼女はどこまでも、自分の「今」を見据えている。

たといえ此処で終わつても走りたい。

そういえば、彼は頷いてくれるだろうか。

一瞬の思案。導き出した答えは、「否」。

彼は絶対にその理由で走ることを許容しない。何故なら克樹はダイワスカーレットの「未来」を見据えているから。

二人で最強いちばんになるために。二人の夢を叶えるために。

彼はレースで共に走ることができない。夢を彼女に託すしかない。だからこそ、彼女の体調管理には細心の注意を払っている。

「未来」を見据える克樹と、「今」を見据えるダイワスカーレット。それは、決して交わることはない平行線。

「……」

「答えは出たか？」

静かに、克樹が問いかける。

彼女は俯いたまま、何も答えない。



数分経った。その間2人とも何も言葉を発さない。時計の針の音だけが、チーム部屋に木霊する。

「……ンタが……」

「あ？」

「アンタが考えなさいよバーカ!!」

「——ん？」

「アンタが考えなさい、って言ってるのよ。お分かり？」

「……ふざけてんのか？」

「大真面目。だってそれがアンタの仕事でしょ？ アタシが有《font:ul40》馬《font》を走れるように、プランを考えてよ。いつもみたいに」

「……………」

彼女は言う。不敵に笑いながら。そこには一切の動揺も葛藤のカケラもない。いつそ清々しいまでに開き直った彼女の様子を見て、克樹は呆気に取られてしまった。

しかしそれも一瞬、克樹は鋭くダイワスカーレットを睨みつける。

「話になんねえな。何の答えにもなってない」

「あら？　そうかしら」

「煽ろうつたつて無駄だ。そんな安い言葉じゃ俺の意思は揺らがない」

腕を組みながら、克樹はそつと瞳を閉じた。

そんな彼へと、ダイワスカーレットは思いの丈を綴り始める。

「…………アタシなりに色々考えたわ。自分の調子とか、そんなのも全部含めて。勝つために、何ができるのか。でも、わからなかった。アタシはトレーナーと一緒に考えることで勝利への道筋を立ててきたことに、嫌でも気付かされた…………」

悔しそうに、唇を噛みしめながら彼女は呟く。

その悔恨を感じ取った克樹は、そつと左目を開けた。

「改めて感じたわ。トレーナーはアタシのために、色々考えてくれてるんだって。アタシの…………ううん、アンタとアタシの、二人の夢のために全力を尽くしてくれてるんだって。だったら、アタシにできることは一つしかない…………だってアタシは…………アタシはッ

!!

喉元まで迫り上がる激情が、言葉を詰まらせた。  
それを飲み込みながら、彼女は叫ぶ。

「アタシにはっ、走るこゝししかできないのよ……！」

「……」

「アタシを信じてくれるアンタに、アタシが返してあげられるのはそれだけなの……っ  
！ 怪我をしたのも、調子が戻らないのもアタシのせいだなんてことわかつてる。だからこそ、アタシは走りたい。二人の夢を、アタシの都合で潰すなんてこと、アタシは絶対に認めない」

揺らぐ表情、揺らがぬ瞳。

矛盾を表皮に貼り付けて彼女は叫び続ける。

「まだ何も始まってない、始まってないじゃない……！  
今現在のアタシだけみて、未来

のアタシの結末を勝手に決めないでツ!! アタシのことは、アタシがなんとかする。本番までに、全部元通りにして見せるから!! だから、だから——っ」

尻すぼみに小さくなっていく語尾。そこで言葉を止めた彼女は、しっかりと克樹の瞳を見据えながら、言葉を続けた。

「——だからトレーナー、手伝つて。アタシを、"いちばん"のウマ娘にして。アタシはアンタと——アンタが信じるアタシを信じて走るから」

彼女の心からの叫びを聞いた克樹はしばらく沈黙を貫いていた。ややあつて彼は、大きなため息を吐き、彼女を再び睨みつける。

「……結局、理論立てたことは何も言えねえのな」

「……」

「でもまあ——合格だ」

「えっ」

驚きながら顔を上げたダイワスカーレットの視界に飛び込んできたのは、先程までとは打って変わった優しい笑みを浮かべる克樹の姿。

「感情的な——感情しかないお前の言葉、確かに受け取った。テキトーな御託やおべんちやら並べられるよりよっぽど良い」

笑顔でそう呟きながら、克樹は立ち上がった。

そしてその表情を一転させ、力強く彼女へと言い放つ。

「——俺がお前を、勝たせてやる」

「トレーナー……!!」

「ただしッ!」

「っ」

「出走取り消しの限界まで待つ。その間にお前の調子が戻らなかつたり、怪我のリスクが高いと判断したら——俺は如何なる理由があろうと、お前の出走を認めない。これが呑めないなら、今の話はナシだ」

「……その程度の譲歩は認めるわよ」

「ならいい——覚悟はいいか、スカーレット。俺はお前が、『有《font:ul40》馬

《font》記念』で一着を獲る姿だけを見据えてプランを組む。生半可じゃねえぞ、付いてくれるか?」

「当たり前でしょ! アンタの方こそ、アタシに気イ使ってたら承知しないからね!」  
彼女の不敵な笑みに、克樹は口角をつり上げた。

かくして、二人の夢の終着点——『有font:ul40』馬《font》記念』への挑戦が、幕を開けた。

## 加害者、或いは破壊者

それから数日後。

『有《font:ul140》馬《/font》記念』優勝を目指して練習を重ねるダイ  
ワスカーレット、しかしその経過は順調とは言えなかった。

「ハア……ハア……タイムは!？」

日が落ちて薄暗くなった夜空。誰も居なくなったターフ上で走り続けていた彼女は、  
ストツプウオッチを構えた克樹へと息を荒げながら問いかけた。

「……『エリザベス女王杯』前に測ったラップタイムより、13秒遅い」

「クソツ……! ペース配分……それともスパートのタイミング……? いや、きつと  
無意識のうちに心理的リミッターをかけてるのね……それで最高速度まで上がり切る  
のに時間がかかってるんだわ……」

苦々しく吐き捨てた後、彼女は即座に分析と自省を始めた。その様子を見ていた克樹

は、笑いながらダイワスカーレットへと声をかける。

「焦んなよ。復帰直後より格段にタイムは上がってるんだ」

「焦るわよ。怪我前のタイムまでは上がって当然。そこからの上乘せがないと勝てるわけがないわ」

「まあ……そうだけどき。俺が言ったりミットのこと気にしてんなら、いったん忘れろ。気にするのは良いが、縛られるのはダメだ。目の前のノルマを一つ一つこなしていけば、結果は必ずついてくる」

「……わかった」

「今日はここまでにしよう。気温も下がってきたし、怪我のリスクも上がる。帰ってゆっくり寝ろ」

「……そう、ね。そうする」

そう呟き、彼女は踵を返した。

その足取りは重く、彼女の心情を如実に表している。

「……スカーレット」

彼女を慮るように、克樹は小さく呟いた。

明日には気分を切り替えていられれば良いが。

内心でそう思いながら、彼女を追いかけるように克樹もタープを後にした。



▼  
「トレーナー、やつほー！」

「めっちゃ元気やん」

次の日の放課後。

勢いよくチーム部屋の扉を開け放ったダイワスカーレットは、かなりの上機嫌だった。

そんな彼女の様子を見た克樹は、昨日の自分の心配が杞憂に終わったことを悟る。それと同時に大きいため息をついた。

「いや、めっちゃ元気やんお前」

「何？ アタシが元気じゃ悪いって言うの？」

「そうじゃないけどさ。あー……どうしたんだよ、なんか良いことあったのか？」

「フフン、脚が軽いのよ！ 今なら何だってできそうなくらいに！」

「脚が……軽いイ？」

確かに心理的余裕が生まれれば、緊張が解けてそのような感覚に陥ることもあるだろう。しかし昨日のあの様子からの、この発言だ。克樹は彼女の言葉を鵜呑みにすること

なく、訝しんだ。

「……何があつたんだ？」

「昨日帰った後、ある先輩に偶々会つて、薬を貰つたのよ。『これを飲めばたちまち元気になる』つて。怪しんでただけど、薬にも継る思いで飲んで寝たら……もうホントにビックリ！ 全身羽根みたいに軽いのよ！ 特に脚……今までにないくらい絶好調かもしれない」

「……ふーん」

薬。

彼女の発言で、彼はかつての記憶の中から該当者を探し出した。

「……アイツ、だろうな」

「ん？ 何か言つた？」

「何でもねえよ。それよりスカーレット、その先輩の所に連れてつてくれ」

「え？ いいけど……アタシもお礼言わなきゃって思つてたし。けどどうしてアンタが？」

「……ま、お前のトレーナーだしな。お前の調子が本当に戻つたんなら、礼の一つくらい言わなきゃいけないだろ」

「ふーん、まあいいわ。付いてきて、多分いつもの場所にいると思うから」

克樹の言葉に不信感を抱くこともなく、上機嫌な彼女は部屋を後にする。その後ろを付いてきている克樹が、怪訝な表情をしていることにも気づかず。



そして二人が訪れたのは、『トレセン学園』の化学教棟。

「多分ここに居ると思うんだけど……」

「……」

ダイワスカーレットの後ろを歩きながら、彼は自分の推測が正しかったことを確信していた。

もう何度目かの話になるが、ウマ娘とは、走ることが本能であり、それこそが己の存在証明である。故に放課後は各々実力を磨くために練習を重ねているのが普通だ。

しかし克樹は、知っている。化学教棟の一室を根城とし、半ばその住人と化しているある一人のウマ娘のことを。

「着いたわ。ハハハよ」

ダイワスカーレットは不意に立ち止まり、ある一室を指差す。そして彼女が扉を数度ノックすると、返事があつた。

扉を開けて入室した彼女を追って、克樹もゴクリと唾を飲みながらそれに続いた。

「——こんにちは、タキオンさん！」

彼女が笑顔で部屋の主の名を呼ぶと、彼女は椅子をくるりと回して、妖艶に笑った。

「おや、君かいスカーレット君。その様子だと、昨日の薬が効いたようだね」

「はい！ 今日はそのお礼に来たんです！ 本当ありがとうございます！」

「ただの試作品を渡しただけさ。こちらとしても貴重な臨床結果が得られて良かったよ」

そこで彼女は、ダイワスカーレットの後ろにいる克樹の存在に気づき——驚きを隠せないかのように目を見開いた。

「……スカーレット君のトレーナーか——はじめまして、私はアグネスタキオンだ。以後よろしく頼むよ」

そう言つて彼女——アグネスタキオンは底知れぬ笑みを浮かべた。

「……！ ああ、俺は松田克樹だ。はじめまして、アグネスタキオン」

アグネスタキオンの自己紹介に一瞬固まった克樹は、それでも努めて自然に——ダイワスカーレットに違和感を抱かれることのないように、返事をする。

しかしダイワスカーレットの洞察力は、彼の異変を確かに見抜いていた。

「……どーしたの、アンタ。緊張でもしてる?」

「……別になんでもねーよ。脚が軽くなる薬作る科学者サンがどんな顔してるのかと思つたら、案外フツのウマ娘でびっくりしたただけだ」

「ちよ……アンタ、タキオンさんに向かつてなんて事言うのよ!」

「ハハハハ! 気にしないでくれたまえスカーレット君」

暴言とも取れる克樹の発言に、ダイワスカーレットは瞠目した。しかし当の本人は、彼女の反応を見てさも面白げに笑っている。

「……さて、スカーレット君。少し頼みがあるのだが聞いてくれないか?」

「あ、はい。なんでしよう?」

「学園に提出する書類を複数枚溜め込んでしまっていてね。生憎私は今ここから離れられない。昨日の葉の礼だと思つて、提出を頼まれてくれないだろうか」

「それぐらいなら幾らでも! 返したりないくらいですよ」

「感謝する。では、よろしく頼んだよ」

「わかりました! トレーナー、アタシ行ってくるわね」

「ああ。俺はここで待つてるよ」

「……またタキオンさんに失礼なこと言ったらタダじゃ済まさないからね」

「わーってるよ、さっさと行ってこい」

手をヒヨイヒヨイと振る克樹をさっさきの箆った瞳で睨みつけながら、彼女は部屋を後にした。

残された克樹とアグネスタキオン。数秒の沈黙を破り、先に口を開いたのは克樹の方だった。

「——久しぶりだな、タキオン」

「やあ、元気にしてたかい？ トレーナー君」

冷たく、無感情な克樹の声。それと対照的に、アグネスタキオンは嬉しそうに言葉を返した。

「何年振りだろうね……こうして君と言葉を交わすのは」

「悪かったな、戻ってきてからずっと顔も出さなくて」

「私だってそうさ。気にする必要はないよ」

アグネスタキオンの言葉に、克樹は安堵したように笑う。

「……氣イ遣わせたな、すまん」

「それも気にする必要はない。あの日の誓いを守るなら、そうすべきだと思つたまで  
さ」

「助かるよ……やっぱりお前だつたんだな。スカーレットが“薬”なんて言うからすぐに合点が行つた」

「おや、君の中で私のイメージはどうなつてるのかな？ 是非とも解剖して調べさせていただきたい」

「それは御免被る」

軽口を交わし合う両者。そこに心理的障壁は一切無く——寧ろこれが自然だと言わんばかりに打ち解けていた。

しかし克樹は、突如その表情を怪訝なものへと変え、彼女へと問いかける。

「……で、タキオン。スカーレットに渡したモノはなんだ？」

「おや、聞いていなかったのかい？ 脚の快復を促す薬だよ」

「んなわけねえだろ」

「ほう……」

克樹の低い声にも、アグネスタキオンは動じない。彼女はデスクに肘を置き、頬杖を

突きながら興味深そうに克樹を見ていた。

「もしそんなモンが本当にあるのなら——お前は今こんなところにはいない」

「……はつ、ハハハッ！ いやはや確かに、違くない。やはり君にはお見通しだねえ、何もかも」

克樹の出した解答に、彼女は声を上げながら嬉しそうに笑う。

「……そうだろうね。そんな薬があるなら、私は真つ先に自分に使っているだろうさ」  
そう呟きながら、アグネスタキオンはそつと自分の脚に視線を落とした。それは過ぎ去った日々を懐かしむように、遠い目をしていた。

「……今もまだ、『プランB』を追っているのか？」

「肯定しよう。それこそが、今の私にとっての此処での存在意義だからね」

——アグネスタキオン。



その勝率は、驚異の10割。出走したレースでは他を寄せ付けないスピードで危なげのない勝利を観客に見せつけた女傑——人呼んで、*「超光速のプリンセス」*。

しかしその戦績は、僅かに4戦。実力からするとあり得ない出走の少なさで、彼女はターフ上から姿を消した。

その理由が——脚。

彼女はそのスピードと反比例するように、脚に致命的な脆さを抱えていた。彼女が備える埒外の出力に、<sup>スベック</sup>身体の方が耐えられなかったのだ。

「……完全に引退したわけじゃないんだろ？」

「ああそうだよ。客観的に判断しても私はまだ、走ることができる。だが結局、私の脚は君の知るあの日のままだ。あと数度の酷使で使い物にならなくなるだろう。一時はそれでもいいと思っていたよ。いつか壊れるその日まで、走り続けていようと」

「それが……『プランA』」

浅い息を漏らしながら、彼女は肯定の笑みを返した。

彼女が抱くプランは二つあった。

一つは前述のように、己の脚でウマ娘の最速の限界を突き詰めるプランA。

そして克樹が問いかけたプランBとは、研究を重ね、自身が追い求める——追いかけていたかった最速の限界を見るという夢を、他のウマ娘に託すというものだ。

「最初はプランBを取るつもりなんて全くなかったんだが……例え私の脚が壊れようが、それはそれとして夢の終わりを割り切るつもりだったよ。だがそんな私を止めたのは、君だろうか？」

「……そうだったっけか？」

「覚えていないのかい？ 困ったな、これでは私が一方的に思い続けているみたいじゃないか、恥ずかしいねえ」

「本気で俺に信じ込ませたいなら、少しは恥ずかしそうな顔して見せろよ科学者」

サイエンティスト

「ハツハツハ！ 羞恥などなくとも、私は君に心から感謝しているんだよ。そしてその選択をさせてくれた事を、私はこの数年間一度も後悔した事はない」

彼女は頬杖を突きながら、視線を窓の外へと移した。その目は外の景色ではなく——在りし日の思い出へと向けられていて。

「……君は覚えていないのかもしれないが、私にこう言ったんだ——『諦めるにはまだ早い』と。『俺が何とかしてみせる』、とも言ってくれたかな。嗚呼、なんと裏打ちのない、根拠の欠けた無責任な言動だろうか!!」

「褒めてんのか貶してんのかどっちだよ」

「どちらでも無い。言つたはずだ、私は君に、感謝していると。そんな無責任な君の言葉が、私の心を救つてくれたんだ。だから私は『プランA』を諦めて、『プランB』を追っている訳さ」

そう言葉を閉じて彼女は、憑物が落ちたような——言つてしまえば、あまりにも似合わない、優しい笑みを克樹へと向けた。

「——嘘だな」

しかし克樹は、彼女の言葉を一刀に切り捨てる。

「ほう……？」

「お前のその目は、プランBだとか、誰かに託すとか……そういう『誰かのため』だとかそんな優しいモンじゃない。泥臭く自身の再起を模索してる、『自分のため』の目エしてんぞ。お前は、1ミリたりともプランAを諦めてなんざいねえ。お前は今——どちら

のプランも追っている、そうだろう」

「……参ったね」

克樹の言葉を無言で聞いていたアグネスタキオンは、困ったように苦笑する。

「冗談どころか、本気で騙しに行っても通じないじゃないか。あの頃はもつと素直だったというのに、面白くないね」

「俺が成長して、お前が衰えたんだろ」

知らんがな、と克樹は吐き捨てる。それをみていたアグネスタキオンは肩を竦めながらため息をついた。

「……君のいう通りだよ。私は今、両方を追っているのさ。最後の瞬間まで、私は<sup>プラン</sup>私の証明を諦めない。ただそれと並行して、その証明を誰かに託すための用意をしているというだけのことさ。我ながら些か欲張り過ぎだとは思うがねえ」

クツクツク、と喉を鳴らしながら、アグネスタキオンは笑う。その普段と変わらない様子を見て、克樹は内心で安堵を浮かべる。

「変わっていないな、お前は」

「それを言うなら君もそうだろう……さて、君の質問への答えだが。無論あれは脚の快復を促す薬などではないよ。そもそも薬ですらない。あれはただの美容栄養<sup>サプリメント</sup>剤さ。体に害は無い、安心してくれたまえ」

「……本当か？」

「プラシーボ効果、というやつさ。私の説明を信じた……というのもあるだろうが、一番はやはり彼女自身の気持ちだろう。意地でも走りたいたいという強い意志が、より強い思い込みを生んだのさ」

「……強い意志、か」

克樹の頭に過ぎったのは数日前の鬼気迫るような彼女の姿。その剣幕に折れてしまった自分を思い返して、彼は苦笑を浮かべた。

「確かに、アイツの意志は半端ないからな」

「……彼女から聞いたが、脚を怪我していたんだろう？ だからこそ意外だったよ——よく君は出走を認めたね」

「……その半端ない意志に折れたんだ」

「ほう、頑固者の君を折れさせるほどの意志とは！ なんとも興味深いねえ」  
「誰が頑固だ」

鋭く睨みつける克樹の視線を意に介さず、彼女はケラケラと笑った。

「……後悔しているのかい？」

「……」

克樹の内心を見透かすように、アグネスタキオンは問う。彼はその言葉に対して一瞬

息を詰まらせ、瞳を伏せながら彼女の問いへと答えた。

「……迷ってる。アイツをこのまま、走らせてもいいのかどうか」

「ほう？」

「怪我明けの身体で、無理をして潰れていったウマ娘……お前もよく知ってるだろ？  
だから——」

「——お前がそれを言うのか、デストロイヤー破壊者」

「っ——！」

彼女の身に纏う雰囲気、変わった。

瞳孔の開いた褐色の瞳は見開かれ、無表情のままに克樹を見つめている。

その瞳から溢れる金色の粒子と全身から放たれる威圧感。

それを受けた克樹の背筋に、冷たい汗が流れた。

「……っハハハ！ 冗談だよ。君のそんな悪名、私は信じてなどいないさ」

そんな克樹の様子を見て、アグネスタキオンは心底愉快そうに笑った。途端に先ほどの威圧感は、幻のように消え失せる。

「……脅かすなよ」

「元々君が持ちかけた話題だろうか？」

「そうだけどさ」

「……信じていないよ。私は勿論、他の誰も。あの日の事は、事故以外の何物でもない。そうだろう、トレーナー君？」

アグネスタキオンは笑う。しかし克樹には、その笑顔が自分を値踏みするように見えて、心底不快だった。

わかっている。彼女にそんなつもりは毛頭無いと。斜に構えた自分の心が、彼女の虚像を映し出しているに過ぎないのだと。

「……そうだな」

努めて笑顔を作って、彼は言葉を返した。

「……君がスカーレット君を走らせたくない気持ちもわかる。しかし、だ。私は彼女が走りたいと望む気持ちもまた、痛い程わかってしまうんだ」

「……」

「本人が走れると言っているんだ、その結果がどうであれ、君が気に病む必要なんて無いんじゃないのかい？ 私は、『走れるはずなのに』と心で燻ったまま諦める方が、彼女にとつて酷なことだと思うがね」

「それは……」

克樹は、言い返すことができなかった。

今日の前にいる彼女に対して——走れるはずなのにと思つたまま諦めぎるを得なかつた彼女に対して、返す言葉が見つからなかったから。

「——信じてやればいい。今の彼女にとつて必要なのは、ただそれだけだ」

その言葉に込められた熱は、克樹が受け止めるには重すぎた。

真顔で見つめるアグネスタキオンの視線に耐えられず、克樹はそつと目を伏せた。

「君が揺らげば、彼女も揺らぐ。ウマ娘とは不思議なものでね——トレーナーに信頼されれば、何処までも行けるような気になれるのさ。実に非科学的で根拠の無いことだ



が、これは私自身も体験した事実だよ」

「……そういうもんなのか」

「そういうものなのさ。だからトレーナー君、君が迷ってはならない。彼女が選んだ道を信じて、共に歩んでやってくれ」

その言葉を閉じたアグネスタキオンは、やはり彼女には似つかわしくない優しい笑みを浮かべていて。それは克樹がこれまで見たことの無い——言うなれば、保護者のような笑みだった。

「……お前、どうしてそこまでスカーレットのことを気にかけてくれるんだ？」

「……不思議と彼女は他人の気がしなくてね。何故だか話していると落ち着くのさ。それに、こんな私を慕ってくれる数少ないひけんた——友人だからね」

「おい待て今一瞬本音が出てきかけたぞ」

「数少ない被験体だからね」

「そつちで言い直すんかい」

克樹のツツコミを受けて、彼女は心底愉快そうに笑った。先程まで部屋を満たしていた重たい空気は気付けば霧散している。

「冗談だよ。とにかくトレーナー君、彼女のことを頼んだよ」

「……ありがとな。なんか相談乗ってもらった感じになっちゃった」

「気にしないでくれたまえ。君にいくら恩を返しても返しすぎじゃあないさ」

その時、ドアを開ける音が響く。

「ただいま戻りましたー」

「お帰りスカーレット君。済まなかったね」

代理提出を終えて戻ってきたダイワスカーレットを、アグネスタキオンは優しく労った。

「タキオンさん、トレーナーと何話してたんですか？ 凄く楽しそうな顔してますけど」

「……なんてことない世間話だよ」

「へえー……そうなんですね」

「スカーレット君。君のトレーナーはとても良い人のようだね。君のことをとても大事に思っているのが伝わってくる」

「は……はあッ!？」

ダイワスカーレットの頬が、一瞬で朱に染まった。

「ちよ、ちよつとトレーナー!?! アンタ一体タキオンさんに何言ったのよ!?!」

「ぐあッ、ちよ、スカーレットつ、く……首絞まッ」

「早く言いなさいよ!?!」

「お、おちつけ……! た、タキオン……テメエ……ッ!」

「フフフフフ、ツハハハハハハ！」

克樹の言葉を受け、アグネスタキオンは一際大きく笑った。